

IS/ガンダム00 crossing exceptioners

A. Tom

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ISが世界を席卷し、軍事力に対するイコールとなった時、世界には例外が生まれる。

それは一つではなかった。

嘗ての世界最強、その弟、織斑一夏^{おりむらいちか}。

個人特定不可能、記憶喪失、IS学園に墜ちてきた刹那^{せつな}・F・聖永^{せいえい}。特に語れる物も無い、知識ある青年、小鳥遊^{おどりゆう}。

そしてこれは、世界を巻き込む大いなる革新の前日譚^{ぜんじつたん}・・・

目次

プロローグ	1
更なる一人	7
原作1巻	
悪意式弁論大会	12
宣戦布告	19
同室者は一体・・・	Y side / I side
同室者は一体・・・	Y side 2 / 2
訳の解らぬ決闘	38
カミングスーンな二つ	45
二人と三人と、忘れちゃいけないもう一人	49
二人の連携？	59
戦いの行方	73
真相追及とジジとババ	84
三人の(計画的)邂逅(かいこう)	97
二人目の幼(おさ)なじみ	105
無力な悩み	119
火花(ひばな)散(ち)る鞘当(さやあ)て	129
セイロンロンパく脅迫状付きく	136
種明(たねあ)かすと挑戦(トライアル)	1 / 2
種明(たねあ)かすと挑戦(トライアル)	2 / 2
他者(たしや)の為(ため)の策(さく)	170
何をした!?(What's happening!?)	1 / 2

何をした!?(What's happening!?) 2/2

186

未知との迎撃 (Intercept for unknown)

1/2

198

未知との迎撃 (Intercept for unknown)

2/2

205

幕間 I

Considerations (真実の見極め) 221

宛無き野望 (Unidentified ambition)

義務か責務か (Duty or obligation)

Sudden rendezvous

Next round

Battle continues

Searching solution

The results

原作2巻

友と友と兄妹と (Friends, friends, siblings)

ngs)

297

A new power and exchange term

s

318

二人の転校生 (Silver Warrior, Bronze

Noble) 1/2

327

二人の転校生 (Silver Warrior, Bronze

Noble) 2/2

347

e d s w i t c h) 2 / 2 	憂鬱を変えるモノ (Blutch e d a y s /	405 R
e d s w i t c h) 1 / 2 	憂鬱を変えるモノ (Blutch e d a y s /	396 R
2 / 2 	憂鬱を変えるモノ (Blutch e d a y s /	387 R
1 / 2 	Cach ▪ stay hidden (秘密 未だ秘密につき)	375 R
1 / 2 	Cach ▪ stay hidden (秘密 未だ秘密につき)	375 R
	O and lui (彼と彼)	362 R

プロローグ

・・・これは、途方もなく未来の話。

西暦23世紀、世界は、軌道エレベーターが実現、それに付随した太陽光発電により、エネルギー資源からの拘束に縛られる事が無くなるうとも、問題を抱えていた。

アメリカを中心とした国家連合

ユニオン

中国、ロシアを中心とした共産主義国家郡

人類革新連盟、通称人革連

ヨーロッパ諸国を中心とする協議制国家

AEU

人類は残り三つの国家郡にまで統一されたのにも関わらず。侵略する事はなかれ、互いにいがみ合い、歩み寄る事も無く、未だひとつに成れずにいた。

だがしかし、多くの兵器、資金、人命を消費する戦争の中で、少なくとも人命の消費を抑える発明があった。

とある一人の天才が、作り上げてしまったのだ。

究極の兵器と呼ばれる機動外骨格、インフィニット・ストラトスを。その圧倒的な性能を前に尻込みした三大勢力は、互いを縛る鎖を以て基本的なパワーバランスの均衡を保たんとした。

結果として、

『生産されるISの動力部は三大勢力に均等に配分される』

『ISのパイロットを養成する機関を、どの三大勢力とも中立的な国家に配置する』

『養成機関においてのみ、ISの仮想能力値を公開する』

等・・・国際法を含む、『アラスカ条約』が制定された。

これによって、目論み通り行動が縛られた各国は、国内での模擬戦により得られたデータを元に世代を重ね、実戦に移す事もないまま、睨み合う、冷戦状態となっていた・・・。

.....

とある場所で、とある人物が、目の前に在る機械に手を当てている。「俺がどれだけ想っても、これだけはどうにもならないんだな」

触れる手に、力は無く、どこか虚ろだった。

目の前の機械はなんの感慨もなく、ただ力を求める彼を拒む事無く佇んでいる。

だが彼にはその力を与えず道具で在ろうとはしない。

「――何をしてるんだか」

彼でなくともこの結末は誰もが予想が付いた事だろう。

結局、その無益さを皮肉気に嗤うだけに止めて、その甲冑の如き機械から手を放し、部屋の外に踵を返した。

.....

最近、一人、『ISを扱える男性』が見つかったそうだ。

彼の名は織斑一夏、なんでも、あの織斑千冬の弟らしい。

何故にその彼がISに乗れる事が分かったのかは俺の知るよしも無いが、まあ、中学3年を卒業したばかりだそうだから、IS学園に送られるのが妥当だろう。

IS整備士を目指している身としては、微妙に関係のありそうな話だから判別に困るのだが、同じ業界に男が一人でも増えるのならありがたい話だ。

「タカナシー、先生がお呼びだぜー」

友人の声に応え、自作の小型ノートパソコンに映されたネット記事から目を放す。

首筋にまで伸びた髪を後ろで纏めた髪型の彼は、顔を上げ、声の方を見やる。

その目付きはお世辞にも良いとは言えない鋭い物で、平時でこれなら、きつと激怒した時の威圧感は結構な物だろう。

「解った。今行く」

タカナシと呼ばれ反応した彼の本名は小鳥遊。そのまんまのあだ名を付けられた彼は、世界でも珍しい、IS整備科の在る専門校に通っている。

何故彼が呼び出されたのかと言うと、彼の専門校にある技能、自作パッケージを試験する為の、所謂トリアル用ISが起動していたのだそう。

(どこの誰だか知らないがそのせいで全員が取り調べを受ける羽目になったじゃないか)

只、問題なのはドジっ子が起動状態を解除していないとかそう言う事ではなく、誰が起動させたのか解らないと言う事だ。

ISと言う兵器を扱う以上、そのセキュリティはそれなりになければならない。

この学校もその例に漏れず、監視カメラが至る所に設置されていて、その死角は何処にも無く、設置場所は解らないが、学舎全体に赤外線は勿論、光学センサーがまでもが設置されていたりするらしい。が、そんな厳重な警備が役立たずな結果を叩き出した事に溜め息を吐き、職員室に向かって歩いて行く。

警備システムの割に随分と古めかしい非自動タイプの職員室の扉を引きける。

「つたく……。先生お呼びで、す……。か？」

飛び込んできた視覚情報に思わず口が開いた。

「ああ、来たか……。大尉、こちらが小鳥遊です」

「君が晃技師の息子だね。私は自衛隊所属の犬飼と言う者です」

角刈りの特徴的な男性教員の隣に、軍服を着用した、どう見ても軍属の女性が居たのだ。

「は、はあ……。小鳥です。……。仲村先生、何なんですか、この状況」

犬飼と言う二十歳前半程の女性の自己紹介を受け、小鳥も名を名乗り、説明を求め。

「まあ待て、訳を話すよりコレを見て貰った方が早い」

そう言ってパソコンに向き合う仲村先生。

「これは……。実習室の監視カメラ……。？」

例のISが置かれていた実習室がパソコンの画面に写っていた。

「昨日、実習室を利用したのはお前のクラスともう一つ。最後に使ったのはお前達のクラスだ」

「・・・それで？」

「最後に触ったのは誰だ？」

彼には覚えが無い訳ではない、確かに自分のクラスの中で最後に実習室を出たのは小鳥だし、その際にあのISを触った覚えも有る。

「いやいやいや待って。まさか俺が起動させて起動状態解除し忘れてたつて言うんなら、なんでこんな大掛かりな事になつてるんです、自衛隊の連中まで呼び出す様な事じゃないでしょう!？」

だが、只々ISの起動を解いていないだけなら、精々教員からみっちり搾られるだけの筈だ。

その引つ掛かりに声を荒らげて詰め寄る小鳥の肩を犬飼が押さえる。

「ちちゃんと話を最後まで聞きなさい、理由はちちゃんと在る」

見ず知らずの他人が自分を窘めようとしている事が、小鳥の羞恥心を煽りそれ以上の詰問を止めさせる。

それを確認した犬飼は小鳥に問う。

「遊君、君が最後に触った。それは確か、だが男性の君が触っただけで起動状態に出来る訳がない、そう言いたいんでしょう?」

「そう!だから一般男子代表みたいな俺が、パソコンや専用の機器も無しに起動できる訳もない!」

「じゃあ何で起動していたんだろうね?」

間髪入れずに紡がれた発言が、小鳥の思考を止めた。

だが、即座に回復した思考回路を用いて。外見の割に低い唸りを上げながら思考し、出した答えを確認する。

「まさか、外部の侵入者?」

「それこそまさかだ。君も知っているだろう?この校舎にある警備システムが何れ程嚴重で、並大抵の泥棒が入れた物じゃないのも」

「それは・・・確かに」

納得するが納得出来ない。それでもまだ理由に成りそうな物は有

る。

「なら、例えば。あの I S に保存されていたこの専門校の技術や、生徒の作り上げたオリジナルパッケージのデータが目的の特殊部隊とか・・・突飛な話だけど、そういうのは無いのか？」

最早敬語も使わず、思考の海から引きずり揚げた可能性を検証してみ。

「だったらあの I S 諸共侵入者の手の内だと思うよ」

が、無残にもぐうの音も出ない程の正論で一刀両断され、イラついた顔を見せる小鳥。

「じゃあ、何で起動してたんだよ。そこまで真っ正面から言い切れるのならそれなりの理由が有るんだろうな」

立場うんぬんを気にしない口調で二人の年上に聞き詰める小鳥の姿勢を受け犬飼が応える。

「あの I S の起動履歴を見てみたら、貴方があの I S に触れた時刻に一度起動して、それを最後にずーっと起動しっぱなしだったの」

その事実を飲み込んだ時、

小鳥は絶句した。

「私だって驚いたよ、それが本当なら君は『二人目』って事になるんだもの」

開いた口が塞がらない小鳥はそのまま押し黙っている。

「そこで、君を I S 学園に招待しようと思う。君はどうしたい？」

「どうしたいって・・・ちよつと待ってくれ!!それは本当にそうなのか!？」

やっと口を開ける様に成った小鳥は、根拠も無く目の前の受け入れ難い現実を疑い、持ち前の良く通る声で問い詰める。

「なら試してみる?もう一度、あの I S に触れて自分自身の特別さを確認してみる?」

どうやら相手には確信が有るらしい、そこでやっと納得した。

自衛隊の面子がこんな事件に見えかける大規模なだけの事故に首を突っ込んで来たのを。

「俺に、I S 適正がある・・・!？」

ただ学校側で事故に『見せ掛けた』だけで、実際はもっと大きな事が起きていたのだ。

「さっきからそう言っているでしよう？」

呆れた様に犬飼大尉がにべもなく告げ、仲村教師兼技師が口を開く。

「そう言う訳だ小鳥、お前IS学園に行ってこい」

更なる一人

嘗ての世界最強、織斑千冬は、職員寮の自室で密室投書された手紙を前に苦笑いをしていた。

「・・・さて、束の奴、連絡を寄越すのはいいんだが、二十四世紀にもなつて手紙を使うとはな、前時代にも程があるんじゃないか？」
精緻を尽くした封蝋が押された手紙を見て、簡潔に感想を述べた後椅子に座り、折り目の部分を破いて本文を取り出す。

『はろはろー、ちーちゃん元気？私はねー、よくわかんないや』
すると束の立体映像が流れ始めた。

手紙を送っておきながら、こんなテクノロジックな物を入れ込むとは、余程のひねくれ者だろう。

相も変わらず、珍妙な事をする奴だ。と、ため息を吐く。

『最近ねー、面白そうな事が起きそうな気がするんだよ』

と、束の映像がそう言った時、千冬の目付きが僅かながら鋭くなる。
(こいつの『面白い』はまともじゃないから・・・一体なにが起こる?)

『具体的に言うとか』

大きく溜める束、そこから紡がれるであろう台詞に身構える千冬。

『——流れ星が降ってくる予感かな?』

その台詞が千冬に届いた時、外で大きな爆発音が響いた。

「ツ・・・!?!」

ガタリ、と椅子をはね飛ばし立ち上がる。

『ちーちゃんなら解ると思うけど、墜ちてきたのはもちろん、隕石なんかじゃない、じゃあ何かって言うのなら、『ISみたいな物』かな?』
「・・・どういう、意味だ・・・!?!」

恐らく、目の前に居る束は、録画されたものなのだろう。だが、問はずにはいられなかった。

『さーって見に行ってみなよちーちゃん、きつと面白いから』

当然の様に、ただの立体映像が応えてくれる訳もなく、促されるまま落下して来た物の確認に向かった。

.....

千冬が向かった先、IS実習用のアリーナには、確かに東が言った様な『ISの様なもの』があった。

「.....これは、IS?乗っているのは.....男?」

白と灰色、主にロールアウト前に使われるカラーリング、全身を覆う人形の鎧の様な機体。

その人形ひとがたの中には13、ないし14歳程の男子が居た。

「織斑先生!これは一体!」

公私共々後輩の教員の一人が問う。

しかし千冬にしてみれば、私に聞くな!!と言いたい所だろうが、そんな事を言ってる場合ではない。

「訓練機を!私が運ぶ、ハンガー格納庫に向かうから、山田先生はこの監視を!決して無茶をしないよう!!」

「は、はい!」

テキパキと指示を飛ばし、一人IS格納庫へ走り出した。

(あの機体は何だ?.....束が『ISの様な物』と言っていた以上、あれはISではない、だが、あれはどうみてもISにしか.....)

そこで頭かぶりを振る、そんな事を気にしている場合ではない。

他の教員とすれ違う、どうやら一足遅くやって来たクチらしい、そんな教員に、山田先生の元に向かってくれ、と頼み込み、そのまま走って格納庫にたどり着く。

(何にせよ、本人に聞いてみれば良いだけの話だ)

スーツのズボンにワイシャツというラフな格好のままISに乗り込んだ。

.....

ハンガーにまで運ばれた後のち、意識が回復した少年が運び込まれたのは、保健室もとい救護室だった。

「.....それで、お前は何者なんだ?」

「.....」

千冬の前でベッドに横たわる少年は、彼女の眼力に怯える事無く応える。

「オレは・・・オレの名前は、刹那・F・聖永だ」
頭に包帯を巻かれてはいる物の、特にこれと言った外傷の無い彼は、己の名を名乗った。

何処か意識がフワフワとしている様だが、それでも質疑応答が出来るのなら、然したる問題ではない。

「お前は何者だ？あのISを何処で手に入れた？」

これが本題だ。彼の持つISは現在解析中だが、束の発言を真に受けるのであれば、『ISではない』と言う結果が出るだろう。

ISでもないのにあの衝撃に耐えうるアレは何なのか、彼が何処の人間なのかを知る為にも、あのISの様な物について知らなければならぬ。

「・・・アレは、あの機体は・・・!？」

あの機体について話をしようとした刹那だが、急に頭を抱え苦悶の表情を浮かべる。

「如何した」

「アレは・・・何だ・・・!?何なんだ!?オレはアレを忘れる訳には行かない筈なのに!?何故忘れていて・・・何故思い出せない・・・!？」

「・・・何だど？」

あり得ては成らない、起きてはいけない事が起きた、そんな焦燥に駆られ、刹那は誰にでもなく只声を洩らす。

「オレは・・・オレは・・・!!!」

「おい、落ち着け」

心配する千冬の間い掛けに耳を傾ける事もなく、泣きそうな顔で刹那は思いだそうとしている。

「チツ、仕方無い・・・」

絶望に染まった顔で呟く刹那に溜め息を吐き、立ち上がる。

「おいー」

「・・・？」

「フツ!!」

「ガッ・・・!?!」

刹那の鳩尾に千冬の拳が突き立つ。

「すまないが、もうしばらく寝てもらおうぞ」

耳元でそう告げ、刹那から身を離す。

すると気絶した彼の身体が倒れ千冬の腕に寄り掛かる。

「ふう・・・こうしていれば、眠り姫の様だと言うのにな」

・・・

布団を被せて千冬は眩き、立ち上がる。

「あ、織斑先生。彼、まだ寝てたんですか?」

「いや、先程寝かせた。一応聞いてみたではあるが、如何やら記憶喪失らしい・・・嘘を吐いているかどうかは判らんがな」

「そ、そうですか」

やっぱり手荒いなあ、と報告に来た教員は内心で思いながらも、次に進める。

「え、えーつと。あのISですが、解析不能でした。一応国連の情報バンクからも一致する物が無いか捜してみましたが、こちらも駄目でした」

「そう、か」

そう言って扉に向かい歩く千冬。

「あの、織斑先生、どこに?」

「事態の報告を兼ねて学長に掛け合いに行く・・・まあ結果は見えていくがな」

その背中はとても頼もしく見えた。

・・・

「そんな訳でお前には、新学期からのIS学園への登校が決まった・・・質問は?」

「——異存は無い・・・だが、待て。そんな事が許されるのか?」

翌日、救護室で改めて顔を会わせた千冬と刹那は、そんな会話をしていた。

「許されているからこそこの結論が出ている、何か不安な事が有るのか？」

「ああ、オレはこれから学校生活を送るんだろう。だがオレの過去は如何^{どう}する、先日から言っているが、オレは記憶喪失だ」

「そこについては問題無い。お前の存在は、あのIS以外は全て真実を公表するつもりだ、お前が記憶喪失だと言う事も伝えて置く」

淡々と対策を述べて行く千冬に、無表情なままの刹那は頷く。

「解った、オレは学園生活に従事すれば良いんだな」

「・・・まあ、その通りだが・・・。まあ、解ったならそれで良い。下手に演技をする必要も無いから、存分に楽しむと良い」

「・・・了解した」

原作1巻

悪意式弁論大会

教室の右列三番目、小鳥は自己紹介をさせられていた。

「あー、ニユースで知ってる奴も多いと思うけど、俺の名前は小鳥遊だ。趣味は機械弄りにSF映画の鑑賞と、まあ後は読書かな。色々と呼び方はあるだろうと思うけど、それぞれに任せる」

割と丁寧だが、どこか突き放す様な口調でそう話した小鳥。

女子の視線は、どこかポカンとしている。どうやらもう少し情報が欲しいようだ。

・・・まあ、そんな期待をかけられたら裏切りたくなる物だ。

「——そんな訳だ、これから一年間、宜しく」
半開きの目は誰を見るでもなく、面倒臭そうな態度で後ろ頭を掻く。

物欲しそうな目付きをしている割に何も質問してこない、非活動的な連中に舌打ちをしそうになりながらも、それを辛うじて抑え、着席する。

「え、えつと、次は織斑君ですよ？」

先生に促され、件の織斑 一夏が登壇した。

かなり長い間が開く。どうやら、どの様にして自己紹介しようか迷っているようだ。

と、たつぷり30秒ほど経った後、意を決して口を開いた。

「お、織斑一夏です」

最初に見つかった『ISを使える男性』の一人目、自分としても少しは気になる。

極力プレッシャーを与えないよう窓の外を見ながら耳を傾けていると。

「・・・以上です」

何か、綺麗に拍子が抜ける音が聞こえた気がした。

と、教室中の誰もが拍子抜けしている中、壇上からパンツと何か

を引つ叩くおとが響いた。

「お前は満足に自己紹介も出来んのか馬鹿垂れ」

見ればその背後で彼の実の姉である織斑 千冬教員が一夏に出席簿を叩きつけていた。

五十音の都合上、先に済まされた小鳥の自己紹介は簡潔に過ぎたが、だが一夏の場合は下手くそなだけで、いたたまれない空気に屈して終わらせた感が否めない。

痛そうにする一夏を他所に空の雲は過ぎて行つた。

.....

一人だけ長つたらしい事を除き、自己紹介も恙無く全員終了し、次に始まる物は授業だった。

普通は入学式の後には色々な要項を渡して解散するだけだと思うが.....

(確かに、ここはIS学園 一般教養以外カリキュラムをメインに据えているし、時間割りが圧迫されるのは解るが... 流石に無理が有りすぎじゃないか?)

「ハア...」

内心で呆れながらも、教科書のページをペラペラと適当に捲つては内容を見直し、失望のため息を漏らす。

(しかも、教科書さえこのザマか。一般に公開されているISの情報と大して変わらない... 詰まらねえな)

教科書に書かれている事柄は、専門校で予習済み、更に言うのであれば情報の深度も桁違いに浅い。

(この程度の情報、調べようと思えばこんな所に居なくとも知れるだろうに)

ぱらり、と退屈そうにページを捲る。

「ハア...」

小鳥が物憂げにため息を吐く度に、黒板に物を書いていた山田真耶教師がビクツと肩を震わせていた。

「...?」

軽く教科書全ページを読み漁った小鳥は、前方の山田教師と軽く目が合う、が、直ぐに山田教師側からいそいそとその視線が外される。(流石 I S 学園、生徒は勿論、教師まで男性慣れしてないのか・・・千冬先生以外は)

ちらり、と横目で元世界最強の織斑千冬を見やる。

一夏と姉弟とあつて、その面立ちは似通う所が多い、がしかし、その目付きはこの教室に居る誰よりも鋭利だ。

(世界最強は伊達じゃない、か・・・)

只佇んで居るだけなのだが、周囲の人間を圧殺しかねないオーラの様な何か漏れ出ている様にさえ見える。

と、暇を持て余し教員の品定めをしているその真後ろの席で、今しがた織斑千冬との比較対象にしていた織斑一夏が頭を抱えて奇声を上げていた。

「んんんん・・・?」

何が在ったかは知らないが、I S の授業に付いて来れてないらしい。隣の女子は教えてくれないのだろうか。

.....

(だ、駄目だ・・・全ツ々解らん。何でみんな涼しい顔して授業受けてられるんだ・・・?)

一時間目の授業も終え、二時間目も終えた頃には織斑一夏の状態は悲惨な物になっていた。

先程、小鳥から『勉強の面倒見ようか?』と誘いがあったので有り難く受けたのだが、今のこの状態では、授業を受ける事さえままたらない。

(最初に I S に乗った時みたいなの、あんな感覚が嘘みたいだ)
そんな彼が思い出していたのは今年の三月頃の話。

・・・親も居らず、きょうだいだけで暮らしていた織斑家。

諸事情あり、学生生活を姉の稼いだ金で謳歌していた一夏は、その罪悪感と『誰かを助けたい』という義務感から、自分も出来るだけ早

く金を稼げるよう、就職率の高い藍越高校に入学しようとしていた。が、何の勘違いかIS学園の入試会場に脚を運び、何の間違いか試験場に口頭だけで案内され、何の気の迷いかISに触れたのだ。

その結果は、本来なら『動かない』の一言で済む筈だったのだろう。だが違った、『動いた』のだ『インフイニット・ストラトス』が。

そんな事も有り、ISが使える事が判明した彼は、トントン拍子で学園への入学が決まり、今に至る。

(・・・あの時のあの感覚は何だったんだろう)

あのISに触れた右の手の平を見つめる。思い出すのはある一つの感覚。

言い表すのも難しい、例えるのならば、『前から知っていた』様な、でも『生まれ変わった』様な、矛盾する感覚。

でも何より、彼が一番引つ掛かりを感じているのは、『こう在る事の方が自然』で、自分と世界がISを介してぴったりと合わさった様な感覚だった。

直感的に言語化してみせても、どうも不思議で仕方がない。彼はISに乗った事なんて一度たりとも無かった筈なのだが、そう思えてしまう事がとても不思議でならない。

そんな疑問に駆られ、何度も思い返してみても、自分がISを操縦した事に思い当たる節の無い一夏は、抱えた頭を持ち上げた。

(悩んでいてもしょうが無い、今からでも遅くはない筈だ・・・!!)

と、気合いを入れて教科書を凝視している一夏と、その前の席で一夏の様子を見ている小鳥の元に一人の女子が立ち構えた。

「ちよつと、よろしくって?」

「ん?」

「んあ?」

自分の世界に入り込んでいた中、唐突に声を掛けられた二人は変な返答をしてしまった。

「まあ、何ですの!?この私に対してその腑抜けた返事は!」

一方的に話し掛けて置いて、勝手に怒り出す女子。

その目付きは他者を嘲る様に吊り上がり、その声音でさえ一々鼻に

付く。

(・・・あー、何だったかコイツは)

小鳥がその少女の名前を思い出そうとする。

確か、やけに長ったらしい自己紹介をしていたのがこの女子だったのは覚えているのだが、如何せんその話に興味が無かったので内容は覚えてないし、そもそも殆どの人の話を聞いていない。

そんな小鳥の無関心を知らず、金髪ロールの髪型をたなびかせ、少女はさらに続ける。

「この私、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットが直々に話し掛けていると言うのに、何ですのその態度は!？」

(あ、セシリアって言うんだ。ふーん)

小鳥と同じく、少女の名前を思い出せてなかった一夏は、彼女が自分から名乗った事で、その名を記憶に留める。

(——この手の女子は苦手なんだよなあ)

と、同時に密かに一夏はそう思う。

男性しか乗れないISがこの世界に生まれてからと言うもの、女性は男性に比べ優遇される機会が多くなり、男女のパワーバランスは崩れ、今では女尊男婢が暗黙の了解となっている。

だが、臆する事無く一夏はそのセシリアに問う。

「あ、質問良いか？」

「ふふふ、下々の求めに応えないほど薄情ではなくてよ」

良い、と言う意味なのだろうか、一夏が質問の是非を問うと、若干気を良くしてセシリアは答える。

「代表候補生って何だ？」

が、それも束の間。一夏のその発言を引き金に、教室中の時間が止まった。

信じられない物を見る様な目で見られる一夏は、初めてISに乗った時、彼の第一発見者となった女性もこんな顔をしていた事をぼんやりと思い出していた。

「・・・あー、何だ。『国家代表候補生』ってのは、読んで字の如く『国家』を『代表』するIS操縦者、その『候補生』・・・つまり、お前の

姉、千冬先生が数年前までなっていた物に、これからなるかもしれない人間の事を指す。基本的にISを所有する国家ひとつにつき、必ず一人は居る……。まあ、有り体に言えば『エリート』と言った所だな」

目も当てられないと言った様子で、小鳥が解説を入れた為に、自信を取り戻したのか、セシリアは胸を張って堂々と宣言する。

「そう、エリートなのですわ!!」

「ふーん」

思った以上に反応の薄い一夏にムツとしながらも、セシリアは演説を続ける。

「そんな選ばれた人間とクラスを同じにした幸運を噛み締めて頂きたい物ですわね」

「………フツ」

その話の鼻先を、『エリート』だとセシリアを持ち上げた筈の小鳥が鼻で嗤い、叩き折った。

「何ですの、その笑いは?」

「いや失礼、余りにも身の程知らずな発言だと思つてな。思わず失笑を禁じ得なかった」

クツクツと陰鬱な笑い声を上げ、嗤い続ける小鳥。

「どういう、意味ですの……?」

「だってなあ、『国家代表候補生と同じクラスになる確率』なんざ、そう低くねえんだよ」

小鳥は立ち上がり、ボタンを開けつばなしにした制服のブレザーを靡かせ、セシリアに詰め寄り、言の葉を紡ぐ。

「現在世界に在る国は統合なんかのせいで150ヶ国程だ、その上ISを軍事力として保有している国家は精々四十が良い所だ。つまり、単純に考えて四十分の一。それに比べて『世界で二人しか確認されていない、ISを使える男性の二人と同じクラスになる確率』を考えてみる、今現在スペースコロニーの人間を含め、人類総数は百億の舞台を越そうとしている。単純に半分の人数を男性だと仮定した時、その確率は五十億の二乗倍、つまり2500京分の一。まあ?イギリス国

民分の一だとしても大凡一億分の一程度しかない訳だけど・・・なあ、この場合、俺等とお前のどっちが幸運なんだろうなあ？」

演技ぶった、わざとらしい台詞回しで小鳥はセシリアに問う。

当のセシリアは、ぐうの音も出ないような正論に顔を真っ赤にしていた。

「ツ・・・貴方は・・・!!自分を何だと思っているのですか!?!」

「さあな、だが少なくとも、俺は俺自身がそこまで特別だとは思っていない、正直ISが乗れる以外は只の男だからな。だが、気に喰わねえんだよ、お前のその、あから様に自分が『特別』だって言う態度が」セシリアの精一杯の感情的な反論でさえ、それ以上の感情論と正論で封殺する。

「ひとっだけ言って置こうか・・・。下らない自慢なら他所でやれ、少なくとも俺の前でするな、鬱陶しいんだよ」

ギラつく目付きでセシリアを威圧し、そう忠告する小鳥。

その光景に一夏は少し引き、周囲の女子達も軽く引いている。

その直後、小鳥の勝利を示す休憩時間終了のチャイムが、まるでゴングの如く鳴り響いた。

宣戦布告

小鳥おどりとセシリアの口論の後、何事も無く始まった三限目。その空気感はピリピリとした物だった。

セシリアは不機嫌に小鳥を睨み付けては歯噛みをしていて。

小鳥はそんな視線を分かり易く無視し。

一夏いちかは先程の小鳥の剣幕を思い出しては身震いし。

クラスのその他大勢は、小鳥への評価を決めあぐねて居る様で、そこから中からひそひそと話をしていた。

「私語を慎め、授業開始だぞ」

千冬ちふゆが全員を黙らせる。

大事な話がある様で、一息置いて全員に聞かせる。

「さ、て・・・気付いている奴も居るとは思うが、来週にはクラス対抗戦がある。そこで、お前達にはクラス代表を選出してもらおう、じた自他推薦すいせんは問わん」

と、その連絡を聞いた後、クラス中の女子達が口々に推薦し始めた。

「私は織斑おりむら君が良いと思います!!」

「私は小鳥君を推薦します!」

面白半分で推薦された側がわの二人はそれに対して対照的な反応をしている。

小鳥は何となく察しが付いていたので落ち着き払った様子で。

一夏かまさか自分が推薦されるとは思っておらず、ワタワタした様子で回りを見やる。

(な、何で俺なんだよ!?)

と、そう思っている事は本人以外知る由よしも無く、女子の会話が止まる事も無い。

このままだとどうしようもない事を理解した一夏は、意を決して立ち上がり、否の声を叫ぶ。

「いや待て!!俺はやんないぞそんなの!!」

「自他推薦は問わんと言った筈だ。選ばれた以上拒否権きよひけんは無い」

「なっ、そりゃ無いでしょう!?!」

その叫びは、無慈悲にも千冬の一言であつさりとは否定される。

「今の社会、この程度の理不尽など雨の如く降ってくる、指名されたのなら覚悟を決めろ」

その指摘の言葉に説得は無理だと感じた一夏はゲンナリと肩を落とす。

そんな一夏に、カラコロと笑った小鳥が、声を掛ける。

「そう肩落とす事無えよ、クラス代表になっても悪い事ばつかとは限らねえし。もしかしたら良い特典が付くかも知れねえんだから、もうちよつと樂觀的に見ても良いんじゃないか？」

「いや小鳥、それでも俺には嫌な未来しか見えななんだ。お前は嫌じゃないのか？」

その問いに小鳥は意地の悪い笑顔で応じる。

「嫌は嫌だが・・・何にしたって断る事は難しそうだし、はつきり言つて諦めた方が良くぞ、この手の話は黙って受け入れるのか得策だ。・・・まあ嫌だと言つて置くことは大切だと思うがね」

なんだか色々諦めている様にも見えるその表情の小鳥は、疲れている様にも見えた。

「何にしても、これで二人選出された、後は投票次第だ。

運が良ければ代表の座から蹴落とされるかもしれないだし、落選を祈つとけば良いんじゃないか？」

と、小鳥が笑っていると、黙つていられないと言つた風の表情をしたセシリアが声を張り上げた。

「そんな選出、納得出来ません!! 只々物珍しきで選ばれた男をクラス代表にするなど、恥晒しも良い所ですわ!!」

後方の席から立ち上がり、一夏達を睨みながら、なお演説を続ける。「ISの登乗者としての実力を以てすれば私が適任!! 極東の猿に任せるなどあり得ません!!」

「・・・それ千冬先生も『極東の猿』つて事に成らないか？」

ボソリ、と小鳥が冷めた口調で呟いた。

その声は小さいながらもクラス中に通る。

一夏にも、千冬にも、セシリアにも。

そして、一瞬にして教室中が静寂に包まれた。

全員の視線がこちらに向いている事を察した小鳥は、面倒な事になったな。と心の中で呟きながらも、それを表情に出すこと無く、立ち上がり、告げる。

「——どうした？続けないのか？その下らない演説を」

水を打ったかの様に静まり返った教室の中で、小鳥の言葉だけが愉しげに紡がれる。

「おーい、聞いてる？理解してるー？」

そう言つて少しの間を取つた小鳥は、真剣みを帯びた顔と台詞回しで告げる。

「——確かに、お前は国家代表候補生だ、その実力は疑い無い。…だがな、だからと言つて俺達が罵られる筋合いは無い」

その表情には確かな憤怒が湛えられている。だが、その怒りを内包した半開きの眼は、セシリアに歪な印象を抱かせる。

「確かに、今の世界、男がどれだけ惨めな扱いを受けてるかは知らねえ訳じゃねえ、それが如何しようも無いって事もな。だがな、俺達は、織斑一夏、小鳥遊と言う存在は、お前と同じ領域に居る。お前が思つているその理由は、適用するには場違いにも程があるんだよ」

直接は口にしらないものの、セシリアの発言の根幹に在る物に警告を入れた。

そして、その手痛い指摘を受けたセシリアは、屈辱に歯噛みして、顔が真っ赤になっていた。

「……言い過ぎだ小鳥」

そう言つて、セシリアを庇つたのは、彼女から中傷を受けた筈の織斑一夏その人だった。

「そうかあ？俺は正論を言つてる積りなんだが」

「語調がキツいんだよ、周り見てみるよ、全員軽く引いてるぞ」

小鳥を窘める一夏は、いつもよりも語調が強めだ。

「……ま、言い過ぎたかもな。何にしても、調子に乗りすぎるなよ、セシリア・オルコット。自分自身の調子に足を捕られる様なら、前に出過ぎない方がマシだぜ」

最後は、穩おだやかながらも悪い口調でセシリアに忠告を残す小鳥。

「さて。話を元に戻そうか、先生、これどうなるんです？三人が選出されましたが、我々はどうすればよろしいでしょうかね？」

「・・・お前がなれば良いんじゃないか？今の様にやれば上手く行くぞ」「そりゃあどうでしょう？俺はそう言うの柄じゃない、人を威圧するのは怒ってる時点で十分ですよ」

千冬の皮肉めいた台詞を、自分の思う所で軽く躲かわす。

「まあそれはそれとして。俺だってこんな面倒臭めんどくさいそうな事したくは在りません。の、で。出来るだけ平等な方法を頂戴ちやうだいしたいのですよ」

軽口を叩いて話を進める小鳥を見て、クラス中の全員（セシリアを除く）はこう思っていた。

お前がクラス代表に成れよ、と。

セシリアの高圧な態度、権力差けんりょくさの有る千冬、それぞれに対して尻込しりこみする事無く話を進める肝きまの座りっぷり、どこを見ても指示を出す側の立ち振舞いをしている。

しかし、小鳥の投げ掛けた質問に応じたのは、千冬ではなかった。

「なら、対戦で決めましょう!! I S 学園のクラス代表であるのならば、その技量をもって決めるべきですわ!!」

先程まで小鳥にいいようにされていたセシリアが、声高こゝろだかに宣言せんげんする。

「貴方あなたがたもそれでよろしいですわね？」

あくまでも自分がルールと言う様に、決めつけるような口調で二人に問う。

「・・・悪くはないな、一理有る」

「お、おい小鳥、良いのかよ?」

以外にもアツサリと了承りょうじやうした小鳥に驚き、一夏は彼の考えを問う。

それに対して、小鳥はにやりと笑い、小声で一夏に説明する。

「良いさ、あちらには曲がりなりにも通る物がある。それに、わざと負けちまえば俺達代表にならずにすむんだぜ?そいつは好都合じゃないか」

「それは・・・確かに、そうだけど」

小鳥も小鳥で打算ださんづくだったらしい、その笑顔は皮肉めいた、悪戯いたずらな笑顔だった。

それに対して、一夏はその考えに納得出来ず、口をへの形にする。「でも、負けを前提にして戦うだなんて、格好悪かっこわるいだろそんなもん」「だーいじょぶだいいじょぶ、俺だってわざわざやられる心算つもりねえよ」

そんな一夏の考えなどお見通しだと言う様な口調で、小鳥は笑う。「まあ・・・それなら良いんだけど」

そういった小鳥の対応も有って、渋々ながら退ひき下がる。

「決まりだな。対決は一週間後、良いな」

千冬のその一声で、小鳥と一夏は覚悟を決めた。

同室者は一体・・・ Y side / I side

その日の放課後、相部屋ながら寮に入れられる事を知らされた一夏と小鳥は、雑談をしながら自室に向かっていた。

「まったく・・・急拵えとは言え、見ず知らずの他人との相部屋とは。笑いしか起きん」

そう言っただけで乾いた笑みを浮かべる小鳥に、一夏が同意する。

「まったく、今までに受けた質問の数からしたら同居人から何聞かれるかわかったもんじやない」

ゲンナリした様子の二人は、廊下を歩き、各々の部屋へと歩を進めている。

「とは言え、俺達の部屋が隣だつてのは唯一の救いだな」

二十四世紀にも関わらず、アナログな鍵に付けられたキーホルダーを見る、そこに刻まれた部屋の番号は、一夏と一っしか変わらない。

一夏の部屋に着いた二人はそこで別れるが、小鳥がその前に話を切り出した。

「晩飯は食堂だよな、一緒に行こうぜ」

「ああ、良いぜ」

「じゃあ用意が出来たら呼んでくれ」

食事の約束を了承した小鳥は、一夏が部屋のドアを開け、その中に入っていくの見送りながら、自らの部屋に入るべく鍵を回した。

・・・

「さ、て・・・。誰も居ないのか？」

自室のベッドに荷物を放り投げた小鳥は、もう一つのベッドに目を向ける。

その上には綺麗に纏められた荷物が在るので、どうやらこの部屋を使っている人間は居るらしい。

「——いや待て、可笑しくないか？」

訝し気に声を出す。

「・・・なんでこんな綺麗に纏められている？」

その荷物は、まるで『今日初めてここに来ました』と言うように、衣服は綺麗に畳まれ、その上に携帯端末が置かれていて、まるで支給品の様に新しい。

「一体、誰だ？」

剩りに整い過ぎている。

同室になった人間がとんでもない綺麗好き、と言う可能性は捨てきれない、が、最低限過ぎる。

ベッド以外の場所を見回してみても、荷物は先程述べた物しか無いのだ。

小鳥自身、自分の荷物がそこまで少くないのは解っているつもりだが、これは誰が見ても異常だろう。

恐る恐るその荷物に近付いた時、猛烈な破壊音が鳴り響いた。

「ッ!」

驚いて扉に眼をやるが、特に異常は無い。

とすると、外で何かが有ったのだろう。

「何があつた？」

スタスタと玄関に赴き、ドアノブを回し、外の様子を伺う。

「・・・どした？」

「いや、その、助けてくれ小鳥、殺されそう」

そこには、何か鋭い木製のオブジェクトが生えたドアと、それに凭れ掛かる一夏がいた。

これだけでは流石に状況が解らない、「何があつた」と声を掛けようとした時、木製のオブジェクトが小さくなり見えなくなる。

(いや真逆あれは・・・!!)

そこで気付いた、あのオブジェクトは生えているのではなく『刺さっている』のだと。

——あれは、木刀だ。

そして、それが奥に引っ込んだと認識した時、嫌な予感がした。

「離れろ一夏!!」

その言葉は遅く、もう既に事態は起こっていた。

ズガンツ！バガンツ！！ドズツ！！と三連続して一夏を狙った木刀がドアを突き破った。

「つて殺す気か!？」

すんでの所で牙突を躲した一夏がドアの向こうの人間に叫ぶ。

恐らく一夏の同室になった人間が攻撃しているのだろう。

しかし本当に何があったのだ、どんな経緯があればこんな事態になると言うのだ。

「あ、一夏くと小鳥くんの部屋つて隣なんだ！」

「良い情報ゲットしたわ・・・!!」

と、小鳥の困惑を他所に、近場の女子が集まり始めていた。

「・・・箒、中に入れてくれ、このままだと色々不味い」

同室の人間の名は箒と言うらしい、一夏が必死に説得を試みる。

ズツ・・・ズズツ、と木刀がドアの向こう側へと沈み込む、どうやら攻撃を止めてくれるらしい。

『・・・良いぞ』

ドア越しのくぐもった声が出た。

何はともあれ入室の許可が出た以上、外でもたもたしてられない。

いそいそと部屋に戻る一夏、その背中をどうしたら良いのか解らない小鳥が見つめていた。

.....

ドアを開けた先には剣道着を身に着けた箒が待っていた。すぐに着けられる服がこれだったのだろう、大急ぎで着けたのか帯の締めが緩かったり襟が縫れている。

それに何より、まだ水気のある長い髪が流れているのは中々新鮮な光景だ。

（つて、洋服よりも和服の方が着け易いつて考えたのか・・・。なんだか相変わらずだな）

IS 学園に入学する前に一夏が彼女を見たのは六年前、小学三年生頃だろうか。

地元の神社と剣道道場の生まれで、一夏の幼馴染みの彼女は、昔から『侍女』と悪口を言われていたりする程、鋭い印象を放っていた。それは今も変わらず、否、その鋭さは六年をかけて研鑽されている。「・・・何だ」

ギロリ、とその鋭い目付きで一睨みする箒は、そのままずっと奥側のベッドに腰掛ける。しかし、自分は座れるような雰囲気でないのを察した一夏は立ちっぱなしでその姿を見続ける。

「な、何を見ている!」

「あ、ああイヤ何でも無い」

箒が口を開くが、それに対する一夏の返答に更に不機嫌そうな顔になり、そのムスツとした表情のまま髪を纏める。

ポニーテールとなったその髪型を見て、何だか落ち着いた一夏に、またもや箒が口を開いた。

「お、お前が私の同室者だと言うのか?」

「ああ、まあ、そうらしいな」

素つ気無い一夏の反応に対して、更なる抗議の文言が箒の口から飛び出す。

「お、お前が希望したのか!」

「は・・・?」

何言ってるんだお前、と言ってしまいそうになったが、すんでのとところで喉の下にまで押し込む。

そして代わりにこんな台詞を発した。

「そんな馬鹿な」

「——ッ!!」

その台詞はどうやら彼女にしてみれば不正解のようだ。

「あ、あぶねえ!!木刀は止めろって!!」

そうでなければ一夏に木刀が振り下ろされる事など無かつただろう。

「馬鹿・・・そんな馬鹿な」だと・・・?ああそうか、そうかそうか・・・
奇跡的にも木刀を白刃取りしてみた一夏の両手諸共押し切ってしまうかと、箒が体重をかけてくる。

(やばいやばい、これ木刀だから死なないとは思うけど、この勢いなら頭蓋骨が陥没かんぼつしてもおかしくないぞ!!)

「!!!」

(いや前言撤回、間違ったら殺される・・・!!)

一夏に体重を掛け続ける筈からは、人を殺しかねないオーラとも呼べるような何かが溢あふれていた。

と、外から

「わあ、篠ノ之さん大胆・・・!!」

「抜け駆けは良くないよー」

「織斑君が総受けての言いわね・・・!」

そんな声が聞こえてきた。

(いや待て、最後のは何だ最後のは!?)

と、一夏は場違いなツツコミを入れるが、筈はそうでもなかったらしい。

「なっ、なななあ・・・!?!」

勢い良く一夏から飛び離れる、どうやら止めてくれるらしい。

(でも何で女子達はあんな事を言ってたんだ・・・?)

ぼんやりとその理由を考えるが、すぐに答こたえに行き着いた。

木刀越こしで押し潰つぶそうとしていた姿勢では、筈が一夏を押し倒している様にも見えなくもない。

「.....!!!」

ドアに張り付く女子達を無言の圧力で追おっ払はらった筈は、一夏に向き直る。

「とりあえず、この状況についてだが・・・。って、聞いているのか、

一夏」

「お、おう聞いてないぞ!?!」

「聞いているのを報告する奴が居るか馬鹿・・・」

真剣に話を始めようとした筈だが、一夏あの顔から『絶対に話聞いてないな』と、確信を得た為一夏に詰め寄る。

ちなみに、当の一夏はと言うと。

(ああ、俺をどう始末するか、だな。いいか筈、殺人で最も重要なのは

犯行のタイミングじゃない、犯行後の後始末だ。人間の身体は50キロを軽く超えるタンパク質、脂質の塊だ。その上5リットルより多い血液が内包されている。そして一番厄介なのが骨だ、骨つてのは実はかなり早い段階で腐っちまう、ドラマなんかじゃ白骨化した状態でしか出てこないからそう言うイメージないだろ？だから、骨は解体の時点で処理しなきゃいけないんだが、そんな時間はない。だからここで冷蔵庫を使う、冷蔵庫の低温下でなら骨の腐食も――

・・・箒の殺気にあてられおかしな事を心の中で口走っていた。

「えーつと、なんだったつけ。もう一回話してくれ」

悪いなど感じて頭を下げる一夏、それに応じて箒も話し始める。

「ま、まあ、その・・・何だ、この部屋で暮らす上での線引き、と言うより、ルールは設けるべきだと言う話でな・・・」

が、後半に行くに従ってごによごによと言葉が潰れて行く。

(何でそんなバツの悪い顔してんだ？それに顔も心無しか赤いし・・・風邪か？)

そんな一夏の検討違いな心配を他所に箒は話を続ける。

「まずは、風呂の時間だ。私は七時から八時。お前は八時から九時だ」

「え、俺早い方が良いんだが・・・」

「部活で汗まみれの私にそのままでもいいろと言うのか！」

「ん？部活入ってるのか？」

「あ、ああ。剣道部だ」

成る程なあ・・・と納得する。確かにそれでは箒を後に回す訳にはいかない。

「ん？・・・いやでも待て、確か武道場にもシャワーは在ったよな・・・？」

「わ、私は自室のシャワーの方が落ち着くんだ!!」

「あー、まあそうだな」

言われてみれば確かにそうだ。と納得する一夏。

(トイレなんかも自分家の方が落ち着くしなあ・・・ん?)

泥縄式に考えを広げていると、一つ疑問にぶつかつた。

「そーいやさ、IS学園に男子トイレっていくつあるんだ？」

「確か・・・各階の両端に一つずつの筈だ」

「まってじゃあどうすんだよ俺のトイレ事情!?こここの両端って相当な距離だぞ、ダツシュしなきゃ休み時間に間に合わねえじゃん!!」

「そんな事私が知るか!!」

一人そんな不安を抱えた一夏は、箒の叫びを横に置いて考えた。

(もし、もしも間に合わないなんて事になってしまったら・・・俺は、俺は・・・)

「――女子トイレを使うしか無いのか・・・?」

バアツシイインツ!!!と、痛烈つうれつな一撃が一夏の頭にクリーンヒットしたのはそれから三秒も無いほどの直後だった。

「・・・一体何なんだ俺の同室者は」

一夏が箒いちかほうきに頭を打たれている時、小鳥おどりはそう呟つぶやいていた。

現在時刻は午後六時三十分。一夏と夕食の時間まで後三十分と、微妙な時間が残されている。

隣で大惨事待った無しの一夏を救出に行くのか、それとも自分の同居人の顔を知るべきか否か。どちらにせよ、小鳥には二つの選択肢があった。

取り敢えず、思考の袋小路ふくらこうじに行き当たってしまった小鳥は、ベッドに横たわる。

「待っべきか、待たぎるべきか。世知辛いな、人情と好奇心の板挟みってのは」

ウィリアム・シェイクスピアの言葉をアレンジしながら、この世の難しさを嘆なげく。

嘆いてはいるが、別段そこまで深刻に悩んでいる訳でもなく、今日の晩御飯のレシピはどうしよっかな。程度の悩みである。

確かに、同居人の事は気になるが、知らなかった所で死ぬ訳でもない。それに、一夏の方も、同居人は知り合いらしいのでボコられても殺やられるだなんて事はないだろう。心配ではあるが。

「・・・・・・・・」

ふと、隣に置いてある着替えが眼に留とまった。

隣人が一夏である以上、女子の服であろうそれをまじまじと見つめるのは気が引けるものの、これ以上状況が進展しなさそうなので、この同室者に対し考察を深めて行く。

「二応、女子、だよな・・・。下着類が見当たらないって事は、大浴場で入浴中って事か」

白いTシャツが一番上に何枚か掛けられ、下には短パンが何枚か重ねられて居る。

見てくれから察するに、どうも胸囲はそこまで大きくなく、スレンダーな娘らしい。

「エロ親父か俺は」

そこまで考えて、考察が下衆ゲスな事になっている事を自覚した小鳥は、頭かぶりを振って邪よこしまな考えと妄想を追い払う。

「兎とに角かく、何だってこんな生活感が無いのか。そこが問題だ」

一人呟つぶやいて思考を元の基軸に戻す。これ以上話題が逸それてもらっても困るのだ。

「——ってかコイツ、服と携帯以外なんも持ち合わせてないな」

より一層謎は深まるばかりだ。

小鳥自身、自分の荷物が普通より多い事は自覚しているが、流石にこれは異常だ。

彼がこれまでの人生経験で得たものとして『人間、生活をする以上は趣味だの何なんだので人生の不用品が必ず出る』と言う持論があったのだが、どうもこの同居人は例に漏れるらしい。

「・・・例外か」

ふと、そんな事を思ってしまった。

セシリアに言った通り、自分は自身の事をさして特別とも思っていない。

それがどうだ、たった二人のIS操縦可能の男性として国賓級こくひんきゅうの扱いを受け、周囲からは好奇と期待の眼差しを受けている。

「つたく・・・人生どう転ぶか解ったものではないな」

そこまで言って、先程と同じように頭をブンブンと振り回す小鳥。どうも思考がブレがちで、結論が見えてこない。

例外の事を考えた所で、一体何者なのかなど解る訳・・・。

「いや待てよ・・・。何で例外なんだ？」

考えてみれば確かにそうだ、この同居人はどうやら、荷物と呼べる荷物が全くと言って良いほど無い。

そんな人間の条件を絞っていけば、自然に答えに近づく筈だ。

「・・・バッグが無いって時点で殆どほとんど答は出ているんだが・・・」

とは言え、考えたら直ぐに答えは出てしまった。

バッグが無い、と言うことは、生活用品をこちらに持ち込んでいないと言う事だ。

それにも関わらず生活用品一式が揃っているとなると、その条件は限られてくる。

一つは、一夏のように急に寮入りが決まって、泣く泣く学園からの支給品で回している奴。

二つは、元々寮生活を希望していた上で、わざわざ近場のショッピングセンターで買って来た奴。

「……」

もう一つ、これが一番面倒臭くかつ、あり得ない事態だ。

「超国賓級の某かつてなところか……」

そう言う特別な人間なら、自分や一夏と同じように、秘密裏に入学させられ、身辺整理の整う前に政府によってぶちこまれたと考えられる。

さらに面倒なのは、どんな風に特別なのか、だ。

例えば歳に似合わぬIS適正で、流石に国家代表うんぬんを問えない状況ならば、それも有りうるだろう。

が、その場合。子守りを任された感じがして癩だ。それに、こんな利己的かつ功利主義な人間が教育など到底出来るとは思えない。

「とは言え、もう一方も……」

正直言つて面倒臭さは先程の想定より倍の面倒臭さだろう。

その想定とは、言うまでも無く隣人が男子だと言う場合だ。

この場合、女子どもが五月蠅くて敵わん。

(一夏と一緒に昼飯食っただけで腐った奴等からカップリング組まされたからな)

とは言え、この想定も言わば想像の域を出ない。未だ、違和感が抜け切らないのだ。

男子であれば、世界的な発見として、大々的に発表される筈だ。が、しかし、どういう訳だか世間一般に知らされていない存在なのだ。

この事実が有る限り、想定としては片手落ちとしか言わざるを得ない。

「誰だかは知らないが、会ってみてからの話になるな」

時刻は現在六時五十分、そろそろ晩飯の時間でもある。

ベッドから跳ね上がり、小鳥は立ち上がる。

「考えても仕方がない、取り敢えず飯だ飯」

考えるのは飯を食ってからにしよう、と。何も考えていない笑顔で小鳥は自室を後にし、食堂に向かった。

・・・一夏を置き去りにして。

・・・翌日・・・

「小鳥・・・お前さ、」

「あー・・・。悪かったって、約束すつぽかして一人だけで飯に行った事は」

時刻は現在朝の七時。場所は食堂の窓際テーブル。

小鳥はほうとうのお吸い物、一夏は鯖味噌を、それぞれお膳に置き、対面しながら話をしていた。

恨めしげに小鳥を睨む一夏は、昨日の事のあらましを語って、自分の大変さを論じ、小鳥が助けに来なかった事を含め、約束を破った事に愚痴を溢していた。

やれやれと言った表情で両手を上げ、降参のポーズを取る小鳥は、軽い口調で約束を破った理由を説明する。

「色々と考え事してたらすっかり忘れてしまつてな」

出任せでは有るが、一応考えていた事については事実である。

結局、晩飯を食った後、三時間考え、三時間待つてみたもの。確信は得られないわやつて来ないわやつて来るのは関係の無い女子連中だで、答を得られないでいた。

しかし、一夏もこの程度の嘘ではそう簡単には誤魔化し切れないらしく、訝しむ様に小鳥に問う。

「何の考え事だよ」

「アイツにどうやって勝つか」

これは完全な出任せ。一夏を騙すならこう言う好戦的な物が良い。

一夏は勝利への意欲が無駄に強い。それを煽り立てれば誤魔化すのも容易いだろう。

が、一夏の食い付きは思いの他強かった。

「へー？じゃあ何か思い付いたか？」

小鳥の顔を覗き込む様に身を乗り出し問いかける。

余程セシリアとの戦いに負けたくないらしい。

まさかの食いつきに面喰らいながらも、小鳥はどう答えようか、刹那コンマに満たない時間でそれを導き出す。

実は全然考えてませんでした、だなどと口走る訳には行くまい。だが、実際考えていない事を隠すにはどうすれば良いか、考え付いた言葉はこれだった。

「何も」

「思い付かなかったのかよ・・・」

失望からガツクリと項垂うなだれる一夏。

(ホントに勝ちたいのか・・・)

一夏の勝利意欲に引き笑いしながらも、小鳥はそれに答えるべく、手作りの二つ折り式小型端末を取り出して弄いじくり始める。

「取り敢えず、アイツのISの情報だ」

おどけた声音で、一夏に端末を手渡す。一夏は驚きながらもそれを受け取る。

「お前、どこでそんなもん手に入れたんだよ」

「別に。IS学園のサーバに公開されてるからな」

ほおー、と頷く一夏。

そんな彼を見ながら、小鳥は心の中で横笑ほくそえむ。

(ま、半なかばハッキング紛いの事はやったけどな)

ISの機能は特A級の国家機密であり、一般のネットワークからハックされないよう、学園内の専用端末でしか接続できない独立ネットワークのサーバに於おいてのみ公開されている。

勿論もちろん、そのネットワークのハック対策は一般のそれとは比較にならない程の防御を誇っている。

それを破る為の労力は並大抵なみたいていではない。個人で出来る領域ではない筈だが、何故そんな事が出来たかと言うと。

(ホントに・・・良くもまあ端末の使用コードを特定出来たな整備科)

「昨晚さくばんやって来た整備科の生徒の何人かが、どこかで決闘の話を聞いていたらしい、点数稼かせぎの為に情報を提供するべく、一般の端末を専用端末に擬装ぎそうする方法を教えてくださいましたのだ。」

「んー・・・」

それに感心している小鳥。一方の一夏は、小鳥の端末とにらめっこしながらセシリアが一体どんなISを使っているのか、どうすれば勝てるのかを考えている。

「遠距離専用の機体か・・・。やっぱりそうなると近距離戦で回して行くしか無いよな」

「ま、だろうな」

一夏の話題に乗ってはいるものの。声に張りは無く、何となく面倒臭くさくなって適当に首肯しゅこんしているだけに見える。

事実、面倒臭くさくさいのは確かなので、小鳥は一夏から端末を取り上げて会話の終わりを促うながす。

「取り敢あえず、この話題はここまでにしよう。今は飯めしを食くう時間だ、朝から喧嘩けんかの事を考えるべきじゃないだろう?」

「ま、そうだな」

そう言いって箸はしを取る小鳥、促うながされた一夏も箸を取り。手を合わせる。

「あゝ、いたいた〜!」

と、その横から異様にゆっくりな女子の声こゑが掛かかった。

それに釣あられて横を見ると、剩あまった袖そでに声に負けず劣せらざるの、のんびりとした表情の女子が居た。

「えへへ。オドリンおはよ〜」

「――本音ほんねか」

「ん? 知り合あい?」

「あー、うん、まあ」

「言いよどまないでよ〜」

困こまった様に言うが、余あまり怒おこっている様に見えないのは、彼女の気質だろう。

彼女の名前は布のほ本音とけほんね、確か整備科期待きたいの新人の筈はずだが・・・。

「えつとね〜、となりに座ってもいい〜い？」

「えつと、小鳥、良いよな」

「構わん、別段特に迷惑な事しなければ断る理由は無い」

「へへへ〜。ありがとお〜」

どうもこのキャラとその立場が噛み合わない。

迅速性を求められるのはパイロットだけではない。仮にもISは兵器なのだ、戦場において整備と言うのは、正確性と機敏さが求められる。

彼女の様に鈍い娘が整備科のエース、と言うのは正直言つて眉唾だ。

「しかし、小鳥お前良く覚えてるな。俺なんて昨日部屋に押し駆けてきた女子の名前ほとんど覚えられてないぞ」

「ああ、俺の数少ない取り柄の一つだからな」

専門校で鍛えた記憶力は伊達ではない。

一機のISで使われるパーツは数十万にも及ぶ。しかも、それは同じ機能を持つパーツでもメーカーによっては見た目が全く異なる事も多い。

中には国際共通規格で組まれている機体は在るものの、殆どがその機体専用のパーツで構成されている為、現役最前線のISだけでも覚えるべきパーツの総数は数億は軽く超える。

興味の無い女子連中とは言えども、数十人程度の名前なら小鳥の記憶力をもってすればそう難い事ではない。

「えへへ〜。うれしいな〜♪」

「そこまで嬉しいか？」

とは言え、覚えられた側は嬉しいらしい。異常に長い袖の剩りをぶんぶん振り回して喜ぶ本音。

喜ばせる積りなど毛頭無かったのだが、そこまで言われると悪い気はしない。

「じゃあ、食べようか」

「そうだな、これ以上時間喰つてたらS H Rに間に合わなくなる」
「頂きます、と三人は手を合わせた。」

訳の解らぬ決闘

面通し翌日の昼食時間、質問責めに遭いながらも食堂に到着した小鳥は、相席した一夏と共に、彼の幼馴染みに相談を持ち掛けていた。「なあ、箒。ISの事教えてくれないか？このままだと、何もできずにセシリアに負けそうだ」

「うむ、おえかあもたのう、おおいいいっおいいあんだが、おえもあいえうおおうゆうにういいえようわあつてえんあよ」

「ええい貴様、口に食べ物をつ突っ込んで喋るな!!それが人に物を頼む態度か!？」

沖繩そばを口に含んだまま喋る小鳥にキレている彼女の名は篠ノ之箒。一夏の会話から察するに剣道をしているようだが、その片手間で古流武術を修得しているようで、先程一夏が強引に昼食に誘った際何が琴線に触れたか、一夏を軽く投げ飛ばしていた。

(それでも付いて来たって事は・・・一夏に気でも有るのかね)

適当に箒の叱責を聞き流し、彼女に対する軽い考察をしていく。

取り敢えず口の中のそばを飲み下し一言。

「うめえな」

「人の話を聞けえツ!!」

.....

完全にキレた箒を一夏が宥めて、会話を再開させる。

「ISの操縦か・・・教えられる事はないが、どうやって教える。お前達二人にはISが無い、この時期は訓練機の貸し出しは出来ないぞうだから、私に出来る事は無いぞ」

「ま、マジかよ・・・じゃあどうすりや良いんだよ俺達」

「ぶつつけ本番で挑むしかないだろうな。まったくふざけていやがる」

「ハア・・・と溜め息を吐く。」

セシリアは国家代表候補生であると同時に彼女用のIS、所謂『専

用機』と言う物を所有しており、操縦経験の差は勿論の事、使用するISにさえ格差が有る。

小鳥は『ただ負けるつもりは無い』と言ったが、勝ち目は相当に薄い。

「あーもう。悩んでても仕方無い。小鳥、座学だけでも良いから教えてくれよ」

右の席に座る小鳥に向き直り頭を下げる一夏。

「お、おい！私に教わるんじゃないのか!?」

「え、いやだつて筈さつき『出来る事は無い』つて言つてたじゃないか?」

「そ、それは実戦訓練とか、そう言つた意味であつて。私が何も出来ない訳ではない!!」

小鳥の反応を待たずして勝手に盛り上がる二人。

小鳥としてはどっちでも良いのだが、会話に入る余地もなければ、最終的にそれを決めるのは一夏なので、空気化する事を選んだ小鳥は、二人の口論を無視して肅々とそばを食べる。

「それとも、私には荷が重いと言ふのか!？」

「……汁物の命とも言える鰹出汁ベースのスープは、旨味を多く保有し、塩味も付きすぎず、ちょうど良い。」

麺類の主役である麺は、歯切れ良く舌触りは割と粗めで、スープとの絡み方を良くしている。

(しかし、世界の郷土料理が一同に会しているとは……。素晴らしいなあ? 血税で出来た学園と言う物は)

「いやそうじゃなくて、先に小鳥が言つてたんだつて!!」

しかも素材ひとつひとつの完成度が高い、所謂『お高めなやつ』を使用しているのだろう。柔らかい三枚肉や、噛み心地抜群の蒲鉾は勿論の事、トッピングに付けられた、香り高く、しかして強すぎない刻み葱や、酸味歯応え共々満足な紅生姜、どれを取っても一級品だろう。

「何をだ!!」

「俺の面倒を見るつて!!」

ぴたり、と、止まった、心を無にしてやっていた食レポも、麺を啜る口の動きも。ついでに言えば、食堂中の空気もぴしりと凍りついた。

「ぶほっ!! あゝ、っほっ!! えゝ、ほっ!!」

その弾みで小鳥が噎せ返り、苦しそうな咳を吐き出す。

そんな小鳥の状態など気にも止めず箒が問い詰める。

「おい!! 本当なのかそれは!!」

「否定したいけど否定出来ないツ!!」

・・・放課後・・・

場所は武道場、そこに居るのは今I S学園で一番ホットな話題の一つ、織斑一夏と小鳥遊、篠ノ之箒の三人だった。

「・・・構えろ」

「イヤイヤイヤイヤイヤ」

剣道着と袴、その上からは防具一式と、完全に剣道部員のフルセットで構える箒が、貸し出しの竹刀一本を右の片手に持つ小鳥に告げる。

ちなみに、小鳥は道着はおろか、防具さえつけていない。自分がやるとは思ってなかったのだろう。

「いやさ、『腕が鈍ってないか見てやる』ってお前一夏に言ったんだろ? 何で俺まで剣道やんなきゃいけないんだよ!」

困惑で胸いっぱいの小鳥は、捲し立てる様に箒に訊ねる。

「そ、それはお前が、一夏に物を教えるに足るかどうかを見る為だ!!」

「つたく・・・頑固オヤジかよ・・・」

鏢で頭を搔く小鳥は、仕方無いと言う風に溜め息を吐き。

箒を正面から見据えた。

「——来い・・・!!」

その構えは剣道と言うより、フェンシングのそれに近い。しかし動きが肝要なフェンシングのそれとは違い、重心を揺らす為の動作すら

ない。これでは素人のそれにしか見えない。

だがしかし、その気迫は堅気とは思えない。

「ツ……!!」

その気迫に臆する事無く突撃する筈。

この際小鳥に防具が無い事など気にしない、それで怪我しても『重くて暑い』と脱ぎ捨てた彼の責任なのだから。

「フウ……ッ」

浅く呼吸を吐き出し、右足を踏み込む。

退く、だなんて無粋な事はしない。

むしろこう言う方が性に適ってる。

「ハアッ!!」

「ツ!!!」

前に重心が移動した状態で筈の面が迫る、しかし小鳥に焦りは無い。踏み出した右足で地面を左に蹴り、強制的に自らの軌道を右に逸らす。

辛うじて鋒を躲し、筈と交差した小鳥は、崩れた体勢を立て直し、筈を正面から睨み付ける。

間合いから離れた小鳥は、筈と視線がかち合った事を確認すると、そのまま右腕を大きく振り上げた。

「ツ!!」

慌てて防御の姿勢を取る筈、それもその筈。

スナツプの効いたその動作で、竹刀が打ち出されたのだ。

「間合いから外れたからって安心すんじゃねえぜツ!!」

一直線に駆け出す小鳥。そう、投げた竹刀と自分自身で一人時間差攻撃をしようと言うのだ。最早剣道ではない。

「ツ……舐めるな!!」

小鳥の竹刀を上弾き、流れるように上段の構えを取る。

人間の速力では到底投げられた竹刀のスピードには追いつけない、時間差が半秒でも有れば捌けない訳がない。

(もらった……!!!)

そんな愚を犯した小鳥を嘲る様に、箒はタイミングを合わせて振り下ろし、

「・・・はん」

竹刀は空を切った。

「止まった・・・!?」

一夏が驚愕の声を漏らす。

そう、止まったのだ。小鳥は、箒の竹刀が当たる瞬間を読み切って、急停止した。

鋒の部分に当たる筈だった小鳥の頭は、その軌道の僅かに後方、仰け反った姿勢でしてやったりと言う風な笑みを浮かべている。

「ラァッ ツ!!」

声を上げて箒の胴に殴り掛かる。

(タイミング完璧!!人間の反応速度じゃ間に合わねえ。貫った!!)

振り下ろされた両腕の隙間を縫って小鳥の右の拳が突き立つ。

否、突き立とうとしたその時

「ハアツ!!」

箒の気合い一閃、竹刀を振り上げたのだ。

ゴンツ!!と鈍い音が胴の防具と拳から鳴ったと同時に、バシンツ!!と鋭い音が小鳥の脇腹と竹刀から響いた。

強かに左脇腹を打ち付けられた小鳥は、その場所を抱えて悶絶する。

「・・・っ、だァーっがァーっ!!」

「男が痛いだけで騒ぐな!!」

その横では箒が小鳥を叱責していた。

小鳥の拳もかなりの威力を持っていた筈なのだが、防具を装備しなかった上、箒が放った改心の一撃を、神経の集まる脇腹に思いつきり受けたのだ、ダメージは小鳥の方が遥に上だろう。

「無茶言うな!!あんなん受けりゃ誰だってこんななるわ!!」

理不尽なお叱りを前に、小鳥も語調を荒くして対応する。

「だ、大丈夫か?」

「大丈夫に見えるか・・・?」

一夏が心配しているが小鳥は未だ立つ事すらままならない。

箒にボツコボコにされた一夏よりは精神的には問題無いが、胸部に奔る痛みは相当な物だ。

「しかし驚いたな、箒。お前また腕上げたんじゃないか」

「ふん、どうせお前達が軟弱なだけだ。私はそれほど強くはない」

「イヤイヤイヤ、と小鳥と一夏が心中でそうツツコミを入れる。特に小鳥がより強く否定しているが、それには理由があつた。

(面を外した直後に振り上げたあの反射神経、人間のそれじゃねえぞ) 小鳥自身、人体の限界を知る様な人間ではないが、それでもあのパターンに初見で対応されるとは思わなかつた。

箒がこちらを見て射程距離外だと判断した瞬間に投げた竹刀も。

それを防御する為に振り上げた腕で視界から外れたのを見計らつて走りだし、剣の間合いにギリギリ入らない距離まで近付いたのも。

振り下ろされた竹刀を前に、全力でブレーキをかけ仰け反り、後方に躲したのも。

そして、その仰け反りの戻りを利用して胴に向けて放つた右ストリートも。

正直、全てが完璧で、パターンを知らなければ攻略は不可能だろうとさえ思っていた。

しかし破られたのだ、こうなると小鳥の作戦不足としか言いようが無い。

「それでもこれはやりすぎでは・・・？」

「いや、卑怯な手を使ってこのザマだ。文句は言えん」

「そう言う意味なら俺も手段としては大分やり過ぎたしな。と左脇腹を抱えて上体を起こす小鳥。

「まあでも、痛いではある。後から言うのもなんだが、もうちよつと手加減してもバチは当たらんぞ？」

あははと引き笑い混ざりの台詞だが、さつきまでの痛み方からは考えられない程ピンピンしている。

「防具を脱いでいたお前が悪い、私に手加減を期待する方がどうかと思うぞ」

そう返した箒に、ですよねー。と小鳥が引き笑う。

「な、何にせよ、だ。小鳥、私はお前に勝ったのだ。だから、その。い、一夏の面倒は、私が見て良いんだな!？」

「・・・まあ、構わんが」

——はたしてこの決闘で勉学面の優劣を計れるかは疑問だが、箒の剣幕に折れ、その座を譲る事にした。

カミングスーンな二つ

「——なあ、箒」

「なんだ、一夏」

それとなく声を掛ける一夏、
無愛想ながらもちゃんと応えてくれる箒。

「・・・俺さ、気のせいじゃなければ、お前からISの事何一つ教わってない気がするんだけど?」

「・・・——(フィット)」

「こっつちを見ろ!」

顔を背けた箒に向かって声を掛け続ける一夏を他所に、小鳥は溜め息と共に苦言を呈す。

「——そんな事よりも、だ。俺達のISはどうなっている。専用機が来るって話じゃなかったのか?このままだと、初期最適化も出来ないぞ・・・?」

IS操縦のレクチャーよりも、むしろこっちの方が問題である。

ちなみに、『初期最適化』とは、

搭乘するISの内部データを初期化する『初期化』

更に、初期化ISに操縦者自身の持つ身体付きや臓器の形と位置、対G性能など、身体能力を測定し、ISに入力する『最適化』

この二つを総じた俗称である。

これを行う事で、ISは真に操縦者の物となり、本当の能力を発揮出来る。

だが、その意味を返せば、たとえISを乗り回す事が出来てもその実力を出す事は出来ないのだ。

(まあそれも、ISが届けば、の話だがな)

ISが届かなければフィットテイングも何も操縦も出来ない。

詰まる所小鳥と一夏の命運は未だ見ぬ専用機と、それがちゃんと届くかに懸かっているのだ。

(まあでも、このまま届かなければ不戦敗になるからそれでも良いかもな)

とは言えそもそも小鳥はそんなに乗り気ではなかったし、これでも戦敗となれば、それこそクラス代表になりたくない小鳥からしてみれば願ったり叶ったりである。

早く届いてくれと切に願う一夏とは対照的に、小鳥は明日に届いてくれと切に願っていた。

「——織斑くーん！小鳥くーん！」

それぞれの思惑が交錯する中、副担任・山田教師が息を切らしてやってきた。

「はあつ、はあつ……」

のだが、全力疾走の結果、息を切らし、喋る事もままならなくなっていた。

「ど、どうした？」

「あ、あのつ、えつと……！」

何があったのか聞いてみるが、途端にどもる真耶先生。

息切れも相まって、とてもじゃないが喋れる状態ではない。

「山田先生、落ち着いて。ほら深呼吸、すつてー」

「すーはーすーはー」

「はい止めてー」

一夏の勧めに従い、掛け声に合わせて深呼吸を始める真耶先生。一体何を見せられているのだろうか。

しかも意地悪な事に一夏が掛け声を止めたせいでどんどん顔が真っ赤になって行く。

「年上をからかうのはよせ。それと、なんで律儀にこのバカの戯れ言に付き合ってるすか麻耶先生」

やれやれと言った様子でそのやり取りに待ったをかける。

「え、いや、あの、そのつ……」

……かけたのだが、山田先生のテンパりは止まらない。

そんな訳で、困り顔を浮かべるしかない小鳥。と、その後ろから、

「あだあつ!？」

「お前こそ教師を困らせるな」

スパンと千冬が出席簿アタックを決めた。

「何をするんですか千冬先生・・・!？」

「何、教師いじめに制裁を下したまでだ」

「どうだ、嬉しかろう?と、いやらしい笑みを浮かべる千冬。」

「そんな遊戯に精を出す暇があれば、さっさとスーツを着けて準備しろ」

「はい?」

スーツ、と言うのは恐らくISを操縦する際に着用するISスーツの事だろう。ちなみに、一夏はツーピース型のヘソ出しスタイルのを、小鳥にはダイバーズスーツみたいな全身すっぽり覆う、二つの異なるタイプのスーツが支給されている。

それを着けると言うのであれば、それ即ちISに乗れ、と言うことになる。

「まさか千冬先生・・・。届いた?」

「ああ、だから今すぐ乗れ」

「えっ、えっ?」

小鳥はそれに勘づいているようだが、一夏はなんの事やらさっぱりである。

「小鳥、お前は三番ピットだ・・・。それと、もし変態と出くわしても手は出すな、返り討ちに遭うぞ」

「は、はあ・・・」

「えっ、ちよつと待ってどう言う事だよ!？」

未だに状況を理解しきれていない一夏は、周囲にその困惑をぶちまける。

「どう、つてなあ・・・。要は今すぐISに乗って戦えって話だろ?」

「いや、そこがどう言う事だよ!」

「や、そのままだろ」

小鳥は素のテンションで返す、当然だと言わんばかりのその表情に、一夏は苛立ちを募らせる。

だが、苛立っていたのは一夏一人だけではなかった。

「ええい!男であるお前がそんな弱腰でどうする!？」

それは筈だった。

後ろから一夏に怒鳴り付けた彼女は、怒りに肩を震わせていた。それを見かねた小鳥が、一夏にフォローを入れる。

「いきなりだつて言つても、この決闘だつていきなりだろ？」

にやりと笑つて肩を叩く。確かに、この決闘は元々セシリアとの言い争いが原因で始まった物だ。それに前触れなど無く、説明も準備する時間も無かつた。

そこから考えてみれば、いきなりISに乗つて戦うと言うのも、そんなに不自然な流れではないのかもしれない。

「でも」

「でもじゃねえよ、このままグダグダゴネり続けた所で状況が好転するわけでもなし、むしろ悪化する一方だ」

不戦敗で負けりや元も子も無いしな。とセシリアの時とは違う、柔らかな口調で一夏を論ず。

「それに、お前は『負ける事を念頭に置いているような、カッコ悪い奴』じゃねえんだろ？じゃあ気張つてこうや」

それは、負ければクラス代表にならなくて済むと言つていた小鳥に一夏が言つた台詞だつた。

「・・・ああー！」

己の言葉に発破をかけられた一夏は自信を取り戻していた。

「山田先生、俺のISはどこですか」

「え、えと、第二ピットです。こつちに来て下さい」

山田先生に促され、その方向へ歩き出す一夏。

小鳥も自分のISの元へ向かうべく歩き始めた。

二人と三人と、忘れちゃいけないもう一人

なんと言いか、変態とエンカウントした時って、どんな感じになるんだろう？と疑問に思う事が無かったって訳じゃない。強姦事件だなんて聞かない訳じゃないから、被害者の事を思っ胸を痛める事があつたりもしたし。

まあだが、実際、本当に被害者の気持ちに寄り添う事なんて出来ないのも判つていた。それを理解出来るのは、本人が同じ体験をした人間くらいだつてのは前々から知っている事だし。

ので、俺はきつと本当に変態と出くわさない限り、そんな気持ちを理解する事は一生無いと思つていた。

だからと言つて俺自身が変態と出遭うのは御免だ。ヤベー奴と出会つてどうにかなるのは正直避けたい事態でもあつたしな。

「えへへえ、君が小鳥くんかあ。アダ名何が良い？オドくん？ゆーくん？それともフルネームからたかちゃん？」

「どれもお断りだ……！」

それで今俺は頭や顔をこねくり回されながら渾名の良し悪しを問われている。

・・・現実是非情だ。

変態と聞いて冗談か何かだと思つていたが、性癖云々ではなくマジのヤベエ奴が来るとは思わなかった。

「あのな、俺はあんたから俺の乗るISの事を聞きたいのであつて、こんな事やつてる場合じゃねえんだよ！」

小鳥は自分の体に纏わりつく黒髪の女性を引き剥がし、身構える。

彼女の名は篠ノ之束、宇宙用パワードスーツ無限の成層圏を開発し、今も天才の名を欲しいままにしている天災。

白いドレスの上から魔法使いのローブを羽織り、煤まみれの布を頭に巻き、その靴は硝子のハイヒールと、一人シンデレラ状態だ。

「むう・・・釣れないなあ、こうなつたら実力行使だおらあー！」

「やめろつつってんだろオイ！」

何故に彼女がこんな場所に來ているかと言うと、小鳥と一夏の機体

は、彼女が創っているからである。なら何故一夏の方に行かないのかと思うが、彼女はどうかやら一夏よりも小鳥の方に興味を示しているようだ。

丁度良く開発者が居たから話を聞いてみようと思つて接触してみたのだが、何故かこんな調子で纏わり着かれています。

追う束と逃げ出す小鳥、シンデレラがダイバースーツの人間を追い回している光景は中々にカオスであった。

・・・数分後・・・

「はあ、はあ・・・も、もう良いだろ。説明に移れ・・・！」

戦う前からクタクタの小鳥は膝に手をつけて荒い息を吐いていた。

「むふふー。オドくんつてさあ確かIS技師に成りたかつたんだよねえ?」

それに対して、同じように走り回っていた筈の束は息を切らす事なく、人の話を完全無視である。

「まあそうだけど、それが?」

律儀に応じる小鳥、それを聞いた束は機嫌を良くしてさらに追及する。

「何で? ISは君にとって悪夢の筈だよ?」

元々目付きの悪い小鳥はその発言を受け、いつもよりも更に鋭い視線で応じる。

「お前・・・どこでそれを・・・！」

「ふふん、この束様に知らない事など無いのだよ、ましてやISが関わった事件なんだから」

怒り心頭といった表情の小鳥だが、決して束は取り合わない。

「それで何で?聞かせてよ」

覗き込むその仕草は歳不相当なまでに幼い。

覗き込まれた小鳥は、真正面から睨み付け、告げる。

「・・・止める、アンタの才能には敬服しているが、そこまで話せる程お人好しじゃない」

鋭い目付きをそのままに、格納庫ハシナガに歩を向ける、その向こうには幕に覆われたISが佇たたずんでいる、それ程大きくは無いがISだ。

「どうせお前の事なんだ、俺の過去や心持ちよりも自分の作ったISの方が大事なんだろう」

ある種の確信を持つている小鳥は、そう断言して話を反らす。

だが、束の食いつきは思いの外良ほかかった。

「え？何で何で？何でオドくんはそう思うの？」

「……………」

頭痛もたに悶える様に頭を抱える小鳥。

内心では『コイツと関わりと時間がいくらあっても足りなくなるな』と愚痴ぐちを溢こぼしていたが、それに構かまう天才なら天災とは呼ばれまい。

観念した小鳥は、その理由を言葉に出す。

「ISが世に広まった理由だ。ほぼ世界全ての弾道ミサイル制御システムをハックされ、日本に全弾発射されたあの事件だ」

発表当初は『女性にしか使えない』と言う欠点を理由として特に注目されていなかったISだが、その事件を期に『世界最強の兵器』として陽の目を見る事となった。

「日本の人間は誰しもが『おしまいだ』と思っただろうな。……だがしかし、事もあるうにその八割強をたった一機いっき、いや、一騎いっしの騎士が撃ち落とした。……あの事件以来、インフイニット・ストラトスと言う起動外骨格きどうがいこつかくは世界最強の兵器の座に躍おどり出た」

「あれは痛快つうかいだったねえー。私のらぶりいISがこの世界の全てを超えた瞬間だったからね」

「だろうな、どうせあれはお前の自作自演じさくじえん……イヤ、自作他演じさくたえんなんだろう？結果、世界はきつとお前の思惑おもわく通りに動いている筈はずだ」

小鳥は持論じろんを展開てんかいする、黙もくしてそれを聞く束は笑顔のままだ。

鋭い目付きの小鳥は横目でそれを確認し、舌打ち混じりに口を開ひらく。

「ただただ日本が危機おちいに陥り、それをISが救すくった？ハッ、そんな筋書すじがき解わかり易やすすぎて疑うたがわすにはいられるかっての。その上で犯人を考えた時、あの事件で利益りえきを得たのはアンタ唯一人ただひとりだったしな。正直どう

考えてもアンタ以外に犯人が考えられないんだよ」

ぶつきらぼうな態度ながらそれでも話し続ける小鳥の目は、束を懐疑の視線で留め続ける。

「真実はどうあれ、俺はお前を信頼する事は無い。良いな」

明らかに敵意を向ける小鳥に対して、上機嫌なままの束は構わないと告げる。

「でも君は信用しなきゃいけないでしょ？なんてったって、私の造ったISを一番知っているのは私なんだもん」

「ああ、信用はしてやる。だが、信用と信頼を履き違えるなよ。俺は進んでアンタに頼る事はしない」

その台詞を受けた束だが、うふふと笑うだけに留める。

怒りも拗ねもしないその表情の変化の無さは不気味に思えるが、その不気味さを理性で振り切り、ISの解説を促す。

「どっちにせよ・・・さっさと説明しろ。アンタは俺よりISが重要だろうし、俺はアンタの真実よりISの事が重要だ。早めに満足して勝手に帰れ」

分かり易く悪態をつく小鳥。掴み所の少ない束を相手に、早め早めに話を終わらせたいようだ。

「ふっふっふー、ご機嫌ナナメなオドくんに、親切にもご説明しましよーそうしましよー!」

ISが絡んでいるからか、束はハイテンションで説明を開始する。・・・この際『最初からそうしておけよ』と口にするのは止してお

こう。

ISを覆う布を手に取り、危険な程嬉しそうな笑顔で宣言する。

「オドくんのISはあー、コレだツ!!」

布は取り払われ、その下にある物が露になる。

そこにはそれ程大きくないISが居た。

「機体名は銀影。君専用こしらに拵えたISだよ」

それを見て、小柄ながら特異的な外見に小鳥は目を見開いた。

まず背面、本来ISでは見えないバックパック式の六連スラスタ、その外側二つを接続する二つの出っ張りに架けられた二振りの片刃

剣、そのサイズは太くはないが長大で、人間が片手で振るうには難しい。

膝のすぐ下にある巨大のスラスタノズルを始めとした、機体の至る所に設置されたバーニア、スラスタはその機動性を如実に表している。

・・・のだが、

「なんと言うか・・・足りねえな」

「あ、わかっちゃおう?」

何か足りない、と言うより全体的なポリウムが少ない。普通のISでは見られない部分が散見される代わりに、普通のISにはある部分が見られないのだ。

例えば通常、ISに飛行ユニットは必要無いのだが、加速ユニットとして浮遊する可動ブースターヴァリアブルが何処かしこかに付いている物なのだが、この機体にはそれに当たる部分が無い。

異常事態は他にもある。

銀影は巨大なブレード二つを背負っているのだが、そもそもISには量子変換により武装を持たずして保有し、使いたい時に使えると言う利点がある。

それは第零世代IS『白騎士』でさえ例外に漏れない。だがしかし、この銀影は実体を持つ剣を実体のまま保持している。これはどう言う事だ。

「この『銀影』元々は第零世代ISの一機りょうしへんかんんだけど、量子変換システムが上手く行かなくてねー、全身にラックさせるしか無かつたんだよー。あ、でも性能はすごいよー?」

その台詞は小鳥を驚かせた。

「第零世代イ!?なんてモン持ち出してんだ!?!」

これまでに無い程驚く小鳥。

それもそうだろう。

本来なら第零世代を含め、ISは条約に置いて各国に分配されている筈だ。第零世代はデータベースとなり易く、始めにこれが必要ならば研究がし辛くなるからだ。

おそらく第零世代 I S は、各国の研究施設に渡って分解、解析され、形を残す物は無いだろう。

正味小鳥としては、こうやって直に第零世代 I S を見れるだけでも垂涎モノなのだが、それはそれで疑問が発芽する。

「でも何でまたそんな物を……。アンタなら条約やら何やら無視して新しい I S を造れるだろうに」

「いやー、欠陥機だからって言って活躍の場を奪うのは良くないでしょ？どんな機体であれ、私のらぶりい I S の一機だって言うのは変わらないんだしさ」

得意気に笑う東、彼女は本当に I S に対しては平等に愛を振り撒くのだろう。

黒をメインに肩の一部、膝のガードパーツ、頭の二本角の銀を差し色としている機体を見据え、小鳥は呟く。

「そう言う割には酷な事をするよ……。足りてないのは、I S としての欠陥だけじゃない。『銀影』と言う機体全体が足りてない。もしかして銀影は『欠陥機』であると同時に『不完全』な機体なんじゃないか？」

全体的なポリウームの無さはそこに起因していると小鳥は見ている。

「へえ……。そこまで解っちゃうんだ？ 凄いなええ」

「アンタに褒められても褒められてる気がしねえよ」

ただの経験則で物を語るのは気が進まないが、どうやら合っていたらしい。東の反応はそれを是としている。

「オドくんの言う通り、今の銀影は不完全だね。完成度は 60% ちよつとつてくらいかな」

最早大破しているのと何も変わらない気がするが、本当に動くのだろうか。

(・・・仕方無い。やりたくはないが、やるしかない)

『はあ』と溜め息を吐いて、その銀の I S に歩み寄る。そして、己に I S 適正があると知ったあの時と同じ様に、鋼鉄の如く冷たい輝きを放つその身体に触れた。

.....

「小鳥のやつ、遅いな・・・」

ISを装着して待機している一夏は、ピットの中でそう呟いた。集中を切らさずに早く戦いがしたいでもあるが、長い目で見ればこれは好都合だ。

今一夏が乗っているIS『白式』はもうそろそろで最適化の行程を終える様だ。

『進捗：85』『93』

ソフトウェアでの最適化が済めば、それからハードウェア、つまりISの機体その物が変化するのだそう。

『97』『99』・・・

モードがチェンジするとか、そういう物では無く、完全なる変化をそれはもたらすらしい。

ただ待っていた一夏の目の前に空中投影のディスプレイが浮かび上がる。

『進捗率が100%を突破しました』

『形態変化を開始します』

「う、うおあつ!?!」

と、一夏がそのディスプレイの文字を読み終わった瞬間、白式の装甲がぐにやりとその形を変え始めた。

「ち、千冬姉!ちふゆねえこれで良いのか!?!」

「ああ、そのまま身を任せていろ・・・何かあつたら骨は拾ってやる」「おーい!!?!」

大丈夫な気がしないのは、自分の知らない事が起こっているのと、千冬の発した物騒な台詞のどちらかのせいだろう。そう信じたい。

『形態変化が終了しました』

『コンソールの《OK》を押して下さい』

《OK》

と、そうこうしている内に最適化の最終段階も終わってしまい、サナギ蛹

の中の蝶の様にドロドロだった白式も、その姿を堅牢な鎧に変わっている。

促されるまま《OK》のパネルを押す。

元々『白』その物の様な機体だったが、その白は洗練され、より鋭い印象を抱かせる。

「これが・・・俺の・・・」

まじまじとその機体を見つめる、最初は白一色だったその色は、蒼と黄の二つの色が追加され、真に自分の物になった事を認識させる。

「どうだ？調子は」

「は、ハイ、大丈夫です」

千冬の問いに応える一夏。始めて体験する『IS』と言う兵器の感覚に戸惑いながらも、一つの確信がしつかりとした返事をさせる。

先程までとは違い『乗っている』感覚ではなく『着けている』感覚に近いフィット感、白式が本当に一夏専用機になった事を確信させていた。

と、軽く感動を覚えていると、一夏に時間を与えた張本人である小鳥から映像込みの通信が入った。

『よお一夏、調子はどうだ？』

「うおっ・・・！って小鳥か・・・驚かさなくてくれよ・・・」

『丁度こつちも準備が整ったからな。連絡ついでに悪戯した訳だ』

ディスプレイの中の小鳥の顔は、誇らしげな笑顔を浮かべている。

そう言う表情はさして珍しくないが、何だか小鳥らしくない程テンションが高い。

「何か嬉しい事でもあったのか？」

『イヤイヤ、専用機貰えた時点で割と嬉しかった訳だが・・・まあ良いや、とりあえず千冬先生に伝えてくれ。準備は出来たってな』

これまた珍しく小鳥が言葉を濁した事に驚きながらも、依頼された事をこなす。

「千冬ね・・・じゃなかった。織斑先生おりむら！小鳥も用意出来たそうです！」

小鳥の伝えたい旨を簡潔に担任に伝える。

「——何故直接連絡しないんだまったく・・・」

小さな声で愚痴を吐く千冬、だがそれも数瞬後にはいつものキリツとした表情となり、一夏やセシリア達に指示を飛ばす。

「よし、ならカタパルトに乗れ」

「分かりました・・・と、そうだ箒ほうき」

前の千冬の悪態に苦笑を浮かべながらカタパルトに足を乗せた一夏は、思い出した様に箒に話しかける。

「な、なんだ？」

「さつき蹴飛ばしてくれてありがとうな、お陰で行けそうだ」

不意打ちの感謝の言葉に、箒の顔は紅あかくなる。

「なっ・・・！ふ、ふん！ありがく思うなら勝って来い！」

「ああ、行ってくる」

意気込んだ一夏は前を見る。

.....

目の前の隔壁が開き、外の光が小鳥の顔に射し込む。

当人は目を閉じ、マニユピレータを握り、黙りこくっている。

（俺は・・・戦いたかったんだ・・・なら今、俺は『力』を手に入れた。こっから先は・・・俺次第だ）

戦いたいモノを、戦うべきモノを見つけられるかは自分自身だと言
い聞かせる。

目を閉ざしたままの小鳥に千冬のアナウンスが告げる。

『用意は言いか馬鹿共』

『ええ、行けますわよ』

セシリアはそれを受けて元気良く返事する。

（俺らが来る前からスタンバってたつてのに、元気なこった）

聞いた話では、セシリアは十分近く待ちぼうけを食らっていたそう
だ。

『フツ・・・なら始めるとしよう』

『ああ！』

気合い十分なのはセシリアだけではないらしい、一夏も勢い良く千

冬の声に返す。

『それでは・・・始めッ!!!』

小鳥は目を開く、オレンジのバイザー越しの風景は澄み渡り、全てを知らせる。

「さあ行こうか・・・。小鳥遊、銀影！征くぞッ!!」

その景色へと、小鳥は飛び込んだ。

二人の連携？

「さて、これでちゃんと戦えますわね」

アリーナの上、セシリアは腰に左手を当て満足といった様子で一夏達に告げる。

腰に当てていない右手には、彼女と彼女のIS『ブルー・ティアーズ』の得物であるスナイパーライフルが握られていた。

だがしかし、その砲口は下を向いている。まだ本格的にやるつもりではない様だ。

(余裕かましてるつもりか？何にしても好都合だな)

小鳥のIS『銀影』の肩にある出っ張りが開き、レンズ式センサーが露出する。

(機体名『蒼 雫』メインウエポンはスナイパーライフル『スターライト Mk-III』背中と腰のアレは『ブルー・ティアーズ』計六つ：：。確か思考同調兵装のビットって奴だっけか。話には聞いていたが、実物を見るのは初めてだな)

小鳥が意識の焦点を当てた部位の名称、詳細がセンサーを通して小鳥の頭に入ってくる。

アリーナの直径は200メートル前後、超音速で空を駆けるISにとっては狭く苦しくて仕方が無いが、それでもやるしかない。

「なんですの？そのIS、猿の乗り物らしくみずばらしいなりをしていますわね」

入念にセシリアの戦力を見極める視線に気付いたのか、銀影の小ささを小馬鹿にしたように彼女は小鳥のISを詰る。

「悪いな。現状これで精一杯なんだ。・・・でも、悔るなよ？飾り散らして負けちまったら格好着かなくなるぜ？」

余裕の笑みでそれを躲す小鳥。

だが自分に有利な土俵の上で、以外にもセシリアは理性的だった。

「ふふっ、赤っ恥をかくのはそちらの方ですわ：：。それを分かりきった上で、一つチャンスを与えましょう」

「ん？何だ？」

だが、高飛車な語り口調は変わらない。

一夏も小鳥も訝いぶかしむ様にチャンスとやらに耳を傾かたむけていた。

「このままやったとしても私が勝つのは明白めいはくの理り、ボロボロになって無様な姿を晒さらしたくないのであれば、あの非礼についてお謝あやまりなき「断る」

傾けていたのだが、突然小鳥が断った。その表情はセシリアとの口論こうろんと同じくらい不機嫌な顔だった。

「戦いを始める前から降伏りざんを求めてどうするよ。それとも、負けるのが怖いのか？」

恐らく、小鳥は機嫌が悪い時にだけ出る煽あおり癖があるのだろう。しかも結構気が早いのもかもしれない。

一夏としては、小鳥の煽り癖についてはもう色々と言うべき事があるのかもしれないが、それでも今の言い分には同調出来る。

「ああ、それに、やってみなきや解らないだろ？」

そう言っつて、一夏は不敵に笑った。

「ハッ、まさかまだ勝算があると思っつてんだな一夏」

軽口を叩いて一夏をみやる小鳥。それは非難や意見の相違を嫌った物ではなかった。

「乗っつてやるよ、まずはセシリアからだ。援護えんごしてやる、お前がメインだ」

どうやら小鳥も本格的に勝ちに行く事にしたらしい。

一夏は右手を前に出して大きく開き、小鳥は両手をバックパツクに伸ばす。

そして、一夏は近接専用プレート『雪片ゆきひら式型』を、小鳥は万能ダブルプレート『アイアス』を手にした。

「そうですか・・・では、交渉決裂こうしょうけつれつ、ですわね！」

そんな二人を前にして、残念そうにセシリアが戦闘開始を告げた。背面の巨大なブロックが動くと同時に、セシリアはライフルを構えた。

「ッ・・・！避けろ一夏ッ!!」

ライフルは一夏の方を向き、ビットの砲口は両方に向いていた。

クイックドロウ
速射ちを警戒していた小鳥は、それにいち早く気づき、一夏に指示を出す。

「うおッ!？」

間一髪、全速力で離脱した場所にビットのビームが通過した。

「な、何とか避けられたけど・・・ッ!」

だが、攻撃は止まらない。喋る暇もなく一夏の元にはライフルによる狙撃が始まっていた。

「うおっ、とあつ、ぐうっ!」

避ける度に苦悶の声を洩らす一夏、小鳥も慌ててフォローに向かう。

「んなろっ!!」

アイアスの柄が五十度曲がり、射撃形態となる。前腕部に搭載されたビームバルカンを込みでやたらめったら撃ちまくる。

「煩わしいですね、ねッ!」

小鳥の邪魔を煩わしく思ったセシリアは、一夏への攻撃を止め、左手を小鳥へ向けてビットでの攻撃を始める。

「くッ・・・!流石に四門での射撃はキツイな!!」

彼女を中心として円形移動をしながら上下左右に避け続ける。

「小鳥!」

「気にしてる場合かッ!今のうちに、セシリアに近づけ!」

心配する一夏に向けて大声で指示を出す小鳥。それを聞いたセシリアは、一夏の方へと視線を戻す。

「やらせませんわ!」

再度ライフルでの射撃を再開させる。

「何で作戦バラしてるんだよ!」

撃たれ続ける一夏は白式の翼を広げ加速しながら回避を続ける。

(例えまた牽制射撃をされてもあの精度では問題にはなりません!まず先に織斑さんの方を落として差し上げますわ!)

そんな事をセシリアが考え、ビット二枚をシールドのように展開している最中。

(どうせ俺の命中率の悪さから大丈夫だと思っっているんだろうな・・・)

もう準備出来てんなら、俺の援護なんか要らねえだろ、一夏！)

その後ろで小鳥はアイアスの背中を合わせ、一つの巨剣とした。

「ほっ、はっ、よっー！」

そして小鳥の思惑通り、一夏の回避の度に発する掛け声にも余裕が見える。

「もう！ちよこまかとー！」

と、そんな現状に苛立ちを募らせたセシリアは更に一夏への攻撃を激しくする。

「らあ、あ、あ、あ、ッ!!！」

その隙を見計らい、叫びを上げて小鳥が巨剣のアイアスを背負って突撃をかける。

「かかりましたわ♪」

だが、切羽詰まった状況にも関わらずセシリアは優越感に浸った声を上げた。

「・・・ッ!?!」

そのレスポンスに小鳥の頭は一瞬だけ真っ白になる。

かかった？知っていた？予測していた？罨？反撃？どうやって？

刹那の間にくつもの疑問が浮かぶが、その疑問の隙間から一つの発見が生まれる。

(ビットが・・・二つ?)

・・・反撃の術は？

セシリアのISであるブルー・ティアーズのビット『ブルー・ティアーズ』は計六つつ。

内二つは腰に在り、今も装備されている。もう四つは背面に装備されていて、先程までそれを使って二人を追い詰めていた。

そして今、二つのビットを防御の為に展開している。

ならもう二つは？

「不味いッ!!!」

「猪突猛進も嫌いじゃないですが、蛮勇に過ぎるのも考え物ですわよ？」

勝ち誇ったセシリアの声が小鳥の耳に届く。

上下がら挟むように設置されていたビットが、交差射撃クロスファイアで小鳥にビームを放つ。

誰もがその着弾を確信する中、小鳥は銀影に命令する。

（お前が俺のISだってんなら・・・全力を以て魅もつせてみる、俺を・・・全てを！）

ビームが銀影の装甲へと進む。距離は五十メートル、人間ならば避けるのはおろか反応することさえ難しいだろう、ISを着けていた所で被弾は必須だ。

だが、そうはならなかった。

「グウツ・・・!!あああツ!!」

躲かわしたのだ、しかも横にずれる訳ではなく、全身のスラスターを全力で逆噴射し、反対方向へと加速したのだ。

「嘘?！」

「ぐっへえ・・・流星に、今の動きじや吐はき気きも催もよおすわ」

驚くセシリアを他所に、小鳥は気の抜けた台詞を吐くちもときながら口許くちもとを拭ぬぐう、どうやら本当に吐き気がしているらしい。

「くっ・・・次は外しません!!」

それを好機と見たセシリアは小鳥に手を向け標準を合わせる。

だが、小鳥は動かない、むしろ余裕の笑みさえ見せている。それを訝いぶかるセシリアに、小鳥はこう言って見せた。

「『外さない』か・・・そいつは結構だが、俺を見てる暇はあるのかな?」

その台詞にハツとしたセシリアは後ろに振り返る。

そこには、彼女に向かって突貫を仕掛ける一夏の姿があった。一瞬逡巡しゆんじゆんしたセシリアは近接武器を呼び出す。

「うおおおツ!!」

「くっ・・・『インターセプター』!!」

ガギインツと、二つの近接武器がぶつかり火花を散らす。しかし、突貫の勢いが付いた白式の力に圧おされ始める。

「ツ・・・!」

「逃がさない・・・ッ!!」

一夏の気迫もあって、雪片式型の鋒きつぎがセシリアの柔肌に触れる。だが、刀から伝わる感覚は柔らかい物ではなく、装甲の如く硬い。ISのシールドバリアーに触れているのだろう。

(今だッ！)

その瞬間、一夏は切り札を使おうと刀を握る手に力を籠こめ、その名を叫んだ。

「『零落白夜』発動ッ!!!」

.....

「ん?・・・『雪片式型』に『零落白夜』・・・?まさか、これって・・・!?!」

小鳥が覚悟を決めている頃、コンソールパネルを弄いじっていた一夏は、白式の武器と謎の文章に首を傾げていた。

「織斑先生、もしかしてこれって・・・」

左に立つ千冬ちふゆに問う。

一夏にはその文章の羅列に覚えがあった。

『雪片式型』『零落白夜』その二つの名は、千冬が現役のIS乗りとして『ブリュンヒルデ』の異名を獲とるその前から一夏は知っている。

彼女が現役時代に戻り回していたIS『暮桜』くれぎくらその武器の名が『雪片』であり、白式のそれは更に『式型』とあってその後継である事が見てとれる。

『零落白夜』に至っては暮桜の単一仕様能力ワンオフ・アビリティそのままだ。

「ほう・・・そう来たか」

感慨深く呟く千冬、その呟きには僅かながら確信が見える。

「えっと・・・雪片式型については何となく分かるけど、零落白夜って一体何なんですか?」

その呟きを聞いて疑問を感じた一夏は、千冬にその概要を問う。

それを受けて、千冬もその疑問に答える。

「ああ、それはワンオフアビリティだ」

「いや、それは知ってますけど・・・」

「わ、ワンオフアビリティーだど!? まだ最適化したばかりだということに・・・!」

信じられないと言った様子で箒が騒ぎ立てる。

そうしていると、説明を始めようとしていた千冬が顔を顰めながらも箒を窘める。

「喚くな騒がしい・・・恐らく、白式にワンオフアビリティーがあるのはそう言う機体なのだろうな」

とは言え、私のものを発現するとはな。と何処か誇らしげに呟くが、その緩んだ表情はすぐに治まり一夏への説明を再開させる。

『零落白夜』は攻撃特化のワンオフアビリティーだ、これを発動させれば、ほぼ無条件で接触したISのエネルギーを対消滅させる特殊エネルギーを発生させる・・・。篠ノ之、それでシールドバリアーを消滅させた場合、相手のISはどうなると思う」

急に話を振られた箒は、戸惑いながらも応える。

「ISの操縦者保護プログラムによって『絶対防衛』が発動し、更に大きなダメージが与えられます」

そうだと箒の答えが正答であることを保証し、満足気に頷く千冬。

「私がブリュンヒルデの地位に居られたのは、このアビリティーによる所が大きいな。・・・だが、気を付けろ。大きな力にはそれに見合う代償を支払う必要がある」

そう言った千冬の視線は、不機嫌な小鳥の鋭さに匹敵する物があつた。

その目付きに身震いし、唾を飲んだ一夏に千冬は説明を続ける。

「それを発動している間は、どれだけ足掻いてもシールドエネルギーが減少する」

「——はい?」

今のは聞き違いだろうか、自分のシールドエネルギーが減少すると言ふことは、何もしなくてもダメージが入っている事と何も変わらなない。敵にダメージを与えるのに、自分にもダメージ受けさせるといふのは一体どう言う事なのだろう。

そんな一夏の疑問を酌くんでか、千冬がシールドエネルギーの減少について話を始める。

「考えてもみろ、対消滅エネルギーだなんて物どこから持ってくるんだ、精製するにしても相当エネルギーを喰くう筈だ」

「あー・・・」

その言葉に納得なっとくを禁きんじ得えない。

つまりは対消滅エネルギーの精製の為にシールドエネルギーまで使わないと間に合わないのだ。

「大きな力とは常に諸刃もろはの剣だ・・・使い所を見誤れば、即座にその刃やいばはお前自身に向けられることになるぞ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

(その使い所は・・・ここだあッ!!)

雪片式型が刃の根本からガパリと開き、対消滅エネルギーの刃が形成され、刀のリーチが更に伸びる。

「ッ!?これは・・・!?ああッ!?」

「いいいいえええ!!」

シールドエネルギーが消滅を始める。千冬の言った通り自分のシールドエネルギーも消費され減少を始めるが、それは些末さまつな問題だ。

(この距離なら、外さない！)

ほぼ零距离で発動した零落白夜なら、必ず絶対防御を発動させられる。

「ぐうッ・・・!」

果たして絶対防御が発生し、ブルーティアーズのシールドエネルギーがとてつもない勢いで減少する。

「こ・・・のッ!」

これ以上接近を続けては不味まずいと感じたセシリアは、フリーになっていたビットの砲口を一夏にむけ、光弾を放つ。

「ぐああッ!」

それは狙いを違わず一夏に着弾し、その身体を引き剥がし、更にライフルでの射撃で追撃ついでをかける。

「はいストロップ」

高い攻撃力に驚いた拍子で過剰に反応したセシリアだが、その後ろには小鳥が居た。

制止の声を聞いてからビットの砲口が向くが、剣を構え、その背中に突き付けているその顔は凄まじく誇らしげであった。

「この反応の遅さ・・・やっぱり、お前ビットとライフルでの同時使用は出来ないな？その上、切り替える時に若干のタイムラグが有る」

そう言うてにやりと笑う小鳥。その解析かいせきは正しかった。

セシリアのISブルーティアーズのビットは計六機、内四つをこれまでセシリアは使つて来たが、どの使用タイミングでも同時使用はしてこなかった。

「二回目、試合開始のあの時はライフルを構えたが、引き金を引くことは無く、ビットだけの射撃だった。

二回目、俺の援護を嫌がつて行つた牽制でも、ビット四機を使つていたが、ライフルは使わなかった。

三回目、俺を罠に嵌はめた時も、やろうとすればライフルでの追撃が出来た筈だ。だがしかし、それは無かった」

セシリアも一夏もその仮説に耳を傾け清澄する。

それに気付いている小鳥は、仮説の結論を提示した。

「・・・それらから考えられる可能性は一つ。

お前はビットとライフルの同時使用が出来ない」

「ええ、ですがそれを補う手をもつてないとも？」

小鳥の推測に苦い顔をするが、それでも悠然ゆうぜんとした態度を崩さない。

小鳥を罠にかけた方法、上下からのクロスファイアもその一つだ。

「ああ、知ってるさ。それがどうした」

やってみろよ、と挑発ちようはつして見せる。

挑発に乗つてセシリアは上下のビットから光線を放つ。小鳥はそれを予測し後退するが、クロスファイアの交点から僅かに離れた程度

で、まだ避けたとは言いがたい。

ゴウンツと、その口振りとは裏腹に、あっさり光弾を食らう小鳥。煙が上がり、熱波が散らばる。

「小鳥ッ！」

「口からの出任せでしたら、言わない方が良いと思いますわよ?」

そんな肩透かしを食らったセシリアは失望したように語りかける。その口調は小鳥がセシリアに忠告した時と似ていた。

だが、その失望を裏切る様に、小鳥が抗議の声を上げた。

「———そうでもないさ、この攻撃を防いだ時点で口だけじゃねえ筈だ、違うか?」

剣の鋒が煙から突き出たかと思うと、次の瞬間には、剣を振るう動きが煙を引き千切り、ほぼ無傷の銀影が姿を現した。

「よお、ご期待通りなんの支障も無く帰って来てやったぜ?」

黒と銀が包むその機体の中で小鳥は不敵に笑い、そんな彼に向かって一夏が疑問を投げ掛ける。

「シールドの無い機体でどうやって・・・!?」

小鳥の機体は中々装甲が厚く見えるが、しかしその身体には煤一つ付いていない。盾を持たない銀影では躲す以外に無傷でいられる手段は無い。

「シールドが無い?どこに目え付けてんだよ、目の前に有るだろうが、おっきいのが」

ほれ、と右手にある物を掲げる。

逆手に持つて掲げられたその名は『アイアス』、合体して一本の巨剣となったそれは、全身を隠せる程大きい。

「名前が『アイアス』だから何かと思っただけど、こう言う使い方が有るわけだ」

笑って二人に見せつける、その笑顔はこれまでに無い程爽快だ。「さあーで、いつまでも呆けている場合じゃないぜ?」

目付きの悪い顔が凶悪に歪む、すると巨剣となったアイアスの持ち手だけが二つに分割され下の部分が五十度程折れ曲がった。

そして、それを持ち上げた小鳥が

「今度は外さない」

そう呟いた次の瞬間。二振りの時よりも強い一撃が放たれた。

「は……?」

ドガアンツ!!と轟々たる爆発音が響き渡る。ビットをその光弾一つで撃ち墜としたのだ。

「ふう……やっぱり、狙って撃つってのは難しいもんだな」

感慨深く頷いて一人ごちる小鳥だが、セシリアが受けた衝撃はとんでもない物だった。

(ビットを……撃墜した!?狙いを着けられないように常に動かしていたと言うのに!)

その上小鳥の射撃センスは、先の牽制射撃では物に当てるのが精一杯の筈だった。

「そろそろ!一夏、お前も手伝え!こいつのビット全部落とすぞ!」

「解った!!」

そんなセシリアの衝撃も露知らず、小鳥は一夏と連携を取り始める。

合流した一夏を後ろに付けて、小鳥はセシリアに突撃をかける。

そうはさせまいとビットでの牽制射撃が降り注ぐが、特殊フィールドを発生させたアイアスを前に霧散していく。

「くツ……!小賢しいですわね!」

不落の楯と必殺の刃、実戦経験はズブの素人とは言えこの二つが組めば相当の脅威となる。

しかし、彼等が素人と言うのならセシリアはその道を長いこと歩いてきたのだ。頭を回し二人に対して対抗策を練る。

(ビットは残り三基……!ビットを囷にしてライフルで撃ち落として差し上げますわ!)

ビットの高度を上げ、小鳥では防ぎ切れない角度で一夏を狙う。

(ツ……そう来たか)

狙われている当の本人よりも先に気付いた小鳥。

肩に装備されているセンサーからは、動くもの全てを敏感に捉える感覚が伝わる。

(零落白夜にシールドエネルギーを使う以上、迂闊うかつに一夏に被弾ひだんしてもらう訳にはいかねえ)

先程見た一夏とセシリアのセッションで、一夏が『零落白夜』を使える事、それを発動した瞬間からシールドエネルギーが減少すると、この二つを銀影の目から把握はあくしていた小鳥は、上手いことすると内心ないしんで舌を打つ。

シールドエネルギーを消費して振るわれる『零落白夜』が最大の攻め手である以上、一夏が下手に被弾すればセシリアに止めとどを刺させなくなるかもしれない。

勿論もちろん、分かりきったビットの攻撃を躲かわす事など難しい話ではない。だが、下手に回避運動を取れば一夏を覆おおう小鳥の大楯から身をはみ出し、ライフルで狙撃されかねない。

かといってこのまま突撃を止めなければビットからの射撃が一夏を襲う。逆に止まってしまえば、セシリアが距離を取って仕切り直しをかけ、これが本当に最後のチャンスになるかもしれない。

小鳥自身にブルー・テイアーズを倒せるかと言われると、恐らく可能だろう。だが、一夏と共闘きょうとうしようと約束したのだ、一夏を見殺しにしてしまうと言うのは余りに不義理ふぎりすぎる。

単純だが、これ程効果的な手は無い。観念した小鳥は覚悟を決める。

「瞬時イグニッションブースト加速ツ!!」

一か八か、加速したのだ。

「ちよッ・・・!小鳥!?!」

それも一夏を置いてけぼりにする速度で。

「なっ・・・!」

だが、これは思ったよりも効果的らしい。

小鳥のシルエットが大きくなれば、その影に一夏が隠れセシリアから見えなくなる。そうすれば彼女は一夏に狙いを定められなくなる。現に一夏はビットからの攻撃を受けていない。

「喰くらいやがれやアツ!!」

何者も寄せ付けぬ瞬時加速での加速、これはほぼ全てのISに搭載

されている機能だ。

ワン・オフ・アビリティ
単一仕様能力ではないので、第零世代とは言えそれ位はあるだろうと踏んでいたが、大当たりだった。

大剣を構えて高速で突貫する小鳥は必勝を確信する。

しかし、セシリアの驚いた顔はすぐさま元の悠然とした表情に戻っていた。

「残念ですが、ティアーズは六基ございましてよ？」

腰部に装備されたビットが起動している、だがそのビットには砲口が無い。

(・・・不味いッ！)

そこから考えられる可能性はただ一つ。誘導ミサイルとしての運用を念頭に置いたビットだと言うことだ。

直線的なビーム兵器であれば身体一つ分動けば躲せる、だが誘導ミサイルであれば話は別だ。

無論、銀影の機動性であれば回避も難くはないだろう、しかしこの距離、この速度ではビットによる誘導を回避しきるのは、とてもじゃないが考えきれない。

(回避不可、撃墜難度も高い・・・ッ！)

だからと言って防衛したとしても、もうチャンスは巡らない、同じ結末を迎えるだろう。

万事窮すか、と諦めかけたその時。

「ここだああアッ!!」

「嘘・・・!?!」

一夏が小鳥の背後から飛び出したのだ。

驚いて小鳥へのロックを外してしまったセシリアだが、驚いているのは何も彼女だけではない。

「何イ!?!」

小鳥も驚いていた。

それもその筈、今この場に居るのは、一夏をビットから隠す為に突貫を仕掛けたからだ。

それは作戦ではなく突発的な思い付きだった。実際一夏を置き去

りにしたし、追いつかれるなどとは思わなかった。

「うおオオツ!!」

もうこの距離なら躲かわせない、不可避を確信した一夏は再度零落白夜を発動させる。

二つの標的を同時に打ち落とせる程セシリアは器用ではない。そもそもそんなことが出来ていたのなら、ここまで追いつまはれない。

「くううツ!!」

苦悶くもんの声を漏らし、必死に近接ブレードを構えるが、近接専門の機体を相手には最早ておく手後れでしかない。

「もらったアツ!!!」

加速した一夏と小鳥は速度を保ったまま巨剣と刀で切り裂さいた。

戦いの行方

「やった……！セシリアを倒した!!」

一夏いちかが喜びの声を上げる、セシリアは一夏と小鳥おどりの前に切り伏せられた。

「うん、まあ……そだね」

……のだが、小鳥の顔色は難しい物だった。

「どうしたんだ？あんなにセシリアの事嫌ってたのに、あんまり嬉しくなさそうだな」

「あー、いや。そりや嬉しいよ、あんな癩しやくに障さわる鼻に付く奴を振ねじ伏ふせられたつてのが嬉しくない訳無いじゃん」

地味に酷い悪口を発する小鳥。いつもなら満面の笑みでも浮かべている所なのだが、その口調には溜め息さえ混じっていった。

そんな煮え切らない態度たいどに訝いぶかしむ様に首を傾げる一夏。

難しい顔で考え続ける小鳥は、重たい口を開いて、一夏に問う。

「お前さ……これが一対一の一のバトルロワイヤルだつて事、覚えてる？」

……。

「……あつ、忘れてた」

「安心しろ、俺もだ」

セシリア撃破に全力を注そそいでいた為に忘れていたが、そもそもこれはクラス代表を決める際に起きたいざこざの解決としてセシリアが提案した物である。

一番最初に脱落だつらくしたセシリアがそれに成る事は無いだろうが、これは最後に立っていた一人が決まるまで終わらない。

「参ったなあ……俺達、戦わないといけないのか？」

「心苦しいが……多分」

セシリアと戦っていた時、互いに気を配りながらコンビネーション

を取っていたのだ。今頃潰し合えと言われて素直にそんな事が出来る訳が無い。

「しかもお前あと少しで死ぬだろ？セシリアからのダメージに『零落白夜』で消費した分を考えると、俺とお前にはどうしようもない不平等がある筈だ」

つまり、小鳥が悩んでいたのはそこなのだ。

出来うる事なら仕切り直しをしたい所なのだが、それをオーデイエンスが許すとは思えない。

「……………はあくあ」

二人して大きな溜め息を吐いて肩を落とす、こんな状況でやる気を起こすと言うのは至難の技だろう。

どうしたものかと考えようとした時。

『何をしている貴様等、さっさと戦え』

織斑千冬がスピーカー越しに命令してきた。

アンタ鬼か何かですか……………。

とは言え、あんな人外鬼畜の命令に背いた日にはどんな仕置きが身に降り掛かっても可笑しくない。

「よっしや来い!!」

「こうなったら自棄糞だオラア!!」

もうどうしようもない。抗えざる運命を感じた二人は『戦う』以外の選択肢を奪われてしまった。

「ウオオオツッ!」

「ラツシヤア!」

刀と大剣がぶつかり火花が散る。

「ぐう……………!」

鎧を削る二人。

質量、加速、共に上の小鳥が一瞬圧す。が、負けじと一夏もスラストをふかし均衡に持ち込む。

「こん……………のツッ!」

「グアツ!?!」

一夏が更に小鳥の腹に蹴りを叩き付ける。小鳥は蹴飛ばされながら

ら、肺から空気が抜ける感覚を覚える。

「こん……なるッ！結構痛かったぞ今の！」

飛んだ方向とは逆向きにスラスターをふかし、ブレーキを掛け、前方に居る筈の一夏を睨む。

が、しかし小鳥が予想していた場所には一夏は居らず、しかも小鳥の目の前で『雪片式型』を降りかぶっていた。

「ハアッ！」

「のおわッ!?!」

間一髪、後退する事でそれを躲す小鳥だが、完全に躲しきる事が出来ず、胸元を刃が掠めた。

(不味いな、距離を取りたいとこだが、このヤロウ完全に状況を心得てやがる……!)

口許を引き吊らせ後退する小鳥。

近接戦において、機動力に重点を置いた銀影では近接専門の白式相手には分が悪い。

せめてアイアスを分割して手数を増やしたい所なのだが、そんな隙さえ与えてくれない。

(どうする俺……このままだと以外にもジリ貧だぞ?)

そんな苦悩を抱える小鳥の目に映る一夏は、手をにぎにぎしていた。

.....

織斑千冬、篠ノ之箒、山田真耶の三人は、そんな二人の戦いを特等席で見つめていた。

「押してますね、一夏君」

静かに山田先生が感想を述べる。

連続で攻撃を仕掛け、小鳥を防戦一方に追い込んでいるその様は押しているとも言えるだろう。

「よし、行け一夏……このまま押し勝ってしまえ！」

一夏に向けて激を飛ばす箒、シールドエネルギーが圧倒的に足りない

いとしても、攻撃し続ければ反撃を喰らう怖れも無い。攻撃は最大の防御、時々ダメージも入るし、このまま行けば一夏の勝ちも見えてくるかもしれない。

「いや、それは無いな」

だが、そんな期待を千冬があつさりと切り捨てる。

確かに、単純に見て小鳥の方が戦力が上だ。今は一夏が優勢だが、全体的な戦局では小鳥の方が有利だろう。

とは言えそれも時間の問題だ。このまま流れが一夏の物になり続けるのであれば戦局は覆る事だつて有り得る。

しかし、それ以上に一夏に負ける要素が在るらしい、千冬は確信を込めた言葉で箒に問う。

「篠ノ之、お前はあいつの幼なじみだろう？あいつは今、とある癖を出しているんだが、分かるか？」

そこまで言われた箒は、一夏を注意深く観察し、とある所に着眼した。

「手を握っては開いています、確かあれは・・・」

「そう、あれは・・・」

口を開いた箒に頷き、千冬もその手癖が示す意味を口にする。

「——調子に乗っている時の癖だ」

千冬は呆れながら、箒はそれにいち早く気づいた彼女に感心しながら呟く。

恐らくは小鳥を相手に押ししていると云う状況に調子付いているらしい。

ただ、調子付いた所でそこまで問題が在るわけでは無い。勢いそのままに押し切れば、それこそ勝利への布石にだってなるだろう。

だが、千冬は調子に乗る事を恐れているらしく、厳しい面持ちで一夏の現状を語る

「調子に乗れば、誰であれミスを犯す。アレはそれが顕著でな・・・」

その隣では箒が苦笑いをしている。どうやら調子に乗った一夏が嫌な思い出を作った事が有るらしい。

そんな箒の隣で彼女を見る山田先生の視線がやや下世話な色を帯

びている事に気づいた箒は、気恥ずかしくなって、慌てて口を開く。「と、とにかく。あの手癖をしている時、一夏はミスをおかす易くなるんです」

と、駄弁ついていると。そんなミスをしでかす可能性の高い一夏が雄叫びを上げ攻撃した。

『うおおお！』

「あつ、不味い！一夏、それは駄目だ！」

大振りに刀を振り下ろす。恐らくは勝てると踏んで大きなダメージを負わせに来たのだろう。

だが、まだ消耗し切っていない小鳥相手にそれは下策だ。もし箒達なら、隙だらけの胴体に剣を打ち込む事も難しくはない。

彼女達の脳裏には、カウンターを喰らう最悪のイメージが過った。

.....

(いけるーこのまま押し切れば、勝てる！)

剣道で培った経験が、一夏に勝利のイメージを浮かばせる。ならば、今の自分の状態を省みる。

シールドエネルギーは残り僅か、許される被弾回数は十回と無いだろう。

きっとまだ小鳥は操縦に慣れていないから、こんな優勢な状況が出来上がっているのだろう。でも時間が経って、慣れてくればそうも言ってもらえない。

(なら、ペースアップして、決着を着ける・・・!!)

気合を入れ右手の雪片式型を強く握り直した。

.....

(まあ、あんな顔なら、『行ける、なら攻めを強くすれば勝ちは見えて来る』・・・とか考えてんだらうな)

難しい顔をしながら、そう一夏の思考を先読みする小鳥。先程から

一夏の顔色が調子乗った笑顔に向かいつつあったので何となくムツと来ていたのだが、徐々に攻撃に入る力が強くなってきていた事から確信を得れた。

(まあ、それならそれでカウンターを入れるだけなんだけどき)

巨剣と刀が激突し光が散る。

シールドエネルギーの容量から『零落白夜』を使えない事を解っているからこそ、こんな打ち合いに応じれるが、あんな威力のものがまだ使えるなら脅威以外の何物でもない。

今のこの状況において、最も有利なのは自分だと解っている。だからこそ焦るまいと、回避、防御に徹しているのだ。

「うおおおー!」

(来たッ!)

雄叫びを上げて一夏が突っ込んでくる、大振りに刀を振り上げることなど『避けて下さい』と言ってるようなものだ。

絶好のチャンス逃すまいと、全センサーを動員して一夏の動きを注視する。

スペック上、銀影にその動きにカウンターを当てるのは十分可能だ。後はギリギリさまで引き付けて剣なり拳なりをぶちこめば良い。そして刀が振り下ろされ、

「やっぱ無理ッ!」

「なっ・・・!?!」

思いつき飛び退いて躲した。

「「え?」」

一夏だけでなく、ギャラリーの三人も驚く、絶好のチャンスの筈なのだが・・・。

「fuck!そもそも俺にんな器用なことが出来るかアツ!!箒や千冬先生みたく何かしらの戦闘経験が有る奴なら兎も角、ステゴロ以外の戦闘経験皆無の野郎が何考えてんだよ!」

自分に激怒し、叱責する。先程吼えた様に、小鳥はIS等の武器を使った戦闘に関しては、ズブの素人である。

そんな素人が『来る』と分かっているても、攻撃に移るなど、かなり無茶な話である。

「ツ……！」

しかし、距離は出来た。アイアスを分割し^{ぶんかつ}手数を増やす。それに氣付いた一夏は息を飲み、顔は緊張に引き締まる^し。

「さあーて……素人VSハンデ付き経験者……どこまでやれる……？」

訝^{いぶか}しむように己に問いかける小鳥。正直言つて近距離戦では一夏に軍配^{ぐんぱい}が上がるだろう、ISでの射撃センスが壊滅的^{かいめつ}な小鳥からすれば、現在の状況では、手数を増やした所で未知数^{みちすう}の状況に転がりこんだだけの話だ。

まともに打ち合つても勝率は一夏に傾^{かたむ}いたまま、今のチャンスをもノに出来なかつたのはかなり痛い。

「行くぞ小鳥！」

小鳥に向かってスラスターを吹かし、攻撃をしかける。

「んなろー！」

片手で放たれたそれを、小鳥も同じ様に片手で受け止める。

空いた右の剣を横薙^{よこな}ぎに払^{はら}う、一夏は、打ち合わせた刀を外してしゃがむ、そうして空振り^{からぶ}りした剣が頭上を掠^{かす}める。

「今……ツ!？」

『今だ』と言おうとした一夏の目の前には、剣を振った勢いを無理に止めず、一回転して後ろ回し蹴^げりを放つ小鳥の姿があった。

「くツ！」

「ハアツ！」

腕を右に配置して防御する一夏。

小鳥は防御ごと突き崩^{くず}す勢いで蹴り飛ばす、空中での姿勢制御に苦しみなながらも距離を離すには十分な一撃が入る。

(ツ、そこまで大きなダメージは入らなかつたけど……小鳥との距離が開いた、不味いな)

驚^{おどろ}く程冷静な頭で現状を把握^{はあく}する。どうやら先程大振りの攻撃が躲^{かわ}されたお陰で、頭に氷水をかけられた様に冷静になっているらし

い。

(小鳥の腕が俺より強いかは分からない……でも、攻撃を防ぐのなら手数の多い今の方がやり易い筈……)

どちらにせよ、『今は』『まだ』一夏が優勢だ。先程と同じように攻めきれぬかは分からない、だが攻めなければ勝利は有り得ない。

「こうなったら、下手に考えない方が良いよな……」

それなら突撃だ。

もう『零落白夜』を使っても勝てないのは判りきっている。どれだけ上手く当てても、この分じや小鳥を削り切る事は無理だ、ただでさえ少ないシールドエネルギー。それを消費したら、自分の負けは確定的だ。

……

(距離を詰め続けられたのならアイツが有利、ヒット&アウェイを実行出来りや俺の勝利……。出来るか、俺に?)

心の内で己に問う、一夏程考える事を放棄出来ない彼にとってみれば、この『考えてもどうにもならない状況』と言うのは好ましくない。この戦いにおいて最も重要なのは、互いの単純な強さである。

(戦力を整理しよう)

聞いた話だと、一夏のIS適正はBに対し、小鳥のIS適正はC+と言った所。

そして肝心のISその物の仕様、『白式』が完全な近接戦オンリーの機体、逆に『銀影』は本来は近接戦仕様ではないのにそれしか出来ないから近接戦オンリーの機体。

正直言つて、元の機体が万能を目指していなければこんな器用な立ち回りは実現不可だっただろう。

――

状況整理をしてみても自分が不利だと言う事が明確に解るだけだ。有利な点が有るとすれば、小鳥の方がまだシールドエネルギーを多く残している事位だろう。

「……………」

もし一夏が強襲を掛けても反応出来るように、満遍なく一夏の動きを見ながら、必死に頭を働かし、この事態を打破する為に必要な行動を模索する。

だが、それを黙って見ている一夏ではない。

「うおおおー！」

「クソッ！」

一旦思考を切り上げ、一夏の攻撃を受け止める。

苦い顔はさらに苦しい表情に変わる。このまま防御を続けても勝利へは近づけない、むしろ敗北に引き寄せられるだけだ。

苦笑いを浮かべ、一夏を睨む小鳥は次の一撃を躲した。

……………

「んなろッ！」

「クッ！」

小鳥は下段からの切り上げを後退しながら防御する事で、防御ラインを崩さず防ぎ切り、距離を取る。

そんな器用な動きが出来るようになってから早五分、一夏には少なからず焦りを感じていた。

(小鳥が明らかに操縦に慣れてきてる……。不味いな)

一夏には武器を使った戦闘経験が在ると言うアドバンテージがある。

これでも一応全国レベルだったし、ブランクがあると言っても、それもこの一週間で大分マシになっている。

だが、そのアドバンテージも小鳥が武器を使った戦闘において素人だからアドバンテージ足りえるのだ。

もし小鳥が戦いに慣れれば、この優勢も一気に瓦解する可能性がある。

(……って落ち着け落ち着け、さつきもこうやって気を乱してやらか

したじやないか。小鳥が慣れてきたのならなおさら落ち着かないと。
平常心平常心)

深呼吸で気持ちを落ち着かせ、構え直す。こんどは正眼に刀を構えるのではなく、小鳥に左側を見せ、コンパクトに畳んだ両腕で刀を水平に構える。所謂『突き』の構えだ。

斬激に比べて動きが少なく、カウンター接続技を掛け易い刺突なら、慣れてきた小鳥相手にも十分対応出来る筈だ。

「いくぞツ！」

瞬間 加速で一気に詰め寄る。懐に飛び込んで刀を突き出す。

「ツ……！」

対処に慣れてない連続の突きを相手に、必死に間合いから外れようと後退するが、左肩に掠める。

「チイツ！」

小鳥も必死に剣を振り、一夏を間合いの外へと追いやる。

(行ける……この戦法なら小鳥は完全な対処が出来ない！)

思わず口角が上がってしまう、それと同時に心も浮わつきそうになるが、深呼吸でそれを静める。

「……！」

と、そんな一夏の好戦的な姿勢とは裏腹に、難しいをしている小鳥は、何か思い付いた様な顔をしている。

「……？」

かと言って何かする訳でもなく、小鳥は顎摘まんで考えている。さつきは何か考えていても目を自分から離す様な事はしなかったと言うのに、今度は防御体勢も取らずに居る。

(つて、考えさせたら駄目だ！アイツに策略を考える時間を与えたら厄介な事になる！)

小鳥は頭の回りが速く、物を考え『戦力』を『戦術』で覆しにかかるとタイプだ。

考えさせて何かを思い付かせるのは不味い。

小鳥のペースへ持っていかせまいと、もう一度突撃を仕掛けようとしたその時。小鳥は右手を上げ、剣の腹を見せつつ『待て』のポーズ

を取る。

「あー、ちよつと待った！」

「ツ……何？」

不意に掛けられた言葉に驚いて、突撃の姿勢を解く。

『待て』とはどう言う事だ、まさかこれも策略の一端か？

と、策略を警戒する一夏を尻目に、小鳥は武器を投げ捨てこう言った。

「俺の負けだ！降参するツ！」

「……へ？」

真相追及とジジとババ

一夏が肩口を狙った突きを繰り出す。

肩を反らす事でギリギリで避けるが、装甲が掠った様で、またシルドエネルギーが減少する。

「チイツー！」

左の剣で刀を防ぎ、一瞬動きが止まったのを見計らって右の剣を振るう。

それを喰らうまいと、一夏は大きく後退する。

(何でこんな事になってんだよ……！)

今のセツションで減少したシルドエネルギーの量を片目で確認した小鳥は、心の中で苦言を漏らす。

ハア……と、溜め息を漏らし、どうしてこんな面倒な事になっているのかを順々に思いだす。

事の始まりは、クラス代表を決める為に多数決を採った際に、セシリアがしやしやり出てきた事だった。

その癪に障る演説に苛立った小鳥は、自分でも自覚している様な汚い口調で罵り、セシリアがキレた。

結局解決策として一対一の一のバトルロワイヤルが提示された。そんな勝手な都合でアーリーナを使って良いのか疑問だったが、何を思ったか千冬先生、OKを出してしまった。

どっちにしても小鳥としては、一夏に説明した様に早々に撃墜され最初の脱落者となり、二人のどちらかにクラス代表の座を明け渡す心算だったのだが……。

開始早々のセシリアの演説に腹を立て、負ける気を無くしてしまった。

で、セシリアを倒すと言う大番狂わせを起こし、一夏に苦戦を強いられている。

(……ん?)

そこまで考えて、頭の中に疑問を浮かべる小鳥。そして気付いた、

(これ俺が勝つ必要ねーじゃん)

そう、最初から小鳥は負けるつもりだったのだ。それに一夏に勝つた所で、与えられるのは『クラス代表』と言う面倒な席である。

そんな物誰が欲しがるか、セシリアみたく自己顕示欲の多い奴ならともかく、そんな物は小鳥には無い。

つまり、彼が降伏した所で何の問題も無い、皆無である。

無論、千冬の脅しの事も考慮せねばならない。が、千冬は全力で戦った末の結果を望んでいるのであって、別段誰が勝とうがどうでも良いのだ。

なら勝ちに拘る必要は毛頭無い。要は全力でない事がバレなければ良いだけなのだから。

「あー、ちよつと待った!」

「ツ・・・何?」

言う事聞いて止まってくれる一夏、見た所突撃を仕掛けようとしていたらしい、もう少し遅ければ面倒な事になっていたかもしれない。

突然の制止に驚き訝しむ一夏だが、下手な動きをされる前に、武器を投げ捨てて言葉を紡ぐ。

「俺の負けだー降参するツ!」

「・・・へ?」

疑問から一転、思いもよらない一夏から発された台詞は間抜けとしか形容出来ないものだった。

そんな間抜け面晒して恥ずかしくないのかとも思ったが、それは腹の底に押しやり、軽い口調でその理由を語る。

「このままやってもキリが無え、それに今の俺じゃこの千日手を打破できそうにもない。恐らくこのままやれば一夏が勝つだろうし、俺の負けだ」

それは後付けの理由だが、全くの嘘と言う訳ではない。実際、一夏と白式に対抗しうる手段を思い付けない以上、少しづつシールドエネルギーが削られる現状において勝利は望めない。

「・・・いや、小鳥、本気か?俺は後少しで倒れるんだぞ?」

一夏が訝しむ様に小鳥に問う、どうやら納得していないようだ。

(もう少しで勝てるかも知れない戦いを前に勝利を投げ棄て降伏しようなどお前からしたら論外なんだろうが、しかし一夏、お前は気づいていない、この戦いを勝ち残っても先にあるのはクラス代表と言う厄介の席なんだ。こんな罰ゲームまっしぐらのフラッグレースは降りるのが最善解なんだよ)

とは言え、千冬や女子共に騒がれても面倒なので、取り敢えず言い訳の一つ位は言っておこう。

「そーゆーのは俺好きじゃねえんだよ。一か八か、つてのは確かに手に汗握るが、そいつは駄目だ。最良の選択をする者が勝利を手にし、そんな奴は何時だって冷静な奴なんだよ」

ぶつきらぼうに吐き出す言葉に嘘は無い、むしろ本音とも言えるだろう。

心の中で舌をんべつと出しながらも、自然体を保ちながら話し続ける小鳥。

「そう言う事で、セシリアは敗退、俺は降参。勝者は一夏つてのでどうでしょう？先生」

そのおどけた視線の先には、ガラス越しにこちらを見ている織斑千冬が居た。

この降参を確実とする為には、この人が最大の難所である。

『……………』

反応が無い。本当にそれだけなのか疑っているのだろうか、黙して語らずかち合った視線を逸らす事無く小鳥を捉え続ける。

黙って考えて二分程、千冬が口を開いた。

『良いだろう、この勝負織斑一夏の勝利とする！』

凜とした、力強いこえが拡声器から響く。

ふう、と膨らんだ風船のように張った緊張から解き放たれた小鳥は、安心の溜め息を吹き出す。

と、不意に隣から一夏が声を掛けてきた。

「小鳥、良かったのか？」

「何が？」

「いや、だつてお前ISの操縦に慣れてきたはずだろ。だつたら残り

のシールドエネルギーから考えても、こんな所で降参って……」
「うっせえ、他ならぬ俺本人がこう言ってるんだ、文句付けてんじやねえ」

ぶつきらぼうに言葉を吐き出し、くるりと一夏に背を向ける。その方向には一夏が飛び出した二番ピットがあり、そこから戻ろうと歩く位の速さで飛ぶ。

と、その背中を見送る一夏が何かを思い出した様に地表に降りる。

「大丈夫か？セシリア」

そこには、一夏と小鳥の二人に敗れ、地表で待機していたセシリア・オルコットが居た。

一夏はそれを思い出しての行動らしい。

「え、ええ。勿論ですわ」

敵に情けをかけられてか、セシリアは戸惑いながらも差し伸べられた一夏の手を取る。

背中越しにそれを見ていた小鳥は、今までに無い程穏やかな笑みを浮かべていた。

……

「——で、どう言う積もりだ？」

「何が？」

その日の晩、一夏は小鳥の部屋にてトランプでしながらジジ抜きをしていた。

「何がじゃねえよ、お前あんな所で降りる様な腰抜けだったのか？」

一夏がカードを引き抜く、♠1だ。

♥の1と共に場に置く。

何故？と問われれば、小鳥が『男子懇親会』を開こうと言い出し、たった二人でトランプゲームを始めたのだ。

「そうだ、と言っただら？」

「……何も無いけど」

「だったら聞いてどうすんだよっ……と、ラッキー♪」

小鳥が一夏の手札を引き抜く、♥Kだ。

二枚揃ったので、場に♣Kと共に出される。

「そうじゃなくて……。お前さ、クラス代表になりたくなくて降参したんじゃないか？」

一夏が小鳥の♠10を引く。こちら揃ったようで♦10と共に場に出される。

「今頃か……。まあ、あの場で言った事が嘘って訳でもないな。実際、俺から見りや相当負け筋だったし」

「だからって、勝てるかも知れない戦いでわざと負けるってのはダメだろう」

一夏からカードを貰った小鳥は苦い顔をする。二人しか居ないこの状況で出さないとすると、意図的に出していない限りこれがジジの可能性が高い。一方の一夏はニヤリと笑っている。

「うるせえ、お前は勝ちを優先して、俺は後先考えてた、それだけだろうが。あと俺の『待て』に素直に従ったお前が悪い」

そう言いながら少ない手札を後ろでシャッフルする小鳥。どうやらジジの居場所を変えた様だ。

「それは……。そうだけど」

言い返す事の出来ない一夏は、口を尖らせながらも小鳥の手札を引っこ抜く、ジョーカーだ。

「げ」

手持ちのカードとは揃わないらしい、嫌そうな声を上げる一夏。

「小鳥お前何してんだよ、出し忘れだなんて」

「悪い悪い、ちよつと出し忘れて……。なっ！」

先の小鳥と同じように、シャッフルされた一夏の手札からカードを一枚引き抜き、♦2が回ってくる。ジジではないようで♣2と二枚組になって場に出てくる。

小鳥の残り枚数二枚。一夏の残り枚数三枚。

（小鳥はジジの♥8とジョーカーを持つてる筈だ、俺が♥8を引かなければ勝てる……。！）

実を言うと、一夏も揃っているのに出していないカードがある。計

算高い小鳥なら、正攻法でやっても通用しないのは目に見えている。だからブラフとして三枚の内二枚を出していないのだ。一見すれば三体二だが実質一対二なのだ。

（嘔吐くのは得意じゃないけど、バレてなさそうだし。ジョーカーを引いて俺が勝つ）

と、息巻いている一夏に、目の前の小鳥は、世間話を続ける。

「ま、それはそれだ。クラス代表の仕事は任せる。なに、俺よりかは良いクラスになるだろうよ」

「ああ、任せといてくれ。どこまで出来るか分かんないけどさ」

そう言つて小鳥の手札へと手を伸ばす一夏。

だが、事もあろうに小鳥はその手を振り払った。

「なッ・・・!?!」

「まあでも、この勝負は譲らねえけどな」

そう言つて残り二枚を無造作に置く。そのカードは♥と♣の8だった。

「ああー！きつたねえぞお前ホントに！」

「はっはっは、そりやお前の言えた事じゃねえだろ！お互い様なんだから文句言うなバーカ！」

小馬鹿にしたように罵る、どうやら一夏が揃っているカードを出していない事に気づいていたようだ。

一夏は小鳥がジョーカーを二枚持っているのと踏んでいたのだが、実際は小鳥も出していないカードがあり、状況は二対一ではなく零対一だったのだ。

「ま、しかし。ジジがババジョーカーだったとはな。これじゃ見た目ババ抜きと変わらないじゃん」

小鳥としては、途中までジジが何なのか解っていないかったが、四、五回程ジョーカーが手札に来た時点で何となく察した。『ああ、コレがジジなんだな』と。

「でもまあ途中まで『ジジはどれだ?』で楽しかったけどな」

「それが出来るのは小鳥だけだよ・・・。お前どうせカードの並び完全に覚えてるだろ?」

「うん」

にべもなく答える辺り、本当に頭が良いんだなと実感させられる。

小鳥が才覚ある事を確認して脱力しながらも、一夏は問う。

「そう言えば『男子懇親会』って言ってたけど、二人で成立してるのか？」

この部屋に小鳥と一夏しか居ない、これでは懇親会というより相談と言った方がが適当だろう。

「んー。ま、成立しない訳じゃないだろ。幼なじみとは言え、女子と二人きり個室でだなんて気不味いだろ？」

「まあ・・・そうだけどき・・・。ってそれを言ったら小鳥も同じだろ、俺と一緒にやらないならお前と相部屋の人は女子なんだろう？」

「ハッハッハ・・・」

そんな意見を前に、小鳥は苦笑いをしていた。

何と言うか、後ろめたい事を隠しているかの様な笑顔。

「お、おい小鳥、まさか、ココって一人部屋なのか？」

「ハッハッハ・・・」

笑うだけで何も言わない小鳥、やはり何か隠しているようだ。

「・・・」

「ハハハハ・・・」

じーっ、と小鳥の顔を見る。

「・・・」

「ハハハハ・・・」

「・・・」

「・・・」

それは、小鳥の様に口上手くちじょうずな訳ではない一夏が思い付く、最大の手段だった。

そんな一夏の切なる思いが届いたのか、両手の平を見せつつ降参のポーズを取り、折れる小鳥。

「あー分かった分かった、そんな怖い顔して俺を見るな、千冬先生みたいだぞ」

溜め息混じりで降伏宣言を発令する小鳥。一方の一夏もそんな感

想に不満があるようで、口を尖らせる。

「そんな怖かったか？俺と千冬姉ちふゆねえってそこまで似てないだろ」

そんな否定を逆に小鳥は否定する。

「似てるぜ？俺は居ないけど、性別関わらずきょうだいってのは似るもんだ。寧ろむじお前ら織斑姉弟は凄く似てる部類だ、論理は滅茶苦茶だが、それこそ『歳の離れた双子』ってレベルでな」

感慨深く呟く。二人の顔立ちはかなり近い。経年の功けいねんこうと言うべきか、目付きの鋭すずさに違いはあれ、そこにさえ目を瞑つぶれば、その相似の程は双子と言っても差し支え無いだらう。

「参ったな・・・じゃあ円花まどかとも似てるって良く言われるし、三人揃そろって似てるのか・・・」

「あん？お前三人姉弟なのか？」

一夏の呟きを聞いた小鳥が本人に問う。名前からして女性だらう。真逆まさか一夏に姉か妹が居るとは思わなかったのだらう。

「あ・・・」

(秘密だったのか・・・)

しまった、と言う顔している一夏、どうやら隠し事は苦手らしい。

「気にすんなよ、秘密だってんなら口は割らんさ。ま、その代わりにそのマドカって奴について詳しく」

「まあ、それなら良いけど・・・でも小鳥の秘密も教えてくれよう？」

「おう、等価交換ってトコだな」

実は内心で『誤魔化ごまかせられなかったか』と、舌打ちと苦笑くしやうをしているのだが、そんな事を顔に出さず了承りようじやうする小鳥。

「えーと、どこから話す？残念な事に、俺は円花の事を余り覚えてないぞ？」

「あ？そりやどう言う意味だよ」

今居る人の事を『覚えていない』と言うのは明らかかな矛盾が有る。ベツトに凭もたれる小鳥は、その矛盾の意味を、ベツトに腰かけている一夏に問う。

「そのままの意味だよ。ちっちゃい頃の円花の事を覚えてないんだよ。あいつに関わる事は、千冬姉から聞いた事が大半だし」

「ああ、そう言う事・・・驚いて損した」

「何に驚いたんだ・・・」

「否、物騒な妄想だが『もう居ない人』なのかと」

「そんな訳無いだろー!」

今までに無い程声を荒らげる、戦っている時よりも敵意が伝わって来るその声音は、その裏にある物が『恐怖』だと言う事が判って仕舞う程感情を剥き出しにした物だった。

自分の声が大きい物と気づいた一夏は、大慌てで謝る。

「わ、悪い。つい声でかくしちまったな・・・」

「良いよ。どうやらお前にとつて『近親者が居なくなる』は鬼門みてえだしな。何、幼少期の事についてまで聞く気はねえよ」

そう言うって、何を聞こうか考え込む小鳥。

こう言う時、目付きの悪い小鳥だが、眉間に皺を寄せている為に、元々良いと言えない顔立ちが余計に悪くなる。

(顔の作りが悪いって訳じゃないんだけどなあ・・・)

かと言って、小鳥の顔が不細工と言う訳ではなく、単純に善人の面構えでないだけで、実は結構顔の出来は良いんじゃないだろうか。

「んー」

じーつ、と小鳥の顔を覗き込む。

平均よりは出っ張った額、ややシャープな顎のライン、僅かに高く小さい鼻、女子も羨む二重と長い睫毛。これだけ見れば、少し彫りの深いだけのイケメンなのだが・・・。

半開きにして、途轍もなく鋭い目付き、伸びきった髪を後ろで一括りにしただけの乱雑な髪型、極め付けは計算高く、勝ち気なあの性格である。友人付き合いは出来ても、それ以上は難しいだろう。

「ま、それはさて置き、マドカの話を進めようじゃないか。そうだな、まずは妹か姉かくらいは教えやがれ」

自分の顔が品定めされている事に気付かないまま、小鳥は一夏に先を促す。

「ああ、円花は妹だよ、いまは中三だな」

「ふむ、やつぱ千冬先生とも似てんのか?」

「うん、身内の俺が似てるって思うんだから、似てると思う」

言つて妹の顔を思い浮かべる一夏、顔立ちはかなり似ているが、千冬に比べて目付きは優しい、そこは人生で経験してきた物の差だろう。

「んじや漢字でどう書くんだ？」

「円えんに花はなで円花えんはなって読ませてる」

ふむ、と頷うなづく小鳥。大分物を聞かれていた気がするが、小鳥の秘密がこの情報に見合う物でなければどうしようかと思つてしまう。

「じゃあー最後に二つ、お前ちん家に暮らしてんなら一人で大丈夫なのか。つてのと、その円花について知つてるのは？」

「えーつと、千冬姉は勿論だけど・・・。後は箒ほうきくらいかな」

「ふむ」

「それと家については、千冬姉が早めに帰つてるんだつてさ」

「そりや良かった、お前としても安心だろ」

「まあな」

他人ひとの家庭事情かていじじょうに良く顔を突つ込めるな、とある意味感心しながら、返答する一夏。

(とは言え、今度はこちらが質問する番だ。絞しぼられて貰おうじゃないか・・・！)

「さ、て。次は俺だな・・・。とは言え、俺の方は一言で終わるぞ？」

「そうなのか？」

「そうですね。だって『俺の隣人は〇〇なんです』の一言で済んじまうからよ」

目を閉じてやれやれと言つた表情を浮かべる小鳥。一夏としては、そんな簡単な事を躊躇ためらうのが意外だった。

「その上、お前に対して罪悪感ざいあくかんがある事以外じやべに喋れない理由が有る訳でも無し、ホントに俺のモチベーション以外じやべに問題はねえのよ」

「じゃあ、なんで話せないんだよ」

両手に頭を乗せ、気楽な口調で話す小鳥にそう問う。

問題無いと言うのに、こんなに勿体もったいぶ振られると気になつて仕方がないではないか、なんだか損した気分だ。

「まあなあ……。じゃあ一夏、お前の隣人は、幼馴染みとは言え異性だ。苦勞はしてるか？」

「え、何でんな事」

「良いから答えろ、一人暮らし出来てる奴に嫉妬出来れば『YES』そうでないか『NO』だ」

理由を答える事も無く、先を促す小鳥。その勢いに押され、一夏も自分の思う所を吐露し始める。

「まあ……。不便だけど、嫉妬する程苦勞してるって訳じゃないかな。箒は気難しいけど、何だかんだ氣を使ってくれるし」

「気づいてねえのかよコイツ……」

「え？」

「いや、何でもない。聞き流せ」

「お、おう」

何だろう、色々と問い詰めてやろうと息巻いていたのに、小鳥のペースに呑まれていている氣がする。

「取り敢えず、このままだと面白くも何とも無い。クイズ形式で行こうじゃないか」

そう提案する小鳥、流されてるようで氣に掛かるが、悪い提案ではない。

「……じゃあ、同室の奴は居るのか？」

「『NO』だな、一応居る事は居る」

「ん？じゃあいつもは居ないって事なのか？」

「『YES』寝床がここってだけで、今の所殆ど顔を合わせてない」

「そんな奴居るのか……」

「まあな。とは言え、特殊な生徒ってだけで悪い奴じゃあねえんだぜ？」

悪戯小僧の様な、不敵な笑みを見せる。

「そいつのクラスって何組？」

「1の3らしいな。でも授業に出れないってんで、いつも空席らしい」

「うーん。じゃあ、そいつって有名人？」

「先生間では『YES』生徒間では『NO』だな」

何とも特徴の読めない人間の様だ、これではまるで教師陣によつてその人に関する情報がシャットアウトされているかのような……。『イヤ待て、ホントに何者なんだそいつ』

「いやあ、それがなあ……。俺も良く知らないし本人が一番良く分かってねえんだよ」

「はい？」

一瞬間が動かなくなった気がした。

自分で自分が分からない、とはどう言う事だろう。

「まあ何だ、あいつは所謂『記憶喪失』つてヤツでな。その上で身元不明らしい。どうしてそんな奴がIS学園に居るのは知らねえけどよ」

小鳥もその記憶について気に掛かっているらしい、その瞳には好奇心の色が見え隠れしていた。

「……なあ、小鳥」

「んあ？」

「ホントに何なんだその娘は」

その言葉に、小鳥は吹き出した。

問題が解らない奴を見て笑う小学生のマセガキみたいな、そんな底意地の悪い笑顔をしている小鳥。

「失礼だな。これをちゃんと答えられる奴なんて居る訳無いじゃねーか。何だかんだ言つたつて学年一つにつき百人前後居るんだぜ？その中から情報の無い奴一人だけを見つけろだなんて無茶があるー！」

「だーかーら、前提から間違つてんだよ、もうちよつと考えてみな。そもそも、女子と同じ部屋なら何で俺がお前に後ろめたく思わなきゃいけないんだよ」

その小鳥の発言に、一夏も反論する、

「いやだつて、俺等以外は全員女子なんだから……。オイ待て『前提から間違つてる』つてお前まさか……。!?!」

だが、その反論の途中で一夏はある可能性に気付いた

「漸く気付きやがったか……。まあ、答え合わせは本人が来てからにし

ようじやないか」
それを察した小鳥は、口角^{こうかく}をつり上げて意地の悪い笑みを浮かべて
いた。

三人の（計画的）邂逅（かいこう）

現在時刻 P・M・11:00。

記憶喪失の少年、刹那・F・聖永は、人の目を避ける様に、消灯済みの廊下を歩いていた。

（この時間帯は、女子は少ないが……まだ油断は出来ない。前も、女子トイレに隠れなければ鉢合わせする所だった……）

一夏と同じ様に無改造の制服を身に着けた刹那は、注意深く歩きながら隣人である小鳥が待つであろう自室へと歩を進めていた。

（オリムラの言っていた事とは大違いだな。結局オレは特別教室に行かされ、記憶の復活に向けて催眠術や脳波チェックを受ける……期待している訳ではないが、何時になったらオレは『普通の学園生活』を送れる様になるんだ？）

口にも表情にも出さないが、刹那は確かな不満を心の中で口にする。

最初の五日間は別室で寝泊まりした上、今日にしてもまだ早い方だが、昨日は午前1:00頃に解放されている。

彼自身、『普通の学園生活』と言う物について詳しく知っている訳ではないが。これを普通と言うのは無理が在ると思う。

（とは言え、どれもこれもオレが記憶を取り戻せば良いだけなのだろうな）

立ち止まり、心の中で独白しながら、彼は胸元に架けられたペンダントを取り出す。

（……これを見ていると、何かを思い出せそうな気がする）

正直、このISのような物が何なのかは解らない。だが、自分自身の正体はこれに在るのだろう。頭の中で、そんな確信が渦巻いている。

とは言え、IS学園の設備でこれを調べて解ったのは、二つ

機体の偽装コードであろう『EXIA』の機体名。

そして、この機体にはISに在るべきISCコアと呼ばれる機器が存在せず、謎の動力機関によって稼働していることだけだった。

(兎にも角にも・・・、『コレ』が何か分からない限り、オレはオレ自身みの正体を掴つかめないだろう)

ペンダントの飾かぎりを胸むねに仕舞しまい込み、また歩き出す。

今日こんにち、小鳥こどりがイギリス代表候補たいひょうこうほを打ち破やぶった事は、学園中の噂うわさになり、それは刹那せつなの耳みみにも届といている。

(だが・・・。その上でオドリはイチカに勝利しょうりを譲ゆずったらしい・・・。何を考えているのか、いまいち解と解とらないな)

同居人どうきよにんの考えかんがえが読よめない事に首くびを傾かしげる刹那せつな。

その戦いくさいが学級代表がくきゅうたいひょうの選出せんしゅを理由りゆうとして勃発ぼつぱつしたことであり、尚なほかつ小鳥こどり自身が代表たいひょうの地位ちゐを嫌きらって降参きやうさんしたのだと言うことを、彼は知しらない。

.....

「.....これは、どう言う事だ？」

「なつはつは。スマン、一夏いっかが寝落ねおちしやがった」

苦笑くせういしながら刹那せつなに弁明べんめいを試こみる小鳥こどり。

ベッドに腰掛こしける小鳥こどりの隣となりでは、上体かみを突つ伏ふして寝息ねいきを立てていいる一夏いっかが居いた。

「いや、そうではなくてだな.....」

「あー、解と解とってる。何なにで一夏いっかがここに居いるかって事ことだろ？それに関かんしちや、ちゃんと話わすから」

その前に、と付つけ加くえ物騒ぶつそうな笑わらみを浮うかべ、小鳥こどりは一夏いっかを起おこさぬよう静しずかに立たち上あがる。

そして、一夏いっかの隣となりに立たった小鳥こどりは、脚あしを思おもいきり上あげたかと思おもうと。

それを振ふり下くだろし、一夏いっかの寝ねているベッドのすぐ隣となりを勢いきおい良よく踏ふみ潰つぶした。

当然とうぜん、小鳥こどりに踏ふまれたマットレスはへこむが、慣性かんせいの法則はうそくに従したがい、瞬間しゅんかん一夏いっかは空そら中に漂たう。

だがそれは一瞬いっしゆんの出来事できごとであり、今度は重力じゅうりきに引き寄せひきよせられた上体かみが、一瞬いっしゆん遅おくれで追従おうするようようにマットレスへ降下こうかする。

一方のマットレスは、小鳥の足が離れた為に己の弾力に従って上方に戻る。

「だあっ!？」

……つまり、一夏の顔面にマットレスの角がめり込んだ。

「でえっ!？」

反動で仰け反った一夏は、勢いそのままに後頭部を別のマットレスにぶつけ、

「わぶっ」

更にその反動で元のベットに顔を打ち付けた。

「夜だけとお早う一夏」

「何すんだよ!？」

「モーニングコールならぬミッドナイトコールですよ、懇親会の主役が寝ててどうする」

「だからってな、三回も頭を痛め付けるは酷くないか!？」

「イヤ、2HIT目以降は流石の俺でも予想つかんかったわ」

頭の後ろをさする一夏に、罪悪感ゼロの小鳥が苦笑いで対応する。

「うう、そこで開き直るなよ……って、そっちの男子って、」

「おう。俺の同居人、刹那・F・聖永だ。あー、刹那。このバカが俺のクラスメイトにしてお前の隣人、織斑一夏だ」

「あ、ああ」

戸惑いながらも返事をする二人。

橋渡しをするように互いの事を紹介する小鳥、少々強行なのは否めないが、時刻が時刻である。健康生活に爺ムサイ程気を遣っている一夏の事だ、これ以上遅くまで起こしていたら翌日に健康の重要さを長々と語られる事になるだろう。

「そら、面会わせも終わったんだ、さっさと手前の部屋に戻って箒のヤツにどやされて来い」

「な、もう良いのか?」

「ホントは良かねえが、お前とて度が過ぎる夜更かしは望む所じゃねえだろ?ならさっさと寝ろ、お前から一恨み節聞かされんのは御免だからな」

ぶつきらぼうに言い放つ小鳥、訝しむように問いかける一夏と刹那。現在世界で三人しか確認されていない男性IS乗りが一堂に会した所で、元より緊張感に欠如した面々だったのだ、そこまで珍しい光景には見えない。

.....

結局、小鳥に言いにくるめられた一夏は自室へと戻り、刹那と小鳥だけが残された。

「…碌に話もしていないのに、あんなに早く帰して良かったのか？」制服を脱ぎ、ベッドに置いていく刹那が、小鳥に話しかける。

「どうやら、刹那も彼なりに自分以外の男子が気になっていたらしい。小鳥はそれを知ってクスリと笑う。

「良ーんだよ、アイツは十分に若いクセして老成してるっつーか、シジムセえんだよ。良く分かんが、兎に角健康に気を遣いすぎてこっちにまで波及しやがる」

だから遅くまで起こしたくなかった訳だ。とニヒルな笑みを浮かべ嗤う小鳥。

冷蔵庫からペットボトルの水を取り出して、ドカリと自らのベッドに腰かける小鳥。

「まあ、アイツはアイツで放つといっても問題は無いだろ。それよりもお前の方だよ、学園生活は馴れたか？」

「・・・一応は。だが、アレに馴れたら本当に普通の学園生活からは二段も三段も離れる予感がする」

無表情ながらも心中で苦笑する刹那。

対する小鳥もペットボトルから口を放して皮肉気に表情を歪める。「そりゃ仕方ねえ、お前は例外揃いの男子の中でも抜きん出て特異だからな」

所属不明、国籍不明、彼のISに関して足掛かりが無いのだ。ほか二人に比べて見ても、刹那の立ち位置と言うのは特異、否、危険な物なのだ。

(まあ、女子と同室だったらもつと大変だったんだらうがな)

それを加味した上で小鳥の同室にしたのだらう。

男子慣れのしていない女子は、異性との付き合いを知らない。そうなるとうとうしようもなく空気が悪くなるか、情報を聞き出そうとして刹那が無理してしまうだらう。

そこまで考えて、小鳥は一つ疑問に行き着く。

(情報、ね……。俺や一夏みたいにニュースにもならんし、それ以上にリーク情報の一つも無かった……。刹那には何があるんだ?)

IS学園と言う国家クラスの権力を持つ組織ならば、男性IS搭乗者の存在を表に出させなくするのも出来ない事はないだらう。

しかし、何故隠す必要があるのか。手近なペンを啜え、考察を始める。

(IS学園が隠す理由……考えられる理由が少なすぎる、寧ろ、身元の特定の為に大々的に公開、情報を待った方がよっぽど自然だ……何者かが圧力をかけた……? 否しかし何の為に?)

シャワーに行った刹那を見届け、一人残された部屋の中で、当人も預かり知らない何かを考えている小鳥だった。

……翌日……

1年1組の教室では、ほくほく顔の山田副担任が前日の結果を述べた。

「昨日の対戦の結果、セシリアさんが敗北、小鳥くんが降伏、クラス代表は織斑くんになりました!」

その叙述を皮切りに、クラスの女子が拍手をする。

当の一夏と言うと、誇るよりもまず、はにかむ様子を見せていた。そんな一夏の心持ちを知る筈も無く、みな思い思いの口振りで囁き立てる。

「せっかく男子の居るクラスだもの、ならクラス代表にしなきゃね」
「織斑くんがクラス代表になれば、貴重な経験を積めるし。他のクラ

スの子に情報を売れるし。一挙両得だね」

「売り物にすんなよ……」

ある意味そんな事情からは蚊帳の外である小鳥が、小さく突っ込む。自分の事じゃないからできる立ち居振舞いである。

だが、そんな小鳥の心の平穏を盛大に崩壊させる言葉が千冬から飛び出した。

「ちなみにだが、昨日の戦闘で次点の小鳥にはクラス副代表を務めてもらう」

「は？」

厄介の立場から逃れられると安心していた小鳥の顔が、一瞬にして呆けた顔に変わる。

「えちよッ、先日はそんな事言つてませんでしたよねッ!?!」

「言つてなかったただけだ。代表が居れば副代表も居て当然だろう?」

「そうかも知れませんが……。ああもう良いですよ……」

反感はあるものの、こうなつては仕方がない。

諦めのため息と共に肩を落とす小鳥。

後ろ纏めまとにしている頭を搔くその姿は、疲れているかのように矮小わいしょうなものに見えた。

と。氣力を失つた小鳥と、嬉し恥ずかしの一夏の後ろから、敗北者セシリア・オルコットが声をあげた。

「あ、あの。それでですわね。代表戦に向け、国家代表候補生のわたくしが操縦を教授して差し上げる、と言うのはいかがでしょう」

「えっ、良いのか?」

突然の提案に驚く一夏、その反応に氣を良くしたセシリアは更に続ける。

「もちろんですわ! わたくしのような優秀かつパーフェクトな人間の手によれば、一夏さんの操縦テクニクもみるみるうちに成長を遂げ

――」

「生憎だが、一夏の教官は私だ。一夏が、私に、直接頼んだのだからな」
机を叩いて立ち上がった筈が声を荒らげる。

ともすればその姿は殺氣立ち、意地とプライドをごちゃ混ぜにした

ような、奇妙な気迫があった。

そんな眼をすれば殆どの人間はビビるか怯むだろう。しかし、セシリアは怯む事なくその視線を受け止め、返している。

「あら、IS適性ランクCの篠ノ之さんではありませんか。Aのわたくしに何のご用かしら?」

「ブツ」

「ら、ランクは関係ない!一夏が私に頼んだ……って今笑ったのは誰だツ!?」

氣勢良く言い切るが、彼女の適性が自分と同じかそれ以下だと知って小鳥が吹き出してしまったのを聞き漏らさない辺り、気にはしているのだろう。

(おっとと……危ない危ない。アイツはマジで何するか分かったもんじゃない)

流星にバレては身が持たないと勘付いた小鳥は何も無かったかのように頬杖を突く。

……ちなみに、一般にIS適性と言うのはA、B、C、D、Eの5つにプラスとーを付けた10段階で評価される。

しかし、ここはエリートが集うIS学園。

D以下は特別な理由でも無ければ叩き落とされ、一般なら中央に在るCランクも学園においては底辺なのだ。

「何はともあれ、Cランクごときの篠ノ之さんでは役が勝ち過ぎています。一夏さんはどう思います?」

「えつと……是非に?」

迷いながらもセシリアの提案に首肯する一夏、がそれが箒の導火線に火を点けた。

「なっ!?一夏、貴様自ら持ちかけた契約を反故にするつもりか!」

「いやだって、箒からISの事教わってないし!」

「ならそれこそ私から教われ!私はその役に見合う力量があると証明してやる!」

「そんな事をしていたら代表戦までの貴重な時間が無くなってしまいますわ。一夏さんもそう思いませんか?」

また自分にお鉢はちが回まわつてきた事に迷惑ごまごを覚おぼえる一夏ひと夏だが、答こたえを出す前に千冬ちふゆの出席簿しゅつせきぼが火ひを吹ふいた。

「やかましい。座まれ馬鹿ばか共ども」

先せんの筭けんの劍幕けんまくが可愛かわいく見みえる程ほどの霸氣はきが二人ふたりを退しりぞける。

「下くだらない事ことで騒さわぐのは10代とっけんの特権とくけんだが、此処こゝは私わたしの時間じかんだ。私の指示しじには従したがえ」

毎度まいどの事こと思おもうのだが、これは体罰たいばつに当あたるのでは？

「……?」

と、心しん中ちゆうで苦笑くわうしていた小鳥こどりだが、ふと先程さきほどの会話かいわの中で気きになる点でが出来できていた。

(一夏ひと夏……さん?)

……さん?

二人目の幼（おさ）なじみ

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オ
ルコット、小鳥。飛んで見せろ」

四月下旬、クラスの人間関係が固まりつつある頃。

1―1クラスでは、実習訓練が行われていた。

指示に従い、セシリアは左耳のイヤークラスに触れる。

その直後、彼女の総身は光に包まれ、一瞬後には彼女の専用機『ブ
ルー・ティーズ』を纏うセシリアの姿だけがあった。

「早いもんだなあ……」

しみじみと呟く一夏を、千冬が叱りつける。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからんぞ」
言われて、一夏は右手で左手首のガントレットを握り、心の内で呟
く。

（来い、白式……！）

その隣で、小鳥は、縦10c m横7c mの灰色の小型端末を手
に握っていた。

「来い」

短く、しかし強い言葉。それが合図だ。

端末は光と解け、セシリアに迫る速度でその身体を覆う。

ほぼ同時に展開を完了した二人は、白と銀と言う非常に似たカ
ラーリングの機体に包まれていた。

「よし、飛べ」

二人の機体の展開を確認した千冬は、強い口調で命令を下す。

そこからの行動はセシリアが早かった。

「は、早いな」

「まあ仕方ねえだろ」

二人も続くが、どうも速度が出ない。

セシリアが空中で止まり、小鳥が半ばに到達したとき、一夏はと言
うとさらにその三分の二にやっと届く所だった。

「何をしている織斑、推力は白式の方が上だぞ」

セシリアにとって乗り慣れたブルー・ティアーズなら兎も角、未
成である筈の銀影にのり慣れない筈の小鳥に負けるのは可笑しい。

そう千冬からお叱りを受けた一夏は千冬に聞こえない事を良いこ
とに不満をぼやく。

「そう言われたってなあ、『前方に円錐を作り出すイメージ』ってなん
だよ」

愚痴りながらも目的地点にたどり着く。白式の高スペックには感
謝しかない。

と、嘆息している一夏の横からセシリアの声がかかる。

「イメージはたかがイメージですわよ。」

勧められたやり方をひたすらやるよりは、自分にとってやり易い方法
を考えた方が建設的ですわ」

「って言われてもなあ……。大体、空を飛んでる今でさえ、その感覚
があやふやなんだ。そもそも、どうやって浮いてるんだこれ」

白式には翼に相等する突起が二つ一対で存在するが、どう考えても
飛行機のそれとは理屈が違う。

翼の向きとは関係無しに好き勝手に方向転換できる時点で揚力
はないのは確かだろう。

「お前な……。それ初っぱなの授業でやってたろ……」

一夏の言を聞き、小鳥が呆れたように肩を落とす。

「細かい事は省くが、ISが飛べる理由としては、P・I・C……パツシ

ブイナーシャルキャンセラーが重力を相殺、その上で行きたい方向に
向かう力場を形成するからだ。わかったなら、補習に励めよ？一夏」

いやらしい笑みを浮かべる小鳥。

今の所勉強においては圧倒的に小鳥が優位なようだ。

「なるほど、わからん」

「だろうと思ったから励めと言ったんだバカめ」

「はいはい……。それはそうとセシリアが何か不機嫌っぽそうなんだ
けど」

小鳥に近づき、耳打ちする一夏。

確かに言われてみれば、小鳥が一夏に説明を始めた辺りからセシリ

アの顔が明らかに雲っていた。

問われた小鳥は、その理由を察しているだけに苦笑いだけで答を言わない。

「ついでだが、下を見てみな」

「お、おう」

小鳥に促されるまま下を見る。そこには明らかに怒りを帯びる筈の顔、その睫毛の一本さえもが『視えた』。

「うわっ・・・凄いな」

ISに標準搭載されたハイパーセンサーにかかれば、これくらいは余裕らしい。

この分なら月の表面くらいは楽勝で見えそうだ。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているのですよ。元々、ISは宇宙空間におけるパワースーツが目的でしたから、星々から己の位置を特定する機能もあるようですから、この程度は見えて当たり前ですわ」

「だ、そうだ」

「へえ。サンキュ、セシリア」

流石候補生、知識面でも頼りになる。

一方専属コーチの筈は説明がアバウトで、

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚で行け』

『ずがーん、と言う具合だ』

・・・とまあ、異様にオノマトペが多く、口に出しては言えないが役に立ちそうにもなかった。

そんな筈の説明にセシリアが口を出してケンカになるのがここ最近のパターンと化している。

(俺に対して態度が軟化した分、筈への当たりが強くなっているのは気のせいかなあ)

実際気のせいではないのだが、その原因となっているのが自分だと

は気づいていない一夏である。

と、少しの間話をしていた三人に、千冬の声が飛んできた。

「三人共所定の位置に着いたな。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上10cmだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

言うが早いか、セシリアは地上へ向かう。

みるみる内に遠くなるその背中を、残された二人は感心しながら眺める。

「上手いもんだなあ」

完全停止もどうやら上手くいったらしい。

それを見届けた一夏は、小鳥より先に降下体勢に入る。

「よし、俺も――」

意識を集中させる。

想像するのは背中からロケットファイアが燃えるイメージ。

円錐を思い起こす事はしない、先程はそれで推力が上がらなかったのだから、セシリアの言うように自分のオリジナルでやってみる。

思惑通りに加速に乗った一夏は、

「わあああああッ!」

凄まじい勢いで地面に激突。もとい墜落した。

地上の面々も、未だ上空に泳ぐ小鳥も『うわ〜』と、目の前の惨状に目を覆っていた。

「大丈夫ですか?一夏さん」

「……. なんとか」

ISのダメージカットの力によって肉体にダメージは無いが、クラス女子の視線はひしひしと感じる。

心配をしてくれているセシリアの優しさでさえ何だか傷心に滲みる。

「馬鹿者、誰が墜落しろと言った」

「……. すみません」

「情けないぞ一夏。昨日教えただろう」

「……. すみません」

ゲンナリとした一夏へ肉親と幼なじみのお叱りの声が掛かる。なげやりに返事をしてしまうのも仕方が無いだろう。

「お怪我は在りませんか」

「大丈夫・・・どこも痛くない」

「そう。それは何よりですわ」

ふふふ、と愉しそうに笑うセシリア。

秋空の天気などより遥かに予測の困難な女心に惑いながらもクレーターから立ち上がる一夏。

「・・・ISを装備して怪我などする訳ないだろう」

「あら篠ノ之さん。ISの有無に関わらず、他人の事をおもんぱかるのは当然の事でしてよ」

と、二人が口喧嘩を始めようとしたその時、轟音を上げて小鳥が急降下してきた。

「——ふんッ」

頭を進行方向に向けていた小鳥は、地面より10mの地点で身を縦に翻し、スラスターを全力噴射、地上2mで完全に停止した。

「チッ、2m60・・・。おおよそ20点つてどこか」

遠回しに一夏がそれ未満だと、他人にも自分にも辛口の評価を下す小鳥。

と、舌を打つ小鳥に歩み寄り千冬がさらに辛口な評価を言い渡す。

「完全停止は成功したようだが・・・誰が大穴を開けると言った。10点だ」

スラスターを全力噴射した反動で小鳥の足元のグラウンドは、浅く広い穴が空いていた。

それを見た小鳥は、先程よりも大きな舌打ちを放ち悪態を吐く。

明らかな反抗的態度に眉をひそめる千冬だが、何に対する舌打ちか判断しかねたようで、何も言わずに一夏に次の指示を出し始める。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは出来るだろう」

「は、はあ」

「『はい』だ」

「・・・はい」

「よし、始めろ」

指令を受けた一夏は周囲の人物との距離を確かめ、正眼に手を構える。

（――鋭い、薄い、硬い、斬るイメージ）

最大まで集中力が高まると、構えた両の手から光が放たれる。

（・・・よし、来いッ！）

その光を確信を以て握り潰す時、一夏の手には『雪片式型』が握られていた。

つい一ヶ月前まで平凡な受験生だった一夏にとって、『手の中に刀が現れる』イメージというのはかなり難しく、ここ最近の特訓はそればかり練習していた、

「遅い、0.5秒で出せ」

していたのだが、これでも遅いらしい千冬からまたもやお叱りを受けてしまう。

（ISと一緒に装備が出てくる小鳥が羨ましい）

鞆ごと出てくれるのなら、まだ楽だったかも知れない。それこそ箒に教われれば武装の展開もスムーズにいくと思う一夏だが、口に出すことはせず困ったような顔をするだけに止める。

「次はオルコットだ、武装展開をしろ」

「はい」

言うなり右手を横に突き出すセシリア。

すると、爆発的に光が放出、収束し、ライフルが出現した。遠距離戦を十八番としているだけありその出現速度は早く、尚且つ戦闘体勢も万全であり、後は安全装置さえ外せばいつでも撃てるようになっていた。

その出来の良さに小鳥も思わず口笛を吹き鳴らす。

「流石だな代表候補生……。だが、そのポーズは止せ、横に居る誰を撃つんだ？」

「で、ですが、これは集中する為に必要な、」

「一週間以内に直せ。良いな」

「……はい」

反論を一睨みで踏み潰す千冬。

流星に口に出して反論はしないが、言いたい事は沢山あるらしい。苦虫を潰したような顔で黙り込むセシリア。

と、頭の中で呪詛の類を唱えていたであろうセシリアに次なる指示が飛んだ。

「セシリア、近接戦用の武器を出してしろ」

「えっ？あつ、はいっ」

完全に自分の世界に入っていた時に出された唐突な指示に驚きながらも、それ従い空いた左の手に光を放出するセシリアだが、

「くっ……！！」

その光は、ライフル『スターライトMark II』の時とは違い、すぐには像を結ばず放出点を起点とし、宙をくるくるとさま迷う。

「どうした。まだか？」

「す、すぐですー！」

とは言いつつも、光は一層散乱し、セシリアの顔を焦燥に歪める。(どうやら、近接戦は基本的にやんねえみえてえだな)

遠距離武器の際はあれほど見事な展開を見せたと言うのに、近接武器を呼び出そうとしている今の展開速度は、一夏のそれにさえも劣る。

ISの操縦というのは、基本的にイメージの強固さがものを言う。

IS歴が1カ月にも満たない一夏がそれなりに速く雪片を呼び出せたのは、ブランクがあったとは言え彼が剣道経験者だったからであろう。

「ああもう！『インターセプター』ッ！」

と、四苦八苦していたセシリアは、半ば自暴自棄気味に武器の銘を唱える。

すると、手元で行き場を失っていた光はゴール地点を見つけたかのように集束し、決闘の時に出したナイフのような物が出現した。

(……マジか)

小鳥が驚いたのはその手法だ。

武器の銘を呼ぶ展開法は、教科書において『初心者のやり方』だと

記載きざいされているような方法である。

慣れていないのは重々じゅうじゅうしゅうちゅう承知しょうちしていたが、真逆まさかそんな方法で呼び出すとは思わなんだ。

小鳥の中でセシリアの株かぶがやや下がってしまった。

それを自覚している為に、セシリアもその屈辱くつじよくに唇くちびるを噛かんでいた。

「何秒かかっている。お前は実戦で相手に待ってもらおう積つもりか？」

「じ、実戦では間合まあいに入いらせません！ですから問題ありませんわ！」

「ほう、あの初心者二人相手に懐ふところに入はいられていたようだが？」

「あつ、あれは、その……っ！」

懸命けんめいに反論はんろんを試みるセシリアだが、それらが一々事実じじつな為に口許くちもとでどもってしまふ。

『大変たいへんそうだなあ』と量子変換りょうしへんかん武器ぶきのない本当に他人事ひとごとの小鳥。その隣となりに立つ一夏いっかはと言うと、何故なぜか苦い顔かおをしている。

それもその筈はず。キツ、とセシリアから睨にらまれた一夏は、

『貴方あなたのせいですわよ！』

(なんでだよ)

『あ、貴方あなたが私わたしに飛び込んでくるから……』

(そりゃあ、近接武器きんせつぶきしか無いんだから仕方ないだろ)

『せ、責任せきにんをとっていただきますわ！』

(なんのだよ)

とまあプライベートチャンネルによって一方的ひつぱくに言われっぱなしだった。

因ちなみに、プライベートチャンネルの使い方がよく解とらない一夏は、返事を返しておらずセシリアからの怒りの声を甘んじて受けるしか出来ていない。

と、理不尽りふじんな愚痴ぐちを聞かされる内、授業終了の鐘かねが鳴らされた。

「時間じかんだな。……今回の授業はここまでだ。織斑おりあま、小鳥、グラウンド、片付けて置けよ」

「はい」

「Yes ma'am」

一夏、小鳥の開けた穴はそれなりに大きく、小鳥のそれに至いたっては

スラスターの逆噴射さかきりによって開いた為、一夏のそれよりも土が舞い上がっている。

「——って、土どこにあるんだ？」

スラスターの風を箒代はらわりにグラウンドの土を掻かき集めることを小鳥が思い付くまで、頭を抱えるしかない一夏だった。

.....

その日の夜、IS学園のゲート前に、小柄こがらな少女が体に不釣り合いなボストンバッグを抱かかえて佇たまたんでいた。

「ふくん、ここがIS学園なんだ・・・」

肩にかかりそうなサイドアップツイントールの髪型を風に靡なびかせ、自身の居場所を確実かくじつなものにすべく、行き先を探す彼女の名は凰フアン・鈴音リンイン。人類革新連盟の主要国、中国の国家代表候補生である。

「えーと、受け付けてどこにあるんだっけ？」

上着のポケットをごそごそとかき回し、一枚の紙を取り出す。長旅と彼女自身のガサツな性格を表すようにグシャグシャとなったそれを広げると、目的地の場所を探し文面ぶんめんを読み始める。

「本校舎一階総合受け付け・・・ってだからどこにあんのよ」

「アツチですヨ」

「わあっ!？」

彼女がぶつくさと言もんくうと、横から男性の声がかかった。

声の方をみる鈴音の右方うほうには、髪を後ろ纏まとめにした半開きの目付きをした少年がいた。

「だっ、誰よアンタ!？」

見知らぬ少年は、おどけた調子でレジ袋を持った腕で肩をすくめ、鈴音の質問に質問で返す。

「オイオイ。仮にも親切に道案内してくれてる人にその言い方はないだろ」

「いつの間にか横に立ってる不審者ふしんしゃに言われたくないわ!」
「不審者とは失礼しつれいな」

ムツと眉を顰める少年は、それならばと溜め息混じりに己の名を名乗る。

「俺の名は小鳥遊、世界で二人目の男性IS乗りだ。そんな俺を不審者と言うお前は誰だ？」

その言葉を聞いた鈴音は、全力できよとんとした顔をしていた。

「え．．．え？い、一夏以外にもいたの!？」

「居るぞ」

「マジで!？」

「真剣で」

と、鈴音の言を聞いていた小鳥は、思考の片隅にひとつの疑問をしまい込む。

『織斑』じゃなくて『一夏』ね．．．。アイツとの知り合いなのかねえ?。」

半開きの目を更に細くして、鈴音の存在を相関図に組み込んだ。

恐らくは昔一夏がのろけさせたやつなんだろうな。と。

「はあ．．．．．もういいわ、受け付けはあつちなよね?。」

「おう．．．あくそうだ、一人目の男子の方はソツチのアーナで特訓してるだろうから、暇なら見に行くと良い」

「え、ちよ．．．ッ!。」

そう言っただけで寮棟へ歩く小鳥を見送るしかなかった鈴音は、少し迷って一夏の許へと向かうのだった。

．．．．．

「あれ?。」

「ん?どうした?。」

箒との特訓が終わり、半袖トレーニングパンツ姿の一夏とジャージトレパンの箒が、部屋へ向かおうとアーナの廊下を歩いていると、どこかで見たことのあるツインテールが何かを探すように揺れている。

「．．．．．あいつは」

どこかで見たことある髪型だ、そのおさげの位置も見覚えがある。

「もしかして……鈴か？」

一人呟くが、その声は隣の箒に聞こえるだけで当の本人の許へは届かない。

声を掛けようと足を動かすが、それより先に隣に立つ箒から声が掛けられる。

「おい、鈴とは奴の事か」

「ん？ああ、箒が小4の頃転校しただろ？そのちよつと後に入れ違いで転入して来た奴だよ」

問う声、答える声それぞれが、アリーナの入り口に木霊する。その声は当然、鈴音にまで届く。

気づいた鈴音は一夏の方へと振り返り、

「あ、いち……か？」

一夏とその傍らに立つ箒の二人を見た瞬間に、表情が固まった。

……彼女がこのような中途半端な時期に転入して来たのは、二つ程理由がある。

まず一つ。現在、一学年の国家代表候補生が専用機持ちであること。

世界のISの数が限られている事、そのISが均等に分配されている事から、IS学園は現代社会における軍事力の縮図となっている。

学園内での対戦で遅れをとるような事態があれば、数の力の無い現状においてそれは、その国の軍事力が劣っている事の証明となる。

まして、その舞台にさえ上がらないと言う事は開発が難航していると言っているようなものだ。

故に鈴音はセシリアの情報を得た中国、もとい人革連から再三入学を依頼されていたのだが、ものぐさかつ大人嫌いの鈴音はそれを毎度の事蹴っていた。

そこで二つ目の理由だ。

結論から言えば、彼女は織斑一夏に好意を寄せている。

毎度の様にIS学園への進学依頼書をゴミ箱へ投げ捨てた日の昼。彼女はポテチを齧りながらテレビを見ていた。

何分散漫なにぶんさんまんとした集中力でテレビニュースを視ていた鈴音は、コップを手に取り烏龍茶ウーロンちゃをすすろうとしたときに、コップを落としかけた。それもその筈、速報に流れてきた人物が幼なじみの顔だったのだから。

「……詰まる所彼女は片想いの相手に会いに来たいが為ためにここまで来ているのだ。」

しかし、一夏の隣には謎の女子が居たのだ。

しかもその距離も明らかに近い。まるで幼なじみのようだ。

衝撃の現実を開いた口の塞ふさがらない鈴音に、一夏が歩あゆみ寄る。

「お、おう。久し振りだな、鈴。一年ちよつと振りか？」

「え、ええーそれくらいじゃないかしら！」

ハツとして我に帰った鈴音は、ぎこちない笑みを浮かべて一夏に応答する。

「そ、それにしても良く分かったわね、普通一年も会ってなかったら顔とか忘れない？」

「忘れねえよ、鈴とは良く遊んだからな」

そう言われると、顔を赤らめてしまう。目の前で一夏の隣に立っている見知らぬ少女にさえ目が行かなくなる程に。

と、一夏との会話に夢中になっている鈴音に、箒ほうが割り込んで来た。

「ん、っ、んん！一夏、この女は何者だ？」

「いや、さつき言っただろ。こいつは、」

「鳳鈴音ファンリンイン、一夏の幼なじみよ」

慎つつましやかな胸を張ってそう言う鈴音。しかし箒ほうも負けじと大きな胸を張って宣言する。

「ほう、奇遇だな。私もだ」

「んなツ……!!?」

突然の幼なじみ宣言に愕然がくぜんとした鈴音は、一夏に詰つめ寄よる。

「どくゆうことよ!」

「どう、って言われてもその通りなんだが」

「あたしの知らないアンタの幼なじみだなんて存在するワケないでしょー!」

事情が全くもって掴めてない鈴音は、困惑しながらも真つ当な論理を述べる。

「いーや、そんなワケがあるのだ！」

「なっ……。良いわ、聞かせもらおうじゃない」

鈴音が問い詰めたのは一夏の筈だったのだが、何故か我が物顔で答える筈。

「私は貴様の前に転校した幼なじみ。つまり初めての女友達と言うヤツだ！」

「な、なんですすって!？」

何だか『初めて』と言う部分が強調されている気がするが、事実なので仕方ない。

驚愕した鈴音にそれが事実であることを肯定する。

「まあ、その、何だ。こいつの名前は篠ノ之筈。前に話さなかったか? ほら、鈴が小五の頭に転入してきただろ? 筈は……」

無言で『言っても良いのか?』と目配せを送る一夏。

筈は何とも言わないが『勝手にしろ』と顔を反らしたので、大丈夫だろうと判断した一夏は話し続ける。

「束さんの妹でさ。要人保護プログラムで小四の終わり頃に転校してて、ちようど入れ換わりだったんだ」

その説明に開いた口が閉じた鈴音。

その代わりに筈がむっとした表情になっているのは、どうか気のせいであってほしい。

「……………」

「……………」

「……………」

と、話題が無くなった三人は、三者揃って黙り込んでしまう。

誰から話しかけたものかと様子を見計らっていた三人の間に、

『Priririririririri!』

「!？」

突然携帯電話の着信が鳴り響いた。

「お、俺か……。もしもし?」

一夏の携帯から鳴っていたらしい、端末を起動させる。着信主は小鳥だった。

『おう、一夏。今どこだ？』

『ああ、アリーナだ。特訓が終わったばかりでさ』

『そうか・・・まあ良い。部屋に戻って着替えたら取り敢えず教室に
来い』

『お、おう。解った』

『別段急ぐ必要は無い、一応十時までに着けば問題は無いからな』

『あ、ああ』

『じゃあまたな』

小鳥からの一方通行な会話は小鳥の一方的な切断によって切られ、一夏も豆鉄砲を食らった様な表情で通話を終了させる。

『誰からだ？』

『小鳥からだ。なんでも、『教室に来い』だつてさ』

何が目的かは知らないが、あの雰囲気ではすっぱかすとロクなことにならないさそうだ。

無力な悩み

鈴音が一夏と箒に遭遇していた頃、小鳥はコンビニのビニール袋を片手に1—1の教室へと向かっていた。

一夏のクラス代表と自分の副代表就任を祝してのクラス会をやるのだそうだ。

(・・・一夏も俺もそんな物欠片たりとも欲していないと言うのに、どうしてそんなに騒ぎ立てるのか)

ちなみに、彼がコンビニに出ていたのも、女子が『お菓子買ってきて!』と言ったからである。

よくも主役の一人を雑用に使えたな、と良くも悪くも感心してしまふ。

・・・加えて言うのであれば、教室を使えるよう交渉をしたのも彼である。

(平和だな・・・)

一人薄暗い道を歩く彼は何も言わず、いつもの様に颯めっ面で歩き続ける。

「・・・・・・・・」

ふと、足を止めて窓を見やる。

防弾の為に分厚い窓、その先に広がる黄昏と夜の混じる空。

小鳥はその全てを『見』て、その全てを『視』ていなかった。

心に抱くのは、焦燥か、或いは望郷の類だったのかも知れない。

『何故今、俺は此処に居る』

『此処に居て俺に何が出来る』

ぎりりと、強く奥歯を噛み締めた小鳥は、こう呟く。

「何故・・・・・・・・何故今なのだ・・・・・・・・!?!」

誰にも届ける積もりの無い言葉は、誰に届く事無く消えていった。

・・・・・・・・

「織斑くん代表就任おめでとー!」

「パンツ!パンツ!とクラッカーが弾ける。」

苦笑いの裏側で沈み込む一夏と、煩わしげにテープを払う小鳥にクラッカーのテープと細切れの紙が掛かる。

「小鳥くんもねー!」

「そう思うんだつたら雑用に使うかよ」

いつも通りの顰めっ面で小さく抗議する小鳥。

クラス的女子も一応思う所はあったらしく。あはは、と笑って釈明する。

「いや〜。だってほら、良い会にする為なら猫の手だって借りたくないじゃない?」

それに対して何も言わずに困った顔をして頭を掻くだけの小鳥。

納得してくれたのだと思った女子は、ポテトチップスを求めどこかへ行ってしまふ。

「………。だったら一夏にも手伝わせれば良かったろうに」

相変わらず小声でぼやく。

無論そのぼやきは隣に立つ一夏にしか聞こえないが、彼にしか聞こえないだけに一夏は苦笑いするしかなかった。

「それにしても、織斑くんが代表になってくれて良かったね〜」

「ほんとほんと」

「これで対抗戦も盛り上がるね」

「そうそう」

「ラッキーよね」

「うんうん」

と、勝手に囁し立てる女子。

ただ、その中に他組の女子が混ざっている様に見えるのは気のせいだろうか。

一夏は疑念を抱き、小鳥は確信を持つ。

(整備科の人間まで居るしな)

パツと部屋を見回した限り、軽く五十人は居るし、布仏本音も視界の端に見受けられる。

これでは如何に教室が広くとも、これは過密状態である。

「つて、何で鈴まで居るんだ」

と、内心で呆れ返っている小鳥の隣では、一夏が他組の顔見知りを発見したらしい。

小鳥が合わせた一夏の視線の先には、先程遭遇した女子が居た。

「・・・あのツインテの女子、顔見知りか？」

「あ、うん。鳳鈴音^{フアンリンイン}つてやつでさ、小四以来の幼なじみつてヤツかな。中二の頃に転校してただけど、何でも中国の代表候補生として二組に転入してきたんだつてさ」

「ふーん」

何となく聞き流しながら手に持った紙コップのジンジャーエールを口に流し込む小鳥。

「良いやつだぜ？なんだつて『料理が上達したらタダで豚を食わせてくれる』つて約束してくれたんだぜ」

「ブツ！」

「どうした!?!」

「い、いや。噎^むせただけだ」

(き、気付いてねえ?!?それ『毎日味噌汁』の下りじゃねえか!?)

どうやら小鳥の見立ては正しかったらしい。

思っていたよりも一夏は罪作りな男のようだ、と認識を改めた小鳥は、苦笑しながらも咳を抑える。

と、いつの間にか一夏の傍らによつていた筈が不機嫌そうに鼻をならす。

「フン、人気者^{にんきもの}だな。一夏」

「・・・ホントにそう思うか?」

「イヤ、人気者はツライねえ」

そんなやり取りを聞いていた小鳥が、白々しく肘で小突く。

「そんな事言つたてなあ・・・。迷惑とは言わないけど困惑はするさ。今日みたいに突然俺が理由に何かやってたらびっくりするだろ」

「そりや言ってる。ま、お前は空気読むのが上手だよ。その割には相当二ブいがな」

からかうようにクツクツと笑う小鳥。

口をへの形にして不満を顔に出す一夏、そんなに好かれている自覚の無い一夏としては意外な事なのだろう。

学級の垣根を越えて人間の集結しているー！ー！。

そんな教室に一組の乱入者が、扉を開いてやって来た。

「はい、こんにちはは新聞部です！話題の新入生の男子二人組を取材しに来ましたー！」

その言葉を聞いて『おー』と盛り上がる女子一同と、肩を落とすように溜め息を吐く一夏と小鳥。

（どうも、インタビュートかは苦手なんだよなあ。何か、自分の事探られてる気がしてヤだし）

そんな一夏の苦手意識を知るよしもなく、新聞部の女子は一夏と小鳥の元へとやって来る。

「私、は薫 薫子。二年で新聞部副部長やっています。あ、はいこれ名刺」

名刺を受け取った小鳥は、そこに踊る画数の多すぎる文字を見て苦笑いし、誰にも聞こえない程小さな声で呟く。

「・・・親は何を思ってこの名前を付けたんだ？」

「ん？何か言った？」

「いや、下らない事を言っただけだ。気にしなくて良い」

自分の名前にツッコみ所が在ると知りつつも。彼女の字面の画数にはツッコまざるを得なかった。

そんな事は露知らず、薫は取材を続ける。

「ではまず、織斑くんから！」

「は、はい」

「ズバリ、クラス代表になった感想を！」

「えーつと・・・」

不味い、何も思い付かない。

とは言え期待を裏切る訳にもいかない為、ふんわりとした言葉が口から出てくる。

「え、えー。頑張ります・・・？」

「弱くい！もうちよつと良いコメント頂戴よー」

「いや、その。インタビューとか苦手で・・・」

あはは、と間に合わせの笑顔で取り繕う一夏。

「まあいいや、テキストに捏造しておくから良いとして・・・」

「オイ」

捏造と言う記者のあるまじき台詞にツッコむ小鳥、それを聞かぬフリして彼女は小鳥にレコーダーを差し向ける。

「じゃあ小鳥くん！副代表になった感想！」

自分のペースを押し通そうとする黛にうんざりとした顔を向けながら、小鳥は表情を崩さずに答える。

「・・・まあ。元々、どのポストに就くつもりも無かったが。就いたからには全力を尽くして一夏をサポートする所存だ」

「おお！これは捏造しなくても良いコメント」

一夏に比べて内容のあるコメントを渡す小鳥。

・・・実を言えば一夏がインタビューを受けている間にインタビュー内容を考えていただけなのだが。

「そう言えば、代表を決める為にISで戦ったって聞いたけど。よくオルコットちゃんに勝ってたね」

「それはまあ、実質二対一だったからなあ」

「実質も何も、ああしなければ俺達が無様に負けていた。よってたかって攻撃しなかりやどうしようもなかっただけの話だろう？」

小鳥がにべもなく告げる。

『手段を選ばないタイプなんだよなあ』と、一夏が密かに心の内で独白しているのを尻目に黛はセシリアにインタビューを始める。

「あ、そうだ。ついでにオルコットちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったのは得意ではないのですが、仕方ありませんわね」

と言う割には中々気合いが入っている風に見えるし、インタビューを受けると知りつつ近くで待機してたり、その時から妙に髪を気にして整えていた辺り、元々そのつもりだったのだろう。

「コホン。まあ、一夏さんには、国家代表候補生のわたくしが指導して

いく予定ですわ。そうなったからには、一夏さんはこれからどんどん強くなつて——」

「あーゴメン長くなりそうだからこつちで捏造しとくわ」

「ちよ、ちよつと！最後まで聞きなさい！」

渾身のコメントを聞き流され憤慨するセシリア

あははー。と、聞かぬふりして自分のペースを押し通す黛。

なんだか大変そうだな、セシリア。と、他人事の目で事態を静観する一夏。

他人事だと見てて楽だなあ。と皮肉気な視線で見ている小鳥。

三者三様で事態に立つが誰一人として火消しに回る気は無いようだ。

「つと、じゃあ話題の専用機持ちを写真に収めて私達は退散としましょうかね」

「えっ?」

意外そうなセシリアの声、僅かに喜色を含んでいる様に聞こえるのは、気のせいではないだろう。

「と、すると。三人一緒に、か?」

「うくん、そうだねーその方が早いし、画面映えもするからねえ」

そう言われた小鳥は、『うげっ』と顔を顰め嫌なことを隠さない。

どうせポーズングがどうの言われ、セシリアから文句を言われ、最終的にはわーわーぎゃーすかと騒がしくなるのだろう。

「ハア……。一夏、手え出せ」

「?・・・おう」

ため息を吐いた小鳥の指示に従い、素直に右手を前に出す一夏。

その下に差し込む様に自分の右手を出した小鳥は、セシリアに指示を出す。

「そらセシリア、一夏の上だ。手え置け」

「えっ!」

「おおーそれ良いねー!」

小鳥が顎で一夏の上に手を置くよう、セシリアに促す。

当のセシリアは、一夏との距離を詰める事が出来る思わぬ機会を得

て、テンパった様子を見せる。

「そ、その。ハンドクリームを塗りたいんですが・・・」

これは好印象を残すまたとないチャンス。

あわよくば、香りによる印象付けを狙うセシリア。

「めんどくさいなあ。ほら、さっさと手置いて!」

しかし相手が悪い、今カメラ場の流れを握るのは新聞部の部長、まゆずみ黛である。

これまでマイペースを突き通し続けた彼女が、セシリアの事情を察する筈もそれに付き合う訳もない。

「いつ、一夏さん。の、乗せますわよ・・・?」

「おう」

恐る恐る一夏の手の上に自分の手を乗せようとするセシリア。

彼女のぎくしゃくしている訳が解らない一夏は、心配そうにセシリアに問いかける。

「大丈夫かセシリア。何かさつきから顔赤いけど、調子悪いんだっから無理しなくても良いんだぞ?」

「だ、大丈夫です!なんともありませんわ!」

ぶんぶんと顔と手を横に振って一夏の心配を否定するセシリア。

それを見て内心ニヤニヤ顔がおの小鳥は、ムスツとした顔を崩さないでセシリアを急かす。

「そら、早く乗せろ。なんだったら俺等おれらふたり二人だけで撮っちまうぞ?」

「っ、分かりましたわ!」

ようは手を重ねれば良いだけの話なのだ。

『女は度胸ですわ!』とヤケクソ気味に覚悟を構えたセシリアは、意を決して自らの右手を一夏の右手の上に重ねる。

「よし、ポーズは決まったね!撮るよー、はい35×51÷24はく?」

「え?えくつと、2?」

「ブー。74・375でしたく」

『2じゃないんかい』と内心で呆れ半分のツツコミを入れる一夏。

一方のセシリアは、緊張でちゃんとした笑顔が出来たかわからなかった為、パタパタと駆けて黛、もといカメラへと向かう。

無表情の小鳥は、周りの女子が居ない事に気づき、まさかと後ろを振り替える。

「ん？どうしたんだ、セシリア」

一夏がそう彼女に声をかけた理由は単純明快。たんじゆんめいかいカメラに収まった写真を見て驚愕の表情を見せたからだ。

一夏の後方で背後の異状に気付いた小鳥もセシリア程ではないが、驚いた顔で絶句ぜっくしている。

「うわっ……」

写真を見た一夏も思わず驚きの声を漏らしてしまった。

それもそうだろう、驚くべき行動力をもって女子のほとんどが画郭がかくに収まっていたのだから。

「箒はらまでいるし……」

こんな催し物には無関心を貫くまでもが粹内わくないに収まっている。写真の彼女も今の彼女も変わらず鉄面皮てつめんぴなのがやけに不自然だ。

「あ、貴女あなた達ねえー！」

「まあまあ、皆の思い出になって良いじゃない」

「そうそう、それにセシリア一人に良い思いはさせないわよー？」

「うぐ、」

趣旨しゆしから外れているのは勝手に入ってきた女子達なのだが、全員悪びれる素振りそぶりもなくむしろセシリアをなだめ、言いくるめようとしている。

「ったく……」

あつけにとられて何も言えなくなった一夏は、頭を搔かいてその行動力かんたんに感嘆する。

と、何かを思い出した一夏は、女子から離れる為に輪から離れ、机の側に居る小鳥に問いかける。

「そーいやさ、今回のポーズ小鳥が決めたけど。あれ何か意味あんのか？」

「ああ、あれか……」

そう聞かれた小鳥は、いつもの半開きの目を閉ざし、

「良い意味ではないな」

「・・・と言うと?」

「あの構図は見る人間によって意味合いが変わる」

机の上の紙コップを手に取り濃ゆめのオレンジジュースをなみなみに注ぎ、続けざまにそれに口を付ける。

橙色の液体で口を潤した小鳥は、挑発するような目付きを一夏に向けて問いかける。

「じゃあ逆に聞くが、お前はあの構図にどんな意味を見出だした?」

問われた一夏は、少し考え、スポーツマンシップに則った答えを出す。

「――實力順、かな。俺と小鳥の順位は兎も角、間違いなくセシリアは俺たちよりも強い」

「そうだな。お前みたい你真つ当な思考回路の持ち主ならそう思うだろうよ」

「と言うかそれ以外にあるのか?」

「あるのさ、お前に解らないだけで」

たがしかし、小鳥が言うにはそれ以外の理由が在るようだ。

皮肉気に口を歪めた小鳥は、もう一つの解釈を口にした。

「答えは女尊男卑だ。バカみてえだがそいつは確実にある、そしてそういう奴に限って嘘みたいな行動力がある。・・・だからこそセシリアを上にしてそう言う風に見せたのさ。面倒臭い騒動を回避するためにな」

「お前、そこまで考えて・・・」

「まあ、考えすぎかもしれないけどねえけどな」

オレンジジュースを飲む小鳥の声は、溜め息が混じる。

一夏もそうだが、小鳥もまた女尊男卑の風潮に嫌気が差しているようだ。

「ま、お互いそんな事が無いように注意払ってこう、つてだけの話さ」
そう言って腰かけた机から離れた小鳥は、一組の出口目掛け一目散に歩き去るのであった。

.....

「・・・思ったより早かったな」

開口一番、クラス会から帰還した小鳥に刹那が発した言葉はその一言だった。

「早いも何も、一時帰還だからな。9時半頃にもう一回出ていく予定だし」

一応10時までの時間制限だが、どうせ騒ぎ好きの女子達がギリギリまで居座るに違いない。

それを見込んだ上で、30分で片付けるタイムテーブルを組んでいるのだ。

「・・・だが、主役が居なくても良いのか？」

「良いんだよ。主人公ってのは物語の最初と最後にさえ居ればそれで十分だ」

一夏の事はあえて顧みずあつけらかなと言い放つ小鳥。
ベッドに腰掛け、そのまま仰向けに寝転がる。

「それに、俺が主役だなんてのも柄じゃない。気を遣ってないと場の雰囲気が悪くするような奴が主人公を僭称出来る筈が無いだろう？」

なら影で黒子に徹してる方がよっぽどマシだ。と皮肉を口にする小鳥。

刹那は無表情だが、呆れた様子を隠さない。

「それに、俺が幸せを享受する権利なんてどこにも在りはしない」

「？ 何か言ったか？」

「別に、何も言っちゃいねえよ」

小声で呟いた為に刹那には聞こえなかったようだが、その呟きには戒めに近い響きがあった。

火花（ひばな）散（ち）る鞘当（さやあ）て

一夏と小鳥の就任祝いのクラス会、もとい、宴会から一夜明け。午前8時40分、教室に辿り着いて一夏が見たものは、隈に目を細める小鳥が机に突っ伏して寝ている光景だった。

クラスの女子からの挨拶を一通り返した一夏は、唯一のクラスメイトの男子の後ろに腰を下ろし、近場の女子に声をかける。

「・・・珍しいな、小鳥が教室で寝てるだなんて」

「ああー。確か昨日のクラス会が理由で寝不足だったんだって。それで早くから教室に来て寝直した方が効率的だったってさ」

「ふーん」

小鳥も小鳥で楽しんでたんだな。と、得心をしたように息を吐く一夏。

・・・昨晚、女子がギリギリまで教室を使い、教室を完全に空にするまで予定時間を20分もオーバーした事が千冬に見咎められ、小鳥がみっちり叱られた事を、一夏は知らない。

と、噂好きのクラスの女子の一人が、一夏にとある噂を持ち出した。

「そう言えば、一夏くん。昨日転入してきた転入生って知ってる？中国の国家代表候補生らしいんだけど」

その話題に心当たりがある一夏は、いつもの調子で反応する。

「ん？鈴の事か？」

噂好きの彼女らからすれば、その回答は意外な物だったらしく、驚いたように声を上げる。

「えっ、知ってるの!？」

「しかもあだ名で呼んだわよ!？」

しかも、一夏が鈴音の事を『鈴』とあだ名で呼んだ事が更に意外だった事も働き、教室中は寝てもいられないどよめきに包まれる。

「煩いお前ら」

と、その騒がしさに小鳥が起きてしまった。

その目の下の隈は、小鳥の半開きの目に更なる迫力を与えている。

「お……お早う、小鳥」

「お早う。今は……45分か、流石に起きた方が良いか」

軽い調子で挨拶を返した後、時計を見遣る小鳥。

現在時刻を確認し、もう寝ている時間は無いのだと把握した彼は、首や肩を回して意識の覚醒を己に促す。

「……それと、件の転校生の名前は凰鈴音だろうか？ だったら一夏が知っていて当然だ。なんでも、幼なじみらしい」

どうやら、女子たちの騒ぎの理由には何となく察しがついているらしい、これ以上騒がれても迷惑だと、吐き捨てる様に一夏と鈴音との関係性を乱雑に説明する。

が、しかし。その説明の乱雑さが仇となる。

そもそも、なぜ小鳥がそんな情報を入力しているのかが彼女らの疑問の琴線を弾き鳴らしたようだ。

「何でそんな事を小鳥くんが知ってるの!？」

「私たちでもそこまでは知らなかったのに!」

「一夏から聞いたんだよ」

「いつの間にそんなに一夏くんと仲良くなってたの!？」

「別に構わんだらう」

「くっ……!!これが男女の差だとも言うの……!？」

「知らん」

女子の慟哭にさえ律儀に答える辺り、本当に調子が悪いのだろうか。

いつもなら『勝手にしている』と、そ知らぬ顔で全ての声を無視している所だろうに。

そんな調子の悪い小鳥は、隈の違和感に目を擦り、珍しく親切な台詞を吐いた。

「さっさと散れ。この時間だ、千冬先生が廊下を歩いて来るぞ」

その台詞にハツとなった彼女らは、鐘が鳴るより前に着席していた。

……

その昼、一夏と共に、小鳥、箒、セシリアの三人が食堂しょくどうに居た。その用事は言うまでも無く昼飯。

いつものように食券しょつけんを買い、列れつに並んだ四名よんめいは受け取り口の方で意外な人影を見ることになった。

「待ってたわよ、一夏！」

食堂のお盆ぼんの上にラーメンを置いた鈴音りんいんが、堂々どうどう仁王立におうだちしていた。

その勝ち気な目付きや髪型、口にだしては言えないがその身長身長の低さは、中学で別れた頃と変わらない。

(そう言えばそこんとこは箒とおんなじだな)

二人の幼なじみの共通点きょうつうてんの発見に、密ひそかに心の内で手を打うつ一夏。そんな二人に向けて、文句もんくを飛ばした。

「鈴音リンイン、一夏。邪魔じゃまだ、注文が出来ないだろ」

「あつ、ゴメン」

意図いとせず進路妨害しんろぼうがいをしていた事に気付いた鈴音は、小鳥の指摘してきに従い大人おとなしく通路から身を引く。

流石さすがにそれが出来ない程子供ではないらしい。

「まったく。何で早く来ないのよ、アンタを待ってたんだからね！」

「無茶むちゃ言うなよ。エスパー超能力者じゃないんだから」

理不尽りふじんな物言いに對して、一夏は馴なれてる風に返答する。

実際片手で注文した塩鯖定食しおさばていしょくを受け取っている辺り、鈴音とこの言いったやり取りは馴なれているのだろう。

一夏に続き箒がきつねうどん、セシリアが洋食ランチ、小鳥が博多うどんを受け取り、自分達の座る席を探し始める。

「あ、あつちが空いてます・・・けど、四席しかありませんわね」

程なくしてセシリアがそれなりに空いた席を見つけたが、空席は四つ、對して人数は五人である。

少し考えて、小鳥がこう提案した。

「お前まへらで座れ。俺は一人で食う」

「えっ、良いの？」

ぱあつ、と顔かほに喜色きいろを灯とした鈴音は、そう小鳥に問う。

問われた小鳥は、溜め息混じりだが、悪戯小僧の様な笑みを浮かべ。「お前……と言うか、お前らは元々一夏が目的なんだろう。それに、合っていない分積もる話も在る筈だ。違うか？」

再開の喜びを邪魔する程小鳥は人が出来ていない訳ではない。

鈴音の喜びを他所にすたと一人空いている席に歩く。女子三人はその気遣いに感謝しながら、一夏と共に四名席に腰かけるのだった。

「……一夏、アンタクラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きだけだな」

「ふーん……」

鈴が話しかけてきたのは、そのラーメンの麺を二、三回啜ってからだだった。

不満を隠さない一夏の返答に何か思う所があったのか、鈴にしては珍しく歯切れの悪い相づちを打つ。

その違和感を誤魔化すかのようにどんぶりからゴクゴクと雄々しくスープを飲み干す。

相変わらず鈴は汁物でスプーンレンゲの類いは使わない。本人曰く「女々しい」のだそうだ。

そんな事を思い起こし、『お前女だろうが』と心の内でツツコミを入れていた一夏に、何か躊躇っている要な安定しない声音で鈴が声を掛けた。

「あ、あのさあ」

「ん？どうした？」

「……アンタがどうしてもって言うなら。ISの操縦、見てあげても良いけど？」

その視線はどこか行き場を探して虚空をさま迷っていた。

「え、良いのか？それなら頼みたいけど」

前の実習で経験や実力の不足を痛感していた事もあって、渡りに船だと思った考えた一夏は、その問いを是で返す。

が、しかし。本人が良くても周囲はそれを許さないらしい。

「あなたは二組でしょう!? 敵の施しは受けませんわ」
「一夏に教えるのは私の役目だ。私が頼まれたのだ」

テーブルに手を置き身を乗り出してまで抗議の声を上げる二人。
その形相は何か鬼気迫るものがある。

しかし、そんな物はどこ吹く風。涼しい顔をした鈴は、二人に向けて敵意丸出しの台詞を告げる。

「あたしは一夏に言っただけ。関係無いのは引っ込んでよ」
「関係ならある！一夏が私にどうしても頼んでるのだ」

「それに、一夏さんは一組の代表ですよ。一組の人間が教えるのは当然ですわ。後からしゃしゃり出てきて何を図々しい事をおっしゃるのですか?」

「はんッ、図々しいも何も、あたしは一夏と小学生からの付き合い何だから後もへつたくれもないわよ」

「そ、それを言うなら私の方が先だぞ！それに、一夏は何度もうちで食事している間柄だ。付き合いの深さもそれなりにある」

そう、小さい頃から千冬と円花の三人だけで暮らしていた織斑家は、家長の千冬が懇意にしていた篠ノ之家のご相伴に与かっていた事が何度かある。

その度に束の無茶苦茶加減にふりまわされていたのだが。
がしかし、家が上がってご飯を食べていた事は、鈴に対してはそれほどどのアドバンテージにはならない。

「うちで食事？それならあたしん家でもそうだったわよ」

そう言えばそうだ、鈴の家は中華料理屋で、彼女の誘いと言うのもあったが、一夏と円花の二人はそれなりにお世話になっていた。

鈴の父親、鳳楽音の営む店は、特徴として全ての料理の量、質、値段の全てが食べ盛り向けで、個人的に気に入っていた一夏は、円花とは別に一人で食べに行っていた事もある。

ちなみに、家計を助けようと働き口を探していた一夏を雇ってくれたのも楽音だったりして、何かと彼には頭が上がらない思いである。

と、物思いにふけっていると。

「い、一夏！どういいう事だ!?聞いていないぞ!」

「わたくしもですわ!一夏さん、納得の行く説明を要求します」

鬼気迫る勢いの矛先が、今度は一夏に向いた。

何が二人の追求意欲をかき立てるのか。困ったように頭をかいて、嘘偽り無く答える。

「説明って言ってもなあ・・・単純に鈴の家が中華料理店をやってて、そこに良く行つてたつてただけだぞ?」

「な、何?店なのか」

「あら、そうでしたの?それなら、別に不思議な事は何もありませんわ」

ほつとしたように箸とセシリアが胸を撫で下ろす。

しかし、対照的になぜか鈴の表情が途端にふてくされたような物になり、怒りを紛らわすようにラーメンを啜る。何も悪いことを行つたつもりは無いのだが。

「そう言えば。親父さんやお袋さんは元気してるか?まあ親父さんは病氣と無縁だろうけど」

「あー、・・・うん、元気——のはずよ」

話しかけてきた時よりも歯切れの悪い返答を返す鈴。その表情も何だか浮かない物になっている。

元気が取り柄みたいな彼女がそういった顔をするのは相当珍しく、違和感を感じずにはいられない。

しかし、それを追求するより先に鈴が話を始める。

「それよりさー!今日の放課後、時間ある?久し振りだしどっかいこうよ。駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたぞ」

「あつ・・・そう。・・・じゃ、じゃあ学食でもいいからさ。その、積もる話もあるでしょ?」

残念ながら積もる程の話題は無い。そもそも鈴が中国本土に帰つたのが中学二年の頃だったので、鈴と会っていない期間と言うのも一年と少しくらいで、その半分も受験勉強に費やされた。

結果として伝えておくこと、伝えたいことと言うのはこれといって

無いのだ。

「――生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

「そうですね。クラス対抗戦に向けての特訓が必要ですよもの」
「おかしい、なぜか自分の意思とは関係無しに放課後の予定が埋ま
ていく。」

（おかしいな、俺はその予定を入た覚え無いんだけどなあ）
もしかしたら自分以外の全員に行き渡っているスケジュールがあ
るのかもしれない。

とは言え自分に関わる物だと言うのなら本人にも伝えてもらいた
いものだが。

心中で不満を呟く一夏。

「じゃあそれが終わったら行くから。時間空けといてね。じゃあね、
一夏！」

そう言つて井を乗せた膳を持ち、席を立つ鈴。

食器類の片付けに行ったのだろうが、恐らくは帰つてこないだろ
う。昔から彼女は自分の話をするだけして相手の話をあまり聞かな
い傾向がある。

またもや自分の意思を無視して予定が組まれてしまった。

「一夏、判つているな」

「あーはいはいわかつてるって」

苦笑いで対応する。

鈴の約束は断れないわ身に覚えの無い二人の特訓があるわ、今日は
珍しく体育やISの実習の無い日だと言うのに疲れを感じるのは
何故なのだろう。

素朴な疑問を抱えながらも手を合わせ、昼食を終える一夏だった。

セイロンロンパく脅迫状付きく

同日の放課後、アリーナの中央で立つ専用機持ち三人の前に、意外な人物が居た。

「な、なんだその顔は……。何か可笑しいか」

「いや、その、おかしいって言うか——」

「どうしてここに篠ノ之さんが居ますの!？」

その人物の名は篠ノ之箒。専用機持ちではないため一夏の放課後特訓に実質的な参加が出来ていなかった人物だった。

「いや、訓練機借りたからだろ」

珍しく特訓に参加している小鳥が、冷めた声音で告げる。

一目見れば解ることだろう。実習で良く使われるIS “打鉄” を纏うその姿を見れば理解に苦しむ事などありはしない。

（いやはやしかし打鉄を使うとは……。本人の事も相まって侍にしか見えん）

打鉄……。その容姿を一言で表すのならば『鎧武者』と言うべきだろう。肩部の大型第シールド、どう見ても日本刀の近接ブレード、積層構造による装甲の形成。どこを切り取って見ても和のイメージを纏う日本製ISだ。

ハードウェアにおいては防御力と姿勢制御に、ソフトウェアにおいては汎用性に重きを置いた設計で、小鳥が触ってきた量産型ISの中でも『使い易い機体』と言う印象がある。

ただ、特化した戦闘においては汎用性の高いOSが反って思い通りの動きを邪魔すると言った欠点を持ち合わせる為、専用機ではなく訓練機としての扱いが適当な機体でもある。

（ま、そこら辺は箒の練度によりけり……。と言った所か。どうあれ近接戦闘の練習相手が来たと言うのは歓迎すべき事か）

オレンジ色のバイザー越しに状況を静観する小鳥。

これからのクラス代表戦誰と当たるかは分からないが、箒の近接戦闘の力量は自分よりは上だろうし、別に困る事は無いだろう。

「と、兎に角だ！これからは私が一夏の指南をする。さあ一夏、刀を抜

け」

やる気満々の箒。抜かれた刀は鋭く、鈍い輝きを放つ。

やはり、彼女には日本刀が似合うことだ。雪片式型を構える一夏に比べて随分と様になっている。

「いざ尋常に——」

上段の構えで力を溜める箒、早速模擬戦を始めるつもりらしい。が、しかし。

「お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットですよ！」

「ええい邪魔な……！」

一夏と箒との間にセシリアが物理的に割って入って来た。

利き手の右手には近接ブレード「インターセプター」が握られ、いつもそこにある箒のスターライトは左手にある。

どうやら自分が近接戦闘においても自分が優位であることを示したいらしい。

「ならば斬る！」

「訓練機に遅れをとる程優しくはありませんわよ！」

しかも箒がその挑戦に乗った為に、一夏そっこのけで戦闘が始まった。

（あーあーあー。コイツら本来の目的忘れてねえか？）

箒の袈裟斬りを受け、衝撃を後退する事で殺しつつ距離を取ったセシリアは、左手のスターライトMk-IIIで箒を狙い打つ。最早近接戦闘を教える云々は関係無いらしい。

「はああああつ！」

「甘いですわ！」

ガシヤガシヤの音を立て、一夏へ歩み寄った小鳥は、二人が争う理由になっている当人に問いかけた。

「どうした？どちらかに加勢しないのか？」

「そんなことしたらどっちか絶対怒るだろ……」

「だろうな、賢明な判断だ」

とは言え、まだまだ読みが甘い。どちらかに味方せずに怒らせると

言うのなら、

「一夏！」

「何を談笑だんしょうしていますの!？」

「いやだつて、どつちかに味方したらお前ら怒るだろ!？」

「当然!!」

「……………」どちらにも味方しなかつたらどちらも怒るに決まってるだろう。

……………

「では、今日はこのあたりで終わりとと言う事にしましょう」

「お、おう……………」

「ふん、鍛えていないからそうなるのだ」

小鳥と一緒いっしょに小一時間日本刀とビームの雨あられに追われ続けたからISのサポートがあつても息が上がって会話がしづらい。隣では両膝に手を突く姿勢の小鳥がゼーゼーと荒い呼吸を繰り返して、声を上げる事すら出来ていない。

一方のセシリア、箒の二人はそこまでの疲労はしておらず、少し呼吸が大きいのもうつつすらと汗をかいているだけだった。

「……………」

「何をしている、ピットに戻るぞ」

「あ、おう」

汗に濡れる体の艶つやつぽさに少しだけドキリとしていたのをぼーっとしてみると見られたのか、軽く叱られてしまう。

いつもは意識していないけれど、やはり自分も十代男子なのだなど心の中で思う。

「つて、箒?」

「な、なんだ?」

「なんでこつち側に来るんだ?」

「何故も何も、私もピットに戻るからだ」

「それならセシリアの所に、」

「も、戻るピットなどどちらでも良いだろう!？」

かなり食い気味きみに言い切る箒。それならセシリアの方からでも良いと思うが、それを言う和不毛ふもうな口論が始まる気がしたので、それ以上の反論はせずに大人しく箒と一緒にピットに向かう。

「……小鳥は大丈夫か？」

「……大丈夫だ……先に、戻ってろ……後から、続く」
「おう……」

疲れ果てた小鳥の、途切れ途切れの返答に本当に大丈夫かと思ってしまう。

多分、今日一番箒とセシリアに狙われたのは小鳥なのではないかと思う。逃げ回っている時は意識していなかったが、セシリアがライフより火力の高いピットで狙っていたのも小鳥だし、箒との接触せつしよく頻度ひんども小鳥の方が高い気がする。

(これって俺の特訓のはずだよなあ……)

本来の特訓の主役より経験値を稼いでいるのはどうなんだろう。

(あー。でも、仕方無いのかな)

小鳥は普段から二人に嫌われている節ふしがある。

セシリアに関しては初対面の時から正論論破せいろんろんぱで印象最悪いんしやうだろうし、箒に關しても昼食の時に叱しかられてから何かと馬があつていとは思えない。

結局は日頃けつぎよくの行いひごろが災わざわいしているのだろう。

「ふうー」

「二夏、お前には無駄な動きが多すぎる。自然体でISを操縦出来るようにならなければ、どれほど練習しても疲れるだけだぞ」

「……頑張ります」

ピットに戻り、展開を解除する一夏。

同時に補助が切れドツ、と増えた疲労感を払い落とそうとため息を落とすと。遠慮えんりよ無く箒からの助言、もといダメ出しが飛び出してきた。

(あー、しかし。無性にシャワー浴びたい)

ISスーツの通気性の良さは流石なのだが、疲れた体にベツタリと

汗が貼り付いていて非常にイヤな感触だ。

本当なら一番風呂、もとい一番シャワーをいただきたいのだが、箒の強い要請で一夏は箒の後、と言うふうになっている上。箒が部活棟のシャワーを使ったがらないので、必ず待ち時間が生まれてしまう。せめてもつてタオルの一つくらい欲しいものだ。

「なあ箒、物は相談なんだけどさ」

「何だ」

「今日、シャワー先に使わせてくれよ。って言うか箒、俺の特訓に付き合っけて良いのか？付き合っけてくれのはありがたい限りだけど、部活で出遅れるぞ？」

「そ、それはお前が気にする様な事ではないだろう・・・それに、こちらの方で出遅れる方が問題だ」

「え？何て？」

「な、何でもない！気にするな」

箒が言い切る。小声で聞こえない部分があったが、本人が何でもないと言うのなら気にするべきではないのだろう。

「一夏っ！」

エア圧式の自動ドアを開け放ちピットに現れたのは、ツイントールセカンド幼なじみこと鈴だった。

「お疲れ、はい、タオルとスポーツドリンク。ぬるめで良かったわよね」

「サンキュ。あー生き返る・・・」

じつとりと肌へばりつく汗をタオルで拭えば気分は幾分良くなると言うものだ。

その上で水分補給のスポーツドリンクが付いているのはありがたいとしか言いようがない。

「まったく。運動後のドリンクがぬるめで良いだなんて、相変わらずジジ臭いわね」

「あのなあ、若い頃から不摂生してたら将来その不摂生が祟るぞー」
「ハイハイ、そう言うところがジジ臭いのよ」

ニヤついた顔で話す鈴の視線。まるで『そんな事はお見通しです

よ』と言わんばかりの台詞回しも相まって、何故か落ち着かなかった。一夏と鈴が最後に顔を合わせたのが中学二年の冬。わずか一年のブランクでしかなかったが、その頃には見られなかった変化に若干の心の揺れを感じる。

「やつぱりさあ、私が居なくて寂しくなかつた？」

「まあな、遊び相手が居なくなるのは大なり小なり寂しいもんだろ」

「いや、そうじゃなくって」

答えが彼女の期待していたものと違っていたと言うのに、なせかそのニヤついた表情は崩れない。

そんな顔をする鈴に覚えがある一夏は、警戒するように告げる。

「一応言つとくが、何も買わないぞ」

その顔は昔、良く解らない映画（確か恋愛系）のペアチケットを売り渡された時の顔に良く似ていた。

……ちなみに、売り渡された物とは言えチケットは高額である。無駄にしないように中学来の親友、五反田弾と一緒に見に行ったのだが、二人してその映画を見るまで恋愛モノだと知らずに居たので、映画館のシアターでは、男女カップルがひしめく中男二人がペア席で居たことで、終始気まずい雰囲気ふんいきが漂ただよっていた。

「アンタねえ……。久しぶりに会った幼なじみなんだから、色々言うこと有るでしょうが」

が、しかしまたもや一夏の予感の外れていたらしい、頭を抱えた鈴は、脱力したように愚痴をこぼす。

言うことと言われても、特に何も思い付かない一夏は、きよとんとした表情で首を傾げるしか出来なかつた。

「ハァー。例えばさあ、」

「ゴホンゴホン！」

箒のわざとらしい咳払いが会話を遮る。

なにかと思つて本人の方を向けば、澄ました顔の箒が話し始めた。

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使つてもいいぞ」

「おお、そりやありがたい」

「では、また後でな」

そう言つてピットの出口へ向かう筈。

それを見送つて視線を戻すと、鈴は明らかに不機嫌な表情になつていた。

一応、顔は笑顔のままなのだが、必死にその表情を崩すまいと意図的に上げられた口角は、どちらかと言うと無理矢理吊り上げているように見えた。

「――。一夏、今のどう言う事？」

.....

呼吸を整え、空を滑るようにしてピットに向かう小鳥は、その途中で愚痴を溢していた。

「つたく、アイツら訓練を口実に腹いせしやがって……。一夏に味方して貰いたいんだったら、少しでもしおらしくなつてりや良いものを」

今日の特訓の内容は八割方ISでのランニングであつた。

時折ピットからの射撃や筈との打ち合いもあつたが、それは筈とセシリアを相手に逃げ回っている最中のほんの少しの出来事に過ぎない。

二人から好かれていない自信はあるが、そもそもこの特訓は一夏の強化にこそある。だと言うのに狙われるのが一夏でなければ特訓の意味も無いだろう。

舌打ちをしながらも、ピットに足を付ける。

「・・・あん？」

ピットに戻り、明日の予定を立てようとした小鳥の目の前には。

口論・・・というより、一方的に鈴音に問い詰められている一夏が居た。

「――いつもは筈がシャワーを最初に使うんだけど、今日は汗だから順番替わつてもらつて」

「しゃしゃしゃ、シャワー!?一夏アンタあの子とどう言う関係なのよ!？」

「どうって・・・幼なじみだけど」

「幼なじみとシャワーが何の関係あんのよ!?!」

どういう話の流れかは知らないが、また話をややこしくしてやがりますよコイツ。そんな心内のため息を他所よそに、二人の会話?は続く。

「ああ、そっか。言つて無かつたつけ。箒と俺、相部屋なんだよ」

「——は?」

「ほら、俺の入学つて、男つて事もあつて一人部屋を用意できなかつたらしくてさ。それで箒と相部屋なんだ」

「そ、それつてあの子と寝食を共にしてるつてこと!?!」

「んー、まあそんなところだな。でも箒で助かつたよ。見知らないヤツが同室だつたら気が散つてロクに眠れないだろうからな」

「.....」

笑う一夏の目前もくぜんには、うつむいて何か覚悟を決めたような表情をする鈴音。

(何か嫌な予感がする)

一夏がこういった天然ジゴロで他人ひとを怒らせた時と言うのは、大抵たいてい面倒な騒動そわどうの種になる。

更に面倒なのは、小鳥が高確率でこれに巻き込まれる事だ。

「どうした?鈴」

鈴音が無言なのに気が付いた一夏が、心配して問いかける。

「——だつたら.....」

「え?なんて?」

「だから!幼なじみだつたら良いワケね!」

「うおっ!?!」

小声で呟つぶやいていた鈴音の言葉を聞き取ろうと近づけていた一夏の頭と、急に顔を上げた鈴音の頭がぶつかりそうになるが。そんな事も気にせず彼女は一人怒り口調で独白し続ける。

「分かつた。分かつたわ.....。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

何を理解したのかは甚はなはだ疑問だが、兎とに角何かを理解したらしい。腕を組んで己の思考を自分で肯定こうていするかのよう一人頷き勝手に納得している。

「一夏っ!」

「おう」

「・・・幼なじみは私もだつて事。覚えていなさいよ」

「いや、そもそも忘れてないけど・・・」

「じゃあ後でね！」

そう言つて自動ドアからピットを走り去る鈴音。

何も理解できていない一夏は、首を傾げてそれを見送る。

一方の一部始終を見ていた小鳥は、

(よし、鈴音が一夏の部屋まで押し掛けるまでは見えた)

これまで『恐らく』が付いていたが、間違いない、鈴音は一夏に気があるようだ。

そして彼女が言いたかつたのは

『箒が一夏と同室なのは幼なじみだからというのなら自分も幼なじみだし同室になつても良いよね』理論。

半分当たつてはいるのだが、間違いなく何かが間違つている気がする。

兎にも角にも面倒臭そうな嫌な予感が当たりそうである。

友人のせいで今日も災難だ。

・・・

午後八時過ぎ、夕飯を食べた一夏と箒は部屋でそれぞれのくつろぎ方で思い思いの過ごし方をしていた。

そんな中で部屋の呼び鈴が無機質な人工音を響かせたのは、一夏が急須から食後の緑茶を淹れるべくキッチンに居た時だった。

茶葉の開き具合を見る必要がある一夏に代わつて、箒がその対応に当たっていたのだが。

「——そんな訳だから部屋替わつてくれない？」

「ふざけるな！何故そんな事を私がせねばならん！」

何か目を離している間に口論になっていた。

「いやあ、篠ノ之さんも男と相部屋なんて嫌でしょ？気を遣つてのんびり出来ないし。その辺、あたしは平気だから替わつてあげようか

なつて思つてさ」

「べ、別に嫌とは言つていないだろう!? それにこれは私と一夏の問題であつて、部外者の貴様に口を挟む義理は無いだろう!」

「だいじょーぶ。あたし一夏と幼なじみだから」

「それは私も同じだ!」と言うより、それが何の理由になる!」

二人の議論は平行線のまま、交わる未来は見えそうにない。

・・・そもそもこの二人の相性と言うのも良いと思えない。

鈴は自分の我を通さねば納得しない性質だし、

箒も自分の信じた事や信念は頑なに守ろうとする頑固な性格だ。

いつか小鳥が言っていたか、話し合いと言うのは折り合いを付ける為にある。しかし、この二人に引き下がると言う発想はそもそも無い。

そんな二人が議論を始めればこうなるのは目に見えた事だろう。

「それに貴様、荷物はどうする。ある程度纏めてまといるようだが、何回か往復する必要があるだろう」

「はん、甘いわね。あたしの荷物はこのポストンバッグで全部よ」

「な、なん・・・だど!」

思わずたじろいでしまうほどの衝撃を受ける箒。

どうやら担いでいるポストンバッグに全ての荷物をまとめここに来ているようだ。

この持ち物の少なさは中学の頃から変わっていないようだ。本人曰く『ポストンバッグさえあればどこでも行ける』らしい。

その意図は不明だが、前にその事を話されいつでも家出が出来るようにか?と聞いた一夏は、本気で怒られている。

「と、に、か、く。今日から私もここで暮らすから」

「ふ、ふざけるな! 出て行け! ここは私の部屋だ!」

『一夏の部屋』でもあるでしょ? じゃあ問題無いじゃん」

と、二人の口論のボルテージが最高潮に達した時。

バスンツ!

「いっ!?!」

「あ痛あ!?!」

箒と鈴の頭が同時に丸めた教科書で叩かれた。

「五月蠅いお前ら」

本を掴んだ両手の持ち主は、左隣の部屋から出てきて不機嫌な顔をしている小鳥だった。

「な、何すんのよ!？」

「こっちの台詞だ、人の部屋の側で騒音を出すな」

そう言った小鳥は、こちらを流し見て溜め息を吐いたと思うと。

「それと鈴音、勝手に部屋を代わるのは規則違反だ。あと俺の迷惑だ、さっさと帰れ」

左手は肩に置き、右手の丸めた教科書を軽く振って、去れのジェスチャーを取る。

が、それで帰るようならこんな事になっていない。鈴は納得していない様子で小鳥に食らい付く。

「アンタは関係無いでしょ。これはあたしと一夏の問題、首突っ込まないですよ」

「関係ならある。俺はコイツの隣人だ」

「それが何の理由になるってのよ!？」

「知っているか鈴音、隣家の騒音ってのは高確率でどこの迷惑防止条例にも引つ掛かるんだぜ?それがどんな理由であっても、他者の迷惑になるなら取り締まられても文句は言えんぞ?」

ギリリ、と長細の目で物理的にも見下す小鳥。

が、しかし。そんなのはどこ吹く風、鈴はマイルールを押し通す姿勢を崩さない。

「だったら、アンタからも説得しなさいよ。篠ノ之さんに一夏の部屋から出てってもらおう説得をさあ」

むしろ小鳥を味方に引き入れようとしている。

その肝の太さ、私の強さに普通なら説得を諦めようとするだろうが。

「それをするつもりは無い、俺は正しくお前にここから去ってもらう間違った正論を味方に付けた小鳥は恐ろしく強い。」

セシリアに対してぐうの音も出ない論破をするくらいには。

「だったら五分くらい部屋で待ってなさい！すぐにカタ付けてあげるから」

「その間また騒がしくなるだろうが」

はあ、と珍しく溜め息を吐く小鳥。

それを諦めさせる好機と取った鈴は畳み掛けるように話を続ける。

「ほら、さっさと戻りなさいすぐに終わらせて・・・」

だが、その台詞は小鳥の恐ろしく冷たい口調で遮られた。

「まだ自分の立場が判っていないようだな」

(あ、とどめ刺すつもりだ)

こういう冷たい口調で小鳥が話し始めた時は、会話ではなく、本格的な論破に入った合図だ。

右手の教科書を無造作に廊下に落とすと。その手でズボンのポケットに入れ携帯を取り出し、その画面を見せつけた。

見ると、その携帯は既に起動状態になっていて、とある人物の携帯に繋がるであろう画面がそこにあつた。

「呼ぶぞ」

言葉にして一言、字数にして三文字。

しかし、その言葉が意味する所は誰にでも理解できた。

携帯の画面にはデカデカと織斑誰もか恐れるスパーレディ千冬の名前があつた。

小鳥の親指は見せつけた携帯の通話ボタンの上に乗せられ、それを離すだけで千冬に連絡が行くようになっていた。

「ぐ・・・ッー」

半ば脅迫のような説得に二の句が継げなくなる鈴。

鈴は昔から千冬姉を怖れ、畏れていた。

いや、そうでなくともこの場で、この状況で千冬姉を呼ばれるとなると、制裁を食らうのは間違いなく鈴だ。

「この卑怯者・・・！」

「おうおう、何とでも言いたまえ。それでこの手段を止めるように見えるか？」

そう言う小鳥の顔は愉悦に歪み、正しい事をしている筈の小鳥が悪

役に見える。

きつと状況を知らない人間がこれを見れば、十中八九小鳥が悪い人間に見える事だろう。

と、苦境に立たされていた鈴が何か小さな声で呟いた。

「…………お、」

「おっ」

それを気持ち悪い満面の笑みで聞き返す小鳥。

完全に鈴で遊んでいる。

「覚えてなさいよー!!!」

言うが早いか、小鳥から回れ右した鈴は猛ダツシユで廊下を駆け抜けていった。

種明（たねあ）かすと挑戦（トライアル） 1 / 2

鈴音が一夏の部屋を奪取しようと、部屋に押し掛け、騒動が起きてから一夜。

「・・・なあ小鳥」

「どうした？」

騒動の原因（自覚無し）と小鳥は、珍しく二人だけで朝飯を食べていた。

一夏が一度箸を置いて問い掛けたのに対し、小鳥はからし蓮根を頬張りながら答える。

「小鳥さ、昨日千冬姉に電話掛けるって脅しかけてたけどさ。あれいつ手に入れてたんだ？」

先日、鈴音を撃退する為に用意した小道具。

IS学園の人間で織斑千冬の名前を出されて退かない者は居るまゝと用意していた物だった。

「ああ、あれか・・・。あれは、ハツタリだ」

さらっと、言い流す。

それを聞いた一夏は、何か期待外れの答えを聞かされたような顔をする。

「何だ、結局あれ千冬姉と繋がんねえのか」

「そりやそうだ。俺と千冬先生の間は何が有る？何も有るまい。あれは、寮監の事務室と繋がる番号だ」

ある意味千冬と繋がる番号でもある為、嘘は言っていない。

後はその名前を『寮監事務』から『織斑千冬』に変更すれば（確率で）織斑千冬に繋がる（かもしれない）電話番号の完成である。

それを聞いた一夏は、感服すると同時に呆れ顔を浮かべた。

「ホントお前、悪知恵働くよな」

「予防策を二重三重に張ってるって言え、人間きの悪い」

そもそも、一夏の察しが良ければあんな事は起こらなかった筈である。悪口を言われる云われは無い。

もしかしたら自分ほとんどでもない鈍感ジゴロ唐変木野郎と友人関

係にあるのかも知れない。と、心内で舌を打つ、まるで創作物上の冗談みたいな本人はそんな気も知らずに焼きジャケをご飯と共に口に入れる。

「そーいや箒の奴はどうした？アイツがお前の隣に居ないとは珍しい」

先日まで忠犬みたいな姿勢で何かと一夏の後を着けていた箒の姿が無い。

十中八九一夏に気がある箒の事だ、隣人がそうである以上、共に居れる時間を逃すとは思えないが。

「ああ、なんでも部活の朝練らしい。これ以上休んでたら部から除名するぞ、って脅されたんだってさ」

「ったく・・・お前の言う通りになつたな」

一夏が前々から危惧していた事だが、箒は剣道部の修練を放置して一夏の特訓に付き合っていたらしく、とうとうそのツケが回っていたらしい。

彼女の不在の理由が彼女自身の身から出た錆だと言うことを知り、拍子抜けした小鳥は、毒づく感想だけを述べる。

(この唐変木は気付いちやいねえが、今日は女子からの視線が多い。自分がチャンスであることを知っていやがる)

その虎視眈々とした視線を浴び続け、本当なら舌打ちの一つくらい打ちたいほどストレスが貯まっている訳だが、それで止める訳でもないだろう。

不機嫌さを隠し、飯を口に運び味噌汁で一息で流し込む。

「つと、ごちそーさん。先に教室行つとくぞ」

「おう。じゃあ教室でな」

適当に手を振って食堂から出ていく。

後ろの一夏がどんな表情をしているかは知らないが、一夏も自分の表情を知る事はないだろう。

チツ、と。周りに聞こえる程盛大に舌打ちする。きつと今、自分の顔は悪い表情をしている事だろう。

.....

教室棟へ向かうべく、寮棟から出て来た小鳥は、生徒用玄関の奥で小さな人だかりが出来ているのを見つけた。

それは、廊下の掲示板に貼られた大きな紙に集まっているように見える。

「・・・なんだ？」

誘われたように人だかりの外側にまでやって来た小鳥は、半開きの目で紙を見上げそのタイトルを読む。

『クラス代表対抗戦日程表』と書かれたその意味を冷静に読み取った小鳥は、左から軽く流し見ていく。

三年ブロック、二年ブロック、一年ブロック。小鳥の目的の物は、程なくして最も右に見つかった。

それは小鳥の級友にしてクラス代表、織斑一夏の対戦表である。

小鳥は一組の副代表であり、一夏のサポート役であることから、その対戦カードを注視しない訳にも行かない。

だが、それを見た時小鳥は愕然とした。

「・・・おいおい、昨日の今日でそれって・・・マジかよ・・・！」
声は小さいものの、それを見た小鳥の声は驚愕に揺れている。

一年生ブロック一回戦、その対戦は。

1—1：織斑一夏 対 1—2：鳳鈴音

まさかの 押し掛けVS家主 だった

.....

その日の放課後より小鳥の情報収集が始まった。

前回ブルー・ティアーズの情報を入手した時と同様、裏アカウントを利用した学園のデータベースへのアクセスはもちろんの事。

外部のネットワークを利用した個体の特定。

鈴音がアリーナで訓練をしようのなら、一夏を放つぽいてその様子を見に行く事もあった。

ただ、その一連の情報収集を見た幾人かの女子から『小鳥は鈴音に気がある』と言う旨の噂を流されたときは、副代表だなんて辞めてしまおうかと考えることもあったが。

「それなりに、集まって来たがねえ・・・」

一週間と二日が経ち、自室のベッドの上で胡座をかき、紙に書いた途中経過を振り返る。

集まった情報は三つ

1. ISのざっくりとした概要
2. 基本性能
3. 単一仕様の売り文句

1. 鈴音の専用機の名は甲龍。

・人類革新連盟の連盟国の一つである中国の第三世代型IS。

・機体コンセプトは『安定した挙動と性能』『長時間の稼働』の二つ。

2. 基本性能は『第二世代に毛が生えた』と言った所。

・コンセプトがコンセプト故に、量産性や安定性を重視した設計を持つ。

・単一仕様を使う事に特化した機体ではなく、『第二世代機に第

三世代兵装を装備した』と言うのが実情。

3. 問題の第三世代兵装。

・・・・余り情報が集まっていない。

・名称は『衝撃砲』

・上記のメカニズム。

↓空間その物に圧力をかけ、眼に見えない砲身を形成。その空間の歪み値の差による衝撃を砲弾として撃ち込む。

・・・・

「んあー・・・なくそ。・・・後少しなんだがなあ」

勢い良く腕を振り上げ、背を伸ばす。

そのままベッドに仰向けになり、天井を見上げた。

この衝撃砲こそが勝敗を別つ鍵になるのは間違いない。小鳥はこれを『超強い空気砲』として捉えているが、果たしてそれが正解なのか。

「——実物を見ない事には、話にならない」

仮にそれが正解だったとしても、実際に甲龍に搭載されている衝撃砲が如何程の威力、弾速なのか。そればかりは実物を見ない事には判別がつかない。

しかも代表戦を意識しているのか、一応毎日アリーナに来て特訓はしているが、全く衝撃砲を使おうとしないのだ。

基本的に対策と言う物は情報が有ってからこそ。だと言うのに情報が無ければ策もへったくれもない。

「——お手上げて事にしたくはないな」

これは自分の仕事である。背負わされた物であれ何であれ、一度始めた仕事だ。『出来ませんでした』だなどと言って投げ出したくもない。

そもそも、そんな事をすれば鈴音との情報戦に負けた気がして正直癩だ。

「オドリ、何かあったのか？」

「ん？いや、お前の心配する事じゃない」

ベッドの上で紙資料をバラ蒔き、仰向けに寝転がっていた小鳥に、同室の刹那が声を掛ける。

いつもなら就寝の時間である11:30に、小鳥はこう言う事はせず、むしろいつだって刹那より先に床に就いているのだ。

「そうか」

そう言つて、窓の近いベッドに横になる刹那。

最近気づいたのだが、刹那と言う少年は世間一般的からは『素っ気ない』もしくは『淡泊』な性格をしている。

最初は過去が無い故に世界に戸惑っているのかとも思ったが、そうでもないらしい。

とは言え冷淡と言うほどでもなく、押せば返すし、押さねば返さないと言うだけの話である。

「こちらから押せば返してくれるし、『聞くな』『言うな』と言えば従順にに応じてくれる。」

馴れ合いが苦手な小鳥にとってはそう言った性格の刹那は接しや
すい人間だった。

「なあ刹那」

「何だ」

ピロートークはしない主義だが、行き詰まった現状の打開に期待を
込め、刹那に問い掛ける。

「もし、お前が欲しい情報を所有している奴が居るとして、だ。お前が
それを手に入れる為に、お前は どうする?」

「何らかの手段で相手に詰め寄り、開示を迫る」

「物騒だなオイ」

即答であった。

一番早い手ではあるが、実行の憚られる手段の提示に苦笑いを浮か
べる他なんともし難い。

「——まあ、一応聞いてくが、そうした方が良い理由は?」

「話し合いでは時間がかかり過ぎる。最終的にそうなるのなら、そう
する方が良い……それに、」

「それに?」

「ISの情報なら、ぶつかった方が早い」

「成る程……。OK、参考になった」

そう言って手作り小型ノートパソコンを取り、丁寧に両手で閉じ
る。

机の上にあるこれまたお手製の充電ポットに置いた小鳥は、すぐ側
の照明スイッチに手を掛ける。

「じゃ、電気落とすぜ」

「ああ」

「お休みー」

パチン、と小気味良い音と共に部屋に暗闇が訪れる。

微かに見えるベッドに潜り込んだ小鳥は、その中で刹那と背中合わせ
になる。

(さあつて・・・考えるのは止めにしようや)
誰もが眠ろうと暗闇に眼を瞑る中、小鳥遊は悪巧みに笑顔を浮かべていた。

.....

「——よっ」

「小鳥・・・アンタ何でここに！」

クラス代表対抗戦の対戦カードが発表されてから六日、いつものようにアリーナに来ていた鈴音の前に、一組の副代表にして一夏の参謀。小鳥遊がそこに居た。

黒と銀に彩られた銀影を身に纏い、空を浮く小鳥は、親しい友人に久し振りにあったように軽い調子で声を掛ける。

先日煮え湯を飲まされている鈴音は、警戒心丸出しで問い掛ける。

「アンタ、何しにここに来たのよ!？」

「あー何。力試しだよ、これ迄までもにタイマンの経験してねえからな。俺自身の今の『位置』ってヤツを知りたいのさ」

何の事も無く、当然の事のように告げる小鳥。

しかし、次の瞬間には凶悪な笑みを見せて、

「それと、今話題の中国代表が一体どれ程の者か、それも知りたくてなあ」

「は？何、私を試そうっての？」

その台詞を挑発と受け取った鈴音は、喧嘩腰で聞き返す。

「言っただろう？力試しだと。何も、これで解るのは俺の『位置』だけじゃない、一石二鳥だとは思わないか？」

「はっ！アンタなんかにあたしが測れるかっての。実力の半分でコテンパンにしてやるわよー！」

「ほう？それは俺の挑戦を受けると言うことで良いんだな？」

「ええ、ええ。アンタこそ、吐いた唾飲むんじゃないわよ？」

「せんせんふこく
宣戦布告を受け取った鈴音。」

小鳥は歪めた口角を最大限に吊り上げて笑う。

「当然だ。俺は嘘は吐かない主義なんでね」

「へえ、あたしに見せた千冬さんの電話番号は嘘だったの？」

「どうやらこの九日間の内に小鳥の見せた電話番号がハツタリである事がバレたようだ。」

苦笑いを浮かべながらも、小鳥はヘラヘラと言いつ返す。

「オイオイ。言い掛かりも良い加減にしてもらいたい所だな、あれは確かに千冬先生に必ず掛かる物じゃないが、一応千冬先生に掛かる可能性はあるから間違ってもないぞ」

「そー言うのは誇大表現つて言うのよ！」

「クツクツク・・・その通りだな。だがあの電話番号に掛けりや遅かれ早かれお前はあの場から追い出されてたんだ。むしろ良かったじゃないか、本当に先生に怒られなくて」

「本つ当にああ言えはこう言う・・・ッ！」

喉を鳴らして欺瞞を肯定する小鳥に、もう話にならないと確信した鈴音は、怒りを溜め息で吐き出して二振りの青竜刀を喚び出す。

「・・・もういいわ。アンタとは話にならないし、直接ボッコボコにしてやるわよ」

「やっそこさ理解したか」

自分の挑発に乗る鈴音に、しめた、と嗤う。

「どうも、鳳 鈴音と言う人間は真つ直ぐで煽り耐性が低いらしい。」

「弄り甲斐のある玩具を見つけた小鳥は、今後の愉しみを思いながらバックパツクのダブルブレード『アイアス』を抜き、左の方を前に突きだし、右を肩に担ぐ構えを取る。」

「言つとくけど、あたし、強いわよ」

「そうかい、なら戦い甲斐が、あるつてモンだッ！」

「言うが速いか、スラスターを全力で吹かし、鈴音に突撃する。」

「直剣と青竜刀がぶつかり、火花が散る。」

「左の剣で青竜刀をがち上げるように切り上げた小鳥は、さらに低い軌道で鈴音の身体を狙う。」

「ぐッ！」

「大振りの一撃を左の刀で受けた鈴音は、後退して距離を取る。」

「オラオラア！休めると思うなよ！」

小鳥は更に接近し追撃を謀る。

二振りの青竜刀を柄で連結、両刃の偃月刀とした鈴音はそれで迎え撃つ。

振り下ろす右の剣は頭の上で偃月刀の柄で止められるが、すぐさま横一閃、左の剣を振り抜く。

「こん、なるー！」

「ガッ……！」

前蹴りで小鳥を遠ざけ、横の斬撃を躲す鈴音。

鳩尾にキツイ一発を貰い、軽くえずく。

しかし、正直に体勢を整えている場合ではない。

「はあっ！」

「うおっ！」

相手は近、中距離戦を得意としている機体である。空中で転がるようにして横を向いた小鳥は、間髪容れず、左へと走る。

次の瞬間には、小鳥が居た場所に鈴音が偃月刀で斬りかかっていた。

「んなろ……ッ！」

後ろを向いて全力後退しながらアイアスのビームライフルと腕部バルカンをバラ蒔き、鈴音をその場に押し留める。

狙いもせず撃った数々のビームは、ほとんどが当たらず空に散るだけだが、何せ六門の一斉砲火だ。母数が多く、時折当たる一発一発がじわじわと鈴音のシールドエネルギーを削る。

「ああもう、鬱陶しい！」

バックステップで一気に距離を取った鈴音。

「——来るかッ！」

この距離で彼女が攻撃する為には件の衝撃砲しか手段は無い。すぐにも躲せるよう身構えつつ、しかし射撃は止めない。

「喰らえ！衝撃砲！」

甲龍の肩アーマーがバシヤリと開き、エネルギーが集中しているであろう、赤熱化した内部が外界に晒される。

エネルギーの上昇具合から砲撃が発射された事を把握する小鳥は、それを避けようとして

見えない衝撃に顔をブン殴られた。

「ガ、つア・・・!?」

ミシリ、と軋む頬骨。

一拍遅れて停止慣性の働きの力点に殺され、顔を起点に小鳥の身体が吹き飛んだ。

(く・・・そ！思ったより弾速も威力も高い！)

吹き飛びながらも鈴音の方を睨み、次の一撃を警戒する。

しかし、鈴音は追撃をしてこない。

どうやら次弾装填までに少しばかりタイムラグが生ずるようで、心身宙返りで体勢を建て直した時点で衝撃砲の追撃が放たれる。

(ラグがあるつつつたって、コイツは・・・！)

アイアスを合体させる隙も無い。

二振りの剣を交差させ身構える小鳥は、またもや衝撃を正面から受け止める事となる。

「ぐっ・・・うー！」

銀影の出力の高いPICでも相殺出来ない威力の攻撃に、後ろへ押し退けられる。

先の直撃と今の防御でシールドエネルギーがかなり削られた。

これ以上の命中は不味い。鈴音を中心に時計回りを描いて飛び始める。

(コイツはやバイ。思った以上に完成度が高え！)

正直見くびっていた。どうやら虎の子の第三世代兵装だと思っていたそれは、既に成獣と化していたようだ。

考え直してみると、IS学園に満を持して送り出すISがお粗末物だなどと、あり得る訳が無い。そもそもあの中国が遅ればせながら出してきた代物だ。あの中国が。

見栄と虚勢が服を着けて歩いているようなあの国が、中途半端な機体を実用させるとは思わない。ハイそこJ-20は？とか言わない。

(兎に角コイツは動き続けるしかねえ！)

クールタイムはおおよそ二秒。

二門の砲塔から交互に放たれる砲弾。チャージから予測できる発射タイミングを元に不可視の攻撃を必死に回避し続ける。

「ホラホラー・さつきまでの威勢はどこ行つたのかしら?!」

「うっせえー言つてろ！」

カタログスペックを信用するなら、甲龍の通常、瞬間最大速は共に銀影以下。追い付かれる事はあるまい。とは言え、このままではジリ貧だ。

どうも鈴音自身のスペックが高い。格闘戦のセンスもさることながら、甲龍の衝撃砲を利用した中、遠距離戦も卒無くこなしている。考えてもどうしようも無いと腹を括つて考えるのを止めた訳だが、流石に考えなさ過ぎた。

甲龍の完成度もさることながら、パイロットの鈴音がその武器の能力値を完全に引き出している。

「つたく・・・凄いな奴だよ」

面倒臭いほど弱点の少ない相手がここまで厄介な敵になるとは思わなかった。

(とは言え・・・やられっぱなしも性にあわんな)

小鳥の本来の目的は衝撃砲のデータを録る事にあるので、別に負けて痛む腹は無い。

が、しかし。かと言って只々何もせずにはボコられて負けると言うのも、負けず嫌いな小鳥にとつては考えがたい結論だった。

ならば勝利に至る為のルートを探るまでだ。
総合的な能力値で劣る小鳥が鈴音を下す為に必要なのは、壁を越える力ではなく、破る力だ。

それを可能にするには総合能力ではなく、一部の突出した能力を最も有効的に活用せねばならない。

小鳥は回避を繰り返し、動き続けながら頭を回す。

(俺が鈴音に対して取れるマウントは二つ・・・。機動力と防御力)
銀影は、本体の機動力、"アイアス"の防御力の二つの点で甲龍を

上回る。

(ま、それ以外は甲龍シエンロンの方が上回ってんだよなあ)

60%の完成度とは言え世知辛い事である。

とは言え長所ちようしよは長所ちようしよだ、戦術せんじゆつを考え始める。

……こうやって動き回りながら考える事が出来るようになってるのがセシリアと箒はらが追いかけ回してくれた成果せいかだと言うべきなのだろうか。

(――考えんどこ)

それについては考えた所で栓せんの無い話だ。

気を取り直して。

鈴音に攻撃を行う為にはあの衝撃砲くわくを潜り抜ける必要がある。

さて、あの段幕だんまくをどうやって潜り抜けるかだ。

1. 普通に回避しながら接近する。

2. 被弾覚悟ひだんかくごで突っ込む。

3. 近接戦あきちは諦めて遠距離戦いとを挑む。

(……まあ、1は無理。3は出来るけどほぼ勝ち目無し。

2が一番妥当だとうかな)

幸いこちらには「アイアス」と言う、エネルギーを拡散させる楯たてがある。

衝撃砲の砲弾が空間歪曲くうかんわいきよくを利用したエネルギー体であるのなら、

銀影からすれば絶好ぜつこうの好餌こうえに他ほかならない。

(一発、かましてやるか)

種明（たねあ） かしと挑戦（トライアル） 2 / 2

「――二組の代表が・・・」

「え？本当」

「うん、なんでも第三アリーナで・・・」

「第四アリーナで特訓に来ていた一夏とセシリア。（箒は例によって剣道部に行っている）」

アリーナのピットの入口に手をかけようとしていた一夏の耳に、遠くから女子の話し声が聞こえた。

「二組の代表？鈴の事か？」

「どうやら鈴が隣のアリーナを使って模擬戦を行っているらしい。」

「あら、気になりますの？」

「ああ、リーグマッチの一回戦の相手は鈴だろ？・・・見に行った方が良いのかな？」

鈴とは勝手知ったる仲だが、IS乗りとしての鈴を一夏は知らない。

模擬戦をやっているのなら丁度良い、鈴がどんな力量の持ち主なのか、見に行くのも良いだろう。

小鳥が最近特訓に付き合わないのも、鈴のISの情報を集めているかららしく。この二週間近く、晩飯以外で放課後に小鳥の顔を見た覚えがない。

多分に小鳥も居るだろうが、やはり自分の目で見ておくのも重要だろう。

「うーん・・・セシリアはどうした方が良いと思う？やっぱり、操縦の特訓した方が良いか？」

「え!?えくつと。そうですね・・・やはり敵情視察は必要ですし一夏さんが見に行く必要があると思うのなら見に行くべきですわ」

「じゃあ見に行くか」

特訓をやらないのは勿体無いと思うが、ここの所毎日が特訓である。息抜きに人の訓練をみるのも良いかもしれない。

.....

一夏とセシリアが第三アリーナに着いた時、その模擬戦はこれ以上に無いほど白熱はくねつしていた。

鈴は逃げ回る相手を追いかけているが、目に見えない砲弾を放ち、アリーナのエネルギーフィールドを揺らす。

「おわっ、……とと。何なんだアレ？」

目に見えぬ砲撃の衝撃で足元を揺さぶられ、足元のおぼつかない一夏がセシリアに問う。

「あれは……。恐らく『衝撃砲』ですわね」
「衝撃砲？」

「はい。空間その物に圧力をかけて砲身を生成、余剰で発生する衝撃それ自体を砲弾として撃ち出す。ブルー・ティーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

（……ごめん、すごい丁寧ていねいに説明してもらってるのに何言ってるかさっぱり解らん）

口では『ふーん』と解ったような相づちを打つてみせるが。専門用語……ではないにしても、仕組みだけを丁寧に説明されても全くと言って良いほど理解できず、首を傾げる他やることはない。

と言うより、それよりも気になる事が一つ。

「……って、何で小鳥が戦っているんだ？」

見れば対戦相手はクラス副代表小鳥 遊であった。

「こらあ待ちなさい！人を煽あおつたならちやんと戦いなさい！」

「待ってって言われて待つ奴やつが居るかよ……」

経緯けいゐは分からないが、怒り肩がたの鈴を見るにどうやら小鳥が煽り立てたようだ。

やれやれと言ったような表情で愚痴ぐちを溢こぼす小鳥の片手には、合体して一本の大剣となった『アイアス』が握にぎられていた。

「なるほど確かに、そうするのがあのの人にとっては最適解さいてきかいですわね」

「？ どう言う事だ？」

問われたセシリアは、真剣しんけんな眼差まなざしで戦闘を見ながら、その問いに

答える。

「銀影には、電子、重力、音波、熱量等のエネルギーの指向性を拡散させるフィールドがあるようです。前にブルー・ティアーズのミサイルを受けた時に無傷だったのも、爆発のエネルギーを拡散させたからですわね」

「……………それって、もしかして無敵?」

拡散フィールドを常に展開していれば、どんな武器もいなしてしまえそうな気がするが。

「どうでしょう、見たところフィールドの発器官は大剣状態の『アイアス』だけのようですし。それを除いても弱点が無いと言うのはありえないのでは?」

確かに、千冬姉から『攻撃系最強』のお墨付きをもらっている零落白夜には『シールドエネルギーから優先的にエネルギーをぶんどる』と言う弱点、もとい欠陥がある。

聞いた限り小鳥のフィールドも同じくらい力があるようだし、代償が無いとは思えない。

「おつ、反撃に移るみたいだぞ」

そう言う一夏の視線の先には、急激な方向転換で鈴に襲い掛かる小鳥が居た。

……………

「こらあ待ちなさい!人を煽つたならちやんと戦いなさい!」

「待ってって言われて待つ奴が居るかよ…………」

逃げる小鳥を追う鈴音、衝撃砲をバカスカと連射し、自らに詰め寄る鈴音の激昂に呆れたような声音で答える小鳥。

しかしその一方で、小鳥の心の内では悪巧みが渦巻いていた。

(とは言え、釣れた事は釣れた訳だ。後は仕掛けるタイミングだな)

本当は数分前から鈴音に対する策は考えついていたものの。その策に対して反撃を食らう事態を避ける為、鈴音が近接戦を行うまで回避に全力を振っていたのだ。

「おっと、危ない」

横へスライドするように衝撃砲の砲弾を躲す。相手を追いかけるからこれ程の射撃精度とは恐れ入る。

（つたく．．．．．どうしたもんかねえ）

四合ほど刃を交えた辺りでその実力が己より上だと把握していたつもりだが、中々どうして勝ちにくい。

「．．．．．ん？」

ふと、人の多くなって来た観客席に目をやると、そこに一夏とセシリアが居た。

「一夏じゃん、何しに来てんだ？」

二人は今日も特訓に行っている筈である。

その二人がここに来ている、と言うことはこの模擬戦が結構な噂になっっているのだろう。

まったく、女子の噂と言うのは風のごとく広がる物だ。

と、心の中で一人ごちていると、

「．．．．．？」

衝撃砲が来ない。

先ほどまでバカスカ撃ってきていた鈴音の衝撃砲が止んだ．．．．．訳ではないが、明らかにその頻度が落ちてきている。

「．．．．．！（ニヤア）」

チャアアンス！

間違い無い、衝撃砲を撃つ為のエネルギーが残り少ないのだ。

となれば話は早い、心を落ち着かせ、身体とスラスターの制御に集中する。

（スラスター、PIC系統は俺の随意下に置き、制御を半手動で行う！出来ねえとは言わせねえぞ！）

バイザーに映される情報を整理しつつ、手動で調整を始める。

「軌道修正、速度同調、事象予測ヨシ、保護機能カット、PIC出力ベクトル巡行から全逆転．．．タイミング、今！」

走り幅跳びの着地のような姿勢で足のスラスターを全力で吹かし、ブレーキをかけ、姿勢を反転させる。

「んががががががが・・・！」

セシリアのビットを回避したあの時より、遥かに強いGを受け、慣性の圧力に悶える。

「瞬間加速ッ！」

しかし、その苦悶を乗り越え、大剣を前に突き出して打突を繰り返した。

「ッ、嘘でしょ!？」

全速力からの急激な180。反転でさえ無茶な挙動だと言うのに、その上で瞬間加速を行うと言う無茶の重ね塗りである。下手をすれば骨の一つや二つにヒビが入りかねない行為だ。

「うオオオオオ！」

「でもね！」

小鳥の無茶な動きに驚いた鈴音ではあるが、反射的に速度を緩め、小鳥に標準を合わせる。

確かに、小鳥の予想通り衝撃砲に使えるエネルギーは僅かしかないが、それでも全く使えない訳ではなく。最大出力五発分は残っている。

(それくらい対応できなきや候補生なんてなれないの、よっ！)

エネルギーは既に装填している。後はそれを解放するだけで、小鳥のシールドエネルギーは底を突くだろう。

「喰らえッ！」

「・・・！！！」

放たれた衝撃砲は、一直線に小鳥の銀影へ向かい、炸裂・・・

「あれ!？」

してない、確かにこのタイミングなら小鳥に着弾する筈なのに。

「喰らえやア！」

勢いそのままに突き出す小鳥。

対処が間に合わず、鈴音はその刃をモロに受け入れるしかない。

「ぐう・・・！」

絶対防御があると言えども、衝撃を完全に殺す事までは叶わない。

鳩尾みぞおちに牙突がとつを受け軽くえずき、後退した鈴音は小鳥を睨にらむ。

「アンタ、一体何を・・・!」

信じられなかった、あの衝撃砲は間違いなく直撃コースだった。だと言うのに小鳥には何のダメージも無く、カウンターを食らっているのは鈴音の方だった。

「さーて、何をしたんでしょうかねえ?」

そう言う小鳥の後ろ側、グラウンドの土が二つの地点で舞い上がっていた。

恐らくは先の衝撃砲がグラウンドに着弾したのだろう。

(・・・着弾点が、二つ?)

そこで気付いた。鈴音が放った衝撃砲は一発、着弾点が二つと言うのは可笑おかしい。

「アンタ、まさか衝撃砲の砲弾を・・・叩たたき切きったって言うの!?!」

「へえ、察さつしが良いな。その通りだファン 鈴音リンイン」

小鳥は笑うが、鈴音は信じられないと言った表情を見せる。

衝撃砲は確かに実体弾じつたいだんではないが、強力な兵器なのは違ちがい。よしんば仮かりに剣を当てられたとしても、接触しゅんかんした瞬間に砲弾は空間圧くうかんあつの歪ゆがみにより炸裂さくれつする、両断りやうだんなど到底とうてい考えられない事だ。

驚愕きやうがくに瞳ひとみを揺ゆらす鈴音を前まへにして小鳥は上機嫌じやうきげんだ。

「俺の銀影はこれでも第三世代機でなあ」

誇こほらしげに大剣を掲げ、笑いながら話し始める小鳥。

「単ワン一仕様オファビリテヤーは『エネルギーの拡散』質量を除くほぼ全てのエネルギーの方向性を拡散させる能力。つまり、お前の衝撃砲やビーム兵器は俺にとつては格好かっこうの餌食えじきなんだよ」

右肩みぎかたに剣を預あずけ、得意気に語る小鳥。

衝撃砲の捌さばき方と言うのは、とーっても簡単。

1. まず大剣状態のアイアスを用意します。
2. 次に衝撃砲の砲弾とアイアスを接触させます。

↓ここでワンポイント『相手は必ずこちらを狙って撃ってきますが、失敗した時のダメージは恐れずにアイアスを振るいきましょう』

3. 後はアイアスのエネルギー拡散フィールドが勝手に砲弾を切

り裂いてくれます。

↓ 衝撃砲の炸裂を不安に思うかもしれないがご安心を。拡散
フィールドは自動制御なら全ての方向へ均一に散らすので、
空間圧縮のバランスを乱すことが無く、お任せでスパッと切れるの
です。

「ま、そんな訳で。こつからは一方的な展開は期待するなよ！」
言うが早いか、大剣を上段に構えた小鳥は、再度瞬間加速で接近
する。
両刃の偃月刀で防いだ鈴音は、受けた刃とは逆の刃を小鳥に振り下ろ
す。

小鳥も即座に大剣を横にずらし、偃月刀を受け止める。

偃月刀を受け止められた鈴音は、続けざまに右足の蹴りを繰り出す
が、瞬間的にPICをカットした小鳥が下方に身を置く事でそれを躲
す。

下に転位した小鳥に向けて衝撃砲をマシンガンのように連射モ
ドで打ち込むが、それもまたアイアスに防がれる。

「はああー！」

「無駄だと言ったのが解んねえのか！」

しかし、防御に回って身動きの取れない事を利用し、鈴音は距離を
詰め己が得物を振るう。

「ちッー！」

「あたしの武器は衝撃砲だけじゃ無いってえ、の！」

甲龍のマニピレーターが高速回転を始め、捕まれた偃月刀もまた
高速回転を始める。

小鳥に向けて換気扇のように回転する刃が迫る。
モロに受ける訳にはいかない。大剣を振り上げ刃と刃を重ねるが、
刃の形状と運動の方向性が相まって、小鳥の剣は上にかち上げられ
る。

「ぐウっー！」

「まだまだ行くわよー！」

繰り返し振り下ろされる高速の刃、苦し紛れに剣を返す小鳥だが、その度に大剣は弾かれ首の皮一枚を繋げるのが精一杯だ。

弾かれる度に開く距離、得意気な鈴音の表情、苦しさを隠さない小鳥の表情、そのそれぞれが鈴音にとっては好ましく、小鳥にとって好ましくない状況を表していた……。

……数分後……

「——あのヤロウほぼゼロ距離で衝撃砲バカスカうちよってからに……」

戦闘開始から数十分後、ピットに戻った小鳥がいの一番に口にした言葉は、そんな悪態の台詞だった。

一時は鈴音の衝撃砲を攻略せしめた小鳥だが、結局はエネルギーの拡散が出来るのは楯だけだ。それを見抜いた鈴音が小鳥に対し付かず離れずの距離を保ち続け、インファイトを仕掛けてきたのだ。

結局、結末としては二振りに戻された双天牙月によってアイアスが取り上げられ、後はほぼゼロ距離で衝撃砲を乱射され、小鳥の敗北で決着がついた。

お陰様、銀影のアーマーは所々がへこみ、小鳥自身にも軽い痣が散見される。

「はあ、『直す』つつても、タダじゃねえしな……」

肩アーマーに目をやり、ため息を吐く小鳥。

奇跡的に『眼』ような光学センサーに被害は無いが、その装甲には少なくないへこみがあり、戦闘の激しさをもの語っていた。

小鳥自身、鈴音の、甲龍のスペックを見定めるにあたって機体ダメージは必要経費だと思っていたが、この手のへこみ傷は考えていなかった。

「斬られた撃たれたの傷だったら余計なの削って補修材吹きかけりや済むがへこみ傷はなあ……」

斬り傷や弾痕等の傷は装甲の一部が無くなっている為、補修材で傷

を埋めても相殺される為、重量やらに違いは出ないが。へコミと言うのは質が悪く、本来の装甲が沈み込んでいる為、補修材で傷を埋めた場合、補修材の重量が丸々プラスされる他。材質的な強度、硬度の差によって受けたダメージが歪に拡散して、最悪パーツが丸々一つオシヤカになってしまう。

と、なつてくると。ISの自己修復でへコミが埋まるのを待つか、へこんだパーツを入れ換える必要がある。

「・・・パーツ換装は手間もカネもかかるしなあ」

小鳥は専用機持ちではあるが、どこかの支援を受けている訳ではない。一応は持倉技研に予備パーツはあるだろうしIS学園側でいくら支払ってくれるだろうが、それでも小鳥に何の出費も無いとは考えられない。

その上、手続きの手間も考えるとパーツの入れ換えは正直やりたくない。

「仕方無い」

そう言った小鳥は、ピットの固定機に銀影を固定させると、一人銀影から跳び降り、こう続けた。

「作るか、予備パーツ」

肩のセンサーカバーや、スラスタノズルのような精密なパーツの方は自己修復に任せるとして。腕部アーマーや胸部の可動パーツは自分でも作れる。

面倒臭い事になったと言いたげな声音とは裏腹に、久方ぶりに機械弄りが出来ると晴れやかな表情だった。

他者（たしや）の為（ため）の策（さく）

小鳥と鈴の模擬戦から三日が経ち。その日まで四日と言うこともあつて、校内はクラス代表対抗戦の話題で持ちきりだった。そのクラス代表の一人である一夏は、放課後の特訓を行うべく、箒、セシリアと一緒に、夕焼けに染まる廊下を抜け、第三アリーナに向かつていた。

いつもならそこに小鳥が居るはずだが、どうやら鈴から受けたダメージが響いているらしい。『今日は整備室でやる事が有る』と言って特訓に付き合うのを断っていた。

「来週のクラス代表対抗戦に合わせてアリーナの調整がされるから、訓練は今日で最後だな」

薄く緊張感を帯びた声音で話しかけて来る箒。

学園生活が始まってから一ヶ月が経ち、女子生徒のテンションも落ち着いてきたのだろう、箒達と一緒に歩いていても好奇の眼で見られる事も無くなって来たし、毎度のような質問責めも無くなっていく。

「IS操縦も様になってきたのだ、完勝を期待しているぞ」
いきなりハードルの高い期待を押し付けられる。

一応言っておくが、最近の特訓の時間をプラスしても一夏がIS学園で最も総合操縦時間の短い人間なのは誰もが知る所だ。

『ようやく様になってきた』と言つても『様になってきた』だけで、勝負を左右できるほど腕が上がった訳でも無い。

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているのですもの。これくらいできて当然ですわ」

「ふん、中距離射撃型の戦闘法が射撃装備の無い白式の戦闘で役に立つものか」

「あら、そう言う意味であれば箒さんの訓練だって、ISを使わないのであれば実戦とは関係無いでしょう?」

「ふん、『剣の道は見から』と言う、見は全ての武の基本だ。それが出来れば実戦などせずとも——」

「さあ一夏さん。今日は無反動旋回の復習をしましょう」

「ええい、この！話を聞け、一夏！」

「俺は聞いているっつての！」

ぐい、と腕を引っ張り張られ当惑する。

セシリアが勝手に話していただだけで一応箒の話も聞いていたのだが、明らかに理不尽である。

気を取り直して、ピットに繋がるドアセンサーに触れる。

指紋と静脈認証が共に確認され、ドアが空気の抜ける音を上げ開く。

・・・そうしてピットに進むと、見知った顔が、あと多分今一番話をややこしくするであろう顔が居た。

「待ってたわよ！一夏！」

セカンド幼なじみこと鈴がそこに居た。

一応、このピットは一組の割り当てになっていて、二組の鈴がここに忍び込める筈は無いのだが。

「何故貴様がここに!?」

「ここは、関係者以外は立ち入り禁止ですわよ！」

箒とセシリアの二人が疑問を投げ掛けるが、それを「はん」と鼻で笑い。当然の事のように鈴は続ける。

「あたしは一夏の幼なじみよ、一夏関係者。だから問題無いわよね」

そう言っつてこっちに笑顔を向ける鈴。

いや、俺に言われても・・・。

確かに鈴は自分と関係があるのだが、この場合『関係者』と言うのは1組の関係者を言うのであって、個人的な関係を指す訳ではないと思う。

「ほう、どういう関係か聞きたいものだな・・・！」

「盗人猛々しいとはまさにこの事ですわね・・・！」

（おお、何に怒ってんだ？）

良く分らないが、両隣に立つ二人が怒っている。

セシリアがどうなのかは知らないけど。キレたら怖い箒が居るし、怒りを抑えて欲しいところだ。

「……何か可笑しな事を考えていないか？」

「いえ、何も、全く」

「やばい、バレてる。」

「絶対考えているだろうー！」

ああ、こんなにも怒って欲しくないと願ってるのに、箒が怒って詰め寄って来る。

が、箒が掴みかかる前に鈴が間に割って入ってきた。

「今はあたしが話てんの。脇役はすっこんでなさい。話が進まないから」

「な、私が脇役だと……!？」

軽くシヨックを受け黙り込んでしまう箒。

相も変わらず、鈴は周りの空気を無視して話し続ける。

「で？あたしに対して何か対策は出来たワケ？」

……対策？

「？ 対策って何の事だ？」

ピシリ、

何だか、亀裂が入る音がした気がした。

対策なんて立てた覚えは無い。

恐らくは鈴の甲龍（例のアレとややこしいから「ごうりゆう」と呼ぼう）に対策の事を言っているのだろう。

しかし、小鳥が戦ったのを見ていたではあるが、それが元で作戦が出来たって訳ではないし、そもそも立てた覚えもない。

「なっ……！ほら、アンタのクラスメイトの男子があたしにケンカ吹っ掛けたでしょうが！あん時にアンタも居たし……あれえ!？」

「小鳥は何も言わなかったぞ？」

しかし、一夏のキョトン、とした表情に変わりはなく、鈴の困惑は極まるばかりだ。

「あ、アンタバカなの!？」

「バカってなんだよ!？」

「当たり前でしょ！あんなにこれ見よがしに戦ってたんだからデータのひとつくらい取って何か作戦とか考えるのが当たり前でしょうが

!!

「そ、そうなのか？」

そう言われると確かにそんな気がする。

小鳥も『戦いは情報を多く集めた方が勝つ』とか言っていたような覚えもあるし、鈴の言っている事は正しいのだろう。

しかし、納得なつとくしている所ところに向けて鈴の言葉はまだまだ続く。

「はあ……アンタホントに勝つ気あるの？」

「むっ……。当たり前だ、あるに決まってるんだろ」

ちよつとカチンと来た。

バカとかアホとかならまあ今までの事もあるから反論はんろん出来ないけど、勝つ気が無いだなんて勝手に言われるのは心外しんがいだ。

「へえ？じゃああたしに勝つって気なの？言つとくけどあたし強いわよ」

「ああ、どんなに強くたって関係ねえ。お前には必ず勝つてやる」
売り言葉うりことばに買い言葉かいかことば、鈴の警告けいこくに対して一夏も勢いきほい良く啖呵たんかを切る。

しかし、言い合いあいは終わらずむしろ激化げきか……もとい悪化あくかしていく。

~~~~~ここからはダイジェストでお送りします。

……  
「良いわ、そこまで言うんなら掛けようじゃないのアンタとあたし、どっちが勝つか」

「おう上等だ。勝った方が負けた方に一つ命令権めいれいけんでどうだ」

……  
「ハッ、吐いた唾飲つばのみむんじゃないわよ」

……  
「じゃあ四日後よっぴちごだな。覚悟かくごしてろよ」

「ええ、ええ楽しみにしてるわよアンタが悔くやしそうな顔かおしてんのを見るのが待ち遠しいわー！」

バタンッ

↓自動機能が無視してドアが勢い良く閉められる音。

……その日の夕飯時……

「……そんなことがあつてき。負けられなくなつた」

「——お前はバカなのか？」

小鳥は端的に、シンプルに罵倒した。

食堂の壁に向かつて備え付けられたテーブルで秋刀魚を頬張る一夏は世間話ついでに今日の出来事を切り出していた。

その顛末を聞いた上で、溜め息も吐きたくなつたが、それ以上に約束の安請け負いに対する愕然としたものが有つたので、溜め息より先に罵倒が飛び出してしまった。

「むっ、人の覚悟をバカ扱いすんなよ」

「悪かつたな、『お前が』じゃなくて『お前等が』だつたな」

「——鈴の事までバカ扱いはするな」

何か琴線に触れたか、一夏の語調が鋭くなる。

そこに千冬と似通つた物を見て『似た者姉弟だな』と思ひながらも、変わらない調子で答える。

「実際そうだろ。まともな神経をしていたのなら、どちらかが止めるだろうに。それが干し藁のようにボーボー燃え上がりやがって、経緯と言ひ約束の内容と言ひ、二人揃つて小学生か」

言いたい事は一通り言つたので喜多方ラーメンをすすり、歯切れの良い 麺を噛み千切る。

見れば一夏はうぐぐ、と苦虫を噛んだような表情になる。

肩を竦めた小鳥は、白々しく話題を切り換える。

「どうあれお前が勝たないといけない状況に代わりは無い。そう言うことだろうか？ どうだ、勝算はあるか？」

レンゲで掬つたスープを口に運ぶ。——良い味だ。

一方隣の一夏は、箸を置いて腕を組み、考えを巡らせているようだった。

しばらくして箸を取った一夏は、こちらに向き直りキリツとした表情で、

「分からん」

「自信満々に自信の無い発言してんじゃねえ・・・」

ゲンナリして竦めた肩を落としてしまう。

何だろう。虚勢を張らないのは結構だが、それは情けないぞ。

「……………後でお前の部屋に行く、勝ち方ってヤツを教えてやる」  
他の人間に聞かれて有らぬ誤解を受けまいよう小声で一夏に伝え、  
努めて無表情にラーメンを啜った。

……………

夕飯を切り上げ部屋に戻り15分ほど、自室のベッドに仰向けになり、小鳥は一夏言った「勝ち方」を考えていた。

どうせこのまま放って置いても事態が好転するとは思いがたい、クラス副代表という立ち位置も考え、ここは参謀としての務めを果たそう。元々初めて一夏と組んだ時でさえ、作戦の立案と指揮をやっていたのだから、それを再演すれば良いだけの話なのだ。

鈴音の動き、武器、長所、短所、あらゆる情報が今は頭の中にある。その中から一夏の長所で突き破れそうな部分を探し、鈴音の動きを意識しながらどう突き破るかを想定する。

「…………やれやれ、どうして他人の為にこうも頭を働かしてるんだか」  
不意に、己がまるでその動きしか出来ないチエスの駒のように、無機的なモノのように思えた。

しかし、同時に頭の中に皮肉な一節が思い浮かんだ。  
盤上の駒は、自らの意思に関わりなく打ち手によって動く。

（俺は駒か？それとも打ち手？あるいは…………）  
その両方か？そう考えかけ、皮肉気に顔を歪める。

たしかに、一夏や周りの状況を見張り作戦を立てるのは、打ち手の仕事だ。しかし、そう言う役割に身を任せている自分は、丸切り駒そのものではないか。

(止めだ止め。指揮官の役割ならいざ知らず、打ち手だなんて柄じゃない)

自分の出来る事で世界を回す、それで十分じゃないか。

泥のように沈み込む気分を振り払うつもりで、身体をベッドから跳ね挙げる。

だとしたら、今の自分の仕事は一夏が勝つために必要な行動を考えてやることだ。

(どうせアイツがロクな策を思い付くとは思えんし)

その心内の眩きは、かなり侮辱的かつ傲慢な物だったが、実際に一夏が何か思い付くとは思えなかった。

一通り策を考えた小鳥は、己が(名目上の)君主——秘かに見下しているが——にそれを伝えるため、隣人の元へ向かった。

何をした!?(What's happening!?)

1 / 2

「うーす」

「あゝ、オドリンだあゝ」

小鳥 遊が己の専用機を修復に格納庫に向かうと、一年のホープ、  
布仏 本音が異常に遅い歩みでこちらに寄って来た。どうやら部屋  
に居るのは本音一人だったらしい。

ちなみにだが、この格納庫は二年の整備科が使用する為の物であり、  
一年の格納庫には無い3Dデータ出力装置が併設されている。

小鳥はそれを使用する事を目的に、  
納庫を使わせてもらっていると言う訳だ。

「本音? どうしてここに?」

つまり、この場所を借りている小鳥がここにいるのは問題ないが、  
一年の本音がここにいるのはやや不自然な事なのだ。

そう疑問に思い、  
そう疑問に思い、  
当人にその訳を問う。

「ええーつとねえゝ。整備科以外の人にはゝ、喋っちゃダメだよ?」

「あ? 機密情報なのか?」

「うん。今ねゝ、IS学園独自のISを造ろうってプロジェクトがある」  
「あゝあゝ、何も聞こえないなあゝ!!!」

耳を塞ぎながら大慌てで本音の台詞を遮り、  
機密を聞いていない  
ポーズを必死に取る。

「バツツツツカかお前は!!俺が一步早かったから良かったものの少し  
でも遅かったら聞こえちまったぞ!!」

「ええゝ? オドリン聞いてたよねゝ? ISのどくじ」

最早手段を選んでいない場合ではない、  
右手で本音の口を塞ぐ。

「聞こえねえって言うてるだろ!!お前も黙っとけ、俺が聞いちゃうだ  
ろうが!!」

そこまで言って本音の耳元に顔を寄せて誰にも聞こえないような  
小声で囁きかける。

「良いか。ここは国際的な施設なんだ、壁に眼も耳も鼻もある。もしそんな事が明らかになつてみる。俺がさえ予想がつかない事態が起こるぞ・・・それに」

口から手を離し、顔を元の位置に戻して、普通の声で話を続ける。「俺が機密情報を洩らしたらどうするつもりだったんだ。軽いつもりは無いが、俺の口が重いなんて自信は無いぞ」

本当は自分の予想のつかない事態に巻き込まれたくないだけなのだが、上部だけでも心配するフリはしておこう。

「だいじょぶだよ。オドリンは嘘つきだから」

「そいつは話さない事の理由じゃねえのか・・・？」

そう言われた小鳥は、首を傾げながら本音を通り越して専用機に向かう。

「・・・ま、何かあつたらあつたら俺に言え。気が向いたなら手伝つてやる」

「・・・うん、じゃあ〜また〜」

背中の方こう側に振り向くことなく手を振って、小鳥は己がすべき事に歩いていった。

.....

「さて、補修パーツ着けてくか」

Eカーボン製の筐や板を取り出し、エネルギーコードに繋がれた銀影を見上げる。

小鳥の格好は、カーキグリーン色のツナギを着け、白いタオルを巻いた『いかにも』といった服装である。

三日前にボコボコになったスラストターノズル等の細やかなパーツは、自然修復効果でかなり綺麗になっているが。その一方で大まかな装甲などは、設定により修復を止めていた為、その黒い総身は鈴音との戦闘でついた傷がそのままになっている。

小鳥が取り上げた黒いパーツは、へこんだパーツがそうなる前のような形状をしており、それらが銀影のパーツの複製品である事を示

していた。

この三日間、小鳥は一夏の特訓に付き合っていなかったが、それは銀影の補修に当てていた。

三日前に整備室の拝借をし、前二日でデータ設計と出力を終えていた為、今日はそのパーツの組み上げと調整にやって来たのだ。

「何の不具合も無ければ良いんだが・・・」

ある程度の失敗を覚悟して、一部のサイズを変更した設計データを用意しているが、出来ることなら再出力の手間はしたくない。

次々と他のパーツを手に取り、それ同士を組み合わせていく。

一つはパーツの模様が合うように、一つは捻り込むようにと、組み合わせていく内に装甲パーツがより大きくなっていく。

「パーツ同士の組み合いは良し、後は銀影にちゃんと引っ付くかな・・・」

足場を利用し、最も破損の大きかった胸部装甲にまで登ると、組み上がったパーツを足元に置き、電磁性ドライバーを手に取る。

ドライバーガンから伸びるコードには、腰のベルトに留められるほどのサイズのバッテリーがあり、そのスイッチをオンにした小鳥は、拳銃に良く似たドライバーガンの回転部を装甲の隅に押し付ける。

ドライバーガンの引き金を引くと『バシユン』と言う音が飛び、引き抜いた回転部の先には、剩りに細かいせいで側面が平らに見える極小のネジがあった。

普段はISの常温超電導効果で引き付けられていて回すことも叶わないが、磁界を乱すことで回しとる事が出来るのだ。

それを十数カ所で繰り返すと、胸部の最も大きいパーツが外れる。

「いやー、一昨日から見ただけど、見事だね小鳥くん」

不意に、後ろから声が掛かる。

振り向いて見てみると、そこには小鳥に格納庫を貸してくれた薫子が居た。

声の主が誰か分かった小鳥は、作業に戻りつつ、変わらない調子で答える。



「当たり前だ。二、三ヶ月前まで取ってた杵柄、朽ちるにはまだ早い」  
一応、腕が鈍っているのは認めるが、それでも現在の整備科二年と同じかそれ以上の腕前の自負がある。

それに、その鈍りもある程度の数をこなしてしまえば解消される。大きいパーツの下にあったパーツを外し、複製したパーツを組み込んでいく。

「で？何か用があるのか？無いのなら散って欲しいんだが」  
カチャカチャと工具箱を漁りながらうざったそうに黛に告げる。

彼女は二年整備科において学年主席であり、その技量も確かだが、何もしないのであれば居ないも同然。まして観察されているとなれば、集中力が削がれる。

であれば居なくなってくれた方が助かると言うものだ。

「もー、ツれないなあ。折角なら手伝ってあげようと思ったのにー」  
「なら右肩左肩右腕左腕の順でパーツを纏めてくれ。その順で取り付ける」

「はい」

小鳥の出した指示通りにパーツを纏める黛、そうして少し時間が経った頃、またもや黛が口を開いた。

「そう言えば小鳥君って、一組の副代表なんだよね」

「それがどうした」

「いや、今一夏君が篠ノ之さんと剣道の試合してるって聞いてるんだけど。それって小鳥君の指示なの？」

その疑問に、少しの間無言になる小鳥。

実際、『お前が鈴音に勝てるとしたら近接戦くらいしかかない』一夏に指示をだし、生身でも出来る特訓として剣道の対戦をさせている。

それを否定するメリツトは無いし、肯定した所で何か問題が起こる訳でもない。

が、気になる事が少し。

「・・・どうしてそう思った？」

その指示は昨日の晩に『一夏の部屋で』した事である。  
いかに「学園の壁には眼も耳も鼻もある」と本音に言った小鳥で

も、流石に個室のプライベートは保たれていると思っ  
て盗聴無しでその答えに至るとすれば、いた 黛自身がそう言う考えをしてい  
るとしか思い至れなかつたのである。

それに、ああ見えて黛も頭が悪い訳ではない。自分の頭でそれを考  
えられてもそう不自然な事ではないだろう

しかし、返つて来たのは想定外のものだった。

「いやあー。それが私が思ったって訳じゃないんだよねえー」

「成る程、受け売りか」

真顔で平淡な声で黛に返す。

その指摘を受け頭を軽く掻きながら苦笑いする黛。

「あはは、そう言うこと。たちちゃんが『一組の実質的な頭脳は小鳥く  
ん』だーって言うてたし」

「――待て、『たちちゃん』とは?」

恐らくは某かの渾名なのは理解出来るが、何せ二、三年の名前は覚  
えていない。渾名からその本人の特定出来ないのだ。

「えーつと。更識 楯無つて知ってる?」

「・・・聞き覚えは有る。誰だかは知らんが」

「それは仕方ないかも。今年色々ゴタゴタがあつたからそんなに  
挨拶とかもやってないからね」

「んで? 何者なんだソイツは」

訝しげに問い返す。しかし、それに答えたのは黛ではなかつた。

「あら。おねーさん有名人のつもりなんだけどなあ」

格納庫に小鳥のでも黛のでもない声が響く。

声のした方を見ると、そこには閉じた扇と思しき物を片手に微笑え  
む二年の女生徒が居た。

「――自分で有名人だと口走るといふ事は、お前が更識 楯無で良い  
のか?」

「あら悪い子ね。年上には敬語が基本でしょう?」

「だったら自分が何者なのか明らかにするのが先じゃないか?」

「ふふつ、それもそうね」

(恐らくは) 楯無本人の科白に対し、間髪入れず言い返す。

そうすると、不敵な笑みを浮かべ、求めに応じて自己紹介を始めた。

「私は二年の更識楯無、君の先輩にしてこの学校の生徒会長よ」

「……」

訝るように楯無を見て、警戒心全開の声音で問い返す。

「で、俺に何の用だ？」

そこに敬語は無い。

「あらー？」いちおうじこしようかい「応自己紹介したんだけどなあ？」

「はいはい、おな 同い歳未満の奴に敬語を使う気は無い」

何かしらの世話になつてゐるわけでもないしな。と続けて足場から楯無を見下ろす。

その半開きの眼は小鳥ことりと言うよりは猛禽もうきんのそれに近く。おおよその人間が見れば尻込みしりごみをしようとするだろう。

しかし、何の怖じ気おも見せず、楯無は小鳥の元に歩み寄る。

そして足場の元にまでやって来た楯無が立ち止まったかと思うと、一足飛びで小鳥の居る足場に飛び乗った。

「ツ……!?!」

「うふ。驚いた？」

小鳥の顔を見上げるように覗き込む楯無、一歩退いて眉まゆを顰ひそめたまま小鳥も彼女の顔を見返す。

「驚いたではあるが……。さて、俺の質問に答えて貰おうか。俺に何の用だ？」

むしろ増ました警戒心けいかいしんのままに、問い返す。

一見すると楯無は悪戯いたずらな猫を思わせるが、その実じつ、小鳥からすれば油断ゆだんも隙すきも許すさない肉食獣にくしよくじゅうが瞳ひとみの奥に見え隠れしていた。

小鳥が無表情に問うのに対して、楯無は笑みを浮かべながらその問いに答える。

「ふっふっふ。何だと思う？」

「はっはっは質問に質問で返す方がマナー違反だろ」

珍しく大口を開けて笑ったかと思えばそのままの口調で毒を吐き出す小鳥。

これは一本取られたとばかりに扇で頭を叩いて楯無は答える。

「あつはっは、これは失敬。じゃあ本題に入ろうかしらね」

本当なら用の内容など聞かず『帰ってくれ』と言うところだったが、この手の人間は相手の都合や事情など気にしない傾向がある。聞くだけ聞いて帰って貰おう。

話を切り出す楯無を横目に見ながら、銀影に新しい胸部装甲を嵌め込む。会話に耳を傾けていた為に気がつかなかったが、どうやら上手く行っているらしい、何の問題も無く組み着いていた。

「単刀直入に言うけど、小鳥くんの事を知りたいのよねえ」

「マジで単刀直入だなオイ」

あれ程はぐらかしていた割にはあつさりと核心を話す為に拍子抜けしてしまう。先程までの睨み合いがバカみたいだ。

呆れ半分に返答しながら工具箱を漁り、新品の極小ネジを探す。

「とは言え、たーだ話し合っただけじゃ解りづらいしねえー。どうしたら良いと思う?」

「・・・聞く側が疑問符を出してんじゃねえ。話を出すなら話題を作ってからしろ」

完全に呆れた様子で溜め息を吐く。

しかし、その眼はまだ警戒を解いていない。どんなに間抜けのフリをした所で、彼女が小鳥を実質的な一組のブレンダと見立てた事に変わりはない。

今は優先順位第二位の話題だが、それについても後々聞くつもりでもある。

とは言え話が進まないのでは話にならない。極小ネジを20本程取り出して楯無に告げる。

「・・・俺から話す事は何も無い。お前が聞きたい事だけ聞け。返せる物だけ返してやる」

「あら太っ腹。結構気前良いのね」

「別に、早くお前に帰って貰いたいだけだ。それに俺もお前に聞きたい事がある、それに答えて貰う事前提で話して貰うぞ」

「・・・そうねえー。どうしよつかしら♪」

「じゃあ話は終わりだ帰れ帰れ」

「やーん、冗談だつてば」

わざとらしい楯無の態度に取り合う積りは無い。相手がマイペースを貫こうと言うならこちらもマイペースで行かせて貰おう。冗談など皮肉で世界を嗤う時で十分だ。

楯無が注文通りに質問を投げた。

「じゃあ一つ。小鳥くんはどうしてIS学園に来たの？」

「・・・IS学園以外に行きたくなかっただけだ。企業も軍も研究所も御免な上、俺には整備士の方が性に合ってる」

吐き捨てるように言い、ネジで装甲を留め始める。

がしかし、唇に指を当てた楯無が追及を始めた。

「うーん、それだったら小鳥くんがそれまでいた専門校に居たら良かったんじゃない？」

「——軍事しか魅力の無い場所だったからな、それが理由で発展した街だったし、それだけの居場所に飽き飽きしていただけた。ただ、」

「ただ？」

聞き捨てならないことが一つだけあった。

ドライバーガンを下ろして作業を止める。

専門校だなんて誰が言った？

・・・無論そこに行き着く為のヒントはあった。

小鳥が同じ年未満に敬語は使わないと言った事。

ISの整備士・技師を目指していた事。

軍や研究所には行きたくないと言った事。

裏の意味を読み取ればそれだけで十分に把握できる。

後は黛辺りから聞いたと言う可能性もあるが、であれば恐らく二日以内に学園中で騒ぎになっているだろう『小鳥 遊は少なくとも18歳以上だ』と。

しかしそんな噂は耳にしてない。噂が立っていたのなら、恐らく当事者である小鳥自身にも届くだろう。

「・・・いや、何でもなし。下らない事だ」

「ええー？そこまで言っても何も無いって事は無いでしょう」

「有ろうが無かろうが、話さないと言うだけの話だ。言っただろう返

せる物だけ返してやると」

言つて、作業を再開させる。

恐らくはここで楯無にそれを聞いてもはぐらかされるだけだ、あるいはそれ以上に厄介やっかいな事にさえなりかねない。雄弁ゆうべんは銀沈黙ぎんちんもくは金とも言う、下手に口を開いて情報を抜かれるのなら口を開かない方が良さそうだ。

「……ふーん、何となく小鳥くんの事が解つてきたわ」

「……」

何をどう解つたのかは知らないが、何か解つたらしい。

何をした!?(What's happening!?)

2 / 2

・・・正直、止めて欲しい。

別に痛む腹はないが、かと言ってこそばゆい程度には構う部分もある。面倒臭さも手伝ってこれ以上情報を取得される事には抵抗を覚えてしまう。

「小鳥くんって、多分『良い人』ね」

「は?何言ってるんだ?」

自分が『悪い人』だと言う気は無いが『良い人』だなどと言われる覚えは無い。

「どんな理由でそんな事を言っているのか知らんが、それはどうとも言えんぞ」

「いやいや。それは小鳥くんに自覚が無いだけで、本当にそうとは限らないわ」

他人にしか解らない事もあるからね。と続け、楯無はまた口を開いた。

「さっきだって『返せる物だけ返すから返さない』って言ったけど。それって私を騙す積りは無いってことでしよう?」

「騙す積りが無い・・・と言うよりは、嘘を言った所で意味が無いだけだ。仮に言ったとして、嘘で隠した事実はいずれ暴かれる。必ずな。特にお前は洞察力が高い。即座に暴かれるくらいなら、言わない方が建設的だろう?『沈黙は金だ』と言うしな」

そう言っただライバーをホルスターに戻し、楯無に向けて皮肉気に笑う。

パーツを取ろうと、その方へ振り返って見てみると、黛が見当たらない。どうやら自分の立ち入る場所が無いと悟り、格納庫から退出していたらしい。

とは言え頼まれていた仕事はキツチリとこなしていたようだ、床には各部位に分けられた装甲パーツが転がっていた。

「で？お前が知りたい事は以上か？なら俺からの質問に答えて貰うぞ」

言つて足場の柵に手を掛けると、一足で柵を飛び越え、硬質の床に勢い良く着地する。

「構わないけど、おねーさんの秘密は高くつくわよ」

「はんツ、その為の対価は既に払った。お前は俺の『IS学園に來た理由』『俺の人柄』少なくとも二つの情報を入手している」

転がつているパーツを手に取り、それを組み合わせながら、自らの論拠を示す。

「等価交換だ、俺は二個以下の情報をお前から取得する権利がある」  
「なるほど、それなら理屈も通るわね」

ふんふんと頷いて微笑んだ楯無は、にこやかな表情をになり質問を促す。

「じゃあ、小鳥くんの質問をどうぞ？」

「成程、それがお前のポーカーフェイスか。俺には出来そうにもない芸当だな。」

口に出さず、心の内で独白する。

元より真似する気は毛頭無いが、ポーカーフェイスをここまで綺麗に使いこなす奴は初めて見る。

・・・それにしても

(本当に高校生なのかコイツ)

小鳥自身、これまでの二十年近い人生で何の波乱も無かった訳でも無かったが、それでも無表情を通すのが精一杯である。

・・・それはさておき

「どうして俺に構う？確かに俺は世界に三人の男性IS乗りだが、だから言つて俺に構った所で然程の旨味はあるまい」

「あら、私があなたに一目惚れしてるかも知れないわよ」

「一目惚れしてる奴はそんな台詞を吐かん。・・・と、そんな事はどうでも良い。俺の質問に答えろ」

楯無に話のペースを握らせてはいけない。再三心に刻んだ文言を



心中で呟き、マイペースを貫く。

と、釘を刺された楯無は大人しく小鳥の問いかけに応える

「小鳥くんは構いに来たのはね。確かめる為よ、小鳥くんがどれ程の人間なのか」

よいしょ、と楯無も足場から跳び降りる。

小鳥の着地とは違い、その足取りは軽く、音は小さい。

「ほお？上から目線で『査定しに来た』とは恐れ入った。で？今の所俺は合格か？」

「弁舌戦なら及第点って所かしら。人間性は良い感じだと思うわよ？」

そんな似合わない台詞を言われれば、苦々しい顔を浮かべるしかない。

「・・・そりやどうも。と言うことは俺の査定はまだ終わっていないと言う事で良いんだな」

「もちろん」

「なら、次は何を凶る？」

当たり前のように発せられた問い掛けに、当たり前のように返答が続く。

少しの間の後、楯無が口を開いた。

「次は、小鳥くん自身の戦闘力、かな？」

「ツ・・・!?!」

咄嗟に身を屈める。

その直後頭の上を楯無の掌底が飛んだ。

「ふッー」

反射的に掴んでいたパーツを床に置くと、一息に跳び退く。

悪態を吐きたいところだが、そんな事を言っている暇は無い。

低い姿勢のまま楯無の居る場所を睨むと、目に写るのは眼前に迫る楯無の膝。

「くッー」

必死に首を右に振って顔面への一撃を回避するが左の頬骨を掠め、その勢いで身体全体が格納庫の硬い床を転がる。

「だっ……はッ！」

勢いを殺さず、楯無に正体する形で立ち上がる。

相対する楯無は、なんの事も無かったように立っていた。

(クソッ……！いきなり殴りかかって来やがって……！)

『戦闘能力を測る』と言うのは、小鳥自身が狙われる想定の下、襲撃を受けた際の事を考えてるのだろうか……。

「メチャクチャだな……」

剩りに唐突な話の流れに悪態をつきたくなる。

右手で左の口元を拭い、吐き捨てる様に呟く。

それが聞こえていたのか、開いた扇で口元を隠しながら楯無が笑う。

「あら、今頃気付いたの？」

「うっせえ。再確認だったの」

値踏みどころは本当にどうでも良いのだが、一方的に蹴られて黙っていられる程、大人しくはない。

ドライバーガンとバッテリーのホルスターを兼ねたベルトを外し、頭のタオルを左手に巻き付けて、両手を握り、臨戦態勢に入る。

「大人しく一発くらい殴らせろよ？」

右手を前に、左手を脇に溜める。

その構えに何か引つ掛かったのか、楯無が問い掛ける。

「ふーん、何か格闘技やってたの？」

「それに答える義務は無い」

先の3コンボは不意打ちが起点だったが、3手分を受けっぱなしだったのは間違いない。

楯無に一手取られれば、それは三手取られたのと同じ意味になる。

(隙を作ればそこを突かれる……。不用意に喋る訳には行かん)

緊張の糸を切らさず、楯無の動向を窺う。

こちらから攻めるような愚は犯さない。

『攻撃は最大の防御だ』と世の昔誰かが言ったらしいが、それは敵との力量に開きが無いが、もしくは敵より優位にある場合のみである。

こちらは確かに殴り合いに慣れてはいるが、恐らく楯無の方が格上

だろう。

加えてこのアドバンテージの取り様のないMAPだ。こちらから動けばまず間違いなく先手を取られる。

先述したように楯無の一手は三手に等しい。

そしてふざけた事に1 || 1 × 3 || 3 × 3 || 9 × 3 || 2 7 × 3 || 8 1 × 3 || 2 4 3 × . . . と、無限に楯無のターンが続いてしまいかねない。

「やる気になったみたいね？ さあ、遠慮なく来なさい」

「断る」

「あらそう」

小鳥が動かない意図を理解した楯無、

とすれば普通は注意しながら攻め掛かって来るだろうが、この破天荒女なら. . .

「じゃあ遠慮なく♪」

(だろくなッ！)

間違い無く、予測を超える動きをしてくるだろう。

案の定、楯無はこちらへ向けて突っ込んで来る。

「く. . . ツ」

楯無の左手による三連の牽制を右手で払い、開いたガードを縫う様に繰り出される右のストレートを返す手で叩き落とす。

左足のローキックをジャンプで躲し、右足を振り上げてキックを放ち距離を開けさせる。

「思ったよりやるわね」

「. . .」

楯無が何か言っている。もう声は聞こえない。

口は開かない。そんな暇は無い。

握り拳を更に強く握る。息を吐くな。

相手の一挙足を注視する。集中を切らすな。

裏返るカクテルは、音の聞こえなくなるのさえ聞こえさせない。

(. . . 驚いた。極限まで集中してる. . . 拍子の間が見当たらない)

人には呼吸や鼓動、様々な生体リズムからなる「拍子」と言うものが存在する。

緊張や集中を常に張り続ける事は難しく、息を吐き出す際にどうしても切れる、もしくは弛んでしまう。その弛みが訪れる時間間隔を「拍子」と呼ぶのだ

中華拳法の太極拳などは、呼吸法や『型』を用いて「拍子」を制御する事を可能としているが。

しかし、小鳥のそれは制御されているのではなく、存在しないのだ。意図的にか、それとも極限の集中の副産物か。呼吸が止まって拍子が見えなくなってるのだ。

(意図的にならとんでもないし、天然だったらもつとんでもないわよ)

だからと言って攻め手を弛める積もりは無い。

何故なら。

「ねえ、小鳥くん。IS学園の生徒会長ってどうやって決められるか知ってる?」

「――」  
例によって小鳥は答ええないが、楯無は続ける。

「勿論、最終決定は生徒一人一人の民意で決定されるんだけどね?その前段階、立候補の時点で人を選別する絶対的不文律があるのよ」

そう、それは

「IS学園の生徒会長は、生徒の長であり、その存在は最強であれ――」  
一足飛びで小鳥の懐に飛び込む楯無。

「とね!」

「フン!」

胴に向けて繰り出される掌底を左手を使って手首から弾き返す。

続けざまに繰り出される右の回し蹴りを屈んで躲す、しかし、楯無は勢いを殺さず左足で蹴りを入れる。

(掌底からの回し蹴りによる接続技・・・!?コイツ、ボクシングスタイルだけじゃなく東洋武術にも心得があるのかッ!)

右腕を蹴りの射線に構え直撃は防ぐものの衝撃は殺せない。その

勢いで更に後方に押されてしまう。

だが、先と違い楯無は体勢を立て直す隙すら与えない。

跳び退がった小鳥に一足で追い付き、跳び回し蹴りを放つ。

「グ……っ！」

左腕で防ぐが、ガード諸共吹き飛ばされそうな重さに苦悶の音が漏れる。

右足で踏ん張り、何とか蹴り飛ばされる事は無かったがまだ終わりではない。

跳び回し蹴りから着地した楯無は回転をそのままに小鳥の足を掃う。

右足は踏ん張っていた事が幸いし転倒は免れたが、それでも体勢は崩れる。

しかも楯無の回転はまだ止まらない。

もう一度右の回し蹴りが飛ぶ。

「ああ……っ、がアッ！」

体勢が崩れた状態では防御が追い着かない。中段蹴りを腹に喰らい肺の空気が一挙に抜ける。

蹴り飛ばされ床をゴロゴロと転がり、2 m程の所で仰向けに停止する。

「っ、はー！」

空気不足の肺が膨らみ、体内に酸素を取り込む。

しかし、悠長に呼吸をしている暇は無い。

楯無が顔面に向けて足を振り下ろしているから。

「ッ！」

遮二無二身体を回して踏み潰す足から逃れ、必死に立ち上がる。

足を振り下ろした楯無は、スカートを押さええて一言。

「やあん、下着見えちゃった？」

「ああ、眼福だったよ」

「えっちゅー」

「ミニスカで、そんな事、する奴が悪い」

ヒューヒューと切れた荒い息を繰り返す。

それでも軽口を絶やさないのは、本人の才能があるいは元々の性格からか。

しかし、

「それもそうね……」

そう言つて楯無の姿が消えた。

「隙あり♪」

(しま……ッ)

気付けば、楯無の姿が目と鼻の先、掌底を構えてそこにあつた。

これが、拍子の間を縫う行動。『無拍子』である。

慌てて防御しようと、腕を動かし、

「!」

腕が、動かない、

(さっきの二撃で……ッ!)

痺れに近い違和感が走り、両腕が動かなくなっている事に気付く。

先の蹴り二発をモロに腕で受けてしまった為か、両腕が動かないのだ。

(ク、ソ……がああああ!)

心中で呪詛を叫ぶが、両腕の動きでは最早防げない、この一撃を喰らえば、今度こそ意識を失いかねない。

自分一人ではこう言つた対処出来ないと言う事実にしたくない。

と言うのもあるが、何よりこんな奴に負けたくない。

そんな心象など知らないとばかりに、楯無の掌が腹に届く

― 咎だつた

「はっ」

「!」

確かに、楯無の掌は小鳥の腹に接触し、その力を小鳥の腹部に伝えていた。

ただしその力のほとんどが銀影の胸部装甲に遮られていたのを除けばの話だが。

「銀影……!?呼んでないぞ!!」

展開の命令はおろか、待機状態にすらしていなかった銀影の装甲が

小鳥の胸部を覆っていた。

銀影の方を見てみると、胸部装甲だけが無くなっていった。

目の前の楯無の顔を見てみると、さしもの彼女も驚いているらしい。柄にも無く呆けた顔をしている。

「・・・ふ、フーン！」

動きづらい右腕を無造作に振るい、楯無の肩口辺りに素人の手刀を叩きつける。

ゴン！と、人間の筋肉由来の柔らかい感触の奥から硬く、鈍い音が手を通して伝わる。

「きやあつー！」

「・・・あれ?」

まさか当たるとは思っておらず、今度はこつちが豆鉄砲を喰らったような顔をしてしまう。

その上あまりに軽い感触で楯無が飛んだので、『もしかしてISのパワーアシスト入ってる?』と思ってしまう。(残念ながらヘッドギアが無い為確認のしようも無いが)

「だ、大丈夫か楯無?」

倒れこむ楯無。

バイザーが無いからハイパーセンサーからの情報は無いし、銀影はウンともスンとも言わないので、楯無に直接聞かなければ安否が解らない。

胸部の装甲だけは着けたまま、急ぎ楯無に歩み寄ると、すつくと楯無が自分の手で上体を起こした。

その表情は先と同じ様に驚きに呆然とした物で、その視線は小鳥の胸の辺りに注がれていた。

「・・・何をしたの?」

「へ?」

唐突な問いかけに、思わず間の抜けた返答をしてしまう。

「だから、何をしたのって聞いたのよ」

「何と言ってもな・・・手刀?」

自分でも的外れな事を言っているのは十分承知しているが。今、

小鳥自身が明瞭に説明できる行動はそれくらいだ。

「そつちじゃなくて、そのアーマーの事よ」

ピツと楯無が指すのは小鳥の胴体、銀影の胸部装甲だ。

その意図を理解した小鳥は、頭を掻きながら答える。

「俺にも解らん。楯無の攻撃を防ごうとしてたら、いつの間にかこんななつてた」

解らない事には素直に『解らない』と答えるしかない。

状況証拠的に、銀影がこちらの求めに応じて防御の手段を寄越してくれたらしいが。

「聞いたこと無いわこんな事例・・・」

「だろうな。俺も聞いた事が無い」

だが、仮説は成り立つ。

かねてよりISには疑似的な『意識に近い物』が存在していると言われている。

操縦者の個性や特性に応じて内部構造やソフトウェアを少しずつ変形させて行く機能などは、その『意識に近い物』の作用だとされている。

それが待機状態でも機動状態と同じ様に作動しているのなら、操縦者の求めに応じてISの一部展開を行ったとしても、何ら可笑しくはない。

(.....)

.....それはさて置き。

「兎に角。どんな理由であれ、コレがある事に変わりはないし、余計な装備があるんじゃないやまともに戦闘能力の評価も出来まい」

これは楯無に丁度良い理由を付けて帰ってもらおう又と無い好機である。多分これを逃せばいつまでも付き纏って来かねない。

「うくん・・・」

「お前の目的が俺の品定めならもう終わっただろう？ さっさと帰れ」

嫌気がさしているのを露骨に顔に出し、帰るよう促す。

「え、でも折角来たんだし。ただ査定しましたー、ってドライな事しただけじゃ面白くないでしょ？」



「・・・俺はお前と交流こうりゆうするのに愉たのしさを求めてない」

ええ。とゲンナリした声を上げる楯無。

さっさと帰れ。と重ねて続ける小鳥。

声に出してはいないが、そもそも交流したくないとすら思っている。しかし、このままでは天井てんどんで延々えんえんと付き纏まとわれそうさ。

「・・・付き纏うんなら、手伝え。お前に付き合ったせいで時間を食ったし、何より両腕が思うように動かん。半分以上はお前のせいなんだから、少しくらい責任を取れ」

ああも戦闘技能が高いのなら、整備課でなく一般科だろう。出来ない事を押し付けければあちらも退ひかざるを得ないだろう。

だが、むしろノリノリで楯無はその条件に応じた。

「あら、そんなので良いの?」

「あ? そんなのだと? お前まさかISの整備も出来るのか?」

「ええ、私専用機持ちなんだけど、私が組んだ物だし。もう出来てるアーマーを組み付けるくらいなら私にもできるわよ?」

(—Oh shit・・・)

これは参まいった。これでは整備を理由に楯無を遠ざけられない。

頭を抱えなくなる衝動を抑え、対処たいじょを一考いっこうする。

(・・・まあ、でもいいか)

が、考えてみれば遠ざかるか早く終わるかの二択だ。楯無がどちらを選んだとしても役得やくとくである。

正直な所、楯無とこのままと言うのはかなり面倒な事だが、銀影の補修ほしゅうが終わらない事に比べればまだマシだ。

「:ハア、解とったよ。銀影の整備が終わるまではお前に構かまってやる。だが、その代わりに整備は手伝えよ?」

これからのストレスを考えると溜め息が自然と零こぼれるが、楯無がその気なら了承りようしょうしよう。

.....

———ちなみに、恐ろしく癩しかくな事だが、楯無のお陰で整備は

予定よりも早く済んだ。

未知との迎撃 (Intercept for unknown) 1/2

クラス代表対抗戦当日がやって来た。

クラス代表であり、同時に選手である織斑一夏、副代表兼参謀である小鳥遊の2人がピットのテレビ画面で客席の様子を見ていた。

いつもの放課後訓練なら小鳥もISスーツなのだが、今回は小鳥は制服(ロングコート仕様)のまま、一夏だけがスーツを着用している。

三日間の剣道訓練をしてきた一夏はそれなりに仕上がっているらしく、意気軒昂に息巻いていて……居たら良かったのだが、元より望まないクラス代表の椅子。学園関係者だけでなく、IS製作企業や、そこから派遣されたスカウトの様な人物など、アーリーナにひしめく人の波に気圧されていた。

「すごい数だな……」

「だろいな」

IS学園と言う施設の性質を考えれば当然である。

学園は世界でも数少ないIS同士での実戦が行える場所で、その上堂々と敵国、ライバル企業のISデータを覗き見出来る絶好の機会である。

これを逃す手はないだろう。

「おおよそは先生生徒だろうが、見ればちらほらそれ以外も居る。気をつけろよっ。」

何にとは言わないが、IS学園は治外法権の部分がある。その上でIS学園では国際法違反に対する明確な文律が存在しない。

要するにどの国がどんな妨害や小細工をしようとも引責問題にならないと言う訳だ。

まあ、流石の彼らも理性の働く大人である。社運が危ぶまれる様な状況でも無い限り、そう言うことはするまい。

「分かってる。大勢の前で恥はかきたくないからな」

そう答える一夏。

「お前な・・・」

何があってもおかしくないぞ、と言った積もりだったのだが、小鳥の心配とはまったく逆の方向で物を考えていたらしい。

その前向きさは確かに一夏の美德なのだが、余りにも前向き過ぎるコメントに毒気を抜かれてしまう。

「――まあ、勝つ意気があるなら良い・・・。戦術の復習だ、お前は何をする？」

あるかどうか解らないイベントについて考えていても仕方がない。自分の主人である一夏がやる気なら、それに乗るだけだ。

先日伝えた戦術を復唱させる。

「えー、序盤は距離を取って様子を見る！」

「はい次イ」

「鈴が衝撃砲を50発くらいまで撃つたら、攻めに転じる！」

「よし。では衝撃砲の性質は？」

「圧縮から解放までに0.05秒のタイムラグがあるから、それに気付けば回避は可能！」

「オケオーケー。一通り頭に入ってるな、では行け」

「おう！」

一夏はISを展開し、カタパルトの足場に白式の足を乗せる。

カタパルトの側に寄って、一夏に向けて助言を飛ばす。

「重ねて言うが、瞬間最大火力、瞬間最大速度は白式が圧倒的に上だ。それが解つてりや、勝ち目も見えて来る筈だ。気を抜くなよ！」

「ああ」

カタパルトの射出口が開き、外の光が差し込む。

完全に射出口が展開すると同時、レーン脇の赤い警告灯が緑に変わる。出陣の合図だ。

「白式、織斑一夏！行きます！」

リニアカタパルトの電圧が瞬間的に上昇し、カタパルトの足場と共に白式が前方に向け加速する。

そして、ピットの淵にたどり着いたその瞬間、慣性のまま一夏は戦

場へと飛び出した。

「さあ、見せ所だぜ？一夏」

本人に届かない声。だが確かに、確かな声で小鳥はそう言った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

アリーナの中央、観客席の皆の視線が俺と鈴りんに注がれている。

小鳥から『恥をかかないよう気を付けろよ』と言う旨むねの言葉をかけられて『分かってる』と返したものの、やっぱりこの手の緊張感は慣れないものだ。なんならこの試合は学園内の一部で中継されているらしく、それも相まって今までの人生でも一、二を争う程心臓がバクバクしているのが解る。

(・・・・・・・・つと、そんなこと気にしてる場合でもないか)

前を見る。

そこには、IS『甲龍こうりゅう(本来は、シエンロン)』読みだが例によって“こうりゅうとする”』を纏う鈴が居た。

対戦を行う2人が揃ったのを合図に、アリーナを覆う様にエネルギーシールドが形成されていく。

「一応聞いておくけど『舐なめてかかってゴメンナサイ』って言えば、手加減てかげんしてあげるけど?」

「手加減なんて雀すずめの一涙ほどだろ?そんなんなら全力で来い、俺は全力で行くぞ」

鈴の後ろではエネルギーシールドの透明な幕まくが上あって行く。きつと鈴は俺の後ろに同じ景色を見ているのだろう。

「そう、なら覚悟しなさい。あたしも全力で行くわ」

そう鈴は告げて、甲龍こうりゅうの両手に偃月刀えんげつとう“双天牙月そうてんがげつ”を呼び出す。

それに応こたえるよう、俺も腕を前まへに出し白式びやくしきの手に雪片式ゆきひらにがた型を呼び出す。

『では、クラス対抗リーグマッチ第1試合を開始します!』

エネルギーシールドが完全に上がりきったらしい、山田先生が試合開始の宣言をするみたいだ。

『よおーい……始め!』

その声と同時に大きなブザー音がアリーナ全体に鳴り響く。

「フッ!」

試合開始の宣言の直後、雪片と牙月がぶつかり合う。

受けたのは俺、飛び込んで来たのは鈴の方。

右の刃を右手の雪片で止められた状況で、鈴が俺に向けて叫ぶ。

「あたしの見ない間に特訓してたらしいじゃない。その成果がどんな物か見せてもらおうわよ!!」

「言われなくてもそのつもりだよ!」

牙月を押し返し、横薙ぎに振るわれる左の牙月を強く弾き返す。

鈴が接近戦を仕掛けるのは予想外だが、2つ目のプランで戦えば良いだけの話だ。

接近戦なら、攻めに転じる!

「はあっ!」

上段からの袈裟斬りを繰り出し、鈴の胸を狙う。

後ろに下がり回避されるが、一気に距離を詰め、今度は下段からの突きで、その肩を狙う。

小鳥曰く、甲龍の衝撃砲は、近接戦では出力を落としてしか使えないらしい。

なんでも衝撃砲の効果範囲が広すぎて自分にも当たってしまうのだとか。

だから刃と刃を交えるような、極短距離の近接戦では衝撃砲は出力を下げてしか使えないのだそうだ。

とは言え、前の小鳥みたいに出力を落とした衝撃砲をバカスカ撃つ事は出来るし、牽制としては十分過ぎる威力だから注意しなければならぬ。

「ッ!」

牙月の刃が突きを逸らし、肩を狙った突きは左肩の上辺りに飛ぶ。にやりと、鈴が笑う。しまっ——

ズドンッ!

「ぐあっ!」

突きを逸らされた事でがら空きになった腹に衝撃が加わる。間違いない、衝撃砲だ。

出力を落としているにも関わらず、ISの腕で直接殴られた様な痛みが走ると同時に、俺は白式と共に大きく吹き飛ぶ。

セシリアから習った無反動旋回ゼロリアクションで素早く立ち直るが、鈴の狙いは付いていて、すでに解放のモーションに入っていた。

「喰らえッー」

放出される空間の歪み、多分に俺の顔面目がけて発射されたそれを躲すことは出来ないだろう。

だから

「な!」

砲弾をぶった斬る事にした

爆音が前の方で響くがこっちにダメージは無い。

とつさにやってみただけど、どうやら上手く行ったみたいだ。

.....

「今の・・・一体何が起きたの!」

アリーナの指令室、試合を観戦していたセシリアが疑問を投げた。

今しがた放たれた衝撃砲の一撃は避けられる間合いではなかった筈はず。だと言うのに、一夏が雪片を振るっただけでダメージはほぼゼロになっっていた。

「篠ノ之・・・仕込んだな?」

にやりと笑って千冬が箒に問う。

問われた箒も静かな笑みで応え、今のタネを明かす。

「篠ノ之流しののりゅう刀術とうじゆつ、抜刀ばつとう、一閃いっせん」。今一夏が使ったのは、篠ノ之流の中で最も基礎きそ的な抜刀術きそてきです」

小鳥と鈴の戦闘によって、衝撃砲がエネルギー弾の1種であることは既に割れていた。なら零落白夜でかき消せる。

そして、一夏が使ったのは居合いあいぬ抜き。単純だが構えに入りさえすればあらゆる剣術の中でも最速の一撃である。

零落白夜を纏まとわせた雪片で切り払えば、十分に対処たいじょ可能だ。

「とは言え……土壇場どたんばでやってのけたのは驚きです」

冷静を装よびかっているが、その声音こわねは自分の教えた技で死地を乗り越えた事に、興奮の色が見え隠れしていた。

その隣では面白くない顔をしているセシリアが居たが。

.....

「ほお？」

銀影の肩アーマーとオレンジのバイザーを展開させ、内蔵ないぞうのセンサーを用いてピットから試合を観察していた小鳥は、感心したと言う風な声を上げる。

(今の衝撃砲……零落白夜込みの居合いあいで斬り伏せたか)

面白い対処を見出みい出したな、と心中しんちゆうで呟つぶやく。

一瞬だけ見えた白い燐光りんこう。あれは零落白夜を発動させた証あかしだろう。

衝撃砲はその性質上、実体にせよエネルギー体せよ、砲弾そのもののエネルギーを乱した時点で無秩序むちつじよに炸裂さくれつする。

しかし、零落白夜を発動させた雪片は瞬間的に倍近ばいちかいリーチになる。

その鋒きりばで砲弾を両断りょうだんすれば、炸裂すれども白式本体への影響は少なく、炸裂するエネルギーすら対消滅し、より影響は減少する。

零落白夜の「シールドエネルギーを食う」と言う欠点により多からずダメージは受けるだろうが、一瞬の展開によるダメージなど、衝撃砲の直撃に比べればマシな物だ。

「良く考えてやがる。いや、良く実行はんしやてきしやがる。反射的にせよ何にせよ、俺にそれをやる勇氣は無いね」

半ばなか苦笑いに近い物を浮かべる。

計算ずくで挑む自分の性格が正しい物だと思っっている訳でもないが、こうまで土壇場どたんばに強いとなると呆れあきが感心にさえ裏返ってくる。

「.....ん？」

センサーに謎の反応があった。



それは、エネルギーシールドの外側に居る小鳥にしか気付けない反応だ。

アリーナの外からアリーナを観察している何かが居る

——まさか

「まさか・・・ッ！」

見上げるは天頂<sup>てんちよう</sup>。そこに居る『何か』を捉え<sup>とら</sup>える。

その何かに誰も気付かぬまま、試合は続いていく。

未知との迎撃 (Intercept for unknown) 2/2

「ふっ！」

「はああー！」

日本刀にほんとうと偃月刀えんげつとうがぶつかり合う。

連結状態の牙月のもう一方も刃を振り上げ、胴を狙うが、すぐさま構え直した一夏の刀がその刃を止める。

すると、刃の上を滑らせる様に、更に踏み込んで一夏が切りかかってくる。

「うおおおッー！」

「ちいっ！」

鈴音リンインが仕掛けた近接戦は、彼女自身が弾かれることによって中断される。

(さあーて、衝撃砲の対策を練られてるって考えて接近戦に持ち込んだのは良いんだけど、どうしたもんかしらね)

さっきまでの打ち合いで分かった事が一つ。

今の一夏とあたしに近接戦闘での実力差がそんなにない

単純に距離を取らないで連結れんけつさせた双天牙月で切り合っていたのだが、どうも決めきれない。

連続回転切りは上手くかわ躲されるか、回転方向に合わせて止められる。

三日間くらい剣道の特訓をしていたらしいけど、それにしてもメチャクチャ強くなっている。

それに何より、

(そもそも何なのよ……。さっきの衝撃砲をかき消したのは)

必殺級の一撃を消した白い閃光、それが何よりも気がかりだった。

「……いや、考えても仕方が無いわね」

衝撃砲をかき消したあれが何なのかは解らないけど、衝撃砲がかき消すモノだと言う事だけは解ってる。それだけ解れば十分。

「なんかあれ喰らったらヤバそうな気もするけど。要は喰らわなけりや良いだけの話だもんね」

双天牙月を背中に構え、一夏に宣言を叩きつける。

「さあ一夏！もつともつと飛ばしていくわよー！」

「・・・ああ、俺も全力で行くぞー！」

一夏もその宣言に応じるように、刀を構える。

「はあッ！」

先に出たのは一夏、瞬間イグニッションフーレスト加速であつと言う間も無く一夏自身の射程距離に入る。

(っ、速い!?)

一瞬判断が遅れ、がら空きの脇腹に刀が振るわれる。

しかも、その刃に例の白い光が輝いた。

(間に合わないか！)

もうこの一撃は受けるしかない。

だからと言って、タダで大ダメージを食らってあげられる程諦めは良くない。

衝撃砲のチャージは済んでる、後手に回るけどそれでもダメージを与えることは出来る。

そして一夏の刀が触れようとした時。

ドッパアアアアアッ!!!

正体不明の音と光がアリーナを襲ったのだ。

それは一夏の白い光でも、衝撃砲が炸裂した音でもない。

「!?!」

思わず、互いの攻撃が止まってしまう。

客席を二重で覆うシールドを照らす光が拡散したビームだと気付く為には時間はかからなかったが、その光の中央に居る人物が誰か気付くには時間がかかった。

『・・・無事か?』

一夏と鈴音の双方に男の声で通信が入る。

それは、銀影に乗る小鳥の声だった。

驚いた一夏が、問いかける。

「な……ッ。小鳥!?何があつたんだ!？」

『乱入者だ。何が目的かは知らんが、シールドの外からお前等を狙っていた。……気をつけろ、そうしようとしていたのならそれが出来る可能性が高い。お前等は教員の指示に従って行動しろ』

「アンタはどうするつもりよ!？」

『……時間を稼ぐ。今ここであの砲撃を凌げるのは俺しか居ない。奴の砲撃でシールドが割れる可能性がある以上、観客に被害が出ないようするにはこれが最適解だ』

淡々とした口調で語る小鳥、それなりに緊張しているらしい。

『だ、ダメです!生徒にそんな危ない事させられません!』

話を聞いていた山田先生が慌てた様子で会話に介入する。

が、小鳥が緊迫した様子でその意見を切り捨てる。

「なら別の案が有るんですか?あるならさっさと行って下さい。アレが暴れだしたら多分話してる暇無いんで」

『えっと……それは……!』

「……まあ無理はしませんよ。コイツをアーリーナの外に出したら後は先生方にお任せしますんで」

肩のセンサーカバーを開き『敵』を見る。

(何なんだ、コイツは)

そこには、異様に大きな腕、頭部の複眼の様なセンサーアイ、そして何よりISでは珍しい全身装甲タイプのISが居た。

相手の装備、挙動を注視する小鳥。

(武装は両腕部の高出力ビームキャノンのみ……。スラスタの多さから見ても……高機動で掻き回して一撃でズドン、かな) その割には先程から動いわずにこちらを見ているだけなのが引つ掛かる。

気を取り直し、通信で山田先生に問いかける。

「それで、追い込む場所はとうします?海上が最善だと思っんですか」

『いや、それは無理だ』

あれ?と首を傾げる小鳥、確か自分の通信先は山田先生の筈……。

「何で千冬先生が出てるんですか？」

『気にするな』

後ろで小さく『代理です〜！』と、山田先生の声が聞こえる。  
と言うことは、席せきに割り込みマイクをぶんどつたのだろう。

『やはり横暴な人だな』と、口を引き吊つらせ苦笑にがわらいしたが、先の発言について千冬に問う。

「それで、何で“無理”なんですか？」

『何者かに非常事態の隔壁かくへきシステムがハックされた。整備科に対処させてるが少なくとも十分はかかる』

「・・・つまり。俺一人でやれ、と？」

『それはお前自身の判断だ。お前、部隊指揮ぶたいしきは得意だろう？』

言われた小鳥は、『了解』とだけ言って静かに通信を切る。

「・・・まったく、冗談キツイぜ」

観客が居る以上、一夏に零落白夜でエネルギーシールドを割つてもらう訳にも行かない、となると一夏達の増援ぞうえんは望めない。

とは言え何もしない訳にもいかない。

思考を纏まとめ上げて行動を起こす。

「まずは、客の安全確保あんぜんかくほからだな」

隔壁が降りていると言うことは、閉じ込められていると言うことだが、裏を返せば堅牢けんろうな檻おりに守られていると言うことでもある。眼前がんぜんの

『アレ』さえ何とかなればおおよそ問題は無いだろう。

アイアス一振りの大剣を構えた小鳥は、上方の敵機へと瞬時イゲニツジョン・ブリスト加速で距離を詰

める。

(まずはコイツをアリーナの外に追いやる！)

それに対して敵は回避行動をとるが、小鳥はそれを予測し強制的に同じ方向へと無理矢理に方向転換する。

本来、瞬時加速は方向転換を可能とするものではないのだが、肩アーマー、脚部にさえスラスターのある銀影のスペックがあれば、それは不可能ではない。

圧倒的な速度で謎のISに激突した小鳥は、左手で持った大剣大剣越しでシールドチャージを行う。

勿論、相手は距離を取ろうとするが、

「エネルギー拡散フィールド、展開ッ！」

『アイアス』から展開されるエネルギー拡散フィールドが、スラスターやPICの指向性を奪い、行動不能に陥らせる。

「リアアアッ!!」

更にスラスターを吹かし、敵諸共アリーナから外に出ていく。

アリーナの外はおろか、学園の領域さえも越え加速していく両機は、緩やかな放物線を描き、学園から3kmほど離れた太平洋へと、水柱を上げる程の勢いで着水する。

(オラアッ！)

水深10m程で勢いが完全に殺されるの確認して相手を蹴り飛ばし、相手を沈める事でさらに距離を取る。

『……………』

距離が空いて好機と見たのだろう、奇形のISが右手を小鳥に翳して主砲を放とうとする。

そうと知りながらもただ佇むだけで、小鳥は回避する素振りさえ見せない。

特に妨害もされなかったビーム砲は、海中で投射され。

(はッ、馬鹿め)

奇形のISの右手が爆発した。

『……………』

水と空気では密度が違う、空気が1なら水はおおよそ1000、単純に考えても抵抗値は1000倍。ビームの集束率が途轍もなく高くない限り、1000倍以上の出力が必要となる。

更に言えば、密度が高ければそれに応じて熱交換も高効率で行われる。

つまり、奇形のISの右腕の付近の海水の温度が、ビームの熱量によつて急激に上昇、沸騰し水蒸気爆発を起こしたのだ。

「ふッ……………!」

そして爆発したならば、次に起こるのは収縮だ。

急激に温度が上がって水蒸気と化した海水は、すぐさま水に戻る

物、水素と酸素として水面を<sup>め</sup>指す物に別れるが、急激に<sup>しゅつ</sup>周囲の海水の密度が下がることに<sup>か</sup>代わりは無い。

無くした物を<sup>おぎな</sup>補うかのごとく、周囲の海水が<sup>さつ</sup>殺到し始め、奇形のI Sは身動きが取れなくなる。

僅かに<sup>わず</sup>引き寄せられる感覚にあわせて前方の敵機へと突撃する小鳥。

銀影には水中戦用のジェットエンジンは無いものの、出力の高いP ICがそれを<sup>あま</sup>補って<sup>あま</sup>剩りある速度を叩き出す。

近接戦闘の距離まで近付かれた敵機は回避が間に合わないと<sup>さと</sup>悟り、腕を振って応戦するが、態勢を低くさせることであえなく<sup>かわ</sup>躲され、腹部を切りつけられる。

(よしっ！)

『……………』

確かな手応えを感じる小鳥だが、無感情な敵は何のレスポンスも無く、複眼でこちらを見つめるだけだ。

正面の敵をオレンジのバイザー越しに見据え険しい顔をする小鳥は、その無反応さに疑問を感じ、ふと考える。

(何者なんだコイツは？さっきから異常に反応が鈍いし遅い……。軍の人間でもこれほど無感情じゃねえぞ)

まるで意思を感じない。

目の前の敵は一夏や鈴音を狙って居たにも関わらず、今は能動的に敵対行動を起こさない。

先の二回のセッションも、こちらから動いた事に対してカウンターを当てる様に反射的な行動しか起こしていない。

そう、それはまるで……。

(まるで、人間が乗っていないみたいだ)

だが、その考えを自分で否定する。

ISは人間無しでは動かない。機械を通して起動・停止は出来るが、ここまで動作する事は絶対にあり得ない。

『……………本当にそうかしら？』

(……………いきなり話しかけてくんじゃねえよ、ビックリするだろ?)

頭に響く少女の声に冷静に心の声で返答する小鳥、声の主はクスク

スと笑い、小鳥の事をお構い無しに語り掛ける。

『知っているでしょ？ 私達は少なからず意思を持つている』

（つたく。前はダメ出し今日はヒントかよ。まあでもお前の口振りから察するに・・・そう言う事なんだろう？ 銀影）

そう、彼女の名は『銀影』

小鳥が今乗り回している機体と同じ名前なのは、偶然でもなんでもなく。IS『銀影』のISコアに宿る疑似人格である。

実はこれまで小鳥が銀影に乗るたびに彼に話かけていたのだ。

小鳥が初めて銀影に乗って一夏に通信をかけた時やけに機嫌が良かったのも、彼女が居たことに研究の未来を見ていたからだったりしている。

『まあね、でも目の前の子がそうなのかは私にもわからないわよ』

（は？ コアネットワークで接触できねえのか？）

『そのネットワークから切断されてるの。あなただってアレが二人を狙ってる時にセンサーでしか存在を確認できなかったでしょ？』

なるほど。と、納得する小鳥。

ISはその特性として、『コアネットワーク』と言う特殊な電子ネットワークを所有している。

そのネットワークはISの本来の目的である『宇宙空間の開発』の為の通信機能と座標特定機能があり、ネットワークに接続されている限り恒星と恒星の距離があつたとしても、それでも座標が割り出せるらしい。

俄には信じられないが、どうやらあの機体は単独起動を可能にした上、あの機体のISコアを説得して、機械による自動制御を行っているらしい。

『まあでも、OSはそこまで優秀じゃないみたいだし、あなたがやった戦闘条件の変更は効いてるみたいだから、テイアーズの時みたいな下手な使い方はしないでよ』

（善処するさ）

適当に返事をして会話を切り上げた小鳥は、目の前に意識の焦点を合わせ、少女に対して告げる。



(行くぜ・・・銀影ッ！)

と、距離を詰めようと前傾姿勢をとったその瞬間。奇形のISがまたもや小鳥に向けて右手を翳した。

何のつもりかと瞬間動きを止めるが、そんな事は意に介さず、敵はビームを撃ち放つ。

〔!?!〕

小鳥も銀影も驚き、動きが硬直してしまう。

どれ程未完成なOSだといえ、真逆同じ愚を犯す程愚かではあるまいと思っていたが故に、その虚を突かれてしまった。

その隙を突き、奇形のISは海面へと浮上していく。

(ッ・・・しまった！)

海中で主砲が満足に使えないなら海の上に行けば良いのだ。

恐らくこのビームは目眩しました。いかに銀影の『眼』が良くとも、自分で得た情報の方がISの送ってくる情報よりも早い。

水中における単純な速力では小鳥に分があるものの、通常空域戦では恐らく相手の方に軍配が上がるだろう。

遅れて小鳥も追跡し始めるが、その距離は遠い。

(水中ならこっちの方がまだ速いが——。クソッ、出遅れた！このままでは・・・ッ！)

焦る小鳥。

水面まで後8m、瞬きをする間に相手は海面を突破するだろう。

そうなればヤツはIS学園に向かい、一夏や鈴音とまた事を起こす事になる。

(まだ五分しか稼げてねえってのに！)

千冬はハックを解くのに数十分はかかると言っていた。

エネルギーを吸収する特性上、瞬時加速は水中では使えない。

奇形のISが海上に出る。万事休すかと思ったその時。

奇形のISが海中に飛び込んだ。

〔!?!〕

何事かと思うが、全速力で相手を追っていた勢いはそう簡単には殺せない。海上に出た小鳥は、そこにもう一機のISを目にする。

「大丈夫か、オドリ」

「刹那……何でここに」

そこには、白と灰色の専用機『エクシア』を纏う刹那・F・聖永が居た。

無表情なまま、刹那は小鳥からの問いかけに答える。

「チフユから加勢に向かえと指示があった」

「……成る程。学生寮にカンヅメのお前なら比較的簡単に外に出られるって訳だ」

右手のソードが展開されている所を見るに、奇形のISは刹那に叩き落とされたのだろう。

しかし、奴はまだ倒れていない。焦った風な口調で小鳥は刹那に指示を出す。

「つと、駄弁<sup>だべ</sup>ってる場合じゃねえ。刹那！ヤツが海中から出ないように」

牽制射撃<sup>けんせいしやげき</sup>を、とは続かなかった。

「ぐあッ!?!」

もう既に敵は海上に居て刹那にその主砲を撃ち込んでいたからだ。

「刹那ッ!?!クソ!」

右の持ち手だけを折り曲げ、射撃モードで迎撃<sup>げいげき</sup>を行う。

剣の左右から交互<sup>こうご</sup>に光弾<sup>こうだん</sup>が発射され、そして予想していた事ではあるが、奇形のISは小鳥の光弾を容易<sup>たやす</sup>く躲<sup>かわ</sup>す。

(せめてセシリアの半分でも命中率があれば……!)

敵の機動力もさることながら、それ以上に小鳥の射撃センスが壊滅的な事が回避<sup>ようい</sup>を容易<sup>たやす</sup>にしている。

焦り顔の小鳥は巨剣を二振りに分割することで、連射数が向上する。命中数が上がった事で、奇形のISは右腕で身体<sup>かば</sup>を庇<sup>かば</sup>う。

「刹那!無事か!?!」

『大丈夫だ……。オドリ、指示を』

落ち着き払った声で返答する刹那に取り敢えずの指示を出そうとした瞬間。

「ッ……!?!」

敵機がコマの様に回転し、その主砲を乱射し始めたのだ。

刹那、小鳥はともに右へ左へビームを躲す。

「クソツ・・・これじゃ近付けねえ・・・!!」

『オドリ、オレが接近する』

「行けんのか!？」

『恐らく。問題は、搭乗者に致命傷を与えかねない』

刹那の言う通りに行かせようかと考えるが、相手の弾幕が激しすぎて考えてる暇さえ無い。

迷う時間さえ惜しい小鳥は、一つ深呼吸してヤケクソ気味にそれを了承する。

「刹那、あれは無人機だ！手加減無しでやれ!!」

『了解！エクシア、刹那・F・聖永。目標を駆逐するツ！』

宣言と共に空を駆ける刹那は、小鳥に告げた通り、先程以上の機動で光弾を躲し5秒足らずで3m程の距離にたどり着く。

「あああッー」

右の剣を大振りで振り上げる刹那、一気に距離を詰めて奇形のISを切り付けるようだ。

だが、相手もそれを見抜き回転を止め刹那を狙い撃つ為に右手を翳す。

刹那はそれを分かっているが止まらない。

そのビームが放たれるのを眼前で捉え。

右手に握られた剣でビームを切り裂いた。

そして、返す刀で横に剣を振るう。

その剣は腰部の傷に接触し。

「うおおああー」

その機体を横一文字に両断した。

切り裂かれた断面からは機械の部品がボロボロと溢れ落ち、その操縦者が人間でないことを物語る。

それを見ていた小鳥も、剣の威力に驚きの声を上げる。

「凄え・・・一刀両断かよ」

もう勝負はついたと見た小鳥は、剣をバックパツクのラックに預け

刹那のもとへと飛ぶ。

刹那は剣を折り畳み。戦闘状態を解く。

「凄いな。一刀両断と来たか」

「ああ、オレも驚いている」

「だろいな」

フツ、と笑う小鳥。

肩のセンサーを使って刹那が無傷であることを一通り確認して、海上に漂う奇形のISに視線を落とし千冬に連絡を入れる。

「千冬先生、こちら小鳥遊。所属不明機との戦闘を終了しました。これより不明機の残骸の回収と学園への帰投を開始します」

「・・・勝ったのか？」

「ええ。俺がと言うより刹那が、ですが」

「そうか。搭乗者が何者かわかるか？」

「それが・・・あの機体は無人機でした」

小鳥の報告に千冬が無言になり、アリーナの指揮室が騒然としているのが聞こえる。

努めて冷静な声で小鳥に問う。

「証拠はあるか？」

「傷付けた時、武装が暴発した時の反応が異様に薄かった事くらいしかありませんでしたが・・・あ、あと事後証拠になりますが、両断された敵機の中身が機械でした」

『お前・・・確証無しに真つ二つにさせたのか』

はあ、とため息を吐いて小鳥に苦言を呈す千冬。小鳥は悪びれもしないが、それでも少なからず胆は冷えていた。

もし、アレが無人機でなかったらと考えると恐ろしいことこの上ない。

「まあ兎に角、この事は箝口令を敷くんでしょう？ならアレの回収も俺達がしますよ」

『ああ、任せろ』

了解、と言って通信を切った小鳥。

「刹那、下半部の方の回収は任せろ。俺は上半身の方を回収する」

「了解」

刹那に下半身の方を任せ、海面に浮く残骸の上半身に手を伸ばしたその時。

「がッ!？」

奇形の I S が再起動し、小鳥の首を掴んだのだ。

「オドリッ!？」

(クソッ……!油断した!まだ機動出来たのかよ……!?)

もしこの I S が独立稼働ではなく通常と同じ様にネットワークに接続した上での起動であれば少なからず気付けた筈だ。

小鳥の首を掴み、上半身だけとなった奇形の I S は小鳥ともども陸地へと飛び込む。

虚を突かれ思考が上手く出来ない小鳥は、コンクリートの岩礁に背中を強かに打ち付ける。

「ぐッ!……う」

ブレードはラックに預けたままだ、どうやっても取り出せない。

左手で首を絞める腕を握る。

「て……めえ……!何がしてえんだ、お前は……!」

答える声が無いと分かっているにも関わらずには居られない。それは、目の前の I S の頭部に4つあるセンサーが憤怒に狂った様に輝き、まるで殺意を湛えているかのように見えたからだ。

だが、小鳥の予想は裏切られる。途切れ途切れの音声メッセージが届いたのだ。

『これ……ハ……カッて、あなタガ……させテ……イタこと、でシヨウ?』

その声を聞いた瞬間、小鳥の眼は見開かれ。その心は怒りに支配された。

「ふぎっ、けんなアアッ!!」

空いていた右手を腰にまわし、コードに繋がれた棒を手に取ると、その棒からは桃色の光の束が顕出する。

そして、小鳥は躊躇うことなく光の剣で相手の胸を貫いた。

.....

「.....」

コンクリートの上に置かれただけの半分の身体、左胸から右の背へと熱で一直線に穴を開けられたその側で、ISを収納し、自らの足で立つ小鳥はそれを見ていた。

「.....あ」

それで分かった、解ってしまった。

このISが伝えたかった事が何だったのかを。

「う.....ああ」

呼吸は乱れ、世界から眼を背けるように右手で右目を被う。

「ああ.....っ.....!」

その顔は苦痛に歪み、身体はくの字に曲がる。

それは彼自身の過去、もうするまいと誓った忌まわしき過ち。

繰り返された現実が彼の頭の内で甦り反響する。

「はあっ。はあ.....っ!」

泣き出しそうな顔になる。呼吸が荒くなる。

右目に当てていた手を離し、恐る恐るその手のひらを眺める。

「!？」

海水にびしょ濡れの右手が、一瞬血に濡れた様に見えた。

4年前の過去が、責める様に小鳥に押し寄せる。

下半身を無くしてブルーシートの上で横たわっている黒髪の女性。

後ろでは見知った顔の人間がISに乗り、金髪の女性が乗ったIS

に切り付けられている。

周りは機銃や突撃銃を構え、金髪のISに撃ちまくっている。

「あ.....ッ。ああ.....!」

息が出来ない。

涙をボロボロと溢して、脇の血で染まった両手で顔を被い泣き咽ぶ遊。

ISを装着したままの刹那が、心配そうな顔をして小鳥の許へ駆け寄る。

そんな景色を見る余裕よゆうも無い小鳥は、記憶に押し潰つぶされる感覚を抱いて。

「……オドリ！」

小鳥遊は奇形のISに覆い被おさる様に倒れた。

……

夕日が白いカーテンを茜色あかねに染め、同じように部屋中の無機質むきしつな白を赤く照らしている。

小鳥はそこで眼を覚ました。

「……(こ)は」

茜色を溶かすシーツをどかし、上半身を起こした小鳥は、胡乱うろんな頭で周囲を見回す。

空気に漂ただよう無機質な殺菌剤せつきんざいの匂い。手摺てすりの付いたベッド。それを囲かこむ様に天井に配置されたカーテンレール。開かれたカーテンの奥に見えるスライド式のドア。

「……学園の救護室、かな？」

ダイバーの様なISスーツの上から医療用の衣服を纏まとっていると  
言う事は、運び込まれてからそれなりに時間が経っているらしい。

身体のどこにも痛みを感じない事を確認した小鳥は、これまでの事を確認する。

「……確か、クラス代表対抗戦の時に高機動砲撃型のISが乱入してきて、俺がそのISをアーリーナの外に追い出して、刹那がそれを真つ二つにして……」

そこで言葉が止まる。

「トラウマがフラッシュバックして倒れちゃった、か……」

はあ、と溜ため息を吐ついて、片手で俯うつむく頭を抱える。

と、頭が下を向いた事でうなじに髪がかかり、いつもはヘアゴムで纏まとめている筈の後ろの髪が纏まとめられていない事に気がつく。

「つと……。ゴムゴム」

辺りを見回してヘアゴムを探す。

左に備え付けられた柵たなの上には見当たらない。

中にあるのかと引き出しに手を伸ばそうとしたその時、スライドドアが音を立てずに開けられた。

「ああ、眼が覚めたか」

「千冬先生」

ドアを開けたのは、小鳥の担任である織斑千冬その人であった。

いつも通りの鋭い目付きで小鳥を見つめる千冬は、部屋の隅すみに置かれた椅子を持ち運び小鳥のベッドの傍かたわらに着席する。

「意外ですね。まさか一番に見舞いに来るのが千冬先生だとは」

「偶然だ。それに、私はお前を見舞いに来たのではなく、お前から敵の話聞きに来たただけだ」

「それでもですよ。流石に誰も来なかったらそれはそれで寂しいですからね」

はははっ。と笑ってはにかむ小鳥。

珍しく可愛げのある回答に調子を狂わされる千冬。

「あ、一夏達は無事ですか？観客に被害は？」

「待て。いっぺんに話すな。・・・一応あの緊急事態で人的被害は出ていない」

「ああ・・・よかったあ」

本当にあの小鳥遊なのか。その台詞はいつもの探るような口調も、虚飾も見られない。

何かと釈然としない千冬に小鳥が問いかける。

「そうだ、話の前にへアゴムありませんか？その。アレがないと落ちて着かないんです」

「ああ、一段目の引き出しにある筈だ」

「ありがとうございます」

言つて、小鳥は引き出しからへアゴムを取り出し髪を纏め上げ、いつもの髪型に戻す。

「やっぱりこれだな。で、話と言うと何を聞くんですか？大体は刹那と状況証拠でカタが付く筈ですよ」

いつもの調子に戻った小鳥は、千冬の用件を先回りした問いかけを



行う。

小鳥の調子が戻った事に引かれ、千冬も調子を取り戻す。

「単刀直入に言えばお前がアレを無人機だと気付けた理由を聞きたい。それと、なぜあの場で気絶していたんだ？」

「答えるのは吝かじやありませんが、その答をどうするつもりですか？ その返答の如何次第で俺は秘密を一つ二つ抱えることになりますよ？」

冗談と仄めかす様な台詞回し、本格的に調子を取り戻しているようだ。

食えない男だと溜め息を吐いた千冬は、気を取り直して問う。

「何について秘密にする気だ？」

「俺のIS・・・銀影について秘密にする気です。それと、倒れていた理由は・・・。まあ、察して下さいとしか言えませんな」

皮肉気に唇を歪めて千冬に笑いかける小鳥。

つられて口角が上がった千冬は、小鳥への事情聴取を始めたのだった。

## 幕間 I

### Considerations (真実の見極め)

IS学園の地下深く、一部教員しか立ち入れないセクションで、1  
—I 副担任の山田真耶教員がISの残骸と睨み合っていた。

(やっぱり、どれだけ探しても該当機体はゼロ……。まあ、無人機の  
時点で何となく察しは付いていましたけど)

上半身と下半身で真つ二つになっている残骸は、本日小鳥 遊と刹  
那・F・聖永が撃墜した、正体不明の無人機だった。

・・・サラツと言っているがメチャクチャである。

ISは人が乗らなければ稼動しない。そういう風に出ているか  
ら。

ところが目の前のそれはそんな原則の存在を嘲笑うかのように実  
在している。

小鳥くんからの情報が正しければ、この機体はコア・ネットワーク  
から独立し、その上で無人機の技術を搭載されていたと言う。

臨戦状態でコア・ネットワークからの独立と言う技術は、今の所どの  
国も開発していない。

(ただ・・・そんな事がその程度の事に思えてしまうのも問題ですよね)  
でもそれも仕方が無いのかもしれない。

この無人機に使用されていたISコアが未登録のコアだと知れば、誰  
もが同じような気分になるだろう。

本人が製造方法を発表していないために、ISコアは篠ノ之博士し  
か作れない。その上全てのISコアは白騎士事件で注目を集めて以  
来ナンバリングされており、各国のISコアの現状は国連のデータ  
ベースに報告、管理されている。

それは篠ノ之博士が最近まで所有していた銀影ですら例外ではな  
い。

そのため、そのISコアに割り振られたナンバーを国連のデータ  
ベースに問い合わせれば、そのISコアが所属している国家や、管理

している企業（せいきやう）が一目で分かる、と言う訳だ。

（まあ・・・その全てが真実である確証は無いんですが・・・）

恐らくはそのデータベースに報告されている情報の一部は嘘（うそ）の情報だったり、不正（ふせい）に変更（へんこう）されていたりするのだろう。けれどISコアの情報がある事に変わりは無い。

だと言うのに、そもそもこのコアの情報（けいほう）が無い。

ISコアが国連のデータベースに登録されていない、それはつまり登録以後に新造されたISコアという事になる。

そこから考えれる犯人は、ISコアを作れるたった1人の人間にまで絞（しぼ）られてくる。

言うまでもなく、篠ノ之博士の仕業（しわざ）だろう。

（よりにもよって篠ノ之博士がこんなことを・・・）

彼女をよく知る先輩、織斑（おりむら） 千冬曰く『変態』『迷惑（めいわく）以外（いがい）を掛けた事が無い』『理解しようとするより対処法（たいじほほう）を考えるより後始末（あとしまつ）を考えた方が建設的（けんせつてき）』・・・等々、散々な言われようだが、もしこれが篠ノ之博士の犯行だと言うのなら、そう言われる理由もわかる気がする。

ストレス性の溜息を吐き出して資料作成を進める。

一応管轄（かんかつ）は国連なのだが、運営は日本がやっているの、同じ物を二つも書かなければならないと言う面倒な事が頭を悩ませるが、仕方ないと自分を納得させる。

と、キーボードを叩き始めると、エアロックが解除される音がした。

振り返って見てみると、件の織斑先生と――

「お、小鳥くん!？」

茶色の髪を後頭部で纏（まと）め、その影響で引つ張られて細長くなった半開きの目の青年、無人機と戦闘を行った小鳥遊が居た。

その服装はISスーツに医療用のガウン、どうやら意識を取り戻して直ぐに来ているらしい。

「って、何で居るんですか!？」

ここは教師、生徒を問わず基本的に立ち入り禁止である。

そこに小鳥がいるのは流石にまずい。

「私が連れて来た」

「えっ、大丈夫なんですか!？」

「問題無いだろう、コイツは既にこの機体の事を知っているし。何よりこの機体の素性を調べるのに役立つ」

そう言つて顎をしゃくる千冬、小鳥はそれに苦笑いしていた。

寝起きに事情聴取されて、首根っこ掴まれて機密情報を取り扱う一般人立ち入り禁止の場所に連れてこられて・・・考えてみると中々散々な目に遭つてるとも言えなくも無い。

「そら、自分から言い出したんだ。さっさと解析しろ」

と、小鳥の肩を叩いて急かす千冬。

それを聞いた麻耶は驚いた表情を小鳥に見せる。

格好から勝手に連れてこられたと考えていたが、自分から希望してここに来たらしい。

「小鳥くん、自分で来たんですか?」

「ええまあ。事情聴取の時に『無人機の情報が欲しい』と言つたらこのザマですよ」

肩を竦めて皮肉気に口元を歪める小鳥。

それまでに何があつたかと言うと・・・。

.....

「・・・で、そこまでしか話せないのか? 肝心の無人機に関して殆ど喋れないようだが?」

「だから言つたでしょう『無人機の確証については喋れない』つて」

小鳥への聴取が終わつた頃、聴取を開始したのが夕焼けも沈み始めた頃だつたと言うのもあつて、辺りは少し暗くなつていた。

千冬は椅子に座つたまま、俺は看護室のベットに胡座をかいて状況説明と質疑応答をしていたのだが。

話せない事があると言つたとはいえ、聞かれた事の四割を企業秘密にしてしまったのは流石の千冬でも見逃せないらしい。

とは言え、下手に話すと俺と銀影の間にある秘密をバラす事にもなりかねないので、詭弁で納得して貰おう。

「結局けつぎよくの所、千冬先生が秘密にする事を了承りようしやうして取調とりしらべを始めた時点で、秘密の責任は俺にはありませんよ。それに、原因げんいん究明きゆうめいにはあまり関係無いでしょう。答えられない質問の殆どが銀影ぎんえい発信はっしんの情報でしように、そんなの時間をかければいずれ分かるし、刹那せつなの情報で補完ほかん出来るだr・・・でしょう?」

思わず上うわつ面つらだけの敬語けいごが剥はがれそうになったが、まあ、頭あたまを殴打おうだされてないのなら大丈夫だろう。

「俺がこれ以上の話をするなら、せめてあの無人機むじんきの情報が欲しい所ですね。情報じやうほう次第だいならアレを送り出した勢力せいりきまで絞しぼれらすヨ?」

戯おどけた口調くちやうで話題わだいてんかん転換てんかんを持ちかける。

これ以上深掘りふかほされたくないので、交渉こうしやうに気をとらせよう。

「ふむ、じゃあやってみせろ」

「へ?」

「情報が欲しいんだらう?なら来い。あの無人機むじんきのある所まで連れてってやる」

「え?良いんですか」

「当たり前だ、その気がなければ言いはしない」

・・・マジか、

本当は話題を逸えらせられれば良かったのだが、まさかそれが了承りようしやうされるとは思わなんだ。

・・・

「・・・そんな訳で千冬先生の案内によって禁止区画きんしくわに入ることになった——と言う訳です」

んで、と一息置いて本題に入る。

「どこまでわかってるんです?アレについて」

「は、はい」

無人機を送り出した勢力を洗い出してやる、と大見栄切おおみえった手前てまえ、解析かいせきの為ための情報が欲しい。主に外殻面ハードウェアについての情報が。

と、それを問われた麻耶はいつもと同じように緊張した様子で

情報端末を差し出す。コレを見ると言う事なのだろうか。

それを受け取って画面に映る情報に目を通す。

(凄いな……。一人で良くここまで調べた)

装甲素材、センサー方式、仮想ジェネレーター出力、仮想エネルギー回路、両腕部ビームキャノンの構造 etc……。IS に関わる事だけでなく、測定出来るだけの無人機のシステムに関する事までもが事細かに記述されていた。

特に目を引くのはIS コアの欄。

『未登録』と記されたそれには、視線を注がずにはいられなかった。

『未登録』て……。これ犯人殆ど絞れたのと同義じゃないですか」

未登録のコアを所有出来るとすれば、心当りは一人しか居ない。

と同時に、某篠ノ之束に襲われかけた人間として、今回の件を引き起こしそうなのもアイツしか居ないな、と得心せざるを得なかった。

……と言うか、

「参ったな……。ここまで状況証拠が挙がってたら俺の出番無いですよ」

犯人が一人に限られた今、俺に出来ることなど無いに等しい。

一応この場に置いて俺の役割はプロファイリングだ、まだ色々出来る事は無いことも無いだろうが、その犯人が判っている時点で最早お払い箱である。

「良いからさつさとやれ」

千冬からの無慈悲な一言。

まあ彼女の言う通りこんな所で出来る出来ないとゴネていても仕方が無い。肩を竦めて先に断っておく。

「……まあ、一応やると言った手前やることはやりますけど、情報量少なくても文句は言わないで下さいね」

言つて、集まった情報、特にハードウェアの情報に注力して解析を始める。

「……………」

端末に表示される情報を、先程まで麻耶の座っていた椅子にドカリと腰を下ろして目を通しつつ。その手を動かして別の資料を呼び出

す。

空中投影映像  
ホログラフイに表示するのは三種の第二代型IS。

ラファール・リヴァイヴ、虎龍、ブラック・ハウンド

それぞれがAEU、人革連、ユニオンを代表する機体だった。

現在無関係な筈の機体三機を並べる事に首を傾げる千冬と麻耶だったが、こちらとしてはいたって真面目である。

そんな疑問に耐えかねてか、麻耶が質問を投げて来た。

「・・・何してるんです?」

「援助組織の痕跡探し」

画面から目を離す事なく、淡々と告げる。

「・・・ISは、コアがあつて、筐体があつて・・・まあ、色々な物を扱って成り立つ代物。例え、相手が天才だろうが天災だろうがモノが必要になる。よしんば仮に何かの交渉を行つて、どこかの勢力から物資を援助されたでしょう」

「・・・だとしたら。」

「だとしたら、何を材料にした? タダで物貸しをする奴はどこにも居るまい、だとしたら何かしらの材料が必要だろう」

三つの機体、それぞれのエネルギー回路の透過模式図を、無人機のそれに照応させる。

「物資、情報、技術・・・考えられるのはこの三つ。物資・・・はまあまず無理だろうな、今回はその物資を貰い受けてる訳だしな」

物を欲しがってる者が物を持つとは思えない。

「じゃあ、情報と技術と言うことに・・・?」

「情報って線も薄い。相手は特A級はおろかS級指名手配の人物だ、三つに一つって事は無いだろうが、あの束が言う事をまともに信用する奴はマトモじゃない」

装甲素材、フレーム素材、その構成を見比べ、類似点、相違点を弾き出す。

「それに、束が世界から注目されているのは、誰も届かない技術力にある。なら十中八九交渉材料は束の技術の一部だろうな」

「つでも、それがどうして援助組織の痕跡に繋がるんです?」

その仮説に納得しながらも、同時に疑問にぶつかって首を傾げる麻耶。

そのまま言っても面白くないので、一つ問題をふっかけるとしよう。

「さて、どうしてでしょうか？」

「え？ええつと、なんででしょうか・・・？」

「当惑する麻耶に代わって、千冬が口を開いた。

「・・・このISに援助勢力が欲しがっている技術が使われている可能性が高い。という事だな」

「大正解。・・・まったく、そんな早く答えないでくれ、麻耶先生が困つてて面白いトコだったのに」

「教師で遊ぶな教師にタメ口を聞くな」

「あいてっ」

バシンツと、端末の面で叩かれる。その後ろでは先の発言に『あはは・・・』と麻耶が引き笑いしていた。

気を取り直して、

「技術だったら何だつて良い訳じゃない。最終的な目的は取得した技術を自分の技術へと転用する事・・・まあ、束が持つ先端技術も魅力的だろうが、モノにできなきや無意味だ・・・です。そう考えると、すでに実用の目処が立っているか、転用しやすい技術を注文するでしょうね」

口に出すことは無いが、その考察に少なからず胆が冷えていた。

そう言う注文があると云うことは、束を援助している組織はそういうテクノロジーを確立させている、或いは確立させようとしている可能性が高い。

正直言つて余りに危険な思想だ。

(戦争の意味さえ否定する気か、『組織』とやらは)

仮称として『組織』と呼ぶが、この『組織』は兵士が死ぬ意味を戦場から奪おうとしているらしい。

反吐が出る。

怒りを通り越して呆れの溜息まで出て来そうだ。



—— その上で、その組織にアタリが付きそうな事が、俺にとってストレスを増加させる事だった。

「はあああああああ……?」

クソほど大きな溜息を誰にでも聞こえるレベルで吐き出す。

理解は出来るが、同調は出来ないその思想が嫌悪に満ち溢れた溜息を生み出させた。

怒りに駆られたまま、口を開く。

「……多分だが、援助組織が判った」

「ほ、本当ですか!?!」

ああ、と、その結果にうんざりしながらも、力無く返答する。

少しばかり言うか迷ったが、千冬の刺す様な視線に急かされ、溜息混じりの声で絞り出すように結論を出す。

「……結論から言うと、束のバックにはユニオン、少なくともアメリカがついてる……!クソ、最悪だ……!よりもよってあの国と組んでいるだ?!」

自分の出した結論が間違いであって欲しい心を躊躇い無く吐露する。

見れば、信じられないと言う風に麻耶は絶句し、千冬は鋭い瞳のままこちらを見ていた。

その千冬が問う。

「根拠は?」

「この無人機の腕部内蔵式ビームキャノンの存在そのものが根拠だ」

言って、情報端末のパネルを叩く。

そこには完全状態の無人機の透過模式図、その腕部の拡大図があった。

「AEU、ユニオン、人革連のISのコンセプトは、それぞれの勢力で分かれてる」

一度閉じた三機の量産型のホログラフィーをもう一度開く。

一機一機に指を刺しながら説明を始める。

「人革連はスペックより量産性。AEUは汎用性の高い本体。ユニオンは本体より武器……と言った風にな」

細長い目が愉悦に歪んでいるのは、久方ぶりにISの構造を詳しく見ることが出来たからだろう。

三機の量産機の図を仕舞い、続けて無人機の構造図を大きく投影した。

骨子、エネルギー系、センサー系、そのどれもが複雑に絡みあつて出来たそれは、専門知識の無い麻耶や千冬にも、その特別さをわからせるだろう。

「コイツのコンセプトは凡そ『高機動砲撃型』しかもスラストターてんこ盛りのエネルギー回路が超複雑で、コスト度外視も良い所だ。こんなゲテモノを人革連が作るとは思えない」

残るは二つ。しかし、その特性ではアメリカを黒幕だと睨む小鳥の予想では矛盾が起きる。

「それじゃあ、AEUが関わつてゐるって事になりませんか？」

確かに、先程の説明だと、機体の汎用性を求めるのはAEUの特徴だった筈だ、それではAEUが怪しくなり、ユニオンを怪しむ見立てが立たなくなる。

だが、そう判断したのは別の理由があつたからだ。

「言つただろう？この機体のミソは腕部ビームキャノンだつて。・・・これを見ろ」

そう言つてホログラフイーを移動させ、腕部アーマー内のビームキャノンのエネルギーパスを示す。

全身装甲が故に実体を持ってラインを繋ぐ事ができるその機体には、分かり易くエネルギーコードが・・・

無かつた。

「この機体のビームキャノンは、エネルギー供給を実体コードではなく、接触式のエネルギーパスで行っている」

「接触式のパス・・・？」

「ああ、普通ならあんな大出力を使うなら実体のコードを使うだろうに、この機体は基本的に普通のISと変わらない無線式どころか、本体装備なら使う筈も無い接触式のエネルギーパスなんかを使つていやがる」

接触式での供給は無線式よりは効率は良いものの、それなら直接ラインを切らずに制御した方が効率は遥かに高い。

だと言うのに、わざわざ接触式のエネルギーパスを使用しているその理由。それに一つ心当たりがあった。

「恐らくだが、この機体の腕は腕にビームキャノンが付いている訳では無くても無理矢理ビームキャノンに腕としての機能をはつつけると言った方が正確だな」

そう、接触式のパスを使うとしたら、マニピレータを介して取り扱うビーム兵器といった所だ。

それならば援助組織は携行ビーム兵器の技術を欲しがっている事になる。

「成程……連中の求めている技術は携行兵器。だから兵装に力を入れるアメリカの可能性が高い、と言う事か」

「そう言う事……。正直言ってもまだAEUや人革と組んでた方が収拾はつきそうなんだがねえ」

背もたれに深く背を預けて溜息混じりに言葉を紡ぐ。

「アメリカは——建国以来負けを知らない。第一次ではほぼほぼ裏方、第二次では本国へ誰も足を踏み入れられず、100年前の中国との大戦でも結局ワシントン、ニューヨークにまで被害が及ぶ事なく痛み分け。敗北も痛みも知らない奴等が束の技術を手にしたら何をしでかすか……。正直言っても分かったモンじゃない」

吐き捨てるように、そうあって欲しくない未来を想像する。

と、千冬から視線を外すと、血色の悪い顔をしている麻耶が居た。どうやらシヨックの大き過ぎる話題だったらしい。

それもそうだ、そんな血みどろな話題が現実味を帯びることなそうそうあるまい。

皮肉気に口を歪めて今までの言葉を茶化す。

「ま、気にしなくても良いですよ。コイツは元専門学生の戯言だとも思っていただければ」

実際、アメリカと束がつるんでいる確証は無い。身も蓋もない言い方をすればこれはまだ憶測でしかない、結論づけるにはまだ早よう

に思える。

「それでも気休めにはならない、麻耶も千冬も浮かない顔を浮かべ、そう言う茶化しを入れた俺ですら、その心中は穏やかではなかった。「どちらにせよ、可能性の範囲を出ないのであれば、報告書に載せる必要は無いな？」

「・・・まあ、でしょうね。こんなのは書類に書くべきじゃない」千冬が口にした台詞に同意する。

この仮説がたとえ真実に届いていたとしてもそうでなくても、外に洩らせばアメリカとの軋轢は免れない。

真実の所在はどうであれ、ひた隠しにした方がよっぽど建設的だろう。

ここに居る三名の内二人が隠蔽に前向きなのを知ったからか、麻耶はホツとしたような顔をして、その提案に同意した。

「そう・・・ですね。この事は報告書には書かないでおきましょう」どんなにIS学園が中立地点だとしても、運営しているのは日本だ。直接的でなくても庄のかけようはいくらでもある。

各国との関係が重要なIS学園、その中でもアメリカは重要な一国である。

——正直に言うところといった重要な事は公表したいが、かと言って公表の後の事を考えられない程向こう見ずでもない。

「それに、事を明るみに出すのはいつでも出来る」

蛇の様な目が、怪しく光った。

宛無き野望 (Unidentified ambition) / 義務か責務か (Duty or obligation)

「んふふ・・・んふふふふ・・・」

「どうされましたか束様」

誰も知らない個人研究室で篠ノ之束が立体映像に映る白式のステータスを見てほくそ笑んでいた。

その後ろから声をかける銀髪の少女、彼女の名はクロエ・クロニクル。束の養女である。

問われた束は上機嫌な様子で答える。

「白式がねえ、すつごく成長しているんだよおー」

演技じみたその声を聞いて、クロエはほんの僅かにその口許を緩め、

「それは何よりです、束様の思惑が順調に成就へと向かうのなら、これ以上の事はありません」

「んもおークーちゃんったら、そんな堅くならなくても良いんだよ？」

そんなクロエに抱きついて、その頭を撫で回す束。

それは子に親が見せる愛情と言うよりも、動物に飼い主が見せるような愛玩に似ていた。

だがクロエは、それでもそれを享受していた。

束がクロエの頭をひときしり撫で終わると、クロエは一つ、束に質問を投げ掛ける。

「それで、次はどうなさいますか。私に出来ることがあれば、何なりと申し付け下さい」

「ん、クーちゃんに活躍して貰うのはもうちよつと後かにや」

「・・・そうですか」

「そんなに落ち込まないでよー。クーちゃんが暗いと私も暗くなっちゃうよ」

「申し訳ございません・・・」

ニコニコと他人が見れば気味が悪いと評価するような笑顔を浮かべながら、束はクロエに注文する。

「わかったならヨシ！それはそうと、束さんはクーちゃんの煎れたコーヒーが飲みたいなく？」

「承知しました、今煎れて来ます」

その後ろ姿を見送った束は、今見ていた物とは別の、新たなホログラム立体映像を呼び出す。

そこに記されているのはアメリカ経由でいただいたIS。そして、銀影に欠けている部位の一つ。

「さあーで、これで面白くなるかな？」

.....

謎のISがクラス代表対抗戦に乱入したその翌日。

「あ、お早う小鳥くん」

「おう、お早う」

AM8:23

SHRまで時間が空いているにも関わらず少し騒がしいが、1-1教室はいつもとほぼ変わり無く朝を迎えていた。

少しばかり騒がしいと言うのも、昨日の乱入騒ぎが原因だろう。

『聞いた話だと・・・』

『でもそれっておかしくないか？』

『中東勢力だつて話もあるみたいよ？』

『まさかあ、中東にそんなこと出来る国なんて無いでしょ・・・』

耳の端々から聞こえる言葉は、先日せんじつのISの正体を探ろうとする噂話うわさばなしの類たぐ이었다。

自分の席に向かいながらぼんやりと女子連中の喋り声を聞いていると、女子生徒の一人（確か夜竹さゆかだったか）がこちらに歩み寄り俺に質問を投げけて来た。

「あの、昨日の機体って何だったの？」

「……」

あのISが無人机だと言う事実に関して当面の内は箝口令が敷かれている。

その正体を知る者は、直接戦闘を行った小鳥遊と刹那・F・聖永、そして当時オペレーションルームに居た数名の教師に限られ、その情報を知る生徒はほぼ居ない。

だからこそ女子連中が俺からそれを聞き出そうとするのは、なんとなく予想はついていた。

席へと向かいながら、軽くあしらう。

「先生方から話すなって言われている。言えなくもないが、その場合俺と聞いた奴が非道い目に遭う。他の面々にも伝えておくと良い」

千冬が与える懲罰を災害のような扱いにしても、クラスメイト全員の共通認識だから大丈夫だろう。……多分。

取り敢えず、無人機に関して話せないという事だけを伝えてさゆかを引き退らせる。

大人しいさゆかが、俺の言う通りに他の面子にも同じ旨を伝えに行くのを眼の端に捉えつつ、無骨なカーキグリーンのシオルダーバックの中からいつもの手乗りノートパソコンと、学園支給のタブレットの二つを机の上に取り出して、シオルダーバックを机の横に掛ける。

授業の準備がおわり、席に着こうとした時、後ろから織斑 一夏が声を掛けて来た。

「お早う小鳥」

「ああ……昨日は災難だったな」

先日の乱入に於いて、自分の試合が中止してしまった一夏は、多分一番の被害者だろう。

飛ばされた挨拶に見舞いの言葉を返すと、一夏は思いもよらない言葉を発した。

「……大丈夫か？」

「あ？何が？」

「ああ、いや、何と言うか……顔？」

「あん？」

要領を得ないその回答に益々首を傾げざるを得なくなる。  
タブレットのカメラ機能を使い、インカメラで自分の顔を確認する。

後ろ髪をゴムで縛っただけの乱雑な髪型、その影響で細長く吊り上がった形の眼。

・・・我ながら酷い面構えだ、どうやっても善人には見えないだろう。

それはさておき、訝しげに一夏に返す。

「いつもこんな顔だろう？それとも何か？俺はいつも大丈夫じゃなさそうか？」

「い、いや。そんな訳じゃないんだけどな。何となくこう・・・暗いって言うかなあ・・・まあそんな感じだった」

「ああそうか・・・」

もしかしたら昨日のトラウマフラッシュバックが未だに尾を引いているのかも知れない。

まさか顔に出ていたとは。『何も無いフリ』の自信はあつたのだが・・・

「って言うかその勘は箒とかに使えよ」

「え？何て？」

「何でもない。下らない事を口にしたただけだ、気にするな」

そう言っただけなら方向を向く、もうめんどくさいのでさっさと終わらせるに限る。

一夏はこういう時こちらが切り上げてもしつこく食い下がる嫌がある。

他の話題でこのバカの注意を逸らすとしよう。

「それはそうと、鈴音との決着はどうなった？中止になったんだろう？」

「え？あ、ああ・・・そういやどうなったんだろ」

「オイお前当事者だろうが」

思わずそっぽを向いた顔を一夏の方に向けるレベルでツッコンでしまった。



「当事者が事態を把握してないでどうする。そんなんだとお前、将来詐欺に引つかかるぞ」

「うっ、」

呆れた様子を隠す事無く嘆息して一夏に忠告する。

『詐欺はかける奴もかかる奴も悪い』と言うのがスタンスなのだが、何かさつき凶星を言い当てられた事への意趣返しがしたくて何となく反省を促す（別に何の意味も無いのだが）。

痛い所を突かれたか、一夏はバツの悪い顔をして居た。

「ちよつと良い？」

『してやったり』と言う感情はさて置いて会話を続けようとした時、一夏の後ろから声が掛かった。

「なにやつ！」

「アンタの幼馴染よバカ」

「あ、鈴」

勢い良く振り向く一夏。

声音と口調から察するに鈴音だろう。一夏にバカと正面切つて言うのは千冬と鈴音、後は筈くらいしか居ないだろうし。噂をすればと言う所か。

「丁度良かったじゃないか。ホラ聞けばどうだ？」

「そうだな。なあ鈴、昨日の決着だけどき……」

鈴音に直接聞く様に促して一夏と鈴音を話させる。

それを視界に収めつつ、俺は俺自身の席に着く。

パソコンを開いて、世界のニュースに目を通す、フリをする。

（……まだ考えるべき事は山積している）

昨日の無人機の解析で得た情報を頭の中で整理しつつ、物思いに耽る。

……偶発的とは言え、俺は世界の裏側に触れてしまった。

俺は知らなければならぬ。

この世界の裏側で一体誰が、どんな原理で、どんな目的で、どうやって、何をしようとしているのか。

AEU、人革、ユニオン、三大勢力の事。その勢力内で跋扈してい

る者達の事。その勢力に立ち入れられない者達の事。

・・・そして何より、束の事。

(今の世界は間違い無くアイツを中心に回っている・・・)

そう言った意味では束がその回転軸を歪めるだけで、この世界は大きくバランスを崩す羽目になるだろう。

何とも迷惑な話だが、束はそれを容赦無く実行する。今はまだそうする気は無いらしいが、それでも彼女の一挙手一投足がこの世界を瓦解させる原因になるのは間違い無い。

現状で満足しているつもりは無いが、コレより酷くなつては目も当てられない。

(俺に何が出来るかは分からんが・・・)

やれる事は少なからずある筈だ。

ちらり、と手元に置かれた四角い端末に目を向ける。

銀影、これが持つ力。

それが喻え束から与えられた物だとしても、銀影を使って何かを成すのは俺自身だ。

やれる事を見逃さぬよう、眼を凝らす。今の俺がやるべき事だろう。

「・・・よし、じゃあ来週の火曜日の放課後！覚悟してなさい！」

「おう！今度こそ決着つけるからな！」

・・・見当違いな方向性でやるべき事が散石しているがな。

## Sudden rendezvous

「ええーつと、次は目覚まし時計・・・」

クラス代表対抗戦が終了して早三日、週末土曜の大型ショッピン  
グモール、通称『駅前』の100円均一コーナーに小鳥 遊が居た。

黒のスキニージーンズに薄くクリームがかかった白のTシャツを着  
け、その上から青磁色の半袖シャツを羽織っている小鳥は、便利グッ  
ズコーナーを突っ切って次なる目標物をカゴにいれるべくズカズカ  
と歩き続ける

購買意欲を誘わせる便利商品は意識の外にあるため、あれこれ無闇に  
手を伸ばす事はしない。

・・・ちなみに、元来こういったショッピングをしない小鳥がなぜ  
ここに居るかと言うと。

「刹那の生活用品ねえ・・・わざわざ俺を使わなくても良いだろう。  
轡木の爺とか居るだろうに」

ぶつくさと文句を言いながらカゴに目覚まし時計を入れる。

そう、理由は刹那の生活用品である。

記憶喪失の少年『刹那・F・聖永』との奇妙な半同居生活が始まって  
から、既に二ヶ月半が経過している。

最近刹那の転入手続きが漸く済んだらしく。来週にも三組に転入  
する事になっているらしい。

が、しかし最近まで生徒というより実験動物に近い環境だったた  
め、普通の服やら日用品の類が無かったのだ。

それを見かねたのか、先日我らが鬼教師、織斑千冬先生から『刹那  
の生活用品を買ってこい』との一言を頂戴し、今現在に至ると言う訳  
である。

「つたく・・・えー、次は歯ブラシと歯磨き粉・・・」

文句は口にするが、行動を止めるといった事はしない辺り、彼がど  
れ程ゲンナリしてるかが解ると言ったものだろう。

.....

紫外線分解性のレジ袋に購入した物を詰め込み、モールの中央をぶち抜くエスカレーターへの乗り口側に在るベンチにドカリと座り込んだ小鳥は、目の前の服飾店に背中を向けてモールの中を見やる。「平和なモンだなあ・・・」

IS学園から最寄りの巨大施設であるこの駅前には、小鳥から見れば学園を攻めるとしたら活動拠点としてはこれ以上無いほど好都合である。

実際そうなるかは分からないが、切れ長の目にはそう写るものだった。

「実際にこの平穩があつて、それを保つ為にどれ程の努力が必要なんだけだか」

そう溜め息を吐いて前方に向き直った小鳥の視線の先に、

ミニマム千冬が現れた。

「・・・は？」

黒の五分丈Tシャツに明るい青のデニムショートパンツを着こなして、向かい側の服飾店で寒気のするにこやかな表情で鏡のにらめっこしている少女が居た。

どうやらこちらには気が付いておらず、服を見て回っているその姿は年相応の少女のそれに見える。

「・・・!! (ブンツ)」

見ている事がバレてしまえば、何か凄まじく凄まじい事をされそうな予感がして、思わず視線を背中の方こう側に戻した。

(え？何がどうなって、何で千冬先生が小さく・・・え?)

必死になって頭を回す。あの千冬が、あの千冬があんなに可愛いげのある少女になっている理由を。

「・・・あー、そーいや言ってたな『妹が居る』とか何とか」  
数秒考え、前に一夏と交わした会話を想起し、一人勝手に得心する。  
確か名前は織斑円花、身内の一夏から見ても千冬にそっくりだと

か。

まさかこんな所で目にするとは思わなかった。

とは言え彼女がここに居ようとも、当面の目的に何の影響があるわけでもない。

「と言うことは、俺には余り関係の無いことか・・・」

そう言つて立ち上がり、別の場所へ向かう。

いや。正確には、向かおうとしたとしたその時。

「ツ・・・!?!」

ぐらりと揺れる視界、力の入らない足、薄れ行く意識、妙な脱力感が全身を襲う。

その中でジーンズのポケットに手を突っ込めたのは僥倖だとしても、言いようがなかった。

急速に意識を取り戻した小鳥は、急ぎ右足を踏み出してその場で踏み止まる。

武装やセンサー類の外装は展開していないが、銀影を起動させ生命保護機能を利用したのだ。

(っ、悪い銀影。急に呼び出して)

『別にいいわよ。どうあっても私はアンタがアンタである限り、アンタの夢を叶える為に居るんだから』

(なら遠慮無く使わせてもらう)

しっかりと両の足で立ち上がってる。

辺りを見回せば、近場の人間は皆深い眠りに落ちていた。

状況把握の為に銀影のヘッドギアのみを展開した小鳥は、オレンジ色のバイザーに躍る文字を見て、舌打ちせざるをえなかった。

「催眠ガス・・・。相当強いヤツだな」

空气中に漂う成分の中には、立てこもり等の鎮圧使われるような睡眠誘発剤を含む無味無臭、無色透明のガスが含まれていた。

ガスの広がりから見るとどうやら空調から回ってきているらしい。

「大丈夫ですか!?!」

と、状況を半ば掴みかけた小鳥の右側。つまりは先程まで向かい側

であった服飾店の中で声が上がった。

驚いてそちらを見れば、急に倒れたのであろう店員の安否を問いかける織斑円花がそこに居た。

「オイオイオイ。嘘だろ……」

この催眠ガスは相当強力な代物しろもので、人間であれば一嗅ぎしただけで昏倒してしまうのだが、それが充満している空間に於おいてなお意識を失わず、むしろ明瞭さを保っているのである。驚かずにはいられない。

(どんなに超人的な千冬先生の妹だつっても無茶苦茶すぎるだろう!?)

「ちよつと待つてて下さい!他の人を呼んできます!」

「ちよ、おい待て!」

だが、驚くのも束の間。しゃがんでいた円花が立ち上がり、他の人間を呼ぶ為に走り出したのだ。

無闇に動いては危険だと、後を追おおうとするが、彼女には届かない。だが、こちらに届とどく物はあつた。

「フーン!」

バキイツ!!

「があツ!?!」

後方から接近に気付かず、何某なにがしかの拳をモロに喰くらつてしまった「ぐう、ツ!」

銀影を完全に展開し、空中で身を翻ひるがえして体勢を立て直す。

「……何者だ!」

睨み付ける前方には、灰色のISが居た。

ヘルメット型デバイスユニット、大型の腕部装甲アームド・アーマー、肩の上のスラスターには何本かナイフが掛けられ、その機体が近接戦を主に考えられている事が明確に現れている。

あれは……確か、"フアングクエイク"だったか。

アメリカの第三世代機、量産と安定性を重視したコンセプトを持つ最新鋭機。

頭の中でカタログを広げる小鳥は、じつと敵を見つめる。

「……………」

操縦者はこちらからの問い掛けに答える事はない。答える気が無い、あるいは答えられない質問だったようだ。

だが、何の情報も無しに会話を終わらせる気は無い。

「質問を変えるぞ、何が目的だ」

「……すぐに解る」

意外にも口に出された返答、その不明さに首をかしげた小鳥だが、その意図は確かにすぐに解った。

「きやあつ!?!」

円花の悲鳴が上がった。

驚いてそちらを見れば、白と灰色の都市迷彩を着用した幾人かのガスマスクの人間が円花を羽交い締めにして連れ去ろうとしていたのだ。

「ッ、何してんだお前ら!!」

ガスマスク達に飛び込もうとした小鳥。

だがしかし、正体不明のISがその前に立ちはだかった。

その瞬間『ヤバイな』そう直感した小鳥は反射的に後ろに跳び退いて距離を取り、バックパックの大剣に手を伸ばす。

相手からは、対話を行おうとする積もりは無い。ただ目標を達成するのみ、それ以外は何も感じなかった。

緊張に浅くなる呼吸が、自分が劣位に立たされた事を自覚する心臓が、被食者の感触を想起した古皮質が、その主に克明に危険を告げる。

「ふ……………」

その主人は小さく息を吐いて、その全てを無視した。

剣に伸ばした手を更に伸ばし、勢い良く抜剣し、臨戦体勢に入る。

「つまりはお前の、お前達の目的は中学三年生の女の子をよつてたかって多人数で拉致する事ってか?」

相手の尊厳を最大限詰るように挑発する。

だが、相手はそんな事を意に介する事無く、ガスマスク達との連絡を取り合う。

『お、おい。大丈夫なのか!?!』

「問題無い、お前達はお前達の任務を優先しろ。私の任務はユウ・オドリの足止めだ」

そう言った彼女はラックからナイフを取りだし大きなマニピレーターで握る。

互いが戦闘体勢に入ったことを確信した二人は、言葉無く睨み合つて相剋する円を描き、通路に一直線に位置取つた直後。

「ふ……ッ！」

「ラアッ！」

二人は己の敵へと突撃した。

小鳥は右の剣を振り下ろし、謎のISは右のナイフを地を這うような軌道で突き上げる。

敵は左のナイフでそれを止め鋭い突きで小鳥の首を狙うが、小鳥は両足のスラストを吹かしバク宙のような形で跳び上がる事で躲すと同時に天井に足を着ける。

結果的に敵に背を向けることになった小鳥は、振り向きつつ足を踏み込んで背後の敵へと両の剣を振り下ろす。

防御する謎のISのナイフと銀影の剣がぶつかり、火花が散った。

「……ッ！」

刃が衝突した衝撃を無理に殺さず、逆に利用して距離を取った敵は、驚いたような表情で小鳥を見る。どうやら素人だと舐められていたらしい。

通路に降りた小鳥は、右の剣を肩に乗せ左の剣を前に出す構えを取る。

（まだ周りに人が居る以上、火器は使えねえ……近距離戦が目的なら嬉しいんだけどな）

周りには催眠ガスで眠らされた人々が数多くいる。もし遠距離用の兵装が生身の人間に当たれば死を免れない。

最低出力でも致命傷になるビーム兵器しか遠距離兵装を持ち得ない銀影の装備と、狙って撃つても当てられない小鳥の射撃センスでは、今ここでアイアスのビームライフルも腕部ビームバルカンも使えたものではない。



(銀影・・・奴の武装、分かるか?)

『遠距離兵装は積んでないみたいね。量子変換インストールしている代物しろものは全部近距離用のブレード。収納してる物の中に火薬の臭いはしないわね』

「・・・そうか、サンキュ」

こちらが遠距離戦に応じる必要は無いと解った小鳥は、小さく安堵して銀影に感謝の意を示す。

(さ、て。奴のやりたい事は解ったが、スペックは如何程いかほどか・・・)  
相手の能力値を見計らう。

筋骨隆々のも言えるマツシヴさからは機動性を感じられない、どちらかと言うなら瞬間的な速度で距離を詰め、インファイトに持ち込む戦法を得意としているのだろう。記憶の中のスペックと照応させながら、考察を深める。

(それなら、わざわざ相手の得意分野に乗ってやる必要は無いか)  
と言うより、そもそもこの敵との戦いに興きずる事自体に意味がない。

どう言った目的であれ、奴等が円花を拐さらうと言うのであれば、円花を追うのが先決である。

「ったく、どうしてこうなってん、だっ!!」

言うが早い、通路からホールを貫く空間へと身を投げる。

「こつから先は速いもの勝ちだ!お先に失礼!」

更に飛んで一階上に行き姿を消す。

小鳥の目的が織斑円花の奪還にあることを察知した敵も慌てて上に向かって、

「・・・なんてなア?」

「ッ!」

ニヒヤア、と邪悪な笑みを浮かべる小鳥を見た。

(っ、待ち伏せ!?)

もう遅い、ラックにアイアスを戻した小鳥が、灰色のISへとタックルし、ホール中央へと瞬時イグニッションブースト加速で己ごと敵を墜おとす。

「うオオオオオアア！」

「ぐ……う！」

敵は抗おうと試みるが、それより先に地面が二人に衝撃を与えた。

「グツ……！」

衝撃に軽く悶える二人、しかし敵の腹を踏みつけ立ち上がった小鳥は、矢継ぎ早にバックパックから“アイアス”を抜剣し逆手に持ち替え、敵のマニキュピレーターを地面と縫い止め、両の拳を突きつける。

その手は空だが、その籠手には銀影の遠距離兵装の一つ、ビームバルカンが在った。

「うらアアア!!」

狙いは付けない、最早付ける必要も無い。目と鼻の先に居る敵が行動不能になるまで小鳥はバルカンを打ち続けた。

## Next round

「ハア……！ハア……！」

強敵と相対した肉体的疲労と言うより、至近距離でバルカンを滅多撃ちにした精神的疲労が原因で、深く、荒い呼吸を繰り返す。

気を失ったパイロットを放置して、小鳥は銀影に語り掛ける。

「これで、円花を助けた後の心配は無くなった訳だ。銀影、外部との連絡を」

『無理、電波妨害用のジャマーがかけられてるみたい』

「やっぱか……。仕方無い、俺等だけで救出しなきゃなんねえか」

とは言え、恐らく相手は生身の人間である、戦闘になったとしてもそこまでの問題はあまるまい。

問題は、連中がこのショッピングモールから先に脱出することだ。そこで問題になってくるのは、連中のゴール、つまりは脱出口である。

ISの速度を持つてすれば先回りなど容易い。しかし、それはルートが敵と同一である場合だ。

ショッピングモールのように分岐点の多い場所ではルートの特定は容易ではない。

「奴等……催眠ガスを使つてたな」

ISの腕部装甲のみを解除し、唇を人差し指と薬指で挟み込むようにして下顎を覆う小鳥。

……ガス等の空気を効率良く回すために、どのような手段を採るべきか。

「それに……。普通の手段で入つてくるとは思えない」

……モール内もそうだが、モール外の人間にも気取られぬために、どのような侵入経路を採るか。

(このガスは上から下へ広がる性質。それに、ガスの発生装置も堂々と置けまい……)

と、するならば。

空調施設のシステムに関与し、誰にも見られない場所が連中の侵入

経路だ。

ガラス張りの天井を見上げ、小鳥は叫ぶ。

「屋上の室外器……。なるほど……。奴等の足はヘリか！」

屋上を目指し飛翔した小鳥は、ガラスの天井を突き破って屋外に身を晒す。

案の定、屋上には黒塗りの、恐らくはキャリアー系統のツインローター式ヘリが着陸していた。

「……………」

しかし、何か様子がおかしい。

こういった迅速さが求められる指令ならば、いつでも逃げおおせるよう、プロペラを止めることはない筈だが。黒塗りのそれは、プロペラを止めている。

「一体、何が……？」

見れば、ヘリの中に居たであろう人員はヘリの外で昏睡こんとうしている上、円花を捕つかまえていたガスマスク共もヘリに凭れ掛かるようにして意識を失っている。

その隣に円花が眠っていたので、その身を保護しようと歩み寄る。

『ちよっと待って』

「あん？どうした」

銀影からの制止せいしの呼び掛けに、訝いぶかしむ表情をしながらも答える。

『円花と同じ座標からISネットワークの信号が出る』

「何？それはつまり、円花がISを持ってるって事だぞ」

そんな話は聞いていない。

がしかし、実際にネットワークを開いて各ISとの位置いちそうかん相関を見てみると、確かに円花の居る位置から信号が検知けんちされている。

「———つたく、聞くことが増えたな」

とは言え、織斑円花と言う少女が誘拐ゆうかいに遭あいかけたと言う事実には代わりは無い。足を動かし円花の許もとまで近寄ちかよって、片膝立ちで円花の肩を揺する。

「おい、起きろ。寝てる場合じゃねえぞ」

「ん、んん……？」

眠たそうに目を掻きながら意識を覚醒させる円花。とは言えまだ覚めきつてない為か、寝ぼけた科白を出す。

「あれ……。さつきまで服屋さんに居た筈……。あれ？」  
「……………」

呆けている円花に安堵とも呆れともとれる溜め息を吐く。

「お前は誘拐されかけてたんだよ、それを俺が助けに来た。そう言う訳だ」

「あ！—夏兄以外の男のIS乗り！」

「あ、あ……お前ちとズレてんなあ……」

発言が的はずれな上に知っているのならせめて名前も覚えていて欲しかった。

疲労感がドツと押し寄せ、先程以上に呆れの強い溜め息を吐き出す。

「俺の名前は小鳥遊、好きなように呼べ」

「あ、うん。私は織斑 円花」

名前を知らないのなら、教える事に越した事はないだろう。

「知ってると思うけど織斑千冬の妹です」

「見りや解る、千冬先生にそっくりだ」

「あはは、よく言われます」

他愛ない冗談と軽口を交わした後、本題に入る。

「で？このヘータイさん達はどうした？お前が伸したのか？」

「いえ……。私、起こされるまで何かで眠らされてみたいですし」

「……そ、か……。仕方無い。とりあえず、ここも安全とは言えない、IS学園に避難しよう」

「っ、後ろ！」

唐突に円花が叫ぶ。なにかと思った次の瞬間、後ろから伸びてきた手に頭を捕まれた。

「な……！」

どうやらISに頭を驚掴みされているようだ。

「この……っ、しつこいッ！」

その状況を呑むと同時にリアアーマーからビームサーベルを抜き

放ち、手を振り払う様に頭を振りながら、己の頭を掴む者へ斬りかかる。

「っ……何!?!」

しかし、振り返って見たのは、先程のマッシュヴなISとは別物の、碧い、獣の様なシルエットのISだった。

大きなマニキュピレータに装備された爪、逆関節構造を有するアームドフット、狼の様な特異な体躯は、読物に出てくるような人狼を思わせる。

……ただ、小鳥を驚かせたのは、その人間離れたISの構造ではない。

全身を包む『全身装甲』その天辺、つまりは頭部。

本来なら操縦者の顔が見れるそこには、剥き出しのセンサーが不規則に並んでいた。

そして、その特徴に覚えがあった、三日前にそれを串刺しにしていた。小鳥には。

「無人機……!?!昨日の今日で二機目だ?!」

その特徴は、三日前にクラス代表対抗戦に乱入してきた無人機のものだった。

恐らくは篠ノ之束の造り上げたと思われる無人機と言う技術は、まだ安定している風に思えなかったが、どうやら史上最凶の天災の名は伊達ではないらしい。

『……………』

無言のまま——そもそも話す必要も機能も無いのだが——無人機は両の掌を小鳥に向ける。

それを見た小鳥は、ゾツとした表情を浮かべバックパックから『アイアス』を抜剣し、一つの楯とする。

即座にそれを構えると同時、その両手から次々と高威力のビームが乱射された。

「ぎゃあああッー!」

「ぐ……ッー!」

円花を庇うように拡散フィールドを展開する。

英雄の名を冠する楯は、小鳥と円花を覆ってその身を守るが、それ以外は守られない。

幸運にも特殊部隊の人間には当たらなかったが、いなされたビームはヘリの外壁を破る。

「マズい・・・ッー」

「わ、わわあつ!?」

逆手に楯を構えたまま振り向いた小鳥は、焦った様子で円花を片腕で抱え上げ飛び上がる。

その直後、ヘリが爆音を上げた。

爆風に煽られ、ヒリヒリと熱線が肌を刺す。

「ちよ、ちよつとーあれなんなんです!? 何で私達を狙って・・・きやあ!?!」

あられも無い声を上げる円花、右腕で彼女を抱える小鳥が緊急回避を行ったからである。

見れば無人機もまた飛び上がり、二人に向けて光弾を放って来ていた。

「しつかり掴まれ! それと不用意に喋るな! 舌噛むぞ!!」

出しうる限りの速度で街の上を右へ左へ飛び回り、大きなバレルロールを交えながら敵の弾幕を躲し続ける。

(クッー! 振り切れねえ!)

円花に身体的負担がかからないように気を使つての飛行であるのも理由だが、単純に無人機の機動性が高い。恐らくは一人であっても振り切るのは困難だろう。

「銀影! 通信はできるか!?!」

『ええーもうジャマーの範囲外に居る!』

ならIS学園に助けを求められる。そう思い通信へと意識が向いた時、

「前ッー!」

「なッ・・・!?!」

数瞬前まで後方に居たはずの無人機が、目の前に出現したのだ。

その両の掌は既に小鳥に向けて開かれている。

——ヤバい  
咄嗟に左手の楯を構える。

「グッ……！」

その一瞬後楯越しにビームのぶつかる衝撃が伝わる。

だが小鳥や円花にダメージが行くことはない。やはりこの楯は優秀だ。

衝撃を殺す様にビルの屋上に降りて頭上の敵を睥む。

ビルの下では、先程のビーム砲の音が原因で騒ぎ起きていた。

(ちと不味いな……。隙を見つけて連絡を入れようにも、こつちの隙を見逃してくれそうにもない)

無傷で凄いとは言え、足を止められてしまった。これでは尚の事逃げ切りは難しいだろう。

どうやら無人機のOSも発展しているらしい。外界からの情報に機敏に反応してくるようだ。唐突なバトル展開に苦笑いが込み上げてくる。

……しかし、その笑みは敵の爪に掻き消えた。

「ガッ……!?!」

真後ろからの爪の一撃だった。

死角からの攻撃、真後ろから小鳥を狙ったそれは銀影のバックパックを直撃し、その背面に爪痕を刻む。

後ろから小鳥を切り刻んだ『それ』は、小鳥の横を通り過ぎて行く。

「っ、何が……!」

背中からの衝撃に顔を顰めながら、通り過ぎて行つた『それ』を片膝立ちで見上げる。

今の攻撃方法、それにこの状況でこちらに攻撃を仕掛けると言う事は……

「クソ……!最初から二機居たって事かよッ!!」

その眼前には件の人狼の様なISが二機、空中から小鳥と円花の二人を見下ろしていた。

背中に攻撃を仕掛けた方が先に現れた方、前に回って砲撃を加えた方が新参だったのだろう。



(・・・っ、この状況じゃ逃げ切りはほぼ不可能だな・・・)

そもそも、機動力にあまり差はなく、戦闘能力では明らかにこちらの方が上だった。

現状、銀影のバックパックは潰され、その機動力は10%ダウン。単独でもあの二機の追跡を振り切るのは困難を極めるだろう。

かといって戦闘を行おうにも、射撃戦しか出来ないであろう今の状態で、遮蔽物の少ないこの屋上で、射撃戦を行えば確実に負けが込む。

一応、あらゆるエネルギーの波長を乱せる「アイアス」をジャマーとして扱えば、隠れのびる事は出来なくもないだろうが、そもそもの話最初に奴らの視界から逃れなければ、レーダー云々の話にすらならない。

「・・・潮時、か・・・」

小さく溜息をついて、逃げ切りを諦めた。

敵対象を注意深く睨みつけながら、円花に問いかける。

「円花、お前今違和感のある装飾品とかあるか？」

「え？えーと・・・あつ、この指輪、つけた覚え無いです」

差し出した右手の人差し指には、ミッドナイトブルーの指輪が、鈍く輝いていた。

逃げ切りがダメなら別の策だ。

少し微笑えんで円花を腕から降ろし、その目を真正面から見つめる。

「良いか円花、その指輪はまず間違いなくISだ。どうして持ってるかは俺にもわからんが。兎に角『それ』がお前を守ってくれる筈だ」

「は、はあ・・・。はあ?!」

「詳しい話は後だ！兎に角逃げろ！そしてIS学園に向かえ、良いな」  
緊張し切った面持ちで告げる小鳥の表情は、反論を許さない。

しかし、それでうんと頷けるのなら、織斑千冬の妹なぞやってられないのだろう。円花は言葉を返した。

「あなたはどうするんですか!?私に逃げろって言ったって、それじゃあまるであなたが足止めすると言ってるような物じゃない!」

「だからそう言っただよ、舐めるなよ、この俺を」

もう悠長に話している暇は無い。こうなれば四の五の言わずに行動を起こした方が早いだろう。

「へ?」

銀影のマニピレーターで円花の襟首を掴んで、

「さつさと・・・行けえ!」

「いやあああああ?」

隣のビルに向かってブン投げた。

「わわわわわわわわあー!?!」

隣のビルの屋上とは5階分程の高低差があるだろうが、それだけの危険性があればISの操縦者保護機能くらいは働くだろう。

「や、て」

問題はここからだ。奴らの目的がわからない以上、俺の勝利条件はこの無人機共を撃退する事に限定される。

(状況的に考えて、奴等の目的は俺か円花か・・・どちらにしても俺が残って迎え撃つのが最善解だろ・・・それに)

どちらにせよ俺は逃げきれない。円花に着けられたISが何なのかはさっぱりだが、今の銀影で円花を抱えて逃げ回るよりは遥かにマシだろう。

・・・

「わわわわわわわわあー!?!」

ヤバいやバいやバいやバいや、死んじやう!

小鳥が私を隣のビル目掛けて投げたのは良いが、そのビルは15m以上の高低差がある。このままじゃ直下死間違い無し!

兎にも角にも何とかしなければいけない、小鳥が言っていた言葉を思い出す。

『その指輪はまず間違いなくISだ、どうして持っているかは俺にも分からんが。兎に角それがお前を守ってくれる筈だ』

頭から落ちゆく中、必死になって手を伸ばす。

「っ・・・!お願い、来て!」

指輪から放たれる光、その光は全身を覆い一瞬で暗れた。

見れば腕や頭の上に何か機械的な物が身に付いている。

——スキンバリアオーブ皮膜装甲展開・・・完了

——スラスタ推進機正常起動・・・確認

——ハイパーセンサー最適化・・・終了

——BT — 02 『サイレントゼファイルス鋭風』起動します

「・・・これが」

IS。史上最強の兵器。

たった数日で世界のパワーバランスを崩壊ほうかいさせ、今もなお最前線を張り続ける、最も分かりやすい『ちから力』

それが自らに従っているのが、理論や数字などではなく、直感で理解できた。

「——これなら、アイツらを・・・！」

——だからなのかもしれない、さつきまでこんな力を持つてる私を襲ってきたあのISにイラツと来たのは。

## Battle Continues

「くっ……!」

地を這い顔面を狙う狂刃を上体を反らして躲す。

右の剣を上方へ振って斬りつけるが、逆関節ならではの敏捷性で無人機は頭の上を通り過ぎる。

続け様にもう1機の無人機が前方からさらに爪を振り下ろす。振り上げた右の剣を更に構えて爪を受け止めて、左の剣を突き出す。

しかし、無人機は総身を振ってそれを躲しきり頭上を取ると、スラストを吹かして爪を地へ振り下ろす。

それを前方へ飛び込む事で潜り抜け、素早く身を翻して無人機を正面に見据える。

視界の中には無人機が1機。もう1機は目の前の奴で隠れている様だ。

直後、目前の無人機が左方向へ跳んだ。

「ちいー!」

遅れて俺も上に飛ぶ。もう1機の影に隠れていた1機がビームを乱射したのだ。

大きなバク宙でビル間を跨いで回避しつつ、空中で「アイアス」を合体させ一つの巨剣となす。

短距離用のビームマシンガンは10m前後で霧消する。それならばこの程度の距離で十分だ。

射程外に逃げ延び隣のビルに着地すると同時に、大剣を左へ大上段で振り下ろす。

その剣は着地の瞬間を狙っていた無人機の左腕にクリーンヒットし、エネルギーシールドごと腕部装甲を斬り裂いた。

「シールドバリアーの破壊は白式だけの特権じゃねえぜ!!」

アイアスのエネルギー拡散フィールドは、質量以外であればほぼ全てのエネルギーに作用し、エネルギーの疎を作り上げる。

シールドバリアーのそれでさえ例外ではない。

用は強制的にシールドバリアーを押し退け、直接的に相手の装甲を

斬り裂けると言う訳だ。

実を言うと鈴音の時に本気でやればあのまま鈴音の胴体を真つ二つにしかねなかったので、打突の瞬間にフィールドを切っていたりしていた訳で。

だが今は状況が違う。真つ二つにしても問題はまるで無い。

そもそも手加減してやる義理も無いし、あつた所で無人機相手に手加減してやるつもりはさらさら無い。

一步引き下がった無人機に対して、更に距離を詰める。

無人機はこちらが詰め寄るのを確認すると、逆関節を活かし瞬時にブレーキをかけると同時に、腰を捻って右の爪を繰り出して来た。

だが、銀影の目を前にその動きは遅すぎる。

急停止が原因で無人機との距離が急激に縮まった今、身の丈程あるアイアスを振り抜ける時間は無い、だがそれは無人機がブレーキをかけた時点で織り込み済みだ。

頭を狙った突きを身を屈めて躲して、慣性のままに無人機の胴体に肩をぶつける。

肩の“眼”が光学情報を鮮明に捉え、銀影が高精度の事象予測を行い、それを元に俺自身が行動を決定する。

今はその事象予測に対して反射的に行動を起こしているだけだが、いずれはリアルタイムでその予測に合わせた戦術を組む事さえ出来る様になるだろう。

『へえ・・・？前より上手くなってるじゃない。コソ練した？』

「うっせえ、集中出来ん」

頭に響く銀影の声を黙らせて背後から斬りかかる無人機を跳び上がって躲す。

円花をぶん投げた後、どう言う訳だか知らないが無人機は遠距離戦を仕掛けて来ず、2機での連携攻撃で攻めて来た。

こちらにとっては好都合なのだが、それでも手強い。これで無人機のOSが連携専門に調整されていたらどうなっていた事やら。

今のところ拮抗はしているが、それも集中が切れれば脆く崩れ去るだろう。

ただ、集中力にも限界は存在するし、二対一の数的不利は変わらない。

「せめて前回みたく一人でも応援が来てくれりゃ良いんだがな」

空中で眩ぎ、軽い足取りで着地する。

騒ぎに気づいた通行人が通報するか、円花がIS学園に到着して事態を知らせるか。どちらにせよ増援がやって来るまで時間が掛かるのは間違いない。

「フーン！」

切り込んで来た無人機の爪をアイアスで受け止めて、弾かれる形で距離を取る。

後退しつつライフルモードのアイアスでもう1機の無人機を狙い、ビームを撃ち続ける。

命中数は少ないが、それでも牽制としての意味合いはあった、一方の動きが止まる。

先にこちらに襲い掛かって来た方はこちらに飛びかかって来る。一旦射撃を止めてその爪を防ぐ。

水平に構えた状態でそのまま受け切り、

「オラアツ！」

片手に持ち換えて左手で相手で殴り付ける。

その左手は無人機の左手で防がれる。それは想定していた、腕部のビームバルカンを発射して――

バガアアアアアツツ!!!

目の前が爆発した。

「ガツ……!?」

受け止めた左手のビームマシンガンでこちらの拳を諸共に吹き飛ばしたのだ。

（自分の左手を犠牲にして……!?クソツ！前の奴より成長していやがる……!）

自動制御で躊躇いが無いとは言え、その行動の速さは想定を超えていた。

「……クソ！」

アイアスを引き剥がそうにも無人機に抑え込まれ、すぐには離れられない。

—— 後ろから迫る無人機。このタイミングは躲せない！

「づう．．．ッ！」

背面に爪が直撃する。

シールドバリアーである程度の衝撃を殺せるとは言え、モロに喰らったのは痛い、エネルギーをかなり削られた。

拘っていても仕方が無いとアイアスを手放し、追撃を警戒して跳び退って今の銀影の状態を確認する。

(左腕部マニピレータはエネルギーパスがオシヤカ、バルカンも半壊、無理して連射すりゃこっちも壊れるだろうな)

幸い指そのものに損傷は無く、正常に動作してくれる。

『へたくソ』

「悪かったって．．．」

これには銀影も酷評である。

完全に油断していた。アイアスは手放してしまったし本体装備は半分持つてかかっている。これを油断と言わずしてなんと言う。

ガラン！とアイアスが地面に転がる音がしてその方を見ると、無人機2機がこちらに歩を進めていた。

こっちの武器は右のバルカンとビームサーベル2本(左腕が壊れているので1本みたいなものだが)。

．．．後は銀影本体の装甲くらいか、

『止めて、痛くはないけど装甲削られるの嫌なの！』

「．．．あいよ」

注文の多いISである。

口では了承するが、まともな武器が殆ど無い状況でまともな戦闘等出来る訳が無い。

取り敢えず一応の武器である腰部のビームサーベルに手を延ばすが．．．。

「ツ．．．！やっぱそう来るよな！」

武器を取ると認識したか、無人機の1機が瞬間加速を使ってこち

らに接近し突きを繰り出す。

間一髪身体を捻ってそれを躲す、目の前を通り過ぎる鋭い刃に胆を冷すが、まだ危険が終わった訳ではない。

手刀を突き出した無人機の首が、僅かな時間の中でこちらを向いた。

一瞬、ISの中に収まった機械と眼が合った奇妙な錯覚を覚えるが、そんな事を気にしている余裕は無い。

「ツラアー！」

後ろから襲い掛かるもう1機に向けて左足で変形の横蹴りをかます。

全力で蹴り飛ばした無人機は後方へ退がってこちらへ掌を向けた。

「—— チッ」

最初にこちらへ突きを仕掛けた無人機は右手だけで俺の左肩を掴んでいた。

軽いデジャヴを感じるが、茶化している場合でもない。このまま身動きを取れなければビーム砲の必中は不可避である。

「同じ手は喰わねえよッ！」

左手は使えないが何も左腕が使えない訳ではない。

乱雑に左手を振り上げて無人機の腕を弾き、右手で弾いた腕を掴んで引つ張り、無理矢理前後を入れ換え無人機の体を盾にして、

掌を向けていた無人機が幾条もの光線で撃ち抜かれた。

「は……?」

余りにもいきなり過ぎる展開に、無人機の腕を掴む手が緩む。

突然の展開に呆けている俺を他所目に、俺の正面で対峙している無人機が更に4本のビームに晒された。

一瞬啞然としていたが、目前の衝撃波に意識を戻さずにはいられなかつた。

ビームによって吹き飛ばされた無人機を視界に収めつつ、現状把握に努める。

(応援……!?でもIS学園で遠距離系のビーム兵器を保有しているのは「ブルーティアーズ」だけの筈、だが)



それにしても、残りにも早すぎる。

一般人に見られて騒ぎになったのほんの2、3分前だ。最速で通報があったとしても、精々今頃出撃準備をしている程度の話だろう。

無人機を攻撃した何者かを、ハイパーセンサーの感知を頼りに辿る。

そして、千冬と瓜二つの少女を見た。

「な、円花あ!？」

柄にも無く素っ頓狂な声を上げてしまうのは、それ程までに衝撃的な絵面だったからだ。

ハイレグのISスーツ、蝶の羽の様なカスタム・ウィング、右手に持つロングレンジライフル、何より目を惹く彼女の従えている複数のビット。IS『サイレントゼフィルス』を纏う織斑円花の姿があった。何故ここに・・・と思ったのだが、それもそうだ。数分前に円花をビルから投げたのは俺自身だった。

多分にアレが原因で操縦者保護機能だけでなくIS全体の機能が開帳されてしまったのだろう。そうして展開したISを用いて俺が戦っている所までトンボ帰りして来た・・・そんな所か。

と、円花の経緯を推測していると、銀影が鼻で笑う様に、

『あら、増援来たじゃない』

「お前本気で言ってる?」

確かに増援を欲しがっていたが、円花は来て欲しくなかった。と言うか護衛対象がノコノコとやって来るなどあり得てはならない事態である。

『それでも増援に代わりは無いでしょ』

「それもそうだがな・・・」

確かに銀影の言う通り、護衛対象だろうと何だろうと数は数である、見てくれから考えても円花が装着しているISが遠距離からの援護向けの機体だろうし、戦術を立てるには申し分無い。

「ったく・・・」

右のマニピレータで頭を搔いて、状況を分析する。

(俺の戦力、敵戦力は依然変わらず。ただし、円花が加わった事で俺の

陣営はある程度マシンになった)

今の射撃から考えて見ても、止まっている物に当てるくらいは出来るらしい。

(流石にズブの素人だろうし、セシリア並みを求めるのは酷だろうな) ビットは単純な数を揃えられる兵装だ。その練度一つで戦術の幅は大きく広がるだろう。

・・・それはさて置き、

「何で来たんだ円花」

オープンチャンネルで円花に呼びかける。

理由は分かっているが、体裁上は置いて置かなければならないだろう。後々千冬に何言われるか分かったもんじゃ無いから。

『助けられてその言い草ですか!?!』

それに対して円花も返してくる。IS初心者のお答だろうに良く淀み無く答えられるものだ。

と、そんな事に感心している場合ではない。

「うっせえ。確かに助けられたが、奴らの狙いがお前の可能性が高い以上お前にここに居てもらっちゃ困るんだよ」

『じゃあそのままやられてて良いんですか!?!』

「良い良くないの問題じゃないんだよ」

批判に批判を返すのはマナー違反な気もしないが、状況が状況である。水掛け論を回避する為話題を転換する。

「ああ・・・もう良い、そうやってISを着けて来たからには手伝ってもらおうぞ」

気乗りはしないがかと言って円花に帰れと言って事態が好転する訳でもなし、そもそも言う事を聞くかさえも定かではない。

「そうこなくっちゃー!」

まあ、こうやってノリノリな時点でそう言う事なんだろうが。

無人機も突然の乱入に戸惑っているらしい、こちらを注視してはいるが、動けないでいる。

これは好機だ。

右手でビームサーベルを引き抜き、頭上の円花に指示を飛ばす。

「取り敢えず、俺が相手をしてない奴に対して撃ちまくれ！俺が突っ込む！」

「了解です！」

そう言つて片腕を損傷した無人機へ突撃する。無人機もそれに腕を構えるが、

「フンッ！」

あえて剣は振らずに、その胴体に直接前蹴りを叩きつける。

無人機は腕を下ろしてその蹴りを防ぐが、大きく後退する。

そのまま更に接近し、内向きにビームサーベルを振り抜く。

ビームサーベルはビームと言う特性上、質量が極端に少なく、クリーンヒットした所で相手を弾き飛ばす事は無い。しかし、この状況ではその方が好ましい。

「円花頼むッ！」

「はー！」

指示に従い、円花がもう一体の方にビットでの迫撃を仕掛ける。

後方の無人機の動きが止まると同時にビルの屋上が貫かれ、1m近い穴が穿たれる。

建造物に穴だらけにしてしまうのは申し訳無いがそんな事も言つてられないので、直下に誰も居ない事を祈るだけ祈ってインファイトを続ける。

内向きに振り抜いて脇の下に来たビームサーベルをそのまま垂直に振り上げ、無人機の腕を斬りつける。

その一撃は確かに当たったが、無人機は大振りな一撃の際にカウンターを仕掛ける。

確かに小鳥の胸を突く筈の手刀は小鳥自身の左脚が蹴り飛ばす。

構えをすつ飛ばした前蹴りはダメージにもならない。だが防御としては申し分無かった。

「んのオラッ!!」

無理矢理右足で跳躍、胴回し蹴りの容量で右の踵を無人機の顔面に叩き込む。

着地と同時に、円花が足止めしている後方の無人機へと飛び込む

だ。

「ちよつ!？」

しかしそこは弾幕の嵐、円花は誤射を恐れて素早くビットの掃射を止めてくれる。

「ナイスだー!」

止んだビームの雨を潜り抜け、無人機の腹に飛び蹴りをかます。

直前まで防御に使われていた両腕をすり抜けて腹に突き立った脚を更に脛脛のスラスターで更に加速させるが、無人機はその加速にも耐え、小鳥の動きを止めた。

「のオラッ!」

一旦スラスターによる加速を止めて重力に従い上体が地面に近付くのを感知すると同時、両手を地面につけ、倒立の要領で相手の両腕を弾く。

無人機は弾かれた腕を俊敏に振り下ろして俺の腹を裂こうとするが、スラスターを吹かして前方に振り下ろした足がそれよりも先に首の付け根に突き立つ。

無人機は思いがけないカウンターを食らってやや後退する、その間に姿勢を戻し両足で立つ。

と、銀影が頭の中で俺に情報を伝える。

『サイレントゼファイルスの武装、大体解ったわよ』

「サンキュ、インストールで構わん、開示を」

『はいはい』

言うが早いか脳内に存在しない筈の「サイレントゼファイルス」の武装類、スペックの類が意識に溢れ出した。

膨大な情報量に軽い目眩を覚え、顔を顰めながらも、しっかりその情報を参照する。

(つ・・・コイツは普通に凄いな)

ブルーティアーズの稼働データがある程度反映されているとは言え、思ったより全体のスペックが高い。

ティアーズに比べ総合火力は低い、その変わりビットの変形として「エネルギーアンブレラ」なる遠隔防御兵装が装備されており、防

御力が高く、更に機動力はティアーズのそれに比べ20%向上している。

特に眼を惹いたのは、星を砕く者「スターブレイカー」の名を持った携行遠距離兵装。

カタログスペック上では大出力BTビームライフルとしての使用が可能であり、その最大出力は衝撃砲のそれに匹敵する。火力として直した場合、学園にある全てのISのそれを凌駕しかねない。

（コイツは使えるか？）

本人は右手に持ったままビットの操作に集中しているが、ビットよりはるかに右手の武器を使った方が効率的なようだ。

円花は素人だろうが、それでも止まっている物に当てられない訳じゃない。こちらで動きを止めてしまえばそれも使い用はある。

「円花！右手の兵装使えそうか!？」

オープンチャンネル 個人回線が戦闘中に使える程器用でもないので共有回線で円花に問いかける。

『使えると思うけど、当てる自信は無いかな!』

円花の返答を聞きながら正面の無人機が振り下ろす爪を躲す。

状況を鑑みるに、この状況に終止符を打てるとしたらあの武装くらいだろう。

右に左に振り下ろされる爪を、左へ右へと身を動かして躲し続けながら、円花の方を見遣る。

（どうも、無人機が円花に応戦しないのが気になるな）

先程から見えていても、無人機は俺に対しては盛んに攻撃を繰り返しているが、円花相手には防御や回避しかしていない。

・・・いや、そんな事を気にしている場合でもないだろう。

一旦距離を取って銀影に確認を取る。

「銀影！周囲の生体反応は!？」

『もう騒ぎになって、みんな逃げてる。少なくともこの一区画に生体反応は無いわよ!』

距離を詰めた無人機の右の手刀を左手で逸らしてそのまま腕の腹で無人機の胸を撃つ。

周囲に人が居ない事を確認して、円花に言葉を投げる。

「円花！俺が合図を出すから、ライフルを全力で射て！」

『今じゃダメ!?!』

「構わんが焦って期を逃した時の責任はお前が取れよ!?!」

『うっ、』

脅し文句を言われて押し黙る円花。どうあれ指示には従ってくれるようだ。

ビームサーベルを突き出す。無人機はストレスでそれを躲すところらの顔を掻き切ろうとする。

バックステップで爪を避けて距離を取るが、無人機は更に距離を詰めて来る。

「よッー！」

円花の弾幕で出来た頭大のコンクリートを無人機の顔に目掛けて蹴りとばす。

瓦礫の速度はだいたい時速20km、それ自体の速度はISにとって脅威となり得る物ではないが、対する無人機は約時速40kmでこちらに突っ込んできている、つまり、相対的に60km相当の速度が出ている事になるだろう。

無人機は反射的に右手で石を弾く。

瞬間的に視界から外れた隙に、こちらから距離を詰める。

両腕が自由になった無人機が胴に向かって手刀を繰り出すが、

「ふッー！」

その動きを見切つて左回りに躲し、無人機の背中を取る。

無人機はその動きに対応して右の爪を突き出してくる。

だがやはりその動きは銀影の『眼』には遅く、右足だけの跳躍で易々と躲せる。

(右脚部スラスター出力最大！)

スラスターを吹かした右足の胴回し蹴りを無人機の顔面めがけて放つ。

さらに、

「瞬間 加速ッ!!」

右足だけでの瞬間 加速で勢いをつける。

「ぬ、ッああああ!」

その蹴りを無人機に叩き込んだ瞬間、ISのアーマーの境目に強烈な鈍い痛みが走るが、そんな事はお構い無しにその足を振り抜いた。

「ブツ 飛べえええ!」

みしりと、脚からそんな音が聞こえた気がした。

全身全霊で放った一撃は、思惑通りに無人機を弾き飛ばす。

蹴り飛ばされた無人機は、円花の抑えていた無人機に激突した。

条件は揃った!

上手く着地が出来ず、不恰好にビルの屋上に倒れ込むが、すぐさま上体を跳ね上げて円花に叫ぶ。

「今だ!」

「待ってました!!」

意気揚々に返す円花。同時に右手の得物の砲身が3つにばかりと開いた。

「スターブレイカー 最大出力、放射!!!」

その台詞と共に、スターブレイカーの砲口から途轍もない勢いで放出された。

照射系ビームの奔流は光柱と見紛う程強く、無人機を2機共々その渦中に呑み込む。

剰りの威力に小鳥も息を飲みつつ、一つの懸念を心中で呟く。

(つて、この威力まさか制限かかってないのか!?)

学園のISには、パイロットの暴走を止められるよう制限がかけられている。

ところがスペックの最大値はリミッターがかけられていようともそうでなくとも変わらない。

ティアーズと同じ感覚で威力を考えていた小鳥の予想に対し、実際のスターブレイカーの威力が乖離していたのだ。

それはある意味では嬉しい誤算でもあったが。

「流石にやったでしょ・・・！」

円花、それはやってないフラグだ。

言葉にはしないが、それでも注意深く無人機を睨<sup>にら</sup>んだ。



## Confession

スターブレイカーの一撃、二人の敵を巻き込んだ光柱は、容易くコンクリートの屋上を融解させるだけでは飽き足らず、天井を貫通してビルの壁までもをドロドロに溶かし切り、最終的に道路を跨いで向こう側のビルの外壁まで軽く溶けてしまった。

「流石にこれでやったでしょ……！」

自分のやった事に軽く恐怖を覚えながらも、必殺の感覚に笑みを浮かべる。

天井が崩れ落ち、最早屋内である事さえ定かでないビルの屋内を覗き込む。

だが、そこで見たのは自分の感覚を裏切る物だった。

陽炎の昇る廃ビルの中、一機のISが姿を表した。

「うそ……まだ動くの……!?!」

あれだけの威力の攻撃であれば、普通はどんなISでも動けなくなる。細かい事はよくわからないけれどこのISがそんな確信があった。

だということにも関わらず、目の前のISは動いている。

どうして、と思ったが、その答えはすぐ目の前にあった。

陽炎と瓦礫の中にもう一機、ISが横たわっていた。

その装甲は黒焦げで、一部は溶けかかってすらいる。

「まさか、仲間を盾にしたっていうの!?!」

信じられない、仲間を盾にして自分だけでも生き残るだなんて。

確かに、IS一機分のシールドバリアーがあれば、あの一撃は避けられた。

だが、そんな行為はまともな人間なら思いついたとしてもやろうとはしないだろう。

生理的嫌悪と、人としてやってはいけない行為を前にして、何かが切れるような音がした。

敵はただこちらを見ているだけだが、円花の切れかけの堪忍袋を破るにはその存在があるだけで十分だった。

「アンタ・・・何をしたの？」

敵は答えない。

「何をしたか分かっているの!？」

何も言わない敵の存在が、怒りを煽り立てる。

「良いわ、そんなに死にたいんだったらお望み通り消してあげる・・・

!!」

怒髪天を突く様な語調で吐き捨てて、敵に向けてスターブレイカーの銃口を向ける。

「!？」

だがその直後、ISの全長ほどある巨大な剣の切っ先が、敵の胸を貫いた。

反射的に敵が切っ先を掴むが、そんな事はお構い無しに切っ先は前へ前へとその身を進める。

「な・・・に・・・?」

呆然としている最中にも敵の胸からその剣の切っ先が伸びていて、平静を取り戻す頃には剣の三分の一くらいが視界に入っていた。

と、状況を掴みきれない円花に、敵の背後から聞いた事のある声が響いた。

「いい加減・・・壊れるオツ!!!」

低く、よく通る声。

小鳥遊が威勢の良い掛け声と共に巨剣を振り上げる。

引き抜かれる事も無く振り上げられたアイアスは敵の腹から首へと移動し、上半身を縦方向に真っ二つにした。

啞然としている自分をよそに、小鳥はブレードをバツクパツクに預け、敵の左手を引きずってこちらに歩いて来る。

ガリガリという音が近づくのに気付いて、ビルの屋上に降り立ち恐る恐る小鳥に訊ねた。

「お、小鳥・・・さん?あなた、今、何を、」

「トドメを刺した・・・ああ、安心しろ、コイツは無人機だ」

そう言つて先程背中を刺し貫いたISの腕を持ち上げる。

言われて見れば、確かにその断面は機械で埋め尽くされ、搭乘して  
いる人間がいない事を明確に表していた。

思わず安堵のため息が漏れる

「び、ビツクリした……。殺したのかと」

「馬鹿言え、人生のターンに差し掛かったばっかで殺人罪なんざ洒落  
にならん」

肩を竦めて戯ける小鳥。

オレンジのバイザー越しに見る目はどことなく自虐的で、何か違和  
感を抱かせる。

どうかしたの、と声をかけようとした時、小鳥が先んじて言葉を投  
げた。

「それで、お前は大丈夫か？」

「え？あ、ああ！はい！どこも痛く無いです」

「ISに乗つてて違和感とかは無いか？」

「それも・・・問題無いです」

特に異常は無いと思う。むしろこの機体は調子が良く、なんなら中  
学の実習で乗つた機体よりもずっとフィット感がする。

「って、何この格好!？」

服がどこかに消えて、代わりに競泳水着の様なハイレグのISを  
纏つていた。

それに気付いた円花は、顔を真っ赤にしてしやがみこむ。

「い、いやっそ、その、これは」

「解つてるよ、大凡その機体・・・『サイレントゼファイルス』が勝手に  
展開したんだろ……。って言うかそんなに恥じらう様なモンか？学園  
の連中なんざ平気でISスーツ姿を見せつけて来るぞ」

「ソレとコレとは話が別!・・・その、こう言う服は初めてで・・・」  
そう言つて真っ赤な顔を俯むかせる円花。

やれやれ、学園の女子連中もこれくらい羞恥心があれば面白いのだ  
がな。

最近では改善されてきたようだが、ほんの一ヶ月前まで下着にパー

カーと言う部屋着すつ飛ばして寝間着姿で寮内をほつつき回る女子が結構居た。

何と言うかあそこまで恥じらいが無いと、この世の猥褻罪わいせつざいの存在理由が分からなくなる気がしてならなかった。

・・・気を取り直して。

「まあ兎に角異常が無いのなら何だって良い。千冬先生の妹に何かあったら事だからな」

主に私怨しえんで千冬に殺さねかねない。ああ見えて千冬がブラコンシスコンの気があるし。

と、皮肉った笑顔で円花に告げると、急に彼女の顔が怒りに曇った。

「・・・やっぱりそうだよね」

「あん？」

「何でも無いです。聞き流して下さい」

「お、おう」

何かは分からないが、急に円花の機嫌が悪くなっている。

何か機嫌をそこねる事をした覚えは無いのだが・・・

・・・気にしている場合でもないか。IS学園に連絡して事後処理をしてもらおうとしよう。

円花に背を向けて銀影の耳当て部分に触れたその時、円花が声を上げた。

「ぎゃあっ!?!」

「っ、どうした!?!」

振り返って見ると、円花の体を覆っていたサイレントゼフィルスの装甲がドロドロに溶けていた。

慌あんどてて駆け寄り、銀影の肩の『眼』からある程度の情報を確認して安堵あんどの溜め息を溢こぼす。

「ああ何だ、形態移行か」

どうやらサイレントゼフィルスの最適化パーソナライズが終了したらしく、円花に合わせて一次移行ファーストシフトを行っている様だ。

「えっと、これ大丈夫なんですか!?!」

「ああ大丈夫だ・・・多分」

「おーい!？」

「問題ねえよ、一夏もそれを経験してる。変な事しなけりや変な事にはならん」

軽く冗談を飛ばしながら、その様を眺める。

実際自分の目で形態移行を見るのは初めてで、まじまじとその様子を観察してしまう。

と、円花が胸元を隠し、慌てた様子で問う。

「ちよ、何見てるんですか!？」

「ISの形態移行。別にそれくらい良いだろ? 滅多に無い機会なんだから」

「布一枚の女の子を凝視しないで下さい!」

「おっとこれは失礼」

半ギレの円花から顔を離し、戯けた表情を見せる。

半信半疑の表情の円花は、こちらを睨みつけてきた。

その顔付きは本当に千冬そっくりで、しかし本人には無い可愛げが、こちらのささやかな嗜虐心を煽って仕方が無い。

「おいおい、そんな恐い顔すんなよ。揶揄いたくなる」

「やめて下さい」

クツクツと噛み殺し切れない笑を浮かべている内に形態移行が終わったらしく。あつと言う間にサイレントゼフィルスの装甲が硬質化した。

「つと……終わったか。どうだ、何か変わりはあるか?」

「えつと……。フィット感が上がりました!」

「そりや当たり前だ」

そうい言った直後、俺達以外の声が会話に割り込んだ。

「じゃあ目的達成だね。うんうん、途中はどうなるかと思っただけど、やっぱり束さんは天才だね」

「……!」

声は後方、少し高い場所からした。

振り返って見てみれば、階段に繋がる塔屋に腰掛ける篠ノ之 束が居た。



それがもし円花にサイレントゼフィルスを譲渡したことに繋がるのならば、それを逃す手は無い。情報は一つでも多い方が良い。

「ふう〜ん。そんな事に興味を持つんだね、もうちよつと聞きたい事あるんじゃないの?」

「無論両の手では足りない程あるさ。だが、ここに居る人間として俺には後処理の仕事が残ってる。優先順位が違うんだよ」

肩を竦め、やれやれと言った風に応える。

その一方で、小鳥の細長い目は、鋭い眼差しで束を見据えた。

「むう〜。じゃあかわいそうなオドくんに事のあらましを伝えまSH OW!」

束は謎の球体を放り投げる。

何かと思つてそれを見ると、それから空中投影映像が投射された。

そこには気を失つた円花の指に指輪を嵌めている束の姿が。

「いっくんやオドくんにISをあげてたから、前々からまーちゃんには何かISをプレゼントしようと思つててね?それでまーちゃんの事ずーつと見てただけど、なんか攫われそうになつてたから、ゴレムを使つて助けたつて訳」

ゴレム——恐らくは無人機の事だろう。飼い主の言う事を聞くしか能の無い無人機には良い渾名だ。

円花に攻撃を仕掛けなかったのはそう言う事だつたらしい。詰まる所、奴等の目的は確かに円花だったが、標的は俺だけだった、と言う訳だ。

・・・何と言うか、お互い同じ人間を護衛対象にしていたと言うのはおかしい事態である。

やっぱり言葉つて大事だな。

「どうやら、ここまで面倒臭くなつたのはコミュニケーション能力の欠如にあつたらしい。」

「成る程な・・・大体分かつた」

「うんうん、物分かりの良い子は束さん好きだよ?」

そりやどうも、と適当に言葉だけの返事を返して、頭を回転させる。

・・・それだけじゃないだろう。

束の事だ、まさかそれだけの事の為に手駒ISを手放すとは思えない。しかし、今の情報だけではその目的を絞しぼり込めない。

それに、そこを深掘りしても剩り意味は無いだろう、これを考えるのは後に回して、また別の事を考える。束のスポンサーの事だ。

円花を襲ったのは十中八九アメリカ、ないしアメリカの息がかかった連中だろう。

そう易々やすやすとISを、それも最新の第三代機を入手できる組織などありはするまい。

ならそれらの任務を邪魔した束はアメリカ以外のどこかにスポンサーを持つている可能性が浮上する。三日前のプロファイリングから意見を掌てのひらがえ返しするのは躊躇ためらわれるが、今現在の状況から考えるのならそれがベターな可能性だろう。

「それはそうとお前、円花を攫さらおうとした連中について知っている事は無いか？少々、お礼参りがしたくてね」

ある程度の状況整理を後に、改めて訊たずねる。

可能な限りその真意を悟られぬよう、最大限皮肉かつ性根の悪そうな笑顔で。

（知っていたらほぼ束は黒・・・知らなかったら・・・振り出しに戻るだけだ）

アメリカとのパイプを持っているのなら、アメリカの最新鋭機を持つ組織を知っていてもおかしくはない。

そして束の性格だ。ストレートに言うか仄ほめかすかのどちらかだろう。

まして、こちらが教えを乞こうなら、その反応は

「ふっふっくん、教えなーい」

（だろうな）

予想通り、だと言うなら煽あおり立てよう。

ちよつとだけ間を置いて。

「は、はは・・・オイオイ、俺は束も知らない組織にケンカ売ったつてのかよ」

額ひたいに手を当てて、絶望した“頭を回す”。



「東が知らない、と言う事は。相当隠密に特化した、秘匿のネットワークを持つているのか、それともネットワークを用いない組織という可能性を考慮する必要があるだろう。」

「そうなるも俺や学園の調査ではその素性を洗い出すことは困難を極め、円花の身に降り掛かる危険に對して対処もままならない。」

「まさかまさかと思っていたが、ここまで世界が広いとは。」

「あの・・・小鳥さん?」

恐る恐る円花がこちらに尋ねる、それにハツとして、「俺は円花の方を向く。」

「どうにも『敵』が何者なのかはわからないが、彼女が危険な状況に立たされているのは間違いないだろう。」

「・・・状況提供ありがとう。じゃあこれで。」

「え?ちよちよちよ、まった!本気で言ってる君!」

「当たり前だ。答えられないって事は解らないって事だろ?それなら四の五の言ってられない、後片付けを放置してでも学園に向かつて対策を練った方が良いだろ。」

「ほら円花、行くぞ。」と円花に付いてくるよう指示する。

「東は超自己中心的な性格だ。」となれば

バックに付いている組織の事など知った事じゃないと話し出すに決まっている。」

円花が着いて来ている事を確認して、スタスタスタと壊れたビルの上を歩いていく。

と、今までに無い程の慌てっぷりでこちらがを引き留めた。

「待つて待つて、東さんはその組織について知ってるよ!」

「大丈夫大丈夫、知らない事を無理に言う必要は無いつて。」

「出任せの話には興味が無いので、彼女に背を向けながら手を横にヒラヒラと振り、歩みを止める事は無い。」

と、東が大声でこちらを呼び止めた。

「組織は君にも縁がある!」

ピタリ、足を止める。

—— がかった。

思わず上がりそうになる口角を抑え、いかにも驚いているような表情で振り向く。

「……どう言う、意味だ……！」

「……」  
「秘密組織に縁を持つた国に縁はあるが、俺の中でそれはさしたる問題ではない、無自覚に縁を結んだのなら話は別だが、それはそれでどうやったら無自覚に秘密組織にか縁を持つてると言うのか」。

その反応に気を良くしたのか、束は意気揚々と話を始めた。

「ふふくん、でもこれはとっておきの秘密だしー、教えるかどうかは別だけどねえ？」

「……！そう言う訳にも行かない」。『正体不明の』組織の正体を知るためにも情報を喋って貰わねばならない。

「……てめえ、人を舐め腐るのも大概にしろ！」

円花の身辺が掛かって来る以上早い事束から情報を引き出さなければならぬ。

「はぐらかされた事に対する怒りと、そんな焦りから、柄にも無く激昂の一喝を上げてしまおう」。

「へえ？珍しいね、オドくんがそんなに他人の事を気にするなんてね」  
「当然だ。分かりきった災厄を見過ごせる程俺はロクでなしじゃない」  
「……！」

睨み付けた視線はそのままに、『激昂を抑えながら』冷静に言葉を連ねる。

「それに俺に縁がある組織なら尚更知らなきやならん……」  
「そんな手段を使っても」

もう既に欲しい情報には大凡の見当がついたが、もう少し欲張ってみるか。

「ふうくん？どんな手段を使っても……ねえ？」

「……出来る事だけだぞ」

「まずいなんか余計なこと言ったかも」。

「……」  
「束はロクな性格をしていない、  
言葉端にヤツの食指をそその台詞を混ぜろ  
などたやすいだろうし」。

（これまでの発言は多分本当……。束とアメリカには何らかの繋がり

があるを見て間違い無い・・・アメリカだけとは限らないが)

上手く行けば束のバックにいる組織を複数リストアップ出来るかも知れない。——もし勘づかれて黙られても最低限の成果は得た、痛む腹は無い。

「じゃあどうしよつかない・・・」

たわわな胸を左腕に預け右の手で顎をつまみ、考える素振りを見せる束。

好機だ、アイタッチで操作し、秘匿通信をサイレントゼフィルスの間に結ぶ。

(円花！)

「えっ、あつハイ！」

驚いてこちらを向く円花。その肩を押さえ、口許に人差し指を立て『静かに』とハンドシグナルを送る。

(プライベートチャンネルだ。返事はしなくて良い)

目を束に向ける。どうやら気づかれてはいないので、心の言葉を円花に送り続ける。

(色々あって俺はもうちょつと束から話を聞き出したい。でだ、もしそれがアイツにバレたら面倒な事になる)

『だから?』

返事はしなくて良いと言ったつもりなのだが、円花は言葉を返して来た。しかもちゃんとプライベートチャンネルで。

(お前・・・凄いな)

『え、何が?』

(・・・今は良いや。話を続けるぞ)

俺はプライベートチャンネルを使うのに5日かかった上自動で使うのがやつとである。

基本ISの操縦は感覚に依る所が大きく、その成長の速さはIS適正の高さに比例する。

一般に何を以ってしてIS適正が測られるかは篠ノ之束とIS本人(人?)がしか知らないが、噂によると、姉妹揃って代表候補

と言うのもあるらしいし、遺伝する何かなのだろう。

この分だと円花もまたIS適正において高い数値を叩き出しそう  
だ。

閑話休題

気を取り直して円花に説明を続ける。

（俺が『逃げさせてもらう』と言ったら俺について来い、IS学園まで  
ひとつ飛びだ）

『追い付かれる可能性は？』

（無い、周囲に俺達以外のIS反応は無いし。人の足でISに追い付  
くのはまず無理だろ。いかに束と言えども人間だ、ISの機動力に付  
いてこれる訳が・・・無い・・・筈だ）

『大丈夫ですか・・・？』

いかん、根拠は無いが束ならやれそうな気がしてきた。

急激に自信が減速し始めるのを他所よそに、束が声を上げた。

「うーん、残念。お話し時間はおしまいみたい」

あらぬ方を見つめた束は、そう言つて俺達に向けて微笑む。

「オドくんへの無茶振りはお預けになるけど、またその時まで期待し  
て待っててね？」

「おい待て、どう言う・・・ッ!？」

一方的な言葉に詰め寄ろうとした直後、束の姿が空くうに掻き消えた。

しかもそれはただの光学迷彩ではなく、銀影のレーダーからも束の  
生体反応ロストが消失したのだ。

「——チツ、これじゃ終えねえか」

追跡もしようにも見え無い上に足掛かりも無いのでは仕方がない。  
諦めて撤退てつたいの準備を始める。

しかし、束が唐突とつとつなのはいつもの事だが、どうしてこうもいきなり  
話を切り上げたのやら。

ふと気になって束が見ていた方の空を見上げる。

「・・・成る程な」

「おーい、小鳥ー!」

視線の先、IS学園方向の空から級友織斑一夏が飛んできた。おそらく市民からの通報でやってきたのだろう。

そしてどうやら、束は一夏の接近に気がついて撤退したらしい。しかし何故一夏の接近が撤退に繋がるのか。そもそもどうやってそれを察知したのか。

色々とは気にはなる事は多いが、それは後回しだ。

「……………」

ちらりと、円花の方を見やる。

ノリで共闘していた訳だが、彼女が纏うISは（経緯はどうあれ）盗難品である。

映像記録から盗難に関しての罪の所在は何とかなると思うが、今現在彼女はそれを使用し、まして最適化までしてしまった。

どうしたものか。刑罰に問われる事は避けられそうだが、それでも厄介な事になるのは間違い無い。

刹那の様にひた隠しにする……のは無理だろう。彼と違って使っている物の由緒が明らかな上、どうもキナ臭い。サイレントゼフィルスを使った以上AEU、特にイギリスから利権だの国家代表候補だのと吹っ掛けられるのは間違いないし、アメリカのISを使った連中の事もあるし、アメリカも何らかの形で動きを強める事だろう。

「面倒極まりないなホント……………」

あの国は中国に並ぶレベルの傲慢さと横暴さを兼ね備えている上に国連での発言力も強い。

これからの事に頭を抱えていると降り立った一夏が話しかけてきた。

「どうしたんだ小鳥…………って円花!どうしたんだそのIS!」

「今頃お…………?ホント一夏兄は鈍いわね」

鈍い云々の話でもない気がするが、それはさておき話を進める。  
「…………?お前は何しに来たんだ?」

「ああ、そうだった。街中でIS2機が暴れてるって通報があったから、なんとかしてこいって事で来させられたんだった」

だろうな、それ以外の理由が考え付かん。

事情聴取は学園で出来るだろうし、警察にも通報が行っている筈だ。さつさと無人機を回収してトンスラするべきか。

「と言う事は、お前に課された目標は『暴れてるISの鎮圧』と『最大限の情報収集』って感じか」

「そうそう……で、コレはどう言う状況なんだ？」

「色々あった……死ぬ程色々あった。ここで端的に伝えられるとしたら、襲われた、撃退した、襲われた、破壊した、逃げられたって事だ」  
投げやりに乱暴な説明をして、肩を竦める。

「詳しい話は後だ。この機体どもを一般人に見せる訳にはいかん」

そう言つて足元に転がる一機の無人機を担ぎ上げた。

一夏はまだ知らない事だが、現在最も有効非人道的に活用されそうな『ISの無人機化』と言う技術がこの機体には使われている。

早いとこ撤収せねば、面倒な事になるのは間違いない。

もう一機、瓦礫がれきの中で黒焦げくろこになった無人機を顎で示し、円花に回収を依頼する。

「円花、もう一機の方任せて良いか？」

「あ、はい」

途方もない嫌な予感と、後処理の事に頭を抱えながら、織斑兄妹と共に学園への帰路についた。

さて、『力を得るにはそれ相応の対価が要る。そう言ったのは誰だったろうか。』

・・・その意見には大いに賛成だ。

力に限らず、モノを得るには価値に見合う対価が必要で、それは有限のこの世界において間違いない絶対の法則でもある。

「ただそりゃ手に入れる方の問題だろうがよ・・・」

小鳥が座り込むのは簡素なパイプ椅子、仰いだ目元を右腕で覆いで愚痴を吐き出す。

ここはIS学園の地下施設。驚いた事にこのような地下施設は学園に複数存在してるらしく、ここに連行される前に、前回の無人機騒ぎの時に連れられた時とは別の施設に続く、いくつかの隔壁が見えた。

(準軍事施設とは言えどんだけだよ)

見ている分には面白karouが、その施設にお世話になるのは面白くない。

と言うのもこの施設は事情聴取と尋問用であり、真っ白い大ききの割には圧迫感の強い部屋の中、目の前にはテーブルと鬼教師。

ホントに俺が悪人だったら何も聞かずに沈黙し続ける位しかやる事無いネ。

「私語は慎め馬鹿者。下手な言葉を吐けばその分貴様に下される罰が重くなるだけだぞ」

千冬が窘めて来る。が、そんな事は知ったものか。

「そんな事言われたってねえ・・・愚痴も言いたくなりますって。円花は優しい優しい麻耶先生が事務室で聴き取り調査でしょう？それに比べて何ですか俺の扱い、雲泥どころか砂と星レベルの差じゃないですか」

無人機を回収し学園に帰投した数分後、俺と円花は先生に引つ張られ、着の身着のままそれぞれ別の人員と設備で聴き取りが始まった訳である。

事態が事態である為こちらに拒否権がないのは重々承知しているつもりだが、この待遇差では流石に何の不平不満も溢すなど言われなくても無理難題な話だろう。

「俺アなあーんにも悪い事あしてませんぜー？ 円花の誘拐を突然ながら阻止して。そしたら束謹製の無人機に襲われてえ．．．全くもって正当防衛ですよアレは」

「その割にはビル2棟と『駅前』に被害が出ているらしいが」

「人的被害が出るよりはマシですよ、物的被害に関してはまあコラテラルダメージに必要な犠牲って事で」

「今日は随分と舌の回りが良いな、良いことでもあったか？」

「逆ですよ逆。ストレスと肉体的疲労が俺のマウスピースの潤滑油でしてね」

あーあやつてらんねー。と変わらぬトーンで放言する小鳥。表情ひとつ変えない千冬は。そのまま尋問を続ける。

「それで、何か情報は無いか？」

「さつき話したでしょう、誘拐されかけた、撃退した、襲われた、破壊した、逃げられた。それだけですよ」

「違う、状況説明は聞き飽きた．．．束は何か言わなかったか？」

「ああ成る程。そう言う事ならいくつか」

多少演技クサイところもあるが、小鳥は促されるままに口を開いた。

「二つ、サイレントゼフィルスは他者から貰い受けた事。二つ、円花を攫おうとした連中を知っている事。三つ、円花にはいずれサイレントゼフィルスを渡すつもりだった事。本人が口にしたのはこちら辺ですかね。後は推理の時間ですよ」

「．．．．．そうか」

「．．．．？」

簡素な返事を返す千冬。

だがその顔はどこか安心したような、下手な嘘を吐いた子供のような、そんな安堵のため息が混ざったような表情をしていた。

しかし、そんな表情の変化はほんの数瞬の出来事であり、秒と経た



ずに眼光鋭いいつも通りの顔に戻っていった。

彼女の秘密とやらに興味は尽きないが、これ以上の追求は難しいだろう。

意識を切り換えて自らの解析と、そこからなる推理を口にする。

「……んで、俺の個人的な考えだが。今回の一件は東にとつて半分以上偶発的な物であり、そして、円花を攫おうとした連中と東には何らかの関わりがあるものと考えられる」

「ほう？その理由は？」

東との会話を思い出し、もう一度その内容を精査して口を開く。

「どうやって聞き出したのかは端折るが、東自身が言ったんだ『円花を攫おうとした組織を知っている』とな。……そしてその組織がアメリカの試験機のISを使っていたんだよ」

千冬の頭の良さなら、ここまでの情報でも十分に理解できるだろう。

そう思つて話を振つたつもりなのだが。

「……ひ？」

「え？」

「……………」

「……あんたそんな言わないとわかんない人だったか……？」

何か異様なレベルで千冬のIQ知能指数が下がっている気がする。

やはり何か気になってる事があるのだろうか。

とは言え気にしても仕方がないので、話を続ける。

「つまりアメリカのISを使うことから襲撃者をアメリカの手の者だと仮定すると、アメリカ内の秘密機関に対して何か知つていると言う事になる、違うか？」

「成る程。前回のプロファイリングの事を鑑みれば、それも領ける」

その返答に領き返す。

「そう、それも含めて考えると。東のバックに居るのはアメリカでは間違いない」

これまで仮説止まりだった物が現実味を帯びてくる。

(もう一押しので丁度良く証拠が現れてくれた)

だからと言ってどうこうなる話でもないが、それでも束の目的に近付く一歩だ。

泥縄式に、確実に現実的な答を。

尋問そつちのけで考察を深めようとしたその直後、千冬が口を開いた。

「そんな事より」

「あん？」

訝るような声音で聞き返す。

束対策以上の事柄が今あるのだろうか。

首を傾げる小鳥に千冬が話を切り出した。

「円花を……どうするべきだと思う？」

「——あゝ……」

成る程そう言う事か、前々から千冬には一夏に対してのみ当たりが強く、立派に育って欲しいと言う系統のブラコン味を感じていたが、やはり円花に対しても少なからずシスコンであった、と言うワケだ。どうやら考え事とやらは円花の処遇についてらしい。

思わず顔面に浮かぶ趣味の悪い笑みが浮んだ。

「刹那のヤツと同じようにIS学園に転入させりや良いんじゃないか？ 中学の授業内容くらいなら十分できるだろう」

「それはそうだが……。強制に転入させても良いものかと思ってない。アイツにもアイツなりの生活がある、そう言って千冬が小鳥に向き直ると、小鳥の口が空いたままだった。

まるで、信じられない物を見たかのように、驚愕の表情を浮かべている。

「……どうした、何だその顔は」

「——イヤこつちの台詞だ。何か悪いモンでも食ったのか」

「おい待て貴様私を何だと思っっているんだ」

「冷血と鉄血の流れる血も涙も無い執行者」

ゴチャイン！

千冬の鉄拳制裁が小鳥に飛んだ。

『いたたた……』と額を抑えた小鳥は、その手をそのままにして言葉

を連ねる。

「本人の意思が大切なら本人に聞けば良いだろまどろっこしい」

「それが出来れば問題無いのだがな」

「・・・？」

妙に引つ掛かる台詞。

それはまるで円花が本音を話さない性格であるように聞こえる。

(はて、円花の性格を考えたらそう難しい話でもなさそうだが)

千冬ほどとは言わないが、円花も結構気骨のある性格だ。あんな危機的状況に陥ってなお、俺に向けて反論や喧嘩腰での会話が出来るような奴が自分の本音を隠すとは思えない。

小鳥が小首を傾げていると、千冬が話を続けた。

「アイツは自分の本音を話さない節がある。私が聞いても一夏が聞いても、それが本音なのか気を使つての嘘なのか：ハッキリと分かった試しが殆どない」

「あく。いるなそういう奴」

適当に返答しながら心中で呟く『ああ、外と内での差が激しいんだな、円花の奴』と。

どうやら千冬との間にあった認識の齟齬の正体は、そもそも円花自身身の切り替えが面白い程大きい事から来ているようだ。

・・・まあ、目の前の情け知らずの織斑千冬と同居してりやそうもなるか。

とは言え、それを話すというのも野暮な話だろう。

心中で小さく呟いた小鳥は、解決策を提示する。

「ならその件、俺が引き受けてやろうか？」

「ほう？円花の真偽が見抜けると？」

千冬が目が鋭い光を帯びる。どうやら家族の事を一番理解していると言う自負でもあったのだろう、琴線に触れられて機嫌を悪くしているらしい。

だからと言って退く気は無いがな。

「本音を見抜くと言うより、本音を引き出す、と言った方が正確だな。家族に対して何かしらの引け目があるなら俺が聞けば問題ないし、そ

うでなくとも俺の口の上手さはアンタも知る所だろ？」

半開きの眼の内に、鋭く、しかし生暖かい光が見え隠れする。

(「小鳥」などはよく言えた物だ。・・・これは最早蛇蝎の類だ)

束が時折見せる背筋の冷えるそれとはまた別の眼差し。

油断すれば足を取られてしまいそうな、そんな不気味な眼が笑って告げる。

「それに円花にやもう一つ問題が残ってる、それを解決する為にもIS学園に入学するかそこら辺の意思があるかは確認した方が良さ。んでもって円花の意思の確認の難度が俺の方が低いなら、そっちの方がいいんじゃないかな？」

円花に付きまとう問題、それはブルーティアーズ3号機「サイレントゼファイルス」を無断使用し、挙げ句の果てに最適化処理までやってしまったのだ。

これはある意味では円花の所属云々よりも根が深く、厄介な話だ。

「ま、別に俺としてはどうでも良い話でもある。あまり他所ん家の事情に口突つ込むのも何だしな」

戯けたように肩を竦める小鳥。

別に何か問題があるわけではない、しかし小鳥に頼むと言うのは何か癪だ

(・・・まあ、やるだけやらせてみるか)

断る理由も無し、成功率が高いのならそれに越した事は無い。

「・・・ならやって見せろ、小鳥」

「はいはい、なんどでもして見せますよ」

.....

「よう」

「あ、小鳥さん！」

IS学園の先生(山田先生と言っらしい)からの事情聴取が一通り終わり、とりあえずと言う事で待合室で待たされていたのだが、そこに小鳥さんもやって来た。

「小鳥さんも終わったの?」

「まあな」

そう言つて小鳥さんは少し離れた席せきに腰掛けた。

「それで、これからどうする?」

「どうつて・・・何を、」

いきなりの問い掛けに言葉を返す。

ため息を吐き出して小鳥さんは答える。

「お前の所属についてだよ。お前がどうも何かしらの組織に狙われているのは疑いようの無い事実だ。その上、サイレントゼフィルスの一件もある。お前はもう一般人じゃない」

お前の意思に関わらずな。そう言つて頬杖ほおづえを突く小鳥さんは、ひどく不機嫌だ。

とは言え、そんなに心配する必要は無いんだよねえー。

「それについてはもう決まってるんですよねえ」

「・・・え、マジで?」

「うん、山田先生にはもう言つただけけど、私は狙われてるみたいだし、安全の為に学園に入学することにした」

「・・・そうか。まあ妥当だとうだな」

そっけなく切り返す小鳥さん。もうちよつと驚くと思つてたんだけどな。

でもそれが目的ではないし、がっかりしていても仕方無いか。

「・・・ったく、苦労しないな」

「え、何か言いました?」

「何も・・・空耳だろ」

——なんか怪しい、根拠は無いけど。

そう思つて追及しようとしたら、小鳥さんの方が口を開いた。

「で、IS学園に所属するのは良いとして、そっから先は?」

「先?」

「ああ、お前の知る由も無い話だろうが、お前の乗ったIS、サイレントゼフィルス”はどうやらイギリス軍から強奪せいとうされてるモンらしくてな・・・。それを使った織斑お前さん円花はユーザー登録されてるんだよ」

「え、そんな物だったんですかアレ」  
それは知らなかった、だったら最適化なんてすべきじゃなかったかな。

そう軽い後悔を浮かべていると、待合室の扉から山田先生がやって来た。

「転入用の資料持つてきましたよ織斑さん……って小鳥さん!」  
両手で持つにしても多すぎる量の資料を抱えている山田先生は、小鳥さんの姿を見て驚いた声を上げる。

「そんなに驚きますかね……つと、半分持ちますよ」

「そこは全部もつてあげましょうよ」

言葉通り資料の半分だけを持ち、近場のテーブルに置いた。

遅れてもう半分の資料を置いた山田先生が背筋を伸ばす。

と、たわわに揺れるおっぱいが目を引いた。

……千冬姉よりも胸が大きいんじゃないかなこの人。

ちらりと、と小鳥さんを見やる。反応次第ではからかう材料になるかもしれない。

「……（ペラリ）」

生憎と資料の一部をめぐっていた。

——ちえ、面白くない。

そんな不機嫌な私の顔を見た小鳥さんが不思議そうに首を傾げた後、意地の悪そうな笑顔を見せた。

弱みを見せる訳が無いだろ、と言いたげな笑顔。

『——千冬先生の妹に何かあったら事だからな』

……どこまでも『大人』な人だな、心配は私の為じゃなくて自分の為で、私をどこまでも舐め腐ってる。

嫌悪感に顔を歪めている私は忌々しげに顔を背ける。今もきつと小鳥さんの顔は性根の悪い顔をしているのだろう。

「おい、お前の事なんだ。少しは目を通しておけ」

「はい」

不承不承な心を隠さない返事をして、手渡された書類を流し見る。  
スゴい、禁則事項だけで紙の辞書くらい分厚い。

「一夏兄もこれを読んでいたのだろうか。だとしたらよく入学までの短期間で頭に入れたなあ、と思いながらも、ふとした疑問を山田先生に投げかける。」

「あの、私サイレントゼファイルスにユーザー登録されてるらしいんですけど。それって解除出来たりします?」

「あん?どうした?」

小鳥さんが答える。いや、山田先生に尋ねただけだなあ……。山田先生も反応してくれてるし、あんまり支障はないけど。

右手人差し指の指輪を擦りながら続ける。

「専用機持ちはほとんどが国家代表候補生って話になってるけど。代表候補生じゃないし、そもそもサイレントゼファイルスに乗ったのも偶然ですし……。できるならこのままが良いんですけど、これどう言う処理になるんです?」

「あ、えつと……。どうなるんです?」

「そこで俺を頼りにするなよ……」

小鳥さんが肩を落とす、確かになぜ小鳥さんを頼るのか。

と、山田先生に対する評価を落としていると、小鳥さんが口を開いた。

「円花、腕部だけ展開できるか?」

その片手には電子辞書らしき何か。

どうするつもりかはわからないが、とりあえず左手だけ展開させる。

と、山田先生が驚きの声を上げた。

「え!?もうそんな細かい操作が出来るんですか!?!」

「ええ、プライベートチャンネルでの通信も出来ますし、円花のIS適正結構高いと思いますよ」

「え、これってそんなにスゴい事なんですか?」

「はい!私が部分展開できるようにするまで大体一ヶ月かかったので三十倍くらい早いですよ!」

流石千冬先生の妹さんですー!と、一人舞い上がっている山田先生を無視して電子辞書のような物を机の上に置いた小鳥さんは、懐か

ら四角い端末を取り出す。

次の瞬間に、小鳥さんの頭にISのヘッドギアが現れた。

「さて・・・と」

ヘッドギアのブイアンテナをバイザーに引き下ろした小鳥さんは、私の手を取ってまじまじとサイレントゼフィルスの装甲を観察する。

何をする気なんだろうと思っていると、次の瞬間、小鳥さんが爪を立ててサイレントゼフィルスの装甲を引っ掻いた。

「ちよおおお！何するんですかあ!？」

思わず飛び退いてその意図を問いたです。

小鳥さんは素っ気無く答える。

「カバールの展開だよ。工具探るのが面倒な時はこうやって代用したもんだ」

「へ・・・おお、凄お」

見れば腕の装甲が開いていて、小鳥さんの言っている事が本当の事だと理解できた。

「ってこんなに簡単に開けて良いんですか?」

「問題ねえよ。そう簡単に開く物ではないし、ISにはシールドバリアがある。戦闘中に開く事態には一千億に一つくらいしか無いだろうよ」

「あ、そうか・・・物知りですね」

「安心しろ、二週間で叩き込まれる」

褒められても小鳥さんは手を止めない、もう一度私の手を握り、展開されたカバールの中身を物色する。

コードのソケットの型式を確認して、電子辞書ライクな端末を机から取り上げたかと思うと、液晶の収められた筐から10cm程のシリアルバスコードを引き出してサイレントゼフィルスのソケットに挿し込んだ。

そしてキーボードを叩いて小鳥さんは告げた。

「あ、ダメだコレ」

「はい?」

唐突に諦めのセリフを吐いた小鳥さんは、山田先生に画面を見せ



た。

「特殊な設定が施ほどこされてる。細かい事は調べて見ない事には解らんが、ユーザー情報が弄いじれない」

間違い無く束たばねさんの仕業しわざだろう。

しかも『消去できない』ではなく『いじれない』と言う事は他のユーザーを追加する事もできない、と言う事だ。

それが意味する所はつまり、

「困こまったなあ……。私がIS学園に入学するにあたって『一般生徒にも関わらず専用機持ち』っていう前例ぜんれいの無い事を通さなきゃならなくなったら、って事ですよね」

「だな……。」

「織斑おとづらさんの転入は保障の為にもなるだけ早くする必要があるのでありますが、でも……。どうしましょうか……。」

山田先生の眩つやきに小鳥さんは困った風に茶色い頭をかく。その顔は騒がしい諦観ていかんを湛たえているように見えた。

少しの沈黙の時間が過ぎた後、小鳥さんが何か思いついたように呟つぶやいた。

「……。仕業しぎょうが無い……。か?」

「!、何か思いついたんですか!?!」

「——まあ、一応。ただ幾分変則いくぶんへんそく的な手段しゅだんだからな。折合おりあいをどう付けるか、だな」

そう言って小鳥さんは唇つまを摘つまんだ。

これが小鳥さんのルーティンなんだろうなと思いついたように、その手段げんきぎょうについて言及する。

「じゃあその手段しゅだんって言うのは?」

「円花きぎょうを企業代表きぎょうだいたいひょうとしてねじ込む」

「え?」

「そ、そんなシステムありましたっけ!?!」

「無い」

「はあ?!?!」

何を言ってるんだこの人は。

私と山田先生が困惑したのを見ながら、真顔で小鳥さんは説明を始める。

「IS学園の管轄は国連だが、まあその運営はほぼ学園の気随きずいだろう？ 多少の無理は通せる」

半開きの目が悪趣味あくしゆみに歪む。

「どうやら、新しい仕組みを作り上げるつもりらしい。」

だがそう上手く行くものだろうか、と言うかそれなら国家代表候補の方が良いような気もする。

「そう上手くいきますかね・・・」

「俺が大丈夫だと言っているんだ、大丈夫に決まっている。勝算しょうざんの無い賭け事はしない主義なんぞでな」

「は、はあ。根拠があるなら良いんですけど」

「そんな訳で俺は学長に話を着けに行ってくる。円花はそのクソ程多い書類を書いておくんだな」

そう言って小鳥さんは待合室から歩いて出て行った。

# The results

「えっと・・・これは・・・」

クラス代表対抗戦がつつがなく終わってから早く五日。IS学園の教室にたどりついた俺は、クラスで唯一の俺以外の男子、小鳥遊の惨状に戸惑いの声をあげるしかなかった。

小型のノートパソコンを覗き込んでいるのはいつも通りだが、茶髪をひとまとめにした後ろ髪はいつもよりボサボサで、いつもよりかは開いている半開きの目は薄く充血し、その下のクマが生気の少なさを如実に表していた。

「何があっただ・・・?」

昨日の朝から顔を見せなかつた小鳥に何があつたか俺は知らない・・・が、聞こうにも聞ける雰囲気ではないな、これは。キーボードを叩く目には生気の無さの割には鬼気迫る物を感じさせる。

クラスメイトも心配しているらしく、小鳥から少しばかり離れた所からヒソヒソと話をしていた。

一方の小鳥は何も気にせずにキーボードを叩く手を止めると、バッグから黒と緑の缶を取り出し一切の躊躇もせず一気飲みし始めた。アレとんでもなく強いエナジードリンクだよな・・・。

天井を仰いでエナジードリンクを完飲した小鳥はそこで俺に気付いた

「ああ、一夏か」

「お、おはよう・・・どうしたんだ一体、一昨日の事も合わせて」  
聞きたい事がたくさん有った。一昨日の街で起きたISでの戦闘の事、どうしてそこに小鳥がいて、ISを着けた円花が居たのか。色々気になる事が多いせいで何とも言えないが、小鳥が全てを知っているのは間違い無いだろう。

小鳥は俺を見て目を細める。だがそれはクラスメイトに向ける目では無い。それは人を値踏みする物で、敵に向けるものだった。

「・・・ダメだ。今は話せない」

「っ、何で」

「今の俺では話し過ぎるんだよ、口止めされてる事まで話せば面倒だ……。それに、すぐ解るさ」

「……それはどう言う……?」

その言葉の真意を問おうとした時、教室の扉から千冬姉ちふゆねえと山田先生が入って来た。

俺の席は小鳥のすぐ後ろなので、席に座る事にそう時間はかからない。

着席した俺を千冬姉が小さく見やる。いつもはクラス全体を見回すのだが、いつもと少し違う行為こういに俺は首を傾かしげた。

(俺何か悪い事したっけ?)

身に覚えが無いので、本当に首を傾げるしかない。

ただ、千冬姉もそれ以上の事はせず朝のS H Rシヨートホームルームが始まった。

.....

各連絡事項かくれんらくじこうも伝え終わり、朝のS H Rが終わりそうになって、山田先生が良く解らないテンションで口を開いた。

「はい皆さん！突然ですがここで転校生しやうかいを紹介します！」

「転校生?このタイミングで?」

クラス内がにわかにざわつく。

鈴の時は少なからず噂うわさが流れていたが、今回は全くと言って良いほど前触まえふれが無かった。

一体どんなヤツがやって来るのだろう。

期待半分不安半分で話を聞くクラスメイト。

直後小鳥を除くのぞクラス全体が驚愕する事態が発生した。

「じゃあ織斑おりむらさん、来てくださいー！」

「は?」

タカタカと高い靴の音を鳴らして歩いて来る、小さい、IS学園の制服を着けた千冬姉とよく似た顔の俺の妹だった。

「皆さん初めまして、織斑おりむら 円花まどかです。色々あつてIS学園に入学する事になりました。IS関連の授業に参加させてもらいます。これから三年間、よろしくお願いします！」

——は、

「はああああああ  
!!!!????」

原作2巻

友と友と兄妹と (Friends, friends,

siblings)

六月初頭、日曜午後0:12分。

この俺、小鳥おどり 遊ゆうは学友一夏の誘さそいに乗り、その友人ごたんだんの五反田弾だんの家にいた。

KO!!!

「ぬツ、ぐおおお!?なんだそのコンボ!?!」

「メールシュトロームの機動力を侮あなとったな。コンボが微妙なら無理矢理にでも積み重ねれば良い・・・まあ、機体として弱いのは間違いないがな」

ゲームコントローラーを床に置き、弾に告げる。

現在やっているゲームは『I S / V S』インフイニットストラトス ヴァーストスカイここ四半世紀の内で最も売れたゲームと言っても過言ではない名作対戦型アクションゲームである。

一方、イギリス代表の第二世代IS『メールシュトローム』

ISを題材とした家庭用格闘ゲームは数あるが、一回戦で千冬&暮桜くれざくらに鎧袖がいきゆう一触いっしょくにされている事もあって、その多くでこの機体は不遇ふぐうな扱あつかいを受けており、それを使う奴は相当な物好きくらいだろう。

・・・まあ俺もその物好きの一人なのだがな。

いつの世も番狂ジャイアントキリングわせは人を惹ひきつけてやまない物である。

2年前にその為だけにこのゲームをやり込んだ俺は、最高難易度さいこうなんいどの全機体にメールシュトロームで勝てるくらいには強い。

「ったあー!こんなヤツがクラスメイトなんて良い御身分だなあ!」

「まあ良い思しいはさせて貰もらってるよ、この前だつて鈴と戦った時に対策付き合あってくれたし」

「ほえー面倒見めんどういいんだなあ」

「俺の役に従ったまでだ。それにアレもそう役に立った訳でもないだろう」

途中から一夏は自分なりの戦術を使い戦っていたし、何よりあの試合は没収試合になり後日個人的に行った一騎打ちでは対策の対策を取られてしまい惜敗している。

それはそうと、と弾は前置きして。

「どうなのよ、女の園の感想は」

—そう聞かれても、多分こう答えるしか無いだろう。

実直に学園生活の感想を述べる。

「地獄」

「………」

絶句する弾、一夏もそれに同意して。

「うん、地獄」

「……嘘つけエ!!メール見てりや楽園じゃねえかよ!?招待券があるなら行きたくてしゃあないんだぞ!」

—まあ側から見ればそう見えるだろうが、今学期始まって二ヶ月を振り返ってみよう。

・ 初日 : クラスの女子とマジ喧嘩。のち決闘

・ 五月 : 行事に乱入者。しかもそれが箝口令を敷くレベル

・ 同月中頃: 無人機が円花と俺を襲撃。これもまた箝口令案件(後調べてみると右足にヒビが入ってた)

・ 翌日 : 早朝から推薦人としてセシリア、保護者として千冬、当事者として円花と共に企業代表パイロットに認めさせる為、イギリスのホーカー・ホイットワース社(BTシリーズを製作したISMメーカー)に日帰り旅行で突撃。  
・ ・ ・ 何というか、ロクな目にあってる気がしない。

それに関わらず女子の目線やら合わない空気感やらで半ば異邦人の気持ちを味わっている現状、弾の妄想に真っ向から領けられなかった。

「別に、周りが女子しか居ないからと言って幸せになれる訳じゃない。周りに女子しか居ないって事は周りに男子は一人として居ないと言

う意味だ。針の筵むじろの様な視線にお前は耐えられる自信はあるか？」

「う、それは・・・難しそうだな。・・・そっか、周りに男子が居ない、か・・・考えてみりやそうだよな・・・。頑張れ、一夏」

まあ女の園への入園は諦めねえけどな！とサムズアップする弾。

何と言うか、年頃の男子と言うヤツはこんななんだったつけかと思ひもするが、これ以上彼の夢を否定するのひていも野暮やぼな話だろう。

「そう言えば、蘭らんはどうしてるんだ？」

一夏が弾に問う。

聞き慣れない人名に俺は首を傾げてその割り込んだ。

「ラン？」

「ああ、弾コイツの妹。あんまり俺になついてくれないんだけどな」

「あーはいはいなんとなく解った」

呆れたように無感情に棒読みで一夏の口を止めさせる。

・・・俺は一夏の口から語られる女おんな心こころは取りあえず信じないことにしている。

何故なぜならコイツが天然ジゴロの鈍感野郎どんかんヤロウだから。

どうやら一夏のどジゴロっぷりは昔の頃かららしく、果てはプレスクールの頃から箒ほうきの事をたらし込んでいたようで、しかも今の所女子3人をその気にさせておきながら本人にはその自覚みじんが微塵みじんも無い様子。全くもって恐ろしい限りである。

と、友人の妹に対する関係の評価を話し半分に聞いていると、弾が呆れた顔で聞いてきた。

「なあ小鳥さんよ、一夏はIS学園でもあの調子なのか？」

「そうでないと思うか？」

口調や表情はそのままに肩をすくめてその問いを肯定こうていする。

中学からこんな調子であつたらしい一夏の性格にため息を二人してつく。当の本人は俺たち二人の行動に首を傾げているが、何に呆れているのかにはまるで検討けんとうがつかないらしい。

と、雑談に花を咲かせていると、力任せちからまかに部屋のドアが開けられた。

「ぶべっ」



近場に居た弾が勢いよく開いたドアに吹き飛ばされた。世辞にも広いとは言えない部屋に男3人が居るのだから1人くらい犠牲者が出るのは仕方の無い事だろう。

「お兄…きつきからお昼出来てるって言ってるじゃん！きつきと降りて——」

そう言いながら出てきたのは弾と同じく赤毛の少女。見た所円花と同じ年だろうか。ショートパンツにタンクトップ、クリップで挟んだだけの乱雑な髪型と、かなりラフな格好をしているその少女の台詞は視線が一夏にむいた途端に途切れた。

次の瞬間には一気に顔を紅潮させ、慌てふためいた様子で一夏に問いかける。

「い、いい一夏さん!？」

「うん、久しぶりに邪魔してる」

恐らくは彼女が五反田 蘭なのだろう。円花に並ぶレベルで元気な奴だ。

瞬間思考が停止した少女は、しかしすぐにその脳内回路をフル回転させ、たどたどしい口調で一夏に尋ねる。

「いやっ、あのっ、一夏さんも来てたんですか!？IS学園は全寮制って聞いてましたけど……」

「ああ、うん。家の様子見ついでに寄ってみたって感じ」

「そ、そうですか……」

と、話題がなくなり会話が途切れたあたりで、ドアに打ち付けられた右頬をさすりながら弾が抗議の声を上げた。

「いきなり入って来るのはもう慣れたけどさあ……せめてノックくらいしろよ、はしたない奴だと思われ——」

「——! (とても10代女子がするとは思えない眼光)」

「……! (恐怖で縮こまる弾)」

娘が1人でも産まれたら父と息子の組織内階層が著しく低下するらしいが、これはその典型例なのだろう。

長年の環境で培われた支配の構造はあまりに根深く、恐怖政治がまかり通る位には彼らには当然の事らしい。

俺一人っ子で良かった。

「何で……言わないのよ……！」

「あ、あれ？言わなかったか？そ、そうかそりや悪かった……ハハ……」

溢れ出す少女の怒気。引き攣った笑顔で受け答えをする弾には同情を禁じ得ない。

最後に件の殺気立った視線を飛ばすと、廊下に戻り、例によつてたどたどしい口調で一夏に誘い文句を残していく。

「あ、あの、良かったら一夏さんもお昼どうぞ。まだ、ですよね？」  
「うん、頂くよ」

元からその予定だったから、と言わずまるで誘いに乗ったと思わせるような言い方をする辺りスケコマシの才があるんだなと改めて実感する。

まあ本人に自覚は無いのだろうが。

そんな天然スケコマシの嬉しい台詞を聞いたからか、彼女はいそいそと階段の方へと向かっていった。もしかしたら部屋と階段の間にあった部屋が彼女ので、一旦そこに向かったのかも知れないが。

この兄にしてこの妹あり。と言う所なのかもしれないが、3分満たない短時間の間に結構な情報量が過ぎ去った為に気になる事は多いが、とりあえず一言。

「なあ弾、俺お前の妹から存在を認識されてなかったんじゃないか？」  
「えっ？」

気のせいではなければ一連の会話の中で彼女は俺について一度たりとも言及しなかった。

無論3人の会話に割って入らず壁の飾りに徹していたではあるが、それでも隠れていた訳でも気配を殺して居た訳でもない。ただそこに居ただけである。

「確かに……初対面の人間に気づいてそのまま流す奴じゃないし……まさかマジで気付いてなかったのか!？」

「イヤイヤ、流石に考えすぎだろ。どうせ聞く前に弾がいらん事して怒って行っちゃっただけじゃないか？」

「——だと良いんだが」

フオローを入れる一夏。まあそれもそうなのだが、実際に見ていると気づかれているとは思えなかった。

小声で納得していない旨を呟く。

・・・まあ、それをこれ以上追求しても意味は無いだらう。

話すことも無くなり。一瞬の無言が部屋に漂った。

次の瞬間に思い出したように一夏が切り出した。

「そろそろ下に降りようぜ。さっきの言い方だと蘭が待つてるみたいだしさ」

「それもそうだな。御相伴に預かるとしよう」

「と言つても出すとしたら残り物のメニューだぜ？」

「構わんよ、安全に食える物なら」

「それを飲食店のせがれに言いますかね」

そうして本来の目的を思い出した一夏達に続いて階段を降りながらぼつりと呟いた。

「恋は盲目、か・・・」

——ただ、少しばかり厄介で面白い未来を予感し、俺は前を歩く二人に告げる。

『一夏さんも来てたんですか!?!』

もしかすると。そう思い弾に向けて口を開く。

「すまん、少しばかりトイレを貸りるぞ」

.....

「げ」

五反田家の一階に降りて、いきなり弾は引き気味の声を上げた。

何かあったのかと弾で隠れた五反田食堂の中を見回すと、ぽつかり

と空いた四人席に一人ちよこんと座る蘭の姿があった。

しかもさっきのラフな部屋着ではなくきちんと外に出る用のお洒落服。俺たちを呼んでから5分も経ってないのに、凄いな。

「なに？何か不満でも？あるのならお兄一人で外に食べに行っても良いよ」

「聞いたか今のお優しい妹の発言。泣けてくるぜ」

涙を拭う演技をしている弾はさておき。店の迷惑にならないよう、蘭の座っているテーブル席に腰掛ける。

「別に一緒に食べれば良いだろ。さっさと座ろうぜ」

「そうよバカ兄、さっさと座れ」

そんなこんなで四人用のテーブルは蘭と向かい合う俺と蘭の隣の席に座る弾の三人で埋まった。

・・・それはそうと。

「なあ蘭」

「はひっ!？」

「着替えたの？どっかに行く予定？」

「えっ、これは、そのっ」

まあ家の中でのとは言え、他人の目に触れる定食屋で服装に気を使ったのかもしれないけど、それにしたって気合が入りまくっている。質問に対してかなりどもっているし、かなり大事かつ秘密にしたい事らしい。

と、したら

「あ、もしかしてデート？」

「違います!!」

「この馬鹿・・・」

強い蘭の否定、なんか隣の弾とカウンター席に座る人から何か呟かれた気がするが、声が小さすぎたしカウンターの人は本当に知らない人だったので気にしないでおこう。

しかしこの怒りっぷり、どうも何か地雷を踏んでしまったらしい。

「ご、ごめん」

「あ、いえ・・・。と、とにかく違うんです」

「まあ兄としては違つてほしくない事もないんだがな。なんせ蘭がこんなオシヤレするの一月にいつペンあるかどうか——」

言いかけた弾の口を文字通り塞ぐ蘭。しかもついでに鼻まで塞ぎ、完全に弾の呼吸を止めていた。一度だけ千冬姉ちふゆねえから食らつた事あるけどキツイぞアレ。

しかもその技術は千冬姉に引けを取らない、世の高校では護身術ごしんじゆつを学ぶのが一般的なのだろうか。

むんずと驚掴わしづかみにした細い指越しでアイコンタクトを取る五反田兄妹、それで通じ合うあたりホント仲良いよなお前ら。

「——どうかしましたか？一夏さん」

「え、何が？」

「えつと、ずっとここちを向いたままなので……」

「ああ、いや。円花とじゃそう言うやりとりした事なくてな……ホント仲良いんだなーって」

「は、はあ……」

「——……」

無言の間が生まれる、ワタワタしていた弾の顔がどんどん蒼くなつていつてるが。

と、俺達の目の前に調理服姿の壮年の男性が立った。

「お前からこれ以上騒ぐようなら昼飯ださねえぞ」

その男性の名は五反田げん厳、この食堂の主人にして弾と蘭の祖父である。

年齢よわい80を超えるが、その両腕は筋骨隆々で、今でも厨房で中華鍋を振るっている。

普段は弾を虐げる蘭もこの人には敵わないようで、昼飯抜きひるいの忠告にすぐごとと弾の顔から手を離れた。

『静かにしてろよ』ともう一度忠告を残して立ち去っていくのを見送る弾と蘭は、厳さんが完全に厨房で料理に入ったのを見るや否や、小声で口喧嘩を始める。

「バカ兄のせいで怒られたじゃない！」

「半分以上はお前の出したセリフだろうが！」

「お兄の声が無駄におっきいのが悪いのよ！」

「さっきのはお前の声が大き過ぎるんだよ！耳元で叫ぶな！」

「あんたがうるさいのが悪いんでしょ!!」

「あーもう、二人共落ち着けて」

「これが落ち着いてられるか!!」

あ、ハモった。あとそんなにうるさくしてると

ゴツチイイイン!!

案の定巖さんの拳骨が二人に飛んだ。

「~~~~ツ!!」

頭を押さえて悶絶している五反田兄妹。

巖さんは険しい顔で腕を組み、何も言わずに二人を睨んで最後通牒を突きつけていた。

流星にこれは答えたか、ゲンナリとした表情で黙った。

巖さんでゲンナリ、なんちゃって。

「…一夏、何考えてるかはわかんねえけど下手な洒落はやめとけよ」  
「…何も言っていないのにダジャレ考えてるのかバレた、表情に出てるのか？」

「鈴とか箒からもそうなんだけど、俺って考えてること顔に出やすいのか？」

「え、マジでダジャレ考えてたのかお前」

「~~~~」

「…マジかあ〜」

呆れたように息を吐き出す弾。

そんなにダジャレを考える事は悪いことですかねえ。

と、苦笑いをしていた蘭が何かに気づいたように『あつ』と声を上げた。

「一夏さん、その、ホウキって誰のことですか？」

その疑問に弾が何故か必死に食らいついた。

「何だったけ？お前のファースト幼なじみ、だっけか。うん、IS学園で再開したんだっけ？」

「おう、小三の頃に引っ越して以来だから…大体六年ぶりくらいか

な」

そう言うのと蘭の顔色が少し変わったような気がする。

なんだろ、ちよつと怖いぞ？

そんな蘭に目を逸らしながら弾は話を促す。

「しっかしお前もその彼女もよく気がついたよなー。六年も経ってたんだろ？顔立ちが変わっててもおかしくないのに」

「まあそうだな。かなり綺麗になってたし体が大きくなってたから、髪型が変わってたらもしかしたら気づけなかったかもな」

今も昔も箒は吊り目でポニーテールが目印だ。鈴も同じようにツインテール（サイドアップって言うんだっけ）が目印だから、それを変えてないなら二人を見間違ふことは無いと思う。

「……」

ところで蘭がそっぽを向いてむくれているのは何故だろう。

膨らました頬はなんだかりスみたいだ。

俺はそんな蘭の顔の前に人差し指を置いて

「蘭」

「はいっ!？」

ぶに

驚いて振り向いた蘭のほっぺたを指がつついた。

「ひゃう!？」

そのままムニムニと摘んでみる。柔らかい。

「ちよ、いいいいいいー夏さん!？な、ななな何をお!？」

すごく驚く蘭、流石に悪戯にしては距離が近すぎたかな。

「いや。そんなに可愛くおめかししてるのに、怒った顔だともったいないぞーってね」

最後にちよつとだけ強くつついて指を頬から離す。

あ、真つ赤になった。可愛い子には変わりないけど、こつちのほうがずっと良いと思う。

と、褒められた蘭はすごく焦った様子で

「す、少し。お、お手洗いへ……」

「お、おう……」

早足で・・・手と足の揃った早足でお店のトイレに向かう蘭。

それを見届けて弾の方に向き直ると、弾は肩を震わせ俯き加減で、すごい剣幕で詰め寄ってきた。

「——お前ホントにさあぁ・・・！」

「ど、どうしたんだ弾」

「・・・はぁ、あ、あ、・・・まあ良い、お前のそういう所はもうずっと前から知ってたからもう良いんだけどさあ」

「？」

なんか俺悪いことしたみたいになってるけど、なんかしたつけ。心当たりが無いので首を傾げるしかない。

「そこを直せつつても直らなさそうだからな」

「そりゃあそうだろう、何が悪いのか分かってないんだから」

「それを自分で言いますかね」

もう一度大きなため息を吐いた弾は、ずいっと顔を寄せて小声で話しかけてくる。

「悪いことは言わねえ、すぐに彼女を作れ、なるだけ早く！」

「はあ!？」

『はあ』じゃねえ!今年、いや、今月中にでも!誰でもいいから!いきなり何を言ってるんだこいつ、いきなり興奮し出して闘牛の牛かよ。

「別に今はそう言うのに興味ねえし」

「相変わらずお前は本当に、そんなんだから鈴が・・・いや、なんでもねえ」

いきなり言い淀む弾。鈴がどうかしたのだろうか。

「とにかく、誰でもいいから誰かと付き合おうんだよ!な、な!」

食い気味に、というかキレ気味に言ってくる弾。

「なんでキレてんだよ」

「キレてねえ!」

と、言い合ってたらトイレから蘭が帰ってきた・・・の、だが。

なんか様子がおかしい。まるで阿修羅みたいな表情で座っている弾を無言で見つめている。



しかし、無言の蘭から伝わるものはあった、  
—— ヨ ケ イ ナ コ ト フ ス ル ナ ——  
と、

その一睨みでマ●オが如く小さくなる。

確か蘭はお嬢様学校の生徒会長をやっているらしいけど、それにし  
たって鋭い目つきだ。千冬にだって負けないだろう。

そうして席に着いた蘭は、覚悟を決めたように話を切り出す。

「・・・決めました。私、来年IS学園を受けます」

「はあ?」

イスをガタガタと押しつけて立ち上がり驚いた弾、直後厨房からお  
玉が飛んできて倒れることになるが。

ある意味いつもの事なので俺は気にせず蘭に話を聞く。

「それは親に言うべき事だろうけど・・・でもなんで? 聖マリアンヌ学  
園ってエスカレーター式で大学にも行けるんだろ?」

「大丈夫です、私の成績評価なら十分いけます」

まあ確かにIS学園の方がよっぽどネームバリューが良いし、上手  
くいけば年収十数億も夢じゃない。

が、それはやっぱり一握りではないし、正直高校生としての授業  
が圧縮・・・もとい圧迫されているから、学園での成績次第じゃ大学  
にいけるかも分からない。

将来の事を考えるなら、このままエスカレーターに乗っている方が  
良いと思うんだけどな。

「でもIS学園に推薦は無い・・・あく、でも蘭の成績なら行けるか?」

「はい、筆記も余裕です」

蘭は結構頭が良い、弾から聞いた話だと学園でも結構良いらしいか  
ら、推薦無しでも合格する可能性は十分にあるだろう。

と、先ほどまで床に倒れていた弾が机にしがみつきながらよろよろ  
と立ち上がった。

「でも確か、実技試験もあったはずだよな・・・」

「ん、まあそうだな。ISでの実戦の試験があつて、そこでの成績が悪  
すぎると落とされるらしい。まあ俺が落ちなかったし、そうそう無い

だろ」

と言っても山田先生が焦ってドジって壁に激突して自爆したので本当はどうなのかは知らないけど。

他にもI S適正とか本人の体力とか運動神経とか測定するらしいし、よっぽどのことがない限りなんとかなるだろう。

その話を聞いた蘭は、無言でポケットの中から何かの紙を取り出した。

「げえ!?!」

その内容を見た弾が驚愕の声を上げた。

なんだなんだと様子を伺っていると、口の端から声が漏れた。

「I S適正・・・判定A・・・」

「すごいじゃないか！俺より上じやん」

それは政府が開いている簡易適正試験の成績だった。

なんでも中学高校生の希望者であれば誰でも受けられるらしい。

しかし、こうなると本格的に落ちる要素がなくなってきた。

「で、ですので。私が合格した暁には、一夏さんに、せ、先輩としてご指導を・・・」

「おう、いいぞ」

別に断る理由は無い、安請け合いな気はするがまあ大丈夫だろう。

それに今更だけど蘭が入学してくれたら普通に嬉しい、小鳥とも仲良くしてくれるかもしれないし、何より気の知れた知り合いが増えるのは純粹にありがたかった。

「ほ、本当ですか！」

嬉しそうな蘭、が弾が声を荒らげて抗議した。

「おい蘭！何勢いで学校変えること決めてんだよ！なあ母さん！」

弾の視線は、弾蘭兄妹の母、自称食堂の看板娘こと五反田蓮さん。

娘がいるのに自分を娘と言うのはどうかと思うのだが、鈴曰く『娘は田舎言葉で「お母さん」の意味がある』らしいので深く考えないでおこう。

「うーん、私はどちらでもいいわよ。一夏くんも蘭ちゃんの事よろしく」

「よくねえだろお!？」

弾の叫びが店中に響き渡る、相変わらずこの人はマイペースというか、どこか抜けている感じがある。

まあ、蘭がIS学園に行く事に反対ではないようだ。

「じゃあ一夏君、蘭のことよろしくね」

「あ、はい」

「はいじゃなくてなあ……!ああもう親父はいねえし!じーちゃんもそれで良いのかよ!？」

「本人が決めてんだ、俺がどうこう言う筋合いはねえ」

「いやだって、」

「なんだ、文句あんのか?」

「……皆無です」

見事に意見が封殺される弾、流石の俺でもそこまで身内に弱くはないぞ。

『——何か言ったか』

突如脳内に溢れる千冬の声。

ダメだ、勝てる訳がないよ。

そう脳内で反省していると、巖さんが声をかけてきた。

「おい、昼飯できたぞ」

「あ、はい」

それを聞いた蘭がカウンターへ料理を取りに行くと、速攻で弾が俺に食いついてきた。

「なああんでお前ばかりモテんだ!?この顔か、この顔なのか!?モテるくせにそう言う気が無えとかふざけんじゃねえよこのモテスリムが!スリムとか色んな部分はいいいからモテ要素だけよこせエエエエー!」

「そう言う物言いだからモテねえんだよ喧しい<sup>やかま</sup>」

そうやって弾の頭にチョップを決めたのは、茶髪を後ろでまとめた小鳥だった。

その左手には空の皿を乗せたお盆が握られていた。

「あれ?小鳥いつの間にか飯食ってたんだ?トイレに行ってたんじゃ」

「どうの昔の話だ……。この鈍助め。この分じやお前、自分の妹の事にも気付いてないな」

「え、」

小鳥のその先、カウンター席からこちらを覗いていたのは我が妹織斑円花だった。

「円花お前来てたのか!？」

「来てましたよ。まあ私も一夏兄が来るとは思わなかったけど」

やれやれと言った調子で肩をすくめる円花。

どうやら小鳥と同じように、自分に気づかなかった事に呆れているらしい。

「一夏兄は本当に女心が分かってないよね、昔からだけどき」

「どういう意味だよそりゃ」

「そのままの意味ですよ鈍感兄貴」

「円花まで……」

なんだろう、なんか今日は二人とも厳しいな。

そんな厳しい目の二人の一人の小鳥が報告をしてきた。

「すまんが、銀影周りの野暮用ができた、先に学園に戻ってるぞ」

「あ、おお。わかった」

「少なくとも門限6時までには帰ってこいよ」

それだけ言う和小鳥は店を後にした。

「円花はどうするんだ？」

「どうしようかなあ、本当は蘭ちゃんのお悩み相談を受ける予定だったんだけどねえ……。解決したみたいだし、私も帰ろっかな」

もちろん蘭ちゃんにもっと話があるか聞いてからだけど。と、言う円花。

「悩みってなんなんだ？」

「秘密。一夏兄に話せる内容ならきつと一夏兄に相談してるでしょう？」

「あー……」

それもそうか。俺も家族に話せない話題も小鳥や皆には話せるものだったりするし、歳頃の女の子に深入りしすぎるのも野暮なもの

か。

「まあ機会があれば本人に聞いてみたらいいんじゃない？ 案外話してもらえるかもしれないし」

「そうだな、聞いてみるよ。円花も、帰る時は気をつけてな」

「ISパイロットに気をつけるも何もでしょ」

そう言っつて、円花は店に奥の蘭に声をかけに行つた。

ふと時計を見ると時刻は現在午後1時を回っている。

門限6時と言う事は、5時間後にはIS学園に到着していなければならぬ計算になる。

遊び回るのに5時間はあつという間だ、急ぐ必要もないけど、だからといってこれ以上呑気にしている場合でもない。

「じゃあもう昼飯食い終わつたら俺たちもすぐに出ようか」

「そうだな」

と、駄弁っている俺たちのテーブルに蘭が料理を持ってきてくれた。

「はい、カボチャの煮物です。一夏さんのご飯の量はこれくらいでよかったですか？」

「うん、ありがとう」

こう言う気配りがなんだか痛く身にしみる。最近優しさに恵まれてないからかなあ。

「きつと蘭は良いお嫁さんになるんだろうなあ」

「そ、そんな、いきなり何を言うんですか!!」

凄いい勢いで謙遜する蘭、そんな反応が結構可愛くて俺の顔も綻んでしまう。

なんてニヤついてたら横から弾が突っ込んで来た。

「なんでお前はナチュラルにそうやって口説きにかかるとかなあ」

「え？」

「なんでもねえよ」

弾が何かを呟いたが、よく聞こえなかったので聞き返そうとしたら弾は黙ってしまった。

一体何を言おうとしたのだろうか？ 気になるが、聞いて教えてくれ

そんな感じではないので諦める事にした。

「じゃあ食べようぜ」

「あ、あの一夏さん」

「ん？」

料理も全て揃ったので手を合わせようとしたところ、蘭が口を開いた。

どうしたんだろう。と話を聞くと、驚きの言葉を蘭は投げてきた。

「さつき一夏さんが話してた男の人って、一夏さんの顔見知りですか？」

「へ？」

さつき俺が話していた、と言うのは、多分小鳥の事だろう。

『・・・なあ弾、俺お前の妹から存在を認識されてなかったんじゃないか？』

先程の小鳥の懸念のセリフを思い出す。

もしかして・・・もしかするの？

反対席の弾に目配せして意思疎通を図る。

『・・・!!』

「——ッ（コクコク）」

意訳

『あれマジで!』

『みたいだな、マジか、聞くか?』

『聞けるか!?お前が聞けよ!妹の事は兄の仕事だろ!』

『・・・ッ、仕方ねえ後で覚えてろよ!』

長年の付き合いって凄いな。

まあそんな訳で蘭から話を聞く事になった弾がそれに応える。

「ああ、一夏のクラスメイトの小鳥ってやつだよ。——ってか、さつき俺の部屋に居たの気付かなかったのか？」

「え!?そ、そうだったんですか!?全然気付かなかったです・・・!」

マジだった、本当に小鳥に気付いていなかったらしい。

「って言うか、一夏さん以外に男性でIS乗れる人居たんですか!？」

「あ、そこからの？」

「は、はい」

「えーっと」

俺は少しだけ考える。小鳥の事をどう説明するべきかと。

あの気難しく、口の悪い友人の尊厳を傷つけずに説明する方法を俺はあまり思いつかない。

「ま、まあそうだなあ・・・すごく頭が良くて、弁が立つ。ISにも詳しいから頼りになる・・・まあ悪いやつじゃないよ」

「そ、そうなんですか」

嘘ではない。まあ100%真実って訳でもないけど。

微妙なラインの説明になってしまったが蘭は特に気にしていないようだ。

とは言えこれ以上小鳥について聞かれると苦しいので、何とかして話題転換を持ちかける。

「そ、そうだ。円花は帰るとか何とか言ってたけど。どうするって?」

「ああ、もう帰るって言っていました。私からの用事で呼んじやっだし、これ以上束縛するのも悪いかな、って」

「用事って?」

とりあえず聞いてみる。円花も『もしかしたら教えてくれるかも』とか言ってたし、聞くだけ聞いてみたのだが、恥ずかしそうに頬を掻いて蘭は答えた。

「そのお。まあ、なんて言うか、進路相談と言うか・・・そんな感じのことです」

あれ、と言う事は。

「じゃあもしかしてIS学園に行くってのは本当に今さっき決めたのか?」

「い、いえー!そんなんじゃないです!!ずっと前から視野に入れてたのが今さっき決まったってだけです!!」

結構な勢いで捲し立てる蘭。

それもそうか、今日思いつきで進学先を決めたなら、IS適正検査なんて受ける訳ないか。

ちなみに厳さんは基本蘭に優しいのでこれが弾だったらフライ返

しが飛んできた事だろう。

「じゃあ円花から何聞こうとしてたんだ？合格に必要なのはもう調べ終わってたんだろ？」

「ええと、学風とかIS実習とかそう言った事を聞こうと思ってたんですけどね……」

あはは、と恥ずかし紛れに頭を掻いて乾いた笑いを浮かべる蘭。  
うむ、それは確かに重要だな。俺も受験勉強の時にかなり頑張った覚えがあるぞ。

結局藍越学園行ってねえけどな。

「なるほど……。ま、その時は俺も頼ってくれよな、教えられる物なら教えるからさ」

「は、はい！よろしくお願いします！」

隣でため息をかく弾はさておき、世間話を終えた俺たちは昼飯に手を合わせたのだった。

……

「……なんというか、耳に痛い話だったなあ」

「何の話だ」

円花は呟く。

その呟きの真意を計りかねる俺は、そっけなく答える。

彼女より先に店を出たのだが、小走りで円花が追いついて来たのでそのまま学園への帰り路を歩いていた。

「さっきの一夏兄と蘭ちゃんの話。聞いてたでしょ？『兄妹でそう言うやりとりしたことない』って」

「ああ……」

言われて思い出す、確か弾の妹（最後まで俺のこと認識していなかったな）が弾の顔を驚掴みにした後だったか。

確かに『円花とじゃそう言うやりとりした事なくてな……』と言っていた覚えがある。

「なら甘えりや良いだろうが」



「そういう問題じゃないの。一夏兄が私と仲良くしたいってのは良く分かってるし、私もそうしたくない訳じゃない。でも根本からズレてるの。一夏兄も千冬姉も私を大切に思ってくれてる。でもだからこそなのかわかんないけど、ずっと距離が縮まらないの。小鳥さんはそんな事無い？」

問われて、少し考える。

——少し考えて、断言した。

「無い。俺は一人っ子の上、専門学校に行ってもストリートな付き合いしかしてない物でね。残念ながら過剰に大切にされる事も、距離を詰めるべき相手もいなかった。その手のジレンマやら憤りってのは理解したくてもできん」

「役に立たないなあ」

「お役に立てず申し訳ありませんね。勝手にやっつてろ」

「はいはい、相談した私が馬鹿でした」

ふん、っと鼻を鳴らして不機嫌さをアピールする円花だが、実際の所そこまで怒ってはいない様に見える。

多分この娘は寂しいのだ。

あの二人は間違いなく自分を愛してくれている。けれど、それが故に対等になれずにいる事が。

「ま、そうだな・・・お前の抱く不満が俺の予想通りなら、それこそ学園での成績だろ」

「成績？」

「ああ・・・まあ簡単な話。お前の不満とやらは、庇護する側とされる側の立場に基づいた関係に端を発する物だろう？」

そう言っただけで横目で円花を見やる。

彼女はしっかりと話を聞いていて、この推測が間違いでない事を明瞭に表していた。

「なら話は早い。円花が何らかの形で一夏と千冬を超えさえすればその関係は変化するだろう」

「あ・・・！」

小さく声を上げる円花。どうやら気づいたらしい。

自分の上に挑み、勝利する。これまでの彼女の人生を俺は知らないが、予想できる分でも刺激的な、それはそれは刺激的な事だろう。

「近く、強制参加の個人リーグ戦が開催されるらしい」

『わあああああああああ』

ポケットの中の銀影を投げ上げて玩もてあそびながら言葉を続ける。

本人が目回しているが、それは無視して真上に投げる。

「丁度良いじゃないか、そこで超えちまえ」

『ぶえ』

落ちてくるそれをキャッチして、ニヤリと笑って見せる。

その言葉を聞いて円花は、俺の方を向いて目を輝かせた。

「それだ！ ナイスアイデア小鳥さん！」

その瞳の輝きは、夜の密林に火を見つけたから遭難者ドリフターのようで、俺にも何か達成感に近い満足感を与えた。

喜びそのまま、走り出した円花は道路の少し小高い場所に立ち、振り返って告げる。

「決めた。私、絶対優勝する！ それで証明してやるんだ。私が強いって事を！」

# A new power and exchange terms

「・・・で、追加ユニットの話ですって?」

「は、はい。どうやら昨夜の時点で篠ノ之博士から送られてたみたいですよ」

IS学園内、円花と分かれていた小鳥は、話を聞いて感心したように声を上げる。

「ほー。で、当の本人は?」

「い、居ません」

「でしようね」

あの目立ちたがりの事だ、この場に来ていれば麻耶先生が困り果てる事だろう。

時刻は午後3時。場所は一年専用の格納庫ハンガー。そこにいるのは俺おとりと小鳥、遊ゆうと山田やまだ、麻耶まや教員だけだ。

目的の物はどうやらこの格納庫の最奥にあるらしく、また、俺たち以外の何者も居ない室内では、足音がやけに大きく響いた。

「・・・・・・・・」

きよろきよろと、周囲を見回す。

アリーナの一階部分に相当するここでは、その壁面に沿うように多くの訓練機が鎮座ちんざし、学園の準軍事施設の一面を、物騒極まりない雰囲気きんきをひしひしと伝えてきた。

(ざつと見て二十機前後・・・その気になれば、すぐにも国ひとつを陥落かんらくさせられる戦力だな)

いかに訓練機とあってもISはISだ。まして、それが現代のどの兵器りようがを凌駕りょうがする代物。

それがこの狭い教育機関の倉庫まくらに纏まとめて格納かくされているなど、狂気きやうきの沙汰さたとも言えるだろう。

・・・改めて見ると、遺伝子工学の実験動物モルモットになるよりも刺激的な

生活を送っているのかもしれない。

「あ、ありましたー！これです、銀影の追加ユニット」

と、皮肉に顔を歪めていると麻耶先生が声を上げた。

その視線に追従して目線を左に寄せる、するとそこにはいつぞやの銀影のようにカーキグリーンカーキグリーンの布に覆われた構造物が放置されていた。

「・・・雑だなー」

「す、すいません」

申し訳なさそうに謝罪する麻耶。

とは言え話では今日の深夜2時に、誰にも見られず警備システムにも触れずに、まるで出現したかのように届けられていたらしく、下手に手を着ける訳にも行かなかつたのだろう。

とりあえずその構造物に歩みより、布に手をかける。

「良いですよ。別に麻耶先生の責任じゃないし、本体が無いんじゃないの保管もままある話だし、なっ！」

右の手で一気に布を引き払うと、そこには縦長の六角形が無造作に置かれていた。

上方が引き伸ばされ、下方が詰まった形状の六角形。

その下端には巨大なスラスタノズルが見え、頂点には小さいが砲身が見てとれた。

「・・・これは、スラスタユニットか」

「はい、一緒に置かれてたデータ端末によると広域エネルギー拡散フィールド発生装置兼大出力ブーストスラスタユニット『霧幻』むげんだけです」

「広域エネルギー拡散、ねえ・・・その『広域』の意味とは？」

少し気にかかる文言だったため確認を取る。

単純に拡散フィールドの領域拡大なら『エネルギー拡散フィールド広域発生装置』と表記するのが正しいだろう。

「おそらくですが、エネルギーの『波長』が広域かんせくりよういきなんだと思います。装備するのに合わせて銀影のセンサーの可観測領域を拡張しておくようにと記されているので」

「ふむ・・・エネルギーが問題になってくるし・・・それ以上にパワーウェイトレシオやウェイトバランスも変わってくるな」

実を言うと拡散フィールドは多くのエネルギーを消費するもので、下手に使いすぎるとエネルギー切れでP I Cで動くだけの力カシサンドバツに成り下がる。

シールドエネルギーまで消費しない辺り零落白夜よりかは幾分マシなのだが、それにしても扱いづらい特性である。

『悪かったわね扱いづらくて』

「じゃあ精々マシになる事を祈るばかりだな」

「へ?」

「今の銀影が使いづらいんで、追加装備で幾分マシになるのを期待してるだけですよ」

「は、はあ」

銀影に言ったセリフが麻耶にも聞こえていたらしく言及げんきゆうされるが、独り言の体ではぐらかす。

「——と言っても、現状では拡散フィールドの領域を拡大した所で効果はそう大きくないのだがな」

機動力強化がついてくるのは普通に嬉しいのだが、拡散できるエネルギーが増えた所で応用性は低い。精々優秀なジャマーやステルスが関の山だろう。

後頭部を搔いて色々考えてみる。

(P I Cで誤魔化しが効くとは言え、上重心になるのはあまり喜べないな。そもそもP I Cで抑える事自体が非効率極まりない)

銀影の強みはその防御力と、軽量かつ反応の良い加速制動かそくせいどうである。いくら可動性の高いスラスタであったとしても、それが生み出すエネルギーの方向性は一方向しかなく、加速力が上昇すれども制動性は著しく低下するだろう。

その上全体的な性能が低い代わりに本体しか無かった今までの銀影とは違い、エネルギーの割り振りに制限がついてくる。

この霧幻むげんに搭載されたフィールド発生装置をOFFにした所で、その質量が変わる事は基本あり得ない。P I Cのエネルギーを浪費ろうひす

るだけである。

巧くやれば拡散フィールドを使って重力波を逸らし重量をゼロに近い数字にできるかもしれないが、それこそ消費するエネルギーが増え本末転倒ほんまつてんどうになりかねない。

せめて、強力なバーニア姿勢制御エンジンがあれば話は別なのだが、絶妙な所で痒いところかゆに手が届かない仕様である。

「……—」

「ど、どうかしましたか？ さっきから黙りこくってますけど……」

そこまで愚痴ぐちをこぼしてから気がついた。

確か、現状の銀影は完成度60%と言う大破一步手前のような状態だったはず、今回のユニット追加で完成。という事なのだろうか。

「麻耶先生今仮に銀影にこれを装備したとして、銀影の完成度ついでくらになりますか？」

「えくと……。80パー……。だ、そうです……」

「やっぱそうか……。チツ、どうして二度手間三度手間を取るんだ非効率極まりない」

「す、すいません」

「だから謝る必要麻耶先生には無いでしょうが。コイツは束への文句だ、アンタが抱え込む必要は無い」

ため息を吐き出すように言つて、霧幻に歩み寄つてそれに触れられるようしやがみ込む。

「——とりあえず、そのタブレット貸して下さい。少し考えたい事あるんで」

「あ、はい、どうぞ」

情報端末を受け取って流し見る。

装備部位、重量、稼働に必要なエネルギー、スラスタ出力、拡散可能範囲、拡散可能出力、搭載ビームライフルの威力、範囲など、様々な項目が画面の上を滑って行く。

(肩部ジョイントに搭載：アレか。実質重量としては銀影の1/5、総合スラスタ出力は60%上昇……。イカれてんな。拡散範囲は広いがその出力は『アイアス』未満……。本当にステルス専門か。ビー

ムライフルの威力は非連結時のアイアスと同等、有効射程距離は60m、秒間12発の発射が可能・・・牽制が精々だな)

霧幻自体の性質を掴み、どう帳尻を合わせるかを考える。

(肩の横につくならバックパックの推力を下げるか足の上げるかでカウンターを当てれば推力バランスはなどうにかなるか・・・?いや、そうなると加速力が落ちるし、直進安定性が落ちるな・・・)

さてどうしたものか。あまり切り落とす事を考えられない己は貧乏性なんじゃなからうか。

『じゃあ貧乏性なんじゃない?』

(.....)

心中で呟いた軽口に乗ってくる銀影。麻耶に見えない角度で角を擦り付けてやろうかとも考えたが、それで拗ねられても面倒なので止めておこう。

それはさて置き、現在取れる手段は3つ。

- 1、全てのスラスタ→推力を調整して帳尻を合わせる
- 2、そもそも受け取らない、更なる追加ユニットが来て完成度100%になるまで保留にする
- 3、個人で下半部の何処かにカウンターのスラスタを着ける  
無論、選択するのは3だ。

1では面白味に欠けるし、2では学園側に持ち主不在で接收されかねない。

元より自分の専門分野は外装ハードウェア。電子制御系は門外漢ソフトウェア、良くて門前の小僧。

ちまちまと設定をいじるより、目標を決めて手段を整える方が向いている。

(銀影。お前のハードポイントって後どこにある)

『腰の両サイド、それと後ろの方にバインダー用のソケットがあるわ。どうする?』

(・・・小型のウィングスラスタユニットだな、ただし両サイドのみ。これ以上エネルギー消費が激しくなっては敵わん)

『オーケー任せた』

・・・もつとも。80%の時点で無視できないエネルギー消費量だ。100%になった日にはどうなることやら。

半分諦観から来るため息と嘲笑を噛み殺して、それでも考える。

前回のように2年の格納庫が使えるとも限らない。

「——とりあえず、図面引くか」

「え、!？」

話の要点をすっ飛ばして設計図何かを作るを書く事を決めた小鳥に驚きの声を以って反応する麻耶。

それもそうだろう。彼女かしてみれば新装備の情報を見ている最中に別の装備の話をしようとしているのだ。説明が欲しくなるのも納得だろう。

とは言え。銀影との『契約』の話もあるし、そうでなくとも『IS』と話して決めました』など言えるはずもない。

「カウンターですよカウンター。こんなデカイスラスターを単品で扱えるわけがないでしょう？なので、銀影の腰の両側にバーニアみたいなモンをつけようかなど。どうせ余り物の品が2年の格納庫に転がっているでしょうし、いくらか改良して改造して調整してやれば使い物にはなるでしょう」

「あー・・・なるほど、そういう事ですか」

一度納得する麻耶だが、すぐに疑問にぶつかったらしくこちらに質問を投げる。

「でも、それなら内部数値を変えてバランスを取った方が良いんじゃないですか」

「それも考えましたが、いかんせん俺には不向きでしてね。単純に減らすだけなら簡単なんですけど、こうも重くて大きい部位の帳尻を合わせるとなるとその労力もバカになりませんし、帳尻の帳尻の帳尻を合わせるとかバカバカしくてやってられんですよ。まあ身も蓋も無い話趣味嗜好なんですけどね」

「趣味・・・ですか・・・？」

一方的に捲し立てた話に、いまいち理解しきれてない風な麻耶の傾げた顔。



それに呆れて、ため息混じりに要約して伝える。

「調理の好みみたいなモンだよ、目玉焼きの黄身の好みが半熟か固焼きか。俺は固焼きが好きなだけだ。労力が同じなら好みが良い」  
その説明に麻耶はポンと手を打つ。

「あー！成る程、分かりましたよ！ちなみに私は半熟が好きです！」  
「……まあわかったのなら良いです」  
好きな目玉焼きの事など聞いてないのだがな。

面倒臭くなつて話を切り上げる。元々少々ズレた部分のある麻耶だが、ここまで天然だと頭を抱える他ない。

この先輩だと言う千冬は束と併せて相当な心労をしていた事だろう。

「とにかく、コレは5日程保管してもらいたい。俺はその内に物を作っておきます」

「わかりました、では、それまでは私の方で預かっています」  
「お願いします」

一礼して、踵を返す。

さて、どうしたものか。まずは原材料を2、3年の格納庫から拝借するとして、その外装は個人で作るとして、接合部を自分で作るとして。

色々やるべき事が多いが、まずは材料を頂戴するとしよう。でなければそれに合わせた設計図も引けない。IS学園の広大な敷地を歩き回り、目的地を探す。

アリーナの方角からは生徒達の賑やかな声が聞こえてくることから、ISの訓練を行っているのだろう。殊勝な事だ。

『あたし達もする？』

「忙しいんでパス。お前でシミュレーションをするにしても、その時間さえ惜しいんでな」

自分で決めた期日まで5日後。

材料を探し、図面を引いて、調整する。

頑張れば一応できないことはないが、余裕があるか無いかと言われるとあまり無い。

「・・・ふむ」

少しばかり頭を回す。

どうせやるなら完璧に仕上げたい。

完成度100%と同程度の戦闘力、など贅沢は言わないが、多少なりとも使える機体にしておかねば今後に支障をきたしかねない。

「円花周りのこともあるしなあ」

何とは言わないが、最近はどうにも物騒だし。

それとは別に、自由参加のリーグ戦の話もある。

特にこれと言った目標は無いが、自分の位置を知るにはもってこの機会で、叶うことなら全力で挑みたいものである。

と考えていたら、聞き覚えのある声が背後から飛んできた。

「あ、小鳥さん。話終わったんですか？」

その声の主は先程話上がった織斑円花だった。

元気のある声はどこか犬じみっていて、その愛嬌は確かにきょうだい兄弟を釘付けにするのに足るものだった。

「まあな・・・で、なんでお前はここに？」

別にそれで不都合がある訳でも無いが、しかし円花がここに来る必要も無い。

率直な疑問を投げる。

帰ってきた答えはこう。

「それが・・・さつき優勝宣言したのは良いんですけど、練習相手が考え付かなくて・・・」

あはは、と気まずそうに笑って誤魔化す円花。

まあ、だとすればその意図は明白で。

「で、リーグ戦の練習相手を頼みにきた。と言う訳か」

「はい」

まあ素直な事だ。

が、それに付き合っている暇は持ち合わせていない。

「残念ながら俺にも俺なりの事情がある。一夏辺りを頼れ」

「ええー！なんで!？」

やたらと大きな声で抗議する円花。

「やかましい。俺も忙しいんだ。何も差し出さずに何かやってもらおうと考えているのなら浅ましいだけだぞ」

「浅ましいって・・・そこまで言いますかね!？」

少しばかり怒っている様な表情で食い下がる円花。少し言い過ぎたかとも思ったが、多分に事実なので訂正はしない。

それにどうあつても練習に付き合わないとも言っていない。

「事実だろうが。それが許されるのは何一つ持ち合わせない乞食こじきにか許されない。それに頭を使え、俺は対価リサレ無しでは動かないと言っただけだぞ」

「え、あ、そう言う事、えーと、じゃあ何をあげたら良いんだろ」

「それは自分で考えるんだな」

不服そうに頬を膨らませる円花に背を向けて、歩き始める。

彼女の視線を心地良いものとして背に受けながら、ぶつきらぼうに手を振ってヒントを投げ捨てた。

「とりあえず俺は2年の格納庫に宝探しに行くんでね、何か思いつけば伝えに来れば良い」

「あつ、」

小鳥の意図に気が付いた円花はニヤリと笑った。

・・・・・・・・

・・・・・・最終的に、円花は小鳥の資材集めに協力し、小鳥は円花との練習に付き合うことで交渉は成立した。

二人の転校生 (Silver Warrior, Bronze Noble) 1/2

「うーん」

弾だんと一通り遊んだ後、俺はベッドの上に寝転んでいた。

先週ほんしゅうまで箒ほうきの居た部屋には今は俺一人で、なんだか部屋がだだっ広く感じる。

と言うのも先週、つまりクラス代表戦が終わった辺りで部屋割の再編成が決定したらしく、箒は別部屋に越こして行った。

俺が寝転んでいるベッドの隣には、箒が使っていたベッドがあった。

(なんであんな事言ったんだろうな)

箒は部屋を移動した後わざわざ戻ってきて宣戦せんせんふこく布告するかのよう  
に俺に告げた。

『来月の個人トーナメントで私が優勝したら、付き合ってもらおう!』

捨て台詞にしては奇妙だし、買い物物の荷物持ちを誘うにしては気合が入りすぎだ。というよりそんな条件なんてつけなくても普通に行  
くけどなあ。鈴で何度もやったし。

「まあ良いか・・・今度聞いてみよう」

そう呟いたときだった。

部屋のドアがノックされる音が聞こえてきた。

俺の部屋に来る人は沢山たくさんいる。けどまあ休日の昼間から来るやつ  
なんてそんなにいないだろ。顔見知りだよな。

そう思いながらドアに向かう。

・・・小鳥だと良いな。

そんな淡い希望あわを胸にドアノブを回した。

「はい?」

「ちよ、いきなり開けないでよ!?!びっくりするでしょうが!」

希望を胸にドアをくぐれば、そこは胸も希望も無いぺったんこだっ  
た。

「・・・なに？私が来て不満？」

「いや、そんな事は無いぞ」

鈴からそっぽを向いて生返事で返す。

先月中国の国家代表候補生として編入してきた鈴こと凰鈴音は俺の幼馴染の一人であり、ある意味では弾に次ぐ腐れ縁かもしれない。

まあ一応彼女のことを嫌いかと言われるとそうではないのだが、割と良い思い出より悪い思い出の方が思い出され、渋い反応をしてしまう。

イヤ、ちゃんと良い思い出もあるんだよ、思い出せないだけで。

その上鈴が来るときは大抵何かしら頼みごとがある時だから少し身構えてしまう。

「まあそれはそれとして俺は食堂に行こうと思ってたんだけど、何か用か？」

「ふん、そうだろうと思って誘いに来てあげたのよ。捨て犬を可哀想に思うくらいの優しさは持ち合わせてたってワケ」

「犬扱いかよ・・・」

良いけどさ。

もうこの手の口振りは慣れた物。気を取り直して鈴からの誘いを了承する。

「じゃあ食堂行こうぜ」

・・・

「あ」

「あ」

「あ」

食堂で昼食を終えた俺たちは声を重ねて間の抜けた声を出した。

メンバーは俺、鈴、箒の三人。

・・・そう、箒なのだ。

クラス代表戦の謎の戦線布告以来、箒は何でかあからさまに俺を避けている。

もちろん俺の特訓に顔を出してくれているし、悪口を言い合うよう

な事になるほど嫌われてはいない、はず。

ただ何となく箒が気まずさを感じているのは分かる。多分俺が何か変わったわけじゃないし、むしろそう言う態度を取られるようになってから、俺から話しかける回数は多くなったかも知れない。

「よ、よお箒」

「な、なんだ、一夏か」

「……」

……まあ、こんな調子で会話が続かなくて気まずくなっている訳だけだ。

いかん、箒が避けるようになったのは会話が続かない俺に嫌気が指したからか？ そう言えば俺の部屋から引越す時に怒っていたよな、もしかしてアレって話題が少ない俺に怒ってたのか？

「何？ あんた達何かあった訳？」

「いや！ 何も！」

——ハモった、マズいこれはあからさまに『何かありましたよ』と言っているような物じゃないか。

鈴もそんな俺達の空気感が伝わったのか、呆れたようにツツコミをもらす。

「何その『何かありました』感まるだしの反応、わざとやってんの？」

「いや、そんな訳無いだろ」

ホントに何も無いんだけど、なんだか言い訳じみた事を言ってしまう。

そのの何かが気に障ったのか、箒はスタスタとどこかに行ってしまった。

「あー……」

ふわりとなびくポニーテールになんとなく後ろ髪を引かれる思いだった。

……ポニーテールが後ろ髪なのでなんだか表現としておかしい気がするけど。

それを見届けた鈴も席から立った。

「じゃ、わたしも部屋に帰るから」

「ん、誘ってくれてありがとな」

「たまにはアンタから誘いなさいよまったく・・・」

「うん？」

「何でもない、じゃあね」

箒と同じように鈴もツインテールをなびかせて歩き出す。

・・・俺もなんか動きのつく物をつけようかな。小鳥が髪方面でやってるし、マントとか。

当てもなくそんな事をぼんやりと考えていた。

・・・月曜日・・・

「ハツキ社製のが良いなあ」

「えく？デザインだけな感じがするし、性能的にもミューレイのがいんじゃない？」

「でも高いじゃん」

月曜の朝からクラスの女子は元気が有り余っているらしく、やいのやいのと談笑している。議題はISスーツについて。

今現在彼女らには学園側からの支給品があり、無理をしてスーツを買い揃える必要は無いのだが、やはり年頃の女子と言うべきか、半ばファッションとして自らの差別化を図り、意見を交わしていた。

ファッション、と言えば衣替えの時期である、生徒の大半が夏服に制服を変えており、俺もまたその1人だった。

一夏はフォーマルな半袖シャツを着け、俺はその上から薄手の白いカーデイガンを羽織っており、皆が皆なりの形で季節の変わり目に対応していた。

—— 閑話休題 かんわきゅうだい

俺は手乗り自作PCと睨み合って設計図を考えながら、一夏は教科書の再確認をしながらその話聞き流していたのだが、ふとした拍子ひょうしに話題が男子のISスーツに飛び火した。

「そういえば一夏さんと小鳥さんのスーツってどこ製のなの？二人とも別々のモデルっぽいけど」

「あー。特注品だって。どっかのラボが・・・えーと、イングリッド社製のストレートアームモデルを改造したって聞いたぞ」

「小鳥くんは？」

「・・・忘れた。アメリカのどこぞかのメーカーの代物らしいが、性能以外は特に気にしてないんでな」

視線を画面に落としたまま返答する。

俺のISスーツは学園経由で選出した一夏のそれとは事情が違い、ある程度メーカー側が男性用ISスーツを作れるようになってから製作された物で、入学する直前にメーカーが宿泊していたホテルに直接送り届けた代物である。

薄気味悪いレベルで着心地が良かったのでそのまま使用しているのだが、メーカーも覚ええず生産国を覚えるなどやはり俺も凡人のようだ。嫌いな存在の事がどうにも気に止まってしまうのは。

「ふーん。小鳥くんが気に入るくらいなんだ、ちよっと気になるな」  
「時間が有れば調べておいてやる」

「なら、私の方も調査お願いしても良いですか？」

「あん？」

言ってきたのは織斑円花、先週学園に特別編入した訳ありである。

持ち前の人当たりの良さと『千冬の妹』と言うネームバリューも相俟って、クラスを問わず、みんなの妹と言うポジションを入学一週間のうちに確立していた。

そんな彼女のISスーツなのだが、現在は支給品を利用しているが、サイレントゼファイルには今もなおあのセンシティブなハイレグが残っている。

「あれは出自不明で情報がゼロなんだ。調べようも無い物をどうして調べられる。先生方に任せるのが良いだろ」

にしても、円花の猫被りは目を見張る物がある。

口調は砕けた時と大差無いが、その柔和さは10割り増し、印象が変わりすぎて別人じみている。

これは千冬や一夏も騙される訳だ。

「ええー情が無い！」



「こんな可愛いのに〜!？」

「関係無い」

「千冬先生の妹なんだよ!？」

「知ったことか」

女子連中が円花を抱いて擁護しながら口々に言いたい言つてきやがる。

そもそも俺は『やらない』ではなく『できない』と言っただの、やるやらない以前の問題で蹴つ躓いていると言うのにどうして調べようと言うのか。

「できない事をやって何の意味がある。よしんば仮に的中できたとしてそれをどうしろと？俺ら学生の身分でできることなどたかが知れている」

どうにも、女性と言う生物は感情が優先されるらしい。

他人の事をとやかく言える立場ではないが、建設性の無い話を気分でもない時に振られる事程面白みの無い事も無い。最初から味も香りも無いガムを延々噛まされている気分だ。

二転三転する話題に嫌気が差して、視線を上げてやる気力も湧かない。

ので、視線を落としたまま言葉を放る。

「それに円花も、他人に何かを頼みたいのならそれ相応の態度があるだろう。何を頼んでも許される程敬語は万能ではないからな」

「・・・すいません」

「もー円花ちゃんが可哀想だよー」

「知った事か。『可哀想』で全てが片付くなら児童犯罪は泣き落としで全部片づいちゃうだろうが」

窘めるように、吐き捨てるように、言い放つ。

どうせ感情論との水掛け論になるだけだ。

撤回しようと通そうとも面倒臭い事には変わりはあるまい。それに相手は過保護に育てられたただのガキだ、社会の荒波を味あわせてやらねば教育にも悪いと言う物だろう。

「それと、お前ら時計は見えているか？軍人教師のお出ましだぞ？」

「あ、やば」

いつぞやの会話の焼き増しで話を切り上げる。

気づいた全員がぞろぞろと自分の席へと踵を返す、中には『じゃあわかったら教えてねー』などと判然としない事を言うヤツや俺にだけ見えるようにあつかんべをしている円花もいるが、まあ気にしないでおう。

「諸君、おはよう」

「「お、おはようございますっ！」「」

一夏、箒、セシリア、円花、クラスのほぼ全員がしまった挨拶を返す。

『ほぼ』全員と言うのも、俺は返答していないので全員と数えるには無理があるのだ。

「では、山田先生。ホームルームを」

「は、はいー」

一瞬、教室を見回した千冬と目がかち合った気がして悪寒が走ったが、そんな事は無かったらしく、麻耶に進行を移す。

「えつとですね、今日はこのクラスに転校生さんが来ています！しかも二名です!!」

ざわめくクラスメイト達。

何しろ時期的におかしい上、この時期に二人とも転校してくるなど珍しいを通り越している。

(鈴音と言い、どうにもISに乗れる野郎の登場に辟易してるみたいだな)

それに学園の外には出ていない情報だろうが、ISに乗れる男はもう一人いる。

刹那・F・聖永、所属不明の機体に乗るこれまた正体不明の記憶喪失の少年。

俺はともかく一夏よりも年少で、円花と同年代くらいじゃないかと思われる彼は、多分今週中には存在が明かされるらしく、千冬から俺に知らせがあった。

そんな俺の心中の眩きなど誰の知る由も無く、麻耶教員の司会で件

の転校生がやってきた。

「では、おふたり共入ってきてください」

「失礼します」

「・・・」

ドアが開かれ、二人の転校生が入ってくる。

「っ!？」

驚愕に俺の目さえ開かれる。

ひとりは銀髪赤目の小柄な女の子、顔立ちは良いが、どうにも冷たい印象を与える目は、どこか千冬に似ていると感じる。

しかし申し訳ないが俺の、いや教室中の視線と意識を釘付けにしていたのはもう一人の転校生。

当然だろう、金髪に紫水晶のような瞳を備えた少年だったのだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。僕と同じ境遇の人物が居ると伺って本国から転校してきました。不慣れな事が多いと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

柔らかな物腰、俺よりやや長く柔らかな髪を俺とは比べ物にならない程丁寧に束ねた髪型と、女とも見紛う中性的な顔と声色を持つ彼は、いわゆる美少年と言うヤツなのだろう。

(・・・いや待て『デュノア』だと?)

彼のセカンドネーム、つまり苗字には聞き覚えがあった、それはまさしく

「「「きやあああああ!!」「」」

そこまで至った俺の思考回路は女子達の黄色い悲鳴によってかき消された。

「男子・三人目!」

「しかも美男子! 守ってあげたくなくなる系の」

「地球に生まれて良かったあ!」

方々からシャルルに対する賞賛の声と、それと同様にその美男子と同級生になれた幸運を喜ぶ声がジェットエンジンみたいな音量で台風のように吹き荒れていた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「お、お静かに。まだ自己紹介終わってませんかー！」

面倒くさそうな千冬の号令と慌てた様子の麻耶教員、ただでさえ姦しい教室がより騒がしいのだ。うんざりするのもしゃるる。

「……」

しかし、話題を振られたはずの銀髪少女は、何も語らず微動だにしない。

銀色の髪は鏡というより氷に似て、動かざるその雰囲気は永久凍土のようだ。モデルにでもしてやれば引くて数多だろう。

が、ここは写真撮影の場でもないし、無論モデル養成学校でもない（モデルやっつてる奴が多いけど）。

学校である以上コミュニケーションが必要なのだが、当人がとりたがらないのでは仕方が無い。溜息をついて千冬が銀髪の転校生に自己紹介を促した。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい教官」

教官——軍などで新兵に指南の役割をもつ上官を指す敬称——と千冬を呼ぶラウラと言う名前らしい転校生。

その『教官』と言う呼び方を受けてか、困った様な顔をして、千冬はまた口を開いた。

「ここではそう呼ぶな、今は私は教官ではないし、お前も一般生徒だ私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

背筋を伸ばしてその言葉を受けたラウラ。

プライドが無駄に高そうな割には素直すぎる態度。

（……どうにも、千冬を尊敬、いや、崇拜しているのか。コイツは）千冬を教官と呼んだ、千冬は『今は』教官ではないと、そして『今は』ラウラも一般生徒だと言った。

つまり彼女はかつては一般人ではなく、また千冬も大凡軍人にしか適用されない教官と呼ばれる立場だったらしい。

シャルルの姓についても考察しながら、ラウラと言う少女がほぼ確

実に軍出身である事を把握する。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ボーデヴィツヒ。間違いなくドイツ語圏の苗字。

ドイツ語圏の中でISを使用している国は複数あるが、製造している国は二つしかない。あるいはドイツが本国なのかも知れない。

とすれば、千冬も恐らくはドイツ軍に何らかの事情で在籍していたのだろうか。

色々とかかる事は多いが、まあラウラにせよ千冬にせよ本人に聞けば良い話だ。

(しかし、名前だけ名乗ってだんまりとは、一夏よりも自己紹介下手かコイツは)

名前を名乗って10秒弱、ラウラ・ボーデヴィツヒは迷い無く口を閉し、それ以上を喋る気配が無い。

「あ、あのく……それだけですか?」

「以上だ」

停滞した教室を流動させようと麻耶教員が引き気味の笑顔でその先を促すが、にべもなくそれ以上は無いと断言するラウラ。切り捨てられて涙目一歩手前の麻耶教員。

良い趣味をしているな、俺も麻耶教員を弄めるのは愉しいと思うぞ。

が、そうして見ていると、銀の少女が織斑千冬の弟の元に足を向けた。

……

自己紹介を終えたラウラは、俺と目が合うと無表情のままこつちに歩いてきた。ここから、山田先生が涙目じゃないか。

と、そのまま一切の無駄無く右手が振り上げられた。

「貴様が……ッ!」

振り上げられるラウラの右手。その直後、俺の腕が引つ張られ、振り下ろされた手のひらが空を切った。

「おわっ!?!」

間一髪自分の頭の上を通り過ぎる手の風に驚きの声をあげてしま  
う。

あまりに突然で、一瞬何が起きたか解らなかったが、どうやらラウ  
ラが俺を平手打ちしようとしたのを小鳥が邪魔したらしい。

「ぐえ、」

勢いのままに俺の肋骨辺りが机に食い込んで踏み潰されたカエル  
みたいな声が出る。

「・・・貴様、何のつもりだ?」

「こつちの台詞だよ、何が有ったかは知らないが、それは誉められたモ  
ンじゃないな」

人が殺せそうな鋭い眼で小鳥を睨むラウラと、いつかのセシリアの  
時の様な眼でラウラを睨み返す小鳥。

「言いたいことがあるならその口を使え。それさえ出来ないのならお  
前は獣以下だぞ?」

一瞬にして凍りつく教室の空気。

ラウラが睨み上げる小鳥から俺に視線を合わせる。

「・・・っ!?!」

静かな両目の奥に燃える怨恨の炎。それはまるで俺を焼き尽くす  
為に燃え上がって、一歩間違えれば喉元を噛み千切られる予感さえし  
た。

一瞬の間を後にラウラは口を開く。

「認めない。私は貴様を教官の弟だとは認めない」

ラウラはそう言う『フンツ』と息を吐いて自分の席に向かった。

小鳥も蛇の様な眼でそれを見届けると、何事も無かったかの様に  
教壇の方に姿勢を戻した。

と、事の顛末を何も無かったかのように、千冬姉が咳払いをして発  
破をかけた。

「えー・・・HRを終了する!ー確認すぐに着替えて・・・」

「「きやあああー!?!?!」」

さつきこここで起きた物に似た悲鳴が聞こえた。2組にしては距離

が遠い感じがする、3組か？

すげえ音圧だな全員ビクツとしてたぞ。

さっきの1組もこんな感じでうるさかったとしたらホントゴメン2組。

「・・・ふー。こんな騒音被害に二度も見舞われた2組の連中には同情しかないな」

小鳥が何か小さくため息を吐いていた。

色々訳知りの小鳥の事だ、何か知っているかも知れない。

「小鳥、何か知ってるのか？」

「知ってるも何も、お前も知っているだろうが。十中八九俺の同居人だろ」

うんざりしたように答える小鳥。

え？同居人？同居人って・・・

「え、刹那!？」

「っ、バカ！声がでかい！」

あつ、と思つて口を塞ぐがもう遅い。

案の定周りからの注目が集まっていた。

「ねえ今の叫び声について何か知ってるの!？」

「今『刹那』って言ってたよね！人の名前みたいだけど知り合い!？」

男子の転入生の登場と、3組から響く黄色い歓声、その上『刹那』と言う人名。

色々と情報が多かったせいでか、クラスの噂好きの生徒たちは興奮気味に詰め寄ってくる。

俺は聖徳太子じゃないんだから一気に喋られても聞き取れないし理解出来ないって。

「ああクソ、やっぱり来たか」

苦虫を噛み潰したような表情の小鳥。

そうか、刹那の情報って俺たち以外じゃ先生しか知らないんだっけ。

だが小鳥の動きはここからが早かった。

「さあ一夏、今日の一限目は実習だぞシャルルもほれ付いてこい！」

「え、ちよつと待てよ小鳥」

「ちよつ、手引つ張らないでっ!」

「言ってる場合か!」

逃走開始である。

「あ、小鳥君!逃げないで!」

「何があつたのか教えなさいよお!!」

2人を引つ張りながら逃げる小鳥。

当然のようにその後を追うクラスメイト達。

騒ぎを聞きつけて他のクラスの生徒まで廊下に出始めている始末。

「な、なんなんだ一体!」

走りながらも何とか小鳥に話しかけるが、その返答すら無い。

小鳥が走るスピードを上げる。

「え、えと、小鳥くん?だよね、この事態は一体!」

「馬鹿かよ!2人も新規の男子が来たんだ!こうなるのも当然だろうがッ!!」

シャルルの質問に半分説明になってない説明を放り投げ、廊下を駆け抜ける小鳥。

「半分は刹那の方に行ってるだろうが。それでも全校生徒の4分の1が俺達を追ってくると思え!!そして遅刻は即刻『死』を意味するぞ!!」  
「死!」

驚いた声を上げるシャルル、それもそうだろう。

遅刻したことも本当に殺されたこともないけど千冬姉を前に遅刻でもしてみればイヤでもそう思う。

それこそ、本気で殺されるんじゃないかと思うくらいには。

しかし、そんな事を考えている余裕はないらしい。

背後からは追っ手の足音が迫ってくる。

しかもこれは……10や20どころではないな、30人以上いる。  
冗談抜きで命の危機を感じる状況だった。

「居た!例の転入生よ!」

「金髪に紫水晶の瞳!とんでもない美形よ!守ってあげたくなる系の



！」

「者ども出会えい！出会えい！」

前からも女子がゾロゾロと出てきた。

苦虫を噛み潰した表情で小鳥が零す。

「武家屋敷かよ、耳も足も早い……ッ！」

全くもって同感だ、あやうくホラガイまで持ってきてきそうだぞ。

なんて事を考えつつ、横道に逸れて女子の壁を躲す。

だけどこのままじゃジリ貧だ、遠回りにもなるし、捕まったら元も子もない。

「ッ……どうすんだよ小鳥！このままじゃ遅刻しちまう！」

「——シャルル、お前専用機あるか？」

「え？う、うん持つてるけど」

唐突な問いに一瞬きよんとするが、直ぐに答えてくれた。

先頭を走っていた小鳥は急停止し、窓の外を眺める。

「じゃあサイレントモードにしている、先生方にバレると厄介だ」

ひと一人は余裕で通れそうな窓を開けながら指示を出す小鳥。

サイレントモード……確か行動不能にする代わりにIS

をコアネットワークから外す機能だったっけ。

「……っっておい待て！それってまさか!？」

驚いて小鳥に詰め寄るけど、小鳥は既に窓枠に手を掛けていた。

「そのまさかだ、校則違反にはなるがバレなきや犯罪じゃあないんだよ。みんなで赤信号を走り渡ろうや」

そしてそのまま小鳥は躊躇なく窓から飛び出した。

制服のままIS『銀影』を展開し、バックバックから2本の剣を引き抜き合体させて一本の剣にした小鳥は俺達に告げる。

「そら、迷ってる暇は無いぞ！俺が掴んでやるから1人ずつ飛び込んでいー！」

でいー！」

「くっッ！ああもう、男は度胸！」

覚悟を決めて飛び込む。

小鳥はしっかりと俺を受け止めて片腕で抱え上げる。

「よし、シャルル！来い」

「わ、わかった!」

シャルルも遅れて窓枠に手を掛け、小鳥目掛けて飛び込む。

小鳥はそれを難無くキャッチして見せた。

「——軽いな、ちゃんと飯食ってるのか?」

「えッ!? そ、そんな事ないよ、少食なだけだしっ! 体重管理してるだけだよっ!」

「女子かよ……。まあ良いか、とにかく行くぞ」

「おう、ほらシャルルもちゃんと捕まっとけよ」

流石に校内でISを展開しているのを見られる訳にはいかない。

シャルルの手を取り、銀影の装甲の掴みやすそうな所に置く。

どうしたんだぼーっとして。

「シャルル?」

「ふえっ!?! い、いやなんでも無いよっ!! うん! なんでも!!」

「準備が良いならとっつと行くぞ」

「う、うん!」

「わかったけどさ、どうやって校舎に入るんだ? 正面からは入れないと思うんだけど」

「アリーナのピットから入る。誰にも見つからないならそこが一番リスクが低い」

空中でそう言い切った小鳥は、俺達を小脇抱えて飛翔した。

PICを広めに展開しているのか、速度の割にGはかからず、自転車の急ブレーキくらいの体感で飛んでいく。

地上100mほどの高さから学園を見下ろせば、なんだか背筋が震えた。

「そらっ、もう着くぞ」

誰も居ないアリーナに降下、ピットに転がり込む。

「ふう……。到着だな」

「こっちとしては心臓に悪いから事前に言っただけだなあ……。」

「仕方ないだろう、進路を塞ぐ連中に文句を言うんだな」

俺の口に軽く返しながらも、小鳥はISを解除した。

「それで、これからどうするの?」

「どうするもこうするも、ピットの更衣室で着替えて、そのまま下に降りてグラウンドに出る。エレベーターがあるから、途中経路は気にしなくて良い」

「な、なるほどね」

「じゃあ早速行こうぜ」

更衣室に3人の男子で入っていく。

更衣室はガラガラで（他に誰かいたら怖いが）、男子3人が広々と使える分の広さがあった。

奥からシャルル、俺、小鳥の順でロッカーを使う。

時計を見ると・・・うわやば、5分無いじゃん

「んじゃ、さっさと着替えようぜ」

そう言いながら制服のボタンを外し、Tシャツを脱ぐ。

と、シャルルが驚いたように声を上げた。

「うわあ!？」

「ん、何だよそんな驚いて」

「い、いや、別に」

顔を赤らめ、視線を逸らすシャルル 男同士なのに何を照れてるんだらう。

「早く着替えないと遅れちまうぞ?」

「う、うん・・・で、でもちよつとあっち向いてて。その、恥ずかしいから・・・」

「???別にジロジロ着替えを見るつもりはないけど・・・シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない!見てないよ!?!」

両手を前に出し必死に否定するシャルル、別に見られても減るもんじゃないし、なんとも思わないんだけどな、変なヤツ。

「つべこべ言わずに背中向けてやれ」

そう思っていると、小鳥が肩を掴みシャルルに背中を向けさせた。

見れば小鳥は既にダイバースーツみたいに全身を覆うISスーツをつけていた。

「早いな・・・」



を終えたシャルルが居た。

「早いな・・・着替えるの」

「そ、そうかな・・・って一夏まだ着てないの?」

シャルルの格好はすでにISスーツを身に纏っていた。

一方の俺は腰骨にまで届いただけで、完全には着けきれていなかった。

「うんまあ。ほら、裸だから着づらいだろ、ひっかかって。なんかコツでもあるのか?」

「ひ、ひっかかって・・・!?」

俺の言葉に何故か顔を赤くするシャルル。

なんだ? さつきから様子がおかしいけど大丈夫だろうか?

「つと急がないとな。んしよっ・・・と」

腰骨のISスーツを上げてパンツを穿ききる。

「これで良し。さ、行こうぜシャルル。小鳥も言っただけど千冬ね・・・織斑先生は怖いんだ」

おつとつと、この呼び方を学園ですると千冬姉怒るんだよな。

「う、うん・・・」

手を取ってグラウンドに向かって走り出す。

低体温なシャルルの手は、まるで絹の様な肌触りで、男同士なのになんだかドキツとした。

.....

「遅い!」

俺が列に加わってから大凡3分、チャイムの音と共に現れた一夏とシャルルは担任兼鬼教師、もとい我らが千冬先生からの叱責を喰らっていた。

と言っても俺もかなり遅い部類であり、列の後ろから三番目程に並んでいて、その次に遅かったセシリアからしきりに一夏に関する情報を聞かれていたが。

そのセシリアが最後尾に着いた一夏に話しかける。

「ずいぶんとゆっくりでしたね、スーツを着けるだけでどうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

「ムチャ言わないでくれよ・・・」

ISスーツは一般的に（と言うかそれ以外があり得なかったのだが）女性用である。

耐刃、対弾性能に優れたその大方はレオタードやワンピースに似ているが、皮膚表面の電位差を検知、伝達することにより、IS操縦をより繊細な物にする役割がある。

肌の露出が多いが、基本的にISのシールドバリアが身体の大半を守備する為、特段問題は無いらしい、零落白夜を見ていると不安で仕方がないが。

「俺らのISスーツはめちやくちや着づらいんだぜ？長袖長ズボンみたいモンだし、首まで覆うもんだから着替えづらいんだよ」

俺たちのように男性のIS乗りと言うのは現状世界に3人しか居ない（公式的には2人だが）。

そんな訳で、実験的に作られた男性用ISスーツと言うのは手探りな状態であり、上下ともにロング丈、一夏はツーピースタイプのだからまだいいが、俺に関してはモロダイバースーツのワンピース、しかも指抜きグローブ付きである。

そう言った事情も加味して言ってもらいたい物だ。

そんな思いも込めて後ろに向かって口を開く。

「シャルルの事もあったんだ、クラス外の女子共に追われてた状態で本礼に間に合っただけでも十分だろうに」

「そうそう、小鳥がいなかったらどうなってたかわかんなかったんだぞ？」

「そうでしたわね、一夏さんは女性との縁が多いようですから？そうでないと初対面の女性から叩かれたりはしませんよね」

「う・・・」

嫌味を言われて押し黙る一夏。

と、そんな俺たちの背後から聞き覚えのある声が上がった。

「なに？またなんかしたのアンタ？」

が、バカはその声の主に気づかず、驚いてキョロキョロと見回すばかり。

「後ろにいるわよバカ！」

一夏のふくらはぎにトゥーキックを入れ、憤慨するのは一年二組が代表、ファンリイン 凰鈴音である。

ザツザツザツ

セシリアは鈴音の疑問に答える。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ!? アンタなにしたのよ!? いきなりはたかれるって相当なバカやらかしたんじゃないの!?!」

「——バカをやらかしてるやつなら私の目の前に二人いるぞ」

あーあ、言わんこっちゃない。

スパーンツ!!!

千冬先生の接近に気づかず話し続けた二人は、仲良く出席簿による制裁を喰らったのだった

二人の転校生 (Silver Warrior, Bronze Noble) 2/2

「うう．．．っ！毎度の事ポカポカと人の頭を叩いてえ．．．！」

「一夏のせい一夏のせい一夏のせい．．．！」

千冬にはたかれた頭をさすりながら一夏への呪詛を吐き続けるセシリアと鈴音。

．．．まあ二人とも自業自得なので言う事は何も無いが。

そんな事は露知らず、知つてても意に介さなさそうだが、千冬は授業を進める。

「では、本日から格闘および射撃を含む実践訓練を開始する．．．そうだな、活気溢れる十代も居ることだし、鳳<sup>フエン</sup>、オルコット！実演をしてみようか」

先の一件で完全に目を付けられた二人に指名がいく。

どうせ専用機持ちは手間が省けるとかそんな理由なのだろうが、指名された二人はしぶしぶと言った様子で前に出てくる。

それなら俺と一夏でも良いのだろうか、やはり射撃を含む実践訓練となればあの二人に軍配が上がったのだろうか。

「どうしてわたくしが．．．」

「一夏のせいなのに．．．」

そして全くと言ってモチベーションの上がない代表候補性、指名された以上のプライドとか責任感の類<sup>たぐい</sup>は無いらしい。

——が。

「．．．．．（何かを耳打ちする千冬）」

「!!」

「．．．．．!!」

急激にやる気に満ちた顔になるセシリアと鈴音。凡<sup>おおよ</sup>そ一夏に関連した何かを言ったのだろうか。

思ったより乙女心の扱い方を心得ているなこの人。

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませ



んが」

「ふふん。こっちの台詞よ、返り討ちにしてやるわ」

「あわてるな馬鹿ども、対戦相手は——」

「あああーっ！ど、どいてくださいーい！」

スラスタアの轟音と共に1組副担任が叫び声を上げながら落下し  
てくる。

「あゝ？」

アドオオオオオンツ！！！！

盛大に土煙を上げて麻耶が墜落した。

あまりにも唐突な出来事に反応出来ず、爆風に吹き飛ばされる、

「っツ．．．．．いきなりなんだ全く．．．！」

起き上がりながら眩く。どうやらこれといった傷はない。

どうやらISをつけた麻耶が演習の相手だったようだが、やはりこ  
う言った場面は緊張するらしい、上がり症が発動してコントロールを  
失ったようだ。

しかし幸いにも直撃は無く、若干後ろの方に落下して．．．．  
一夏に激突したかもしれない。

「——一夏！無事かッ!？」

彼の安否を確認するため墜落現場に駆け寄る。

未だ土煙は晴れず、シルエツトを見るにどうやらISを装備した2  
人分の人影が一塊になっているのはわかる。

「あいつたたた．．．なんなんだ一体．．．？」

「．．．．．あゝ？」

地に両手を突いて起き上がる一夏、しかしその全容を見た時空気が  
凍りついた。

おもいつきり真耶先生の胸を揉んでいたのだから。

一夏も驚いているらしくその場から動いていない、その場にいた全  
員が硬直している最中、麻耶は．．．

「あ、あの、織斑くん。こんな場所でこんな事．．．いえっ！場所だけ  
じゃなくてですね私と織斑くんは仮にも生徒と教師でして——」

「何言い出してんですか麻耶先生．．．」

きょうび下手なAIでもしないような思考回路のオーバーヒートを起こしトンチンカンな事を口走る。

さて、この場で俺がとるべき選択肢は二つ、

後ろの代表候補生の2人を抑える。

↑

早急にこの場を離脱し厄介事から逃れる。

↑

後ろの代表候補生の2人を抑える。

鈴音とセンリア

早急にこの場を離脱し厄介事から逃れる。

↑

ピツ

0コンマ4秒後に壮大な破壊音が鳴り響いたのは言うまでもない。

「うわっ、あぶねっ!?!」

「退がっててください織斑くん!ここは私がなんとかします!」

「邪魔しないで下さい!私たちは一夏さんに用があるんです!」

「邪魔するってんなら先生が相手でも容赦しないわよ!」

そしてそのまま始まる戦闘、とりあえず巻き込まれないように一夏を避難させた後、数分間俺達はその光景を見上げていた。

.....

どかーんっ!

山田先生対セシリア&鈴の代表候補生ペアの対戦がやっぱりどうか予定調和というか山田先生の勝利で終わった。

二人が一直線で並ぶように誘導してその間に割って入り、数の不利を逆手にとって一方的に弾を打ち込む様は普段の温厚さでは考えられないくらいえげつない作戦だった。

というかそりゃ強いよな、千冬姉が言っていたけど学園の生徒だった時代代表候補生だったらしいじゃん、それって日本で千冬姉の次に強いって事だからなあ・・・

それとは別に、

「シャルル凄いな、山田先生のISのことなんであんなに知ってるん

だ？」

勝負が終わるまでの3分くらいの間、シャルルは山田先生のISについて詳しく説明してくれていた。

ラファール・リヴァイヴ。フランスの第二世代機筆頭、現在AEUでの標準配備機体であり、第二世代最後発機でありながらもそのシェアは第二位を占める。

ちなみに小鳥から聞いた話ではそもそもAEUでは国軍の規模が小さく、ドイツやイギリスと言った一部の大国を除いたほとんどの国が軍事を売りにした会社がその国での軍事力を担っていることが多いらしく、そこでの消費がほとんどらしい。

閑話休題。

とにかくそう言ったことに詳しいのはパイロット科では珍しいから気になっていたんだ。

なので聞いてみると、シャルルは少し暗い顔をする。

「ああ、それはね……」

「ISに詳しい、じゃなくてラファールに詳しいって事だろ」

小鳥が口を挟んできた。しかもやれやれと言った感じの顔をしている。

こういう時の小鳥は基本的に初歩的なミスをしている時らしい。

「さつきシャルル自身が言っていたろうが、セカンドネームと同じ会社の名前を」

「セカンドネーム……えっと、苗字のことだよな、シャルルの苗字って……ああー！」

「声でけえよバカ……」

そうか、そういう事か！シャルルの実家って、デュノア社だったのか！

「なるほどなあ……どうりで、振る舞いが上品だと思っただらそう言う事だったんだな」

「あ、はは……」

「？」

引き気味の笑い。どこかそこに触れて欲しくないと言うようなそ

の笑顔。

「なあシャルル、もしかして実家に何かあるのか？」

「えっ？いいいや、何も無いけど……」

「いやだって、そんな嫌そうな顔してあいたたたたた」

「だったら放つとけ、お前だって自分の両親について話したくないだろう」

小鳥が耳を摘んで話を遮る。

「それに授業中だぞ、千冬先生に叱られたいのならいざ知らず。私語は慎んどくんだな」

「実家の話に移したのは小鳥の方だろ……？」

「触れてはいけないと気づいたのはお前が先だ」

俺の文句もどこ吹く風、小鳥はそっぽを向いてどこかへ行ってしまった。

それを見送って少し後、俺はシャルルに向き直る。

「えーと、ゴメンな。話しづらい事を無遠慮ぶえんりよに聞いて」

「う、ううん！大丈夫、一夏こそ大丈夫？耳引つ張られてたみたいだけど」

「ああ。まあ千冬姉のに比べたら全然」

「そ、そうなんだ……」

「そうそう、千冬姉なんてホントに耳が引きちぎあだだだだだ!!」

「小鳥では物足りないときたか、そうかそうか」

「ちっ、千冬姉っ！ギブツ！ギブです！」

「織斑先生だ」

「お、お織斑先生！私語は慎みますからあああッ!？」

「……よろしい」

ぱッ、と耳たぶから千冬姉の指が離れる。

いてててて………本当に耳ちぎれるんじゃないか？

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱん、と手を叩いて話を切り替える千冬姉。

「専用機持ちは………7、いや——これから6のグループで

実習を行う。グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？  
では分かれろ」

言い終わるや否や大体20人前後の女子がそれぞれ男子3人に押し寄せてきた。

「織斑くん、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて！小鳥くん！」

「シャルルくんの技術見てみたいなあ」

三者三様の言い分で集まってくる女子達。うわあ、圧がすごい、堪えないと倒れそうだ。

シャルルは言わずもがな、流石の小鳥も対応しきれずにやれやれと言った様子で頭を抱えている。

ああ、そんなに固まっていると……  
スパーンツ!!!

「「「いったあああつ!?!」」」

言わんこつちやない。出席簿アタックで俺の前の女子たちが一網打尽にされた。

「……出席番号順で一人ずつグループにはいれ！それ以上もたつくようならISを背負った状態でグラウンドを100周させるかな！」

「「「はっ、はいっ!」」」

鶴の一声、いや、鬼か。

とにかく、千冬姉がまとめてくれたお陰で女子のみんなはそれぞれの持ち場についてくれた。

「わー、小鳥さ〜ん♪」

「一夏君よろしくー!」

「オルコットさんもよろしく〜♪」

「デュノアくん……お母さん、この苗字でいてくれてありがとう……ッ!」

「鈴音さんといっしょかあ、負けてたしなあ」「なんか言った？」

「……」

——すげえ、ラウラんとこだけ空気が冷めきってる。

というか、

「なあ箒、円花の奴なんで小鳥に懐いてんだ？」

「私に聞くな、兄のお前がわからない物を私が知る訳がないだろう」

「それと・・・今先生が話しているのだから、急に話しかけるな」

「す、すまん」

「みなさーん。これから訓練機を一班一機で取りに来てくださーい。『打鉄』と『ラファール』が3機ずつ計6機あります、早い者勝ちです。ので、好きな方を班で決めて取ってきてくださいねー」

さっきの模擬戦で自信がっていたのか、呼びかける山田先生はいつもの5から6倍くらいしっかりしているようにも見える。もしあの大きな赤いフレームの丸メガネを外したのなら『仕事のできるオンナ』にも見えそうだ。

.....

「そら、始めるぞ」

訓練機のリヴァイヴを受領し、班員に簡潔に告げる。

「？ 打鉄じゃダメなんですか？」

「乗る分にはどうでもいいが、乗らせる分にはその限りじゃねえ。監督者としてベターを取ったまでだ」

日本製のOSには若干のクセがあり、もし何かしらの異常があった際に対処できないとなれば矜持きょうじと沽券こけんに関わる。万が一を早期に対処できる可能性は、一つでも多いに越したことはない。

「ほれ、お前は専用機持ちだ、助手しろ」

「はい」

優等生の仮面をつけた円花の扱いやすさたるや、練習に付き合っている時の8倍くらいはある。

観客がいない時はやれ『近距離戦がしたい』だの『ビットでちまちま打つのは性に合わない』だのとわがまま放題な上に一夏に負けず劣らずの頑固っぷり。説得だけで30分は無駄にする。

「じゃあ、始めるぞ。先頭は誰だ」

「ソフィアですー」

「よし乗れ…膝のそこと前腕の、そうそこ。そこを掴んで乗り込め。あとはIS側が合わせてくれる」

「合わせてくれない場合は〜?」

「お前が何かいらん事をした時だけだから安心しろ」

軽口に応じながら金髪ゆるふわ女子の実習を見ていく。

流石にIS学園の生徒だけあって操縦に関しては滞りない。二、三歩歩かせて次の指示を与える。

「よし、慣れたか?…あの誘導灯まで走って、ターンして戻って来い」

「りようかいですー」

気の抜けた返事をして走っていくソフィア。行きは走り、帰りはブーストで帰ってくるよう伝え、異常がないか注視しながら後ろ手で端末を弄る。

(代表候補生の班長とは言うが…つまりはISの持ち逃げ防止の監視員だろうな)

その気になればIS一機二機の暴走程度はISを使わずとも抑え切れるだろうに、難儀な事だ。

ソフィアが折り返しに到達する、端末のタイマー機能を使いラップ計測としてタイムを記録していく。

「よしソフィア!そこからブーストで円花にぶつからないように戻って来い!」

「はーい!行きますよおー!」

「円花!」

「人使いが荒いんですから…!」

ISに乗っていないければ聞こえないほど小さな声で愚痴を溢しながらもサイレントゼフィルスを展開しているあたり、つくづく聞き分けの良い。練習の時からこのテンションでいてくれたら楽だろうと思うが、ここでは言わないでおこう。

ブーストをかけて円花の元に駆けるソフィアは、正しい目算でブーストをかけ、ひとつ飛びで円花の前方2m地点で着地、勢いを殺しな

がら支えられる形で停止した。

「おとと・・・と。凄いですよソフィーさん！私最初こんなに来ませんでしたよー！」

「ありがとうございますー」

嘘つけ、初乗り2時間後で俺よりも成長した奴だろうがお前は。

「ああく！ズルい！」「私もされたい！」

「・・・あ？」

にわかに騒ぎ立つ場内。事態を掴もうと周囲を見渡すと、確かの騒ぎが起きる光景があった。

織斑一夏のお姫様抱っこである。

「・・・」

どうもISを片膝を付かせずに待機状態にさせた事で乗り込めなくなり、結果的に抱き上げる形になったようだ。

踏み台にでもなればよかつたろうに。

「」

嫌な予感がする。

「オイ待てソフィー・・・、」

「よいしょー」

「お、ナイス着地です！」

「ツハア~~~~・・・！」

頭を抱えて大きく溜め息を吐く。

静止の命令を言い切る前にISを立たせたまま飛び降りたのだ。

円花め、やってくれる。

期待の視線に応えたのだろうか、生憎とそれには対策がとれるぞ。

「邪魔だ、どけ」

そう言つて2人を退かした後、例の方法で背部のアタッチメントを開き、端末と繋ぐ。

するとISのフレームの簡略的な図が表され、俺は右足を起点にするよう設定し、各関節部を指でなぞっていく。

すると、リヴァイヴは従順に片膝立ちの姿勢をとった。

「んなっ・・・！」



「俺は3年間ISと向き合ってきたんだ。この程度造作もない」

これがラファールを選んだ理由である。日本製のOSでならこうは行かなかつただろう

膝立ちの姿勢で固定されているのを確認してから、周囲に呼びかける。

「そら、さっさと続きをやるぞ。美月、乗れ」

「はーい・・・」

残念そうな表情を浮かべた橘美月をリヴァイヴに乗せた後、俺は誰にも見えないよう上体だけで振り向いて、

「んべ」

円花に向かって舌を出す。

ムカツとした表情を浮かべた円花はあつかんべを返して見せる。

この悪ガキめ。他人を揶揄うんだつたらもう少し頭を回せ。

「わからない事があつたら俺に聞け、お前らよりかは知識がある」

高慢ではあるが、専門校で身につけた知識はおそらく整備科3年生のそれと大差あるまい。

余程のことがなければ大抵の事は解決出来るよう教えられてきたし、解決出来る自信がある。

(円花の思い通りにならなくて申し訳ないが、そうそうオイタはさせられないな)

なぜなら千冬が怖いから。

下手に叱りつけると千冬に変な因縁が出来るかもしれない。千冬の戦闘能力と社会的権力を前にすれば、平均的高校生以下の後ろ盾が無い俺は塵芥にも等しかろう。

流石にそんな人間を敵に回すのは得策ではない、元より無意味に敵を作る事自体趣味ではないのだが。

美月の周回時間を記録し、そのまま話を続ける。

「周回が一通り終わつたら武装展開と収納だ、いいな」

「は、はーい」

15、16の少年少女対して行うべきではない軍事指導。

酷く歪んだ行為に眉を顰めながらも、己が役割を果たし続ける。

・・・・・・・・

そんなこんなで午前中の実習も終わり、俺たち男子3人はピットにまで戻ってきたのだが・・・。

「あゝ・・・疲れた」

「全くだ」

グロッキーな俺と小鳥は2人してため息を吐く。

実習終わりに専用機持ちに任されたのは訓練機の片付けであり、それが原因で俺たちは体力を使い切っていた。

と言うのもISを乗せるカートがまあ重い、その上I専用機S使用禁止ときた、かてて加えて小鳥と俺は『力仕事は男子の仕事』って事で1人で押さなきゃいけなかったし、他の面々よりも遥かに疲れが溜まっている。

まあ女子に力仕事をさせるのは男の名折れだから、当然と言ったらそうなんだけどさ。

「ふ、2人とも大丈夫？」

「ああ・・・うん、何とか」

シャルルはと言うと『シャルル君にそんな事はさせられない！』だそうで、ほぼ全ての作業を班の女子がやっていた。

これが人徳のなせる技なんだろうか。確かに俺もシャルルにはあんまり力仕事させたくないって気持ちはわかる。

小鳥は・・・何のためらいも無くさせそうだ。

「あ、そうだ。2人とも、今日一緒にお昼食べないか？」

「・・・？断りを入れる必要があるのか？それ」

無表情に疑問を投げる小鳥。

確かに小鳥とはこれまでに何回も昼を一緒にしてるから、そのセリフも当然なんだろうけど、今回はシャルルも一緒にいるし、

「筈も一緒なんだ。何か弁当も作ってるらしいし、屋上で食べようってさ」

「ああ・・・なるほど。刹那を連れて来るが構わないな？」

「おう、シャルルは？」

「うん、いいよ。おんなじ専用気持ち同士、親睦を深めるのも良いと思う」

シャルルも快く受け入れてくれた。うん、じゃあ凜やセシリアも呼ぶか。

結論が見えた小鳥は更衣室に向かって歩き始める。

「……決まりだな、ならさっさと支度を整えて刹那を迎えに行く  
としよう」

「そうだな、今朝の分で考えたら大変そうだし急ぐか」

「あ、じゃあ先に行つててくれないかな？リヴァイヴのチェックをしておきたいんだ」

「ん？いやそれくらいなら待つて。刹那を迎えに行くなら小鳥一人でも出来るし」

「いいって良いって！時間かかるかもしれないし！待たせるのも申し訳ないから！」

「平気だって、待つのは慣れてるしさ」

「僕が平気じゃないんだって！」

と、そこまで言い合った所で、

「人の好意は素直に受け取った方が身の為だぞバカ」

「いたたたたた……！」

例によって例のごとく小鳥が耳をつまみ上げ更衣室の方へ引つ張る。

「先に戻る……言つとくが、朝の時よりも多い人数の女子がお前を追っかけてくるだろうから、早めに来いよ」

「あ、うん」

「あ、ちよ待て！耳！耳痛い！」

「どなどなどーなーどーなー、子牛をのーせーてー」

「出荷されるの俺!?!どこに!?!誰に!?!」

シャルルに見守られながら、俺は更衣室に連れていかれるのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「いたたたた・・・ちぎれてない？」

「だとしたらお前の顔面が血濡れちぬになっている、心配すんな」

「心ないなあ・・・」

耳を擦りながらそんなことを話しつつ、制服へと着替えていく。

小鳥は相変わらず素っ気ない言い草で容赦の無い言葉を投げ掛けてくるが、それはまあ確かに俺がシャルルに食いつきすぎたからなのだろう。

「それにしたって耳引つ張るのは酷くないか？」

「お前がセクハラを仕掛けるのが悪い、同性でもセクハラは成立するぞ？」

「そ、そうなのか？裸の付き合いくらい普通だと思っけどな」

「お前の普通を他人に押し付けんな・・・俺達がそうであるように、シャルルにも都合がある。それくらい察しろ、日本人だろ」

「む、それはちよつとヤな言い方だな」

「変形だがお前のやってる事と同じだ馬鹿。これを押し付けと言うんだ」

「う・・・」

全くもってその通りだった。

それと同時に自分がやっていた事が嫌がらせになりかねないと言う事に気づいて不安を覚えざるを得ない。

「ど、どうしよう。俺シャルルに嫌われる」

「——知るか。そう思うなら勝手にしてろ」

うう・・・小鳥の視線が冷たい・・・！知恵を借りたいつてのに・・・

！

・・・とりあえず、昼飯前に謝っておこう・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえ刹那くん、お昼の予定ある？」

「？」

3つ目の授業の後、休み時間入った直後にそんな質問が飛んできた。

「あ、私も気になる！暇なら一緒にしようよ」

「私も私も！伸び盛りなんだし、1、2品奢おごっちゃうよ？」

「良いね！刹那くん可愛いから私からもサービスするよ！」

「親睦深めようよ！弁当ある？」

オレはクラス——3組の皆みなよりも3〜5歳ほど年下で、それ以上にオレがクラス唯一の男子という事もあってか、皆オレに対して過剰とも思える好奇心を秘めた目をしていた。

休み時間の度にこう言ったやりとりをしていたオレにとってこれは鬱陶うっとうしいとしか言いようがない。

その上これほど生肌を晒した女子は風紀として如何どうなのだろうか。

しかし、何も考えずに拒否して良い物だろうか。オドリやイチ力が言うにはオレの言葉は語気が強いらしい、優しい言葉が良いのなら、努力してみよう。

立ち上がって告げる。

「・・・オドリが待っている。後にしろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬、教室内の誰もが沈黙した。

その理由を掴めないまま、しかし静止する者は誰もいない。オレは固まって動かない女子の間を通り抜け教室の外へと向かう。

一度机の横から布くるに包まれた弁当箱を取り出す。昨日の時点でオレが登校するのを知っていたオドリが、前もって持って行けと渡してくれた物だ。

女子の視線を背に教室の扉を開けると、そこにはオレの同居人のオドリが居た。

「・・・オドリ」

「よう、本当は学食を案内してやるつもりだったんだが、予定変更だ」「何かあったのか？」

「ああ、まあ誘われたってだけの話だ、場所を変えて昼食を男子同士一緒にしないかって一夏から」

「・・・了解した」

小鳥はついて来いと手を振って先に歩き出す。  
その背中についていこうとした直後、

「・・・？」

「どうした刹那」

「何か、地鳴りのような音がしている」

どどどど、と地響きのような音を感じそれと伝えると、オドリが途端に渋い顔をした。

それは忌々しげに歪み、本当に嫌悪しているような顔だった。

「刹那、着いて来い！」

「どうした！」

唐突とつとつに駆け出したオドリを追ってオレも走り出す。

逃げ出すようなその行動に疑念を抱き、走りながらも問いかける。

「どうして走っている!?!」

「女子共が追っかけてくんだよ！新生生の男子を珍しがってな！」

自暴自棄な叫びを発しながら、オドリとオレは道ゆく女子の間を縫ぬうように走り抜ける。

「Fuck、本日2度目だよ畜生」

・・・オドリはオレに口調が強いと言うが、それは彼にも言えた事なのではないのだろうか。

## O and lui (彼と彼)

「……だ、大丈夫か小鳥、刹那」

「だ……大丈夫じゃない」

「ああ……大変だった……」

ぜひぜひと息を切らせながら一夏からの問いに応える。

本日2度目の逃走は午前中よりも激しさを増し、撒き切るまで5分近くかけ、その間走り通しだったせいで息が整わない。

一方の刹那の回復は比較的早く、深い呼吸からは抜け出していた。

ここは学園の屋上。庭園のように花壇やテーブルが整備され、晴れの陽気もあって開放感のあるこの場所で昼飯を食べようと言う事になつていた。

普通学校施設の屋上は事故や事件、自殺の防止として教師の同伴無しでは閉鎖されている物だが、此処ではその限りではなく、制限無く解放されていた。

そう言った固定概念の結果か屋上に寄り付く者は殆ど居らず、一度躲かわしてしまえば追手の心配は無かった。

「……」

「おわつ、どうした急にIS出して?」

しかし念には念、と言う物。銀影ぎんえいを呼び出して階段に繋がる扉を塞ぐ。

「乱入者防止だ。お前らも横入りされるのは御免だろう?」

腰掛けに座るセシリア、鈴音りんいん、箒ほうきに問いかける。

3人は『お前も邪魔だ』と言いたげな顔をしているが、意に介さない方が賢明だろう。

『私は気にした方が良くないんじゃないの?』

(分かった、感謝してるよ)

『もうちよつとちゃんと形にしてほしいなあ』

(面倒くせえなお前……)

それにISが何を欲しがるかなど知りえない、整備か?

そう言う事なら霧幻の取り付けも急いだ方が良いかも知れない。

「あ、その子が例の？」

「ん、ああ。刹那、」

「・・・刹那・F・聖永だ、よろしく」

シャルルに対し自己紹介を済ませる刹那。

ちなみに、刹那の歳は学園中で円花に継いで低く、10〜13歳の幼い印象にシャルルと女子達は目を丸くしていた。

「え、えーと・・・。どうしてこの学校に？」

「それは——」

「それは昼飯食いながらも出来るだろ。俺も一夏に聞きたいことがある、席に着こう」

言つて、一夏とシャルルの間を割つて進み半円の椅子とは逆の、椅子のある方に惣菜パン数個が入った袋を置く。

女子連中の視線が方々から刺さるが、無視して着席した俺は、一夏が席に着いたのを確認して飯を広げる。

今日は本来刹那に学食の案内をするために時間を取らせないよう、売店で売られている弁当を調達していたのだが、図らずもピクニックのような形になってしまった。

ちなみに刹那に渡した学食弁当は、常温放置しても3日は持つ優れ物で、更に保存料なしと言う点は技術の発展の産物と言える。

「ん・・・じゃあ俺らも座るか」

「そうだね」

「ああつ、では一夏さんこちらの方に！」

「え？良いのか？窓際の席だぞ？」

「風通しが良すぎると返って身体が冷える。さっさと座れ」

「ふーん。じゃ、シャルルも座ろうぜ」

「うん」

ついて来た3人が席に着こうとすると、女子連中が一夏を誘導して半円のベンチの中央に座らせる。シャルルが一夏の隣に座った瞬間に鈴音の目つきが鋭くなるつたのは間違いないだろう。

流石に後が怖いので刹那の裾を引っ張り、隣の椅子に座らせる。



「えーと、箸。弁当、作ってくれたんだよな」

「あ、ああ。これだ」

一夏の振りに応え、箸が風呂敷に包まれた弁当箱を机に置いた。包みがある故中身は分からないが、弁当箱としては平均的なサイズ、あるいはそれより少し大きめか。

そんな包みを開き、箸作の弁当が顔を見せた。

「おおー！旨そうだな」

「たまたま今日は早く目が覚めたからな、気まぐれに作ってやった」

白米に鮭の塩焼き、ほうれん草の胡麻和え、卵焼きに唐揚げ、蒟蒻と牛蒡の金平と、素朴だが、王道の唐揚げ弁当である。

忘れがちだがIS学園は曲がりなりにも教育施設。あまりにも浮世離れしているとやえど、流石に家庭科室は存在し、平日頃から生徒に向けて解放されている。

一応寮の部屋にも簡易的なキッチンなどはあるが調理器具類は無い、調理室で作って来たのだろう、健気な事だ。

そんな乙女の献身の意図する所が一夏に伝わるか、となると、それは自動拳銃で回転拳銃より早い早撃ちをするほどに難度が高い。

・・・実際一夏の挙動に変わりが無い辺り、伝わってなさそうなのは見て取れた。

「あのっ、一夏さん！私もバスケット、作ってきましたのよ」

「へえ？奇遇ね、私も今日はたまたま早く起きたから作ってきたのよ」

「お、おう。ありがとな」

そして置かれる編み籠と茶色いなが入っている小さめのプラタッパー。

三人がたまたま朝早くに目覚め、気紛れに弁当を作った、など途轍もない偶然も有ったものである。

偶然も三つ重なれば必然とも言うが、これを前にしても一夏は『セシリアの料理かぁ・・・』と苦笑いしているのみである。

確かに料理を絵画か何かと勘違いしてるセシリアの料理の味が絶望的なのは同意するが、それにしても鈍すぎるだろう。

「ほら一夏、前に食べたいって言ってたでしょ。酢豚、作ってきてやつ

「ただだから感謝しなさい」

「ちよ、投げるなバカ!」

一方の鈴音と言えば、乱雑にタッパーを投げ渡す。中身は酢豚のよ  
うだ、毎日味噌汁をくのりベンジだろうか。

自分の分を別途で買っているセシリアと違い、自分の分まで作って  
来ている辺り中華料理屋の娘と言った所か。

しかし集まった料理を見てみると和の弁当に中華の酢豚、西洋のバ  
スケット（恐らく中身はサンドイッチ）と量も内容も支離滅裂、一夏  
一人の腹に収まるかどうか、まあそうでなかった場合は明日の弁当に  
でもなるだろう。

「みんな、優しいんだね」

「ああ・・・俺の手に余らなければ優しいで済んだんだけどなあ・・・」

そう言いながらバスケットを開く一夏、どうやら中身は玉子サンド  
イッチのよ・・・う？

風下の俺に向かって玉子サンドに似つかわしくないニオイが飛ん  
できた。

「セシリア・・・お前そのサンドイッチに何入れた？滅多矢鱈に甘い匂  
いがするんだが」

「あら、気付きましたの」

「・・・確かに、なんか甘ったるい匂いするな」

「はい♪隠し味と香り付け、見た目の調整にバニラエッセンスを少々」  
.....

金髪の発言の前に、オドリが激怒した。

「てんメエ巫山戯てんのか馬鹿がア!?どこの飯屋にバニラエッセンス  
入りの玉子サンドイッチがあるってんだよ!イギリス世界で一番郷土料理が不味い国の代表に  
相応し過ぎるわ○○○○!」

ロケット弾が爆発する様な勢いで。

「は・・・え・・・?」

「まず普通に考えれば玉子サンドの何処にもバニラの香りはねえだ  
ろオが阿呆が!イギリスの舌に味蕾は付いてねえのか!?それと  
も脳味噌の方がオカシイのか!」

「っ、流石にそれは聞き捨てなりませんわ！私個人ならともかく、祖国の事まで悪く言われる筋合いはありませんことよ！」

そこまで言われて理解が追いついたのか、彼女も反論を始めた。

「大体、食べた事も無いのに美味しいかどうかなんてわかる訳もありませんわ！何事も試してみなければ始まりません！」

「じゃあ味見の一つくらいしたのか!?!」

「してませんわ！」

「言い切んな馬鹿！」

「お、おい小鳥、一旦落ち着け」

「オメーは黙ってる馬鹿2号！大体最初で味見する様誘導できなかつたからこうなってるんだろが！」

オドリの言葉一つで項垂れるイチカ。鎧袖一触がいのしゆういつしよく、と言うモノだらうか。

「大体な、最近初めて料理を作ったヤツの料理がどうして美味しいと言いつ切れる!?!」

「教科書通りに出来ているんですもの！美味しい料理の教科書なんですから最終的に完璧になれば美味しいに決まっていますでしょう！」

「教科書のどこに『バニラエッセンスを少々』なんて文言が書いてあった!?!」

「だって見た目が合わないんですもの！調整は必要ですわ！」

「その調整の結果を確かめろよアホンダラ！」

「人様に出す料理に口を着けるなど恥知らずにも程がありますわ！」

「人様に喰わすからこそだろうが間抜けがッ！」

その間にもオドリと金髪の口論は激化の一途いっとうを辿り、遂には実力行使にまで躍り出る。

バスケットの中からそれぞれサンドイツチを鷺掴みにした。

「罎らちが開かない・・・！こうなったら・・・！」

「いいでしょう、そこまで仰るのでしたら特別ですわよ」

「喰らいやがれエッ！」

「くらないさいっ！」

そうしてテレフォンパンチの構えを取った二人は、互いの口を標的

にして凶器を押し込んだ。

「……………」

「ふ、ふたりとも、大丈夫?」

互いの口にサンドイッチを食い込ませたまま行動を停止させた二人に金髪の男が声をかけた直後。

「きゆう」

「うご、あ」

二人は元の席について真白な灰のように色を失った。

「お、小鳥い!」

「やめておけ。セシリアの飯を食らったのだ、暫くは意識を取り戻さないだろう」

「え!?!失神してるのこれ!?!」

驚愕の事態に金髪の男——シャルルと言われていたな——も声を上げている。

「起こすか?」

「いーわよ別に、でもまあ目え覚ましたらまた口論が起きるから、めんどくさいと思うけど?」

「……………なるほど」

先刻な怒号を鑑みれば、小柄な女子の発言は的を射た物だった。

「んで?一夏?このちびっこは何?」

「あ、ああ。小鳥の同室の」

「刹那・F・聖永だ……イチカやオドリと同じ。ISが使える男だ」

「そりや見りや解るわよ」

「そりやそうだけどさ……」

「いや、オレも話さなければならぬ」

イチカの同情は嬉しいが、それでも小柄な女子の指摘は的確な物であり、それ以上を説明しなければならぬのは明白だった。

「ただ……オレはそこまで口が回るわけじゃない、そちらから質問してほしい」

「ふうーん、そりや良い心がけね。じゃあ質問。いつISに乗れるってわかったの?」

「3月17日」

「・・・？貴様のニュースは聞いた事ないぞ？」

「学園が規制を敷いたのだろう」

「そう、じゃあなんで今の今まで登校してなかったのかしら？」

「オレの調査が一通り無駄になったからだ」

「ふむ・・・」

「——いや鈴<sup>りん</sup>、その説明で納得するのか？」

「するわけないでしょ、どうやって納得しろってんのよ」

小柄な女子——リンと呼ばれていたな——がイチカ言葉を切つて捨てる。

・・・確かに、彼女の言うように、オレが今話した情報だけで必要な情報が得られるとは思わない。

むしろ何か秘密があると思う方が自然だろう。

「え、えーと。じゃあ刹那くん、君はどこから来たのかな。中東周辺だよね？」

シャルルが質問を投げる。

オドリも前に似たような質問をしていたな。

「わからない。オドリもそれについて調べていてくれたが、覚えていないし、何も分かっていない」

「・・・えーと、刹那。言っても大丈夫か？」

「？何をだ」

イチカが身を乗り出し、机越しに耳打ちする。

「記憶喪失の事だよ」

「？皆知らないのか」

「ああうん・・・」

「そうか、チフユは皆に伝えると言っていたが」

「たぶん先生方にしか伝わってないんじゃないか？」  
「成る程」

「俺から言うぜ？」

「ああ、任せる」

そうして席に戻ったイチカは、神妙な面持ちで語った。

「実は・・・刹那は記憶喪失なんだ。小鳥から聞いた話じゃ、3月17日にISをつけた状態で学園に墜落してきたらしい。その

機体も調べてるけど、分からないことが分かっただけ。だそうだ」

「ふうん・・・」

「成る程・・・それならば説明にも納得できる」

「・・・」

「——どうした」

「え？あ、僕？」

「ああ、何か考えているようだったからな」

金髪の男は見当がついていなかったようだが、すぐにその答えを出す。

「えっと、その年頃なら・・・ううん、僕と同じ事情じゃないんだなって思ってただけ」

「・・・そうか」

どこか言い淀よどんだ金髪の男だが、すぐに言い直す。

「ああ・・・えと、刹那について他に質問はあるか？」

「——無いわ、聞いても知らぬ存ぜぬなんですよ？聞いても意味無いわ」

「・・・そうだな、思い出せんのなら聞く必要はあるまい。これから思い出せばいいんだ」

「——じゃ、俺から皆に質問だ」

オレの右から手が伸びた。

・・・オドリだ。

「お、小鳥、起きたのか」

「今しがた・・・で、気を失ってた間にどこまで行ってたかは知らんが・・・自己紹介したか？」

「え・・・うん刹那の方は」

「逆だ、刹那に、だ」

「うん？」

「俺とお前は前に紹介してるが、刹那は3組だ、全員の名前知らんぞ」

「え」

「ああ、どう呼べば良いのか分からなかった」

そんなオドリとイチカの話の隙を突いて、金髪の男が話を始めた。  
「えっと、じゃあ僕から。僕の名前はシャルル・デュノア。君や一夏と同じ、ISが使える男子で、フランスからきたんだ、これからよろしくね」

「ああ、宜しく頼む」

シャルル・デュノア、彼から差し出された手を握り返し、返答する。  
オドリやイチカとはまるで違う。細く、繊細な印象を与える指の感触。同じ生き物と思えない感触に困惑するが、他者からの話は続く。

ポニーテールの女子から、

「私の名前は篠ノ之箒、一夏とは小学生の頃からの縁がある。聞いてわかると思うが日本人だ、宜しく頼む」

「シノノホウキ、か。こちらとも宜しく」

やや古風な印象を覚える言い回しと、それが故に非常に堅い雰囲気  
が特徴のシノノホウキに続き、小柄な女子が自己紹介をした。

「あたしは凰鈴音、故郷は中国、一夏とは小学生の頃からの腐れ縁よ」

「そうか・・・イチカは顔が広いんだ・・・宜しく」

「ん、宜しく」

ファン・リンインはそう言つて快活そうな笑顔を浮かべた。こう言う女性も世の中にはいるのだな。

.....

「.....それで、その金髪は何者なんだ」

視界の端で、恐らくは手料理の味のシヨックに耐えきれず、灰になったまま小さく「そんな」  
「私はんぺきに・・・」と呟いている金髪を見遣る。

「ああ・・・ほらせシリア、アンタのことお呼びよ」

「あう・・・私・・・わたくしはあ・・・」

「ダメっぽいわね・・・」

ファン・リンインが金髪の頬を突くが、胡乱な表情を浮かべたままの彼女は、変わらず絶望した台詞を呟き続けている。

そんな彼女に代わりファン・リンインが紹介した。

「ゴイツはセシリア・オルコット、イギリスの元貴族らしいわ。あたしと同じで国家代表候補生よ」

「——そうか」

全員の自己紹介が終わったところで、イチカが口を開いた。

「じゃあ、みんなの自己紹介も終わったけど、シャルル、何かもうちよつと言つときたい事あるか?」

「ううん、嫌いな物はあんまり無いから、他の事はおいおいね。ほら、これ以上時間使つてたら午後にも影響出るから、ご飯食べよ?」

「そうだな、じゃあ」

言つて、イチカが両手の掌を顔の前で合わせた。

「?イチカ、何をしてるんだ?」

「ん? 『いただきます』をしようとしてたんだが・・・あ、もしかしてお祈りとかある?」

「いや、食前で宗教的儀礼をしていた覚えは無い」

「中東圏は十字教みたいに長いお祈りはしないよ、えつと、でもお祈りの言葉辺りはあつた筈だよね」

「覚えがないなら、する必要も無いだろう」

シャルルが説明してくれたが、オレに覚えが無い以上、何をしていたのかは考えない方が良いだろう。

「オドリが言っていたが、日本には『郷にいらば郷に従え』と言う諺ことわざがあるらしいな。ならオレもその『イタダキマス』をした方が良いか?」  
「あー、好きにして良いぞ。結局の所『頂きます』も言つてしまえば日本流のお祈りだ。過去を気にするならしなくても良い。それは個人の自由で保護される範囲だ」

「成程」

オドリのフォローを受け、自分の自由を行使しよう。

両手を合わせる。

「・・・じゃ、いただきます」

「」「いただきます」」

一夏の音頭おんどに合わせて、全員が昼食を食べ始めた。



……

「……そうだ、一夏。一つ聞いても良いか？」

唐揚げ弁当と酢豚に舌鼓したつづみを打っていると、小鳥が話をかけてきた。セシリアのサンドイッチの味を誤魔化すように惣菜パンを口の中に突っ込んで食べてたせいで、誰よりも早く食い終わっていて、その手にはパンの包み紙とが無造作に握られている。

「あー、なんか俺に聞きたいことがあるって言ってたよな。なんだ？」  
「千冬先生とラウラ・ボーデヴィツヒ、ひいてはドイツ軍との関係について、だ」

なんとも軽い口調で小鳥はそんな事を聞いてきた。

多分、ラウラと千冬姉との関係から弱みの一つくらい握っていたい、と言う事なんだろう。

「うーん……先に言つとくけど、そんなに俺も千冬姉とラウラの関係を知ってるわけじゃないんだ。千冬姉がドイツ軍で教育官やってた、と言うのも最近聞いたばかりだし」

「……それはネグレ……情が無すぎじゃないか」

「あはは……一応その時期にもちゃんど給料が振り込まれてたから。それなりに気にしてくれたとは思う」

「ふうーん、それで一時期千冬さん家にいないことが多かったんだ」  
「ああそうそう、俺も円花も『海外で仕事してくる』としか聞かされてなかったから面食らったよ」

その分いつ家に帰ってくるか分からない千冬姉に俺も円花も鈴もどぎまぎしてたんだけど。

しっかし少しぐらい教えてくれても良いんじゃないかなホント、そしたらこっちから荷物の一つや二つくらい送れたのに。

「ふむ……一夏、なんで千冬がドイツ軍で働いたか、理由は解るか？」  
「やっぱ聞くよなあ……」

目ざとい小鳥の事だから、きつと聞いてくると思ったんだよなあ。

正直言つて、あの事は俺にとってトラウマだからあまり話したくない。

「・・・俺もよくわかってないから、話半分で聞いてくれるか？」

「——構わん、話せ」

「千冬姉が第二回『モンド・グロツソ』を決勝戦で棄権したの、理由はわかるか？」

「いや知らん」

「だよな、話は多分そこまでさかのぼるんだけど——」

あの日、日本代表の親族として優待券をもらった俺は謎の組織に誘拐ゆうかいされた。

謎の組織、なんて番組の中の悪党みたいな響きだけど、でもそうとしか言いようがない、少なくとも俺の中では呼べない連中が俺を会場から連れ去ったんだ。

思い出したくもない、けど忘れることもできない記憶だ。千冬姉はそれを聞きつけて、決勝戦を放り投げてまで俺を助けにきてくれたんだ。

同じ事を言うけど、あの景色は絶対に忘れないと思う。暗闇の倉庫の中、突き破った天井から降り立つ、日の光を浴びる千冬姉の姿を。

「——で、誘拐された俺の居所を掴んだのがドイツ軍で、それがきつかけで日本との契約を切られた千冬姉を雇った、って事らしい」

まあ多分俺が誘拐されなかったら2回連続『ブリュンヒルデ』の座をとってただろうからラウラは俺を恨んでるんだろうな。

「・・・お前がシスコンな理由がわかったってただけだな」

「う、まあそれはそうだけど・・・」

「って言うかそんな事があったのになんで今まであたしに黙ってたのよ、今初めて聞いたわよその話」

「いやだって千冬姉から話すなって・・・」

「じゃあ話してんじやねえよバカ・・・」

しまった、そりやそうだ。千冬姉が警戒すると言ったらそりや普通に危ないヤツじゃないか。

小鳥も鈴も頭を抱えている。

「す、すまん。みんななら大丈夫だと思って・・・えっと、この事は口外無用って事で・・・」

「当たり前だ、まったくこの馬鹿者は……」

箒の遠慮のない言葉が胸を貫く、セシリアの事といい、今日はこんなばつかな。こんな困難……なんちゃって。

「一夏」

「なんかくだらない事考えてるでしょあんだ」

「い、いやそんな事ないですよ?」

「なんだその口調」

「亜熱帯では普通でございますよ」

「もう暫くの間黙ってる」

「……すいません」

ちくしょう幼馴染にボケで誤魔化したら友達から痛烈なツツコミが返ってきやがった。俺はサンドバッグじゃないんだぞ。

こうなったら話題を変えるしか……!

「そ、そうだ。男子もこんなに増えたんだし、もしかしたら大浴場の調整もしてくれるかもな。あー楽しみ楽しみ」

「そ、そう?一夏がよかったら良い事だね……?」

あれ、シャルルくん言葉に詰まってるけどそんなに嬉しくない?

「嬉しいのか、そうか」

刹那くん?なんでそんな他人事なの?自室の風呂って湯船狭いよね?

「すまん、俺シャワー派だ」

「おおい!銭湯、大浴場は日本人の心だろ!」

「オレは日本人ではない事は確かだ」

「僕フランス人だし」

「人種差別はんたーい」

くそう、銭湯の入り方の作法教えてやんないかな!

C a c h ・ s t a y h i d d e n (秘密 未だ  
秘密につき) 1 / 2

転入生が2名、公表された男子生徒1名が入ってきたその日の放課後。

「じゃ、宜しく」

「いや、何が？」

「何って、円花の練習相手」

俺、一夏、シャルルの男子3名と円花1名がピットに揃っていた。

議題は円花のISの特訓について、因みに一夏には『放課後、ピットで待っていてほしい』と伝えただけである。

「仕方ないだろ、円花の練習は引き受けたが、学年別トーナメントまで時間が無い。これから追加ユニット用の追加ユニットを調整しないといけないんだ。銀影は使えない、麻耶先生に言った期日も過ぎてるし、本当に急いでるんだよ、これでも」

「・・・わかったよ、約束は守らなきゃだもんな」

「恩にきる。円花、メニューは頭に入ってるな？」

「あ、はい大丈夫です」

普段なら『はいはいわかってますよ、舐めないで下さい』位は言ってくるが、流石にガードが堅いな。

正直、こう言う仮面の被り方はその後の自己形成に良い影響を与えろとは思えない。いつかコイツが痛い目に遭わないか心配な物だ。

(——ま、そう言うのは老婆心と言うものか)

深く突っ込んで俺の理想を押し付けているだけだ。すり合わせが済むまでは付き合ってた方が最善か。

「んじゃそう言う事で宜しく」

自作端末をひらひらと振って、背を向けてピットを去る。

・・・この際、なんの見返りも無しに依頼を引き受けてくれる友情に感謝すべきなんだろうか、それともその愚かさを嗤うべきだろうか、ピットから繋がるドアを閉じ、誰にも聞かれていないのを確認してか

ら眩く。

「眩しいな」

分からないまま、どちらをするでもなく足だけが先に進んでいた。

.....

「じゃ、着替えるとするか」

「あ、うん・・・どっち使う?」

両手で左右の更衣室を指し示す。

IS 学園は元来は女性しかいないから、現在進行形で男女どっちが使うかと言うのも無くて、なので早い者勝ちか雰囲気決めていいる所がある。

「んーまあこっちなな、どっちでも変わらないと思うけど」

一夏兄いちかにいはそう言って小鳥さんが出て行った方に指をさした。

まあ、確かにどっちにせよ機能的な変わりはないしそれでいっか。

「じゃ、着替えるか」

「そうだね」

「あ、ちょっと待ってもらっていいですか?」

更衣室に向かおうとする二人の背中に手をあげて引き留める。

何かと思つて振り返つたシャルルさんの方まで歩き、手を差し出す。

「自己紹介、まだでしたよね。織斑先生、一夏兄の妹の織斑円花です。

兄ともどもクラスメイトとしてこれからよろしくお願いします」

「あ、ありがとね。僕はシャルル・デュノア。よろしく」

にっこりと形のいい半月のような口元で微笑み返す彼は、差し出した手を取り、しっかりと握った。

(すごい綺麗な顔・・・人形みたい)

それだけじゃない、私の手を握る手指てゆびの細さ、滑らかさはまるで女子と握手しているみたいだ。

「おお・・・すべすべですね・・・うらやましいです」

「あはは・・・そうかな?ハンドクリームとかはよく使うけど、それか

な」

「へえ、一夏兄は余りそう言うの気にしない人だから、良ければ教えてあげて下さい」

「いや良いってホントに……」

そんな軽い言葉を交わし、私と一夏兄達は別々の更衣室に向かった。

……

「~~~~♪」

「……なんかご機嫌だなシャルル」

「ふえっ!?そ、そうかな」

更衣室でシャルルと背中合わせで着替えながら話しかける。

まだ出会ってから1日も経っていないけど、鼻歌を歌っているのが珍しかったからそんなことを聞いてみたのだ。

「え〜つと、一夏から見えてさ、僕って女の子っぽい?」

「……いやそんな事ないぞ!俺はシャルルの事ちゃんと男だっと思っ  
ているし」

本当は時々シャルルの行動にドキツとすることがあるけど、それでシャルルが傷つくのではないかと思っつて嘘をつくのが、シャルルはそんな俺の心理を見透かしているかのように笑って話す。

「ありがとう。……でも気を使わなくても良いよ。言われなれてるし、

僕も自分の事『男の子らしくないな』て思うことあるからさ」

「……いや、思わない。シャルルが傷つくならなおさら」

「……ありがとう」

心の底から驚いたような、複雑な心情を表した声音で呟くシャルルは、気を取り直して話を続けた。

「まあ、だからね。そう言う事で褒められたりするのには珍しいから、ちよつと嬉しかっただけ」

その声から、シャルルが今どういう顔をしているのか、何となく分かった気がする。

「シャルル、目を瞑つむってるから、そっち向いて良いか」

「え、あ、ちよ、ちよつと待ってね」

そう言つて、シャルルの方から細かな布の擦れる音が暫しばくしてからシャルルの声がした。

「え、と・・・いいよ」

「おう、じゃあ、向くぞ」

目を閉じて、何も見ないままに後ろに向く。

多分今日の前にはシャルルがいるんだろう、どんな顔をしてるのか、想像がつかないけれど、それでもシャルルに向けて頭を下げた。

「ごめん！さつき、そんな事情があったのに無理矢理一緒に着替えようとしてたの、無神経だった」

小鳥に言われてからずっと胸にチクチクしたものが突つかかっていた。ずっと謝らなきゃと思つていた。

ここを逃したら、まともな場面が用意されているとは思えなかった。

「い、いいよぜんぜんっ！僕みたいなのが珍しいだけだし！一夏が謝る筋合いなんてどこにも無いよ、むしろ僕の方が・・・！」

「いやーそれは無い。悪い事された奴がどうして縮こまんきやいけないんだよ。シャルルが嫌なら嫌つて言つて良いんだからな」

目を瞑つたまま頭を上げて笑いかける。

そういえば、鈴を庇かばつて大喧嘩した時。千冬姉もこんなこと言つてたっけ。

「・・・ごめんね、そんなに気を使つてもらつたら、そんなことしか言えないよ」

「そう言う時は『ありがとう』って言うんだぜ、そしたら俺も嬉しいからさ」

「・・・そうだね、今度からはそうするよ」

「おう」

そんな会話の後、俺たちはまた背中合わせに着替え始めた。

「・・・ごめんね」

言葉は届くこともなく消えていくだけだった。

.....

IS学園第2アリーナから整備課2年生の共用格納庫ハンガーに向かう道、曇り空を写す然程大きくもない窓、硬い足音の響く道の上で、俺はラウラ・ヴォーデヴィツヒと遭遇そうぐうした。

「……いや、遭遇した、と言うよりすれ違い損ねた。と言うべきだろうか。」

放課後とは言えまだ部活もある時間帯だ。人のほとんどが外にいる中、人通りの少ない——少なくとも俺とラウラ以外見当たらない道の上ですれ違う事など当然のように可能だっただろう。

「よう」

そんな言葉が口をつけて出たのは、あるいは考え事をしていて会釈えしゃくする癖くせを抑えられなかったのだろう。

しまった、と思ってももう遅い。俺から話しかけられると思っていなかったラウラは、一瞬だけ目を見開き。

「――」

すれ違おうとした。

いや、そこで終わってしまえば万事ばんじ何事も無く終わらせられたのだろうが、横並びになった瞬間に俺は声をかけてしまっていた。

「無視するとは失礼な奴だな、一夏だつて会釈の一つくらいできるぞ」  
「……短絡たんらく的てきと言うのは俺自身が一番理解している。しかしまあ突発的な感情とは御しきれない物だ。」

後悔先にも役にも立たず。そんな訳で安い挑発を受けたラウラは足を止めて睨ねめあげた。

氷のような、しかし炎の揺ゆめきを灯した瞳が、その怒りの大きさを示す。

「……そんなに一夏が嫌いか？」

「……貴様には関係無い」

「一応友人だからな。味方する義務がある」

守り切る義務は無いがね、と戯おどけて見せる。



しかし、いや案あんの定じようと言うべきか、ラウラの瞳はより強い怒りを輝かせた。

「——下衆が」

「どうとでも。お前の勝手な逆恨さかうらみの復讐ふくしゆうに付き合うのも馬鹿馬鹿ばかばかしいんでな」

「——貴様ツ！」

「おおこわいこわい。——そう言う所は年相応なんだな」

両手を挙げて降参の意を示すと、踏み込んだ足がそこで止まる。

「優秀だな、無抵抗の人間を攻撃しないように教育されてるみたいで何よりだ・・・千冬先生の賜物だな」

「・・・ああ、貴様のような屑くずを殺すための技術だ」

「そりや何よりだ、ドイツの未来も明るかろう」

ラウラの腕前いかほどが如何程かは俺の知る所ではない、しかし軍属の人間だ。その上でこのタイピングでの転入生となれば、相応の手練てだれなのは間違いあるまい。これ以上煽あおった所で痛い目を見るだけだろう事は容易に想像がついた。

彼女の横を通り過ぎながら、背後の先に立つ彼女に告げる。

「最後に忠告だ。今のお前のままでは、軍人としてのお前と、個人としてのラウラ・ヴォーデヴィツヒ。そのどちらか、あるいはその両方で一夏に負けるぞ」

「・・・世迷言を、私はあの男を否定する為にここに居る」

「そうかい、結構な事だ」

鼻で笑って歩き去る。

彼女の足音の小ささが彼女自身の存在に比例しているようで、酷ひどく滑稽こっけいに思えた。

・・・

「すまん、待たせたなせ、つ、な・・・何してんだ」

整備用の格納庫の扉を開けたオドリがそんな声を上げた。それもそうだろう。

「やーん刹那くんお人形さんみた〜い！」

「中東系つてがっしりしてるイメージあつたけど、こんな可愛い子いるんだー!？」

「あ〜。オドリンだ〜」

「お化粧してみない!? きつともつと可愛くなるわよ！」

「良いねっ！」

整備科の面々に囲まれ身体全体を弄られている光景を目にすれば、オレも似たような事を言い出したに違いない。

オドリがこの格納庫にオレを連れてきて戻ってくるまでの間、今と対して変わらない調子で身体を触られ顔を褒められ質問攻めに遭っていた。

そんな中で動けずにいると、オドリが一切の無駄無く女子達を散らしていく。

「どいた退いた、それ以上刹那にお触りしたいなら俺の仕事を手伝ってからにしてもらおうぞー」

「え! 手伝ったら良いの!？」

「もちろん」

「待てオドリ」

唐突な身売りに驚きを隠せない。

オレがここに居るのは、整備科に匿ってもらう事で集まる注目の目を多少なりとも減らすためではなかったのか。

そのための交渉の引き換えに、オレがオドリの整備を手伝うと言う事ではなかったのか。

批判の目を受けたオドリは、歓喜の声を上げる女子を見ながら答える。

「すまん、人足が足りない以上。こうなるのは必然だった」

「貴様、まさか初めからそのつもりで・・・!」

「半分は、まあ悪く思うな。逃走の補助くらいはしてやる」

「よおーっし、みんな頑張るぞー!」

「「おお〜!」」

「早めに終わらせて刹那君を可愛くするぞー!」

「「おおーッ！」」

「これほど士気の高まっている人間相手に何ができるか疑問だ。

「やあくオドリンお疲れ様〜」

「ああ、本音か。例のISか？」

「うーうん、今日はお嬢様の方」

「お嬢様？」

首を傾げたオドリにノホトケホンネがあまる袖に隠れる指をさして応える。

腕の方向の先には、女子達の輪の外でディスプレイを見ている髪留めと眼鏡の女子がいた。

ネクタイの青色から1年であることがわかる眼鏡は、周囲には興味が無いらしく。一人忙しくなくキーボードを叩き続けている。

「・・・もしかして楯無の妹か？」

「おお〜！凄いなオドリン人の顔のことあんまり覚えて無さそうなのに〜」

「いや、楯無の方はいろいろあつて忘れる事自体困難極まりないからな・・・」

遠い目をして頭を掻くオドリ。

タテナシとやらと何があったのか気になる所だが、それより先にオドリが話題を変えた。

「で、その楯無の妹とお前はと言う関係なんだ？女中か？」

「せ〜く〜い〜！凄いなオドリン」

ノホトケホンネは眠たくなるほど遅い語り口調で言葉を紡ぐ。

「わたしとねえ、わたしのお姉ちゃんはねえ〜？更識家に代々仕えるお家なんだよ〜」

タテナシお嬢さまにはお姉ちゃんが仕えてるよ〜、とどこまでも間延びした言い回しの彼女に、オドリは少し意外そうな顔をしていた。

「お前・・・そう言う仕事出来るのか？」

「えへへ〜、やったら増えるんだよねえ〜」

「ああ・・・そうだと思った」

「えへへへ〜」

誇らしげに頭を掻いているノホトケホンネ、それは誇るべき部分なのか疑問だが、誇らしいのだろう。

二年整備科の女子たちの喧騒に紛れるようにオドリは問う。

「・・・で、そんなポンコツ奉公人ほうこうじんに質問だが、更識なせ(妹)は何故に二年用IS格納庫かくに居るんだ？整備科の候補生なのか？」

「んんん。かんちゃんねえ、日本の代表候補生なの」

「・・・ん？」

「でもねえ・・・ないんだよねえ専用機」

「・・・待て、色々と問題点が出てきたんだが・・・」

頭を抱えたオドリが会話を止めて質問する。

「まず名前だ・・・かんちゃんじゃ分からない」

「うん？ 簪かんざしちゃんだよ」

「簪・・・なんで専用機が無いんだ？」

「おりむーの白式があるじゃない？アレを作ったせいでも開発がストップしちゃったの」

「用意はされてるんだな・・・まさか・・・造ってるのか？」

「うん、建造途中のISをひとりで作るって」

「・・・できるのか、そんな事」

「無理とは言わないが、無謀むぼうだ。基礎コンポーネント的構成が固まってるならやりようはあるが、一人でやるとなると・・・3の、6から8だとして・・・大体一年半はかかる。目まぐるしいISの進歩の速度にそれではついていけない。やっても意味がないんだ」

オレの問いに答えるオドリは電子機器用のペンを口に咥くはえていた。

コレがオドリのルーティンなのだろう。

「やっぱそれくらいかかるよねえ」

「なんでひとりでんな事を・・・」

「手助けされたら意味無いから」

「!？」

誰にも気づかれずに彼女はそこにいた。恐らくはオドリが原因だろう。

サラシキカンザシ、だったか——彼女は眉を顰め、無感情な声音で

こちらに告げた。

「私は一人でいい・・・手を借りたら意味が無いの」

「・・・楯無が原因か？」

「!・・・知ってるの？」

「アイツの腕前は少々。・・・成る程、楯無は一人でやったんだな？それを」

「・・・・・・・・あなたには関係ない」

元々熱の無かったサラシキカンザシの声音が低くなる。

それが拒絶なのだと思感したのでだろうか、こちらの理解が追いつくよりも先にオドリは話を切り上げた。

「つと、そうだな。この話はここまでにしておこう。俺もお前もそう暇じゃないだろう？」

「そう、あなたみたいに余計な事をするような暇はない」

「左様で。そら、二人とも手伝え。今日中に組み上げまではするぞ」

本音借りるぞ、と。そう言いながらオドリはオレたちの背中を押して彼のISに向かうのだった。

・・・・・・・・

作業も粗方終わり、女子連中が刹那を弄んでいる最中。眠たそうな笑顔をしながら、本音が輪の外で作業机に腰掛ける俺に問いかける。

「オドリン今日どうかしたの〜？」

いつも通り剩った袖に弛みきった顔をしている本音。こんな見てくれないが、勘と言うべきか、何か人よりも聡い部分がある。

多分にいつもより攻撃的な俺に対して疑問を覚えたのだろう。それにしてはいつも通りの表情のせいで真剣味に欠けるが。

「・・・別に、少しばかり気が立ってるだけだ。やるべき事が山積してれば誰だってこうなる」

十数名で出力と組み上げ、組み付けまで済ませたバーニア。

シャルルに関する違和感、一夏を誘拐した何某かの目的、ドイツ軍の目的、ラウラに対する攻略法。

今日終わらせた作業量に対して今日得た課題が余りにも多い。比にして0.8:4だ、5倍もある。

・・・勿論、それだけでは無い、が。

「ま、そう言う訳だ、気にするなよ。むしろお前は自分の主人に意識を割いてやれ」

「えへへ・・・言われちゃった」

笑って頭を搔く本音。

ふと、彼女、もとい彼女の主人である更識家に思考の腕を伸ばす。

代々使えるような家が今もあるような家柄で、次期当主候補であるう楯無の戦闘能力の高さが必要となるような家柄・・・か。

・・・分かる訳無いな。

目の前に関係者がいるのだが、流石に口を割ってくれるとは思わない。

・・・もしかしたら割ってくれるかもしれないが。

(・・・やめだ止め。知ってどうなる)

良家のお嬢様の個人情報を探って良い事があるとは思えない。

白式の事で一夏とも因縁があるのなら、触らぬ神に祟り無し、だ。藪を突いて出るのが蛇か鬼なら、突かない方が幾分か賢明という物だろう。

「・・・まあ、今日はありがとな。お陰で大分楽になった」

「いえいえく私だけじゃないからねえくみんなにも言っておいてよ」

「そうだな・・・でもま、俺が見た範囲だったらお前が1番動けてた。良い腕をしてるぞ」

「えへへ」

本音の動き自体はひどく緩慢な物だったが、作業の流れが初めから全て解っているかのような淀みのない動きで気づけば俺の次に作業をこなしていた。

あるいは簪も本音の力を借りればそれを為す事が出来るやもしれないと言うのに。惜しい物だ。

「刹那くんまっつげ長いわね〜！マスカラ要らずだうらやましいわ〜」

「オレは、化粧は、しない・・・！」

「まあまあそんなこと言わずに、チークだけでも良いから！」

「やめっ、やめろー！」

女子連中に弄られる刹那。

自分より3〜4歳年上の異性に絡まれるのはあまり無い経験らしい。

流石に可哀想なので救助してやるか。

C a c h ・ s t a y   h i d d e n (秘密) 未だ  
秘密につき) 2 / 2

赤い瞳、覚えている、あれは、そう、桜が散る景色。

桜にしてはやけに赤い、綺麗な、鮮やかな色あいが目をうるおす。  
泣いていることも、だれかな？

夕日の中でうつぶせに寝ている大人を見おろす。

わたしもその人にあこがれていたんだっけ

赤い、あかい・・・

ふふ、きれい

ほら見てよ、強くなったんだよ

赤い夕焼け、赤い血だまり、そこにうつる赤い瞳、その顔は――

『――忘れていろ』

聞き慣れた誰かの声が腕を引く。

そうだ、これは忘れてなければならぬ記憶だ。

白い雪が夕焼けの上に降り積もる

.....

P M 1 8 : 2 2

I S 学園生徒用寮棟、ホテルの様な内装の一室で、オレはテレビを見て、オドリは自作の小型端末のキーボードを叩いていた。

ばぎんツ!!

唐突に鳴った音に振り向くと、オドリはペンを啜えたまま首と肩を回して柔軟をしていた。どうやら先の異音は首を鳴らした音らしい。

「っあゝ・・・すまん刹那せつな、暫しばらく外す。俺に用がある奴が来たら追  
い返してくれ」

「了解した」

そう言って席を立ったオドリは、赤い十字の入った小さな白い箱と灰色のコートを手に取り出かけてしまった。



月に一回、多ければ二週間に一回オドリはあの箱を手の外に出かける。

あの箱が何なのか、何が収められているのかは知らない。本人から言わない、と言うのなら知る必要は無いのだろう。

玄関から出て行つたオドリを見送ると、テレビで流れる淡々とした情報の流れが、一つ大きな事象を映し出した。

スタジオの中のアナウンサーが、予定されていた文面を平坦な声音で読み上げる。

『——五年前に王政を復活させたアザディスタンですが、改革派と保守派、王室がどちらを選ぶか。中東各国をはじめ、多くの注目が寄せられています。特派員の池田さん、現地はどうなっているのでしょうか』

『はい、クルジスとの併合以降、アザディスタンでは議会を開けないほど治安が悪化していましたが、王政を復活させて以来国民の意識は王室に集まりつつあり、えー、治安も安定してきました。しかし、マリナ・イスマイル皇女殿下が太陽光発電エネルギーの取り入れに前向きであるとわかると、再び国民の意見が分かれる事態になっていきます』

特派員がそう言うと、王宮に向かって抗議の声をあげる保守派の群衆が映し出される。

彼らが口にするのは皆同じ言葉。

『聖地に余所者を立ち入らせるな！』

『神の土地を汚すな！』

『不信仰者に裁きを！』

「不信仰者に……裁きを……」

これは、神の御前に捧げられる——である

不信仰者に屈服してはならない

我々が——す事によって神の——だ

伝統を軽んじる不信仰者どもに——槌を下すのだ

「これは聖戦である……」

口をついた言葉は無意識だ、意味など無い。

砂と埃、血と夕日の中で壊れた通信機の声が響き続ける。

・・・神は何処にいる？

いや神は――

「小鳥ー？」

「――ッ!？」

不意に意識が引き戻される。

『皇女殿下がどうするかが、今後の中東の分水嶺ぶんすいれいとなりそうです』

「――今のは」

朧げに見えたあの景色は、一度手放した瞬間からもう見えなくなる。

ドアをノックして声を上げるのは、イチカだろう。

オドリに用なら、追い返さねばならない。ベッドから立ち上がって玄関に向かう。

窓からは雨の音。テレビから発せられる声は、やはり平坦だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

外は雨、しとしとと降り止まぬ雨が、透明な樹脂じゆしでできた天井てんじやうと壁面へきめんを濡らしていく。

現在時刻は午後6時35分。

日も大分傾だいぶんかたむいている筈はずだが、5時半頃から暗雲が押し寄せ空の夕日こはくいろの琥珀色は失われたまま。恐らくはこのまま落陽らくようを向かえるだろう。

首に携帯を挟み、自作の端末でメモを取りながら電話をかけ、マイクとスピーカーの向こう側の人物に頭を下げる。

「ああはい。・・・そうですね、開発に関わった人が良いですね。はい」  
「・・・！本当ですか、ありがとうございます、はい。御礼は・・・できる限り。いえ、借りたものは可能な限り返す主義なので」

「はい、はい・・・ああはいはい、アラン・ルー・・・パスカル・マルタン・・・ロジェ・ガルシア・・・」

「はいありがとうございます、ございます・・・いえいえ十分過ぎますよ」

「ああはい、ではここら辺で失礼します」

通話終了のボタンを押すと、専門校にいた時に知り合った技術者の名前が浮かぶ。

彼には『デュノア社の話が聞きたいから技術者を教えて欲しい』と頼み込んだところ、快く技術者3名の名前と電話番号を教えてくださいました。

恐らく彼が予想している方向の質問はしないが。

灰色のコートのポケットを手探りながら、呟く。

「とは言え足掛かりはできた・・・か」

彼が想像している使い方はしないが、無論悪用する気はない。むしろ悪事を働く人間に掣肘を喰らわせてやろうと思っっている俺が責められると言う事はあるまい。

危険な橋を渡るのは主義ではないが、橋を渡らずにいられない状況にある以上叩き壊す勢いで叩いてから渡るべきだろう。橋が壊れるなら壊してしまえ。

そんな思索を巡らせながらポケットから取り出したのは赤十字の入った手のひらに収まる箱。

プラスチックの簡素な作りの箱の上端を親指でスライドさせる。そこから紙で巻かれたペンより短い棒状の物を一本取り出して口に咥える。

それは平たく言えば煙草と呼ばれる物で、上下左右を透明な樹脂で囲うこの部屋は紛う事なき『喫煙室』だった。

教室棟の裏側に併設されたこの喫煙室の存在を知る物は少ない。そもそも、俺以外に喫煙者がこの学園に居ない。

そう言った事情もあり部屋の中央に鎮座する灰捨て筒は、俺がこの学園に来るまでささやかな使命を果たす事もなくここに放置されていたように、今でも俺以外の灰が積もる気配は微塵も無い。

右手の示指、中指で咥えた煙草を挟み、左手で掴んだコートの内ポケットに隠したライターの火打石を火種に小さな炎を起こし、我ながら慣れた手つきで煙草の先端に火を移す。

息を吸って紫煙を呑み、吐き出して、その味の感想は、

「あゝ．．．まつず．．．」

相変わらずの酷い臭いと喉の感触に顔を顰める。

健康に気を遣うのであれば多少の味の悪さには眼を瞑れる物だが、ここまで吸わせる気の無い味は死活問題だろう。

ぱつぱつぱつ、透明な屋根の上に雨が止まない。

．．．．．

午後六時五十分、じめじめとした湿り気が身体を冷やしていく。

私こと織斑円花は、人混みを避けながら学園を探検している内に教室棟の外側にまで来てしまっていた。

「やつと静かになった．．．」

入学してからこつち、色んな人から質問責めにあっていて、正直ゲンナリしていた。千冬姉や一夏兄の私生活が気になるのは理解できるけれど、それでももう少し遠慮とかしてくれませんか。家族のプライベートって基本的に私のプライベートなんですよ。

そんな訳で私は他の生徒からの逃げ場を探す為に学園の良さげな場所を探していたのだけれど。ついには外に出てしまつて、軒先の貸し出しビニール傘の下で雨の中を歩いていた。

「ん．．．？」

そこで、私は見つけたんです。無色透明なポリカーボネートの部屋、『喫煙室』と書かれた看板がつるされた部屋の中で、火のついたタバコをびこびここと啜えた人影。

半開きの目、一つまよめの茶髪、パーツは悪くないのに全体的に人相は良いと言ひ難い小鳥遊さんがそこにいた。

「．．．」

普通に犯罪では？え、未成年ですよね貴方、なんでタバコ吸ってるんです？

小鳥さんはまだ横に居る私に気づいておらず、のんきにタバコをふかしていた。

さて、今私には三つほど取れる手段がある。

一つは今すぐ小鳥さんに声をかけて、注意する。  
二つは見なかつたふりをして、そのまま立ち去る。  
三つ目は短い丈のボトムのパケットから携帯をとり、  
パシヤツ!

フラツシユを光らせてその姿を撮る事。

・・・なんとなくだけど、私はこの人が嫌いだと思う。

千冬姉や一夏兄の顔色を見ながら自分の利益になるように立ち回り、他者に当たる時なんかはゆるされる範囲でコソコソ動き回り、それで人を巻き込んでも我が物顔で通りを歩く。

貴方が命の恩人なのは、まあ疑いありませんが。今日の練習を一夏兄に任せた時のあしらい方とかを見て確信した。貴方は恥も外聞も捨てて自分の得を取れる人だ、自分の事情を最優先に友情を軽々利用出来る人間で、私に関わるのも千冬姉に恩を売りたいからなんだと。

「・・・・・・・・・・」

そんな理解できない、いや理解したくもない生き方をする人は、私の方を向いて眉を少し上げたと思つたら、すぐに正面を向いてタバコを吸い始めた。

「いやあの、弱みを握られた人の反応ですかそれ!」

思わず喫煙室に入ってそんな事を言つてしまった。

もちろん、反応を見せて欲しかったと言うわけではないのだけれど、流石さすがに何かしら反応してくれないと予想外過ぎてこっちもどう反応したら良いのか分からないじゃないですか。

「・・・別に、俺は何も悪い事はしてねえからな」

「いや・・・せめて手に持つてる物の火を消してから言つてくださいよ・・・」

手に持ったタバコには未だ緋色ひいろの明かりがついて、白い煙けいが登っている。

高校生って大体タバコ吸える年齢じゃないですよね。何堂々どうどうと法律違反してるんですか。

肩を落とす目の前で貴方の口はタバコを啞くえて煙を吸いこんでいる。

「ちよつとー？言った目の前で何吸ってるんですかー？」

「悪いな、これは人生の薬なんだ。受動喫煙じゆうどうきつえんは自分でなんとかしろ」

「少しは悪びれてくださいよ・・・」

「安くないんだ、1000円払ってくれたら止めてやるよ」

「が、がめつい・・・それでもって全然悪そうにしてない。鋼鉄で出来てるのかこの人の心臓は。」

「違法行為だつてわかっているんですかね、私が写真をどうするかで千冬姉からの制裁が降りたりしますよ？」

小鳥さんの左側、彼の黒い傘の隣にビニール傘を置いて座る。

外は雨のせいで白みがかって、静かに、けれど確かに降り続けて、外と内の境界線を嫌でも押し付けてきて、静かさが浮き彫りになる。

「・・・・・・・・・・」

そんな中でも小鳥さんは煙を上げて息を続けている。貴方の健康はどうでもいいんですけど、私の健康を少しくらい考えてもバチは当たりませんか？

「副流煙とか・・・それ以前に吸う事自体ダメですよね」

「残念、俺はもう23だ、コレ煙草との付き合いも2年目になる」

「え」

「・・・何以外な顔してんだ。俺と一夏が同じ年だとも？」

「いやだつて、え？こ、高校生ですよね？」

「無論だ、通信制の高校は18以上でもいいだろ」

あつげらんとした表情で話す小鳥さんは、タバコの灰を灰皿に落として、もう一度吸い口をくわえる。その長さは半分も無い。

じりじりとタバコが焼けていく様を見続けるしかない私に、言葉が投げかけられた。

「ああだが・・・俺は既に高校の課程かていを終えて居るからな・・・ISパイロットの課程以外は実は免除されてるし。厳密せきにはIS学園せきに籍を置いているだけの一般人と言うのが正しいのか」

「は、はあ」

「――まー・・・そんな所とこだ。千冬に告げ口しても大して意味無いぞ」  
ふうー・・・と白い息を吐き出して、その終わりに煙の輪っかを

吐き投げると、たゆたう煙は輪っかに巻き込まれて、壁に付く前に解けて消えた。

「・・・そんな大人が、制服で教室にいるのって・・・恥ずかしくないですか?」

「言うなよ」

鼻で笑った貴方の恥ずかしそうな口元。

いつも私の事を上から目線で誘導してくる貴方に一つ白星をつけたような、そんな気がして満足できる。

そんなイジワルな感情を抱く私の顔を覗きこんで、小鳥さんはふてくされたような声をあげる。

「・・・なんだその顔」

「いえいえ。貴方の弱みが知れて嬉しいとかそんなんじゃないですよ?」

「・・・」

べしっ、とチョップが飛んできた。

「大人をおちよくんな。俺はこれで許してやれるが、千冬こんな事やった日にはお前、血の雨を見ることになるぞ」

「まあ小鳥さんにそういう事やる度胸は無さそうですね」

「五月蠅えな。一夏と違ってリスク管理出来るんだよ」

もう一度チョップが飛ぶ、全然痛く無い。

罰としてはあまりに軽すぎる気はしますが、殴りたい訳ではないので好都合ですし、これは黙っておくとしましよう。

~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

どこからか流れてくるチャイムの音が日没を知らせる。そっか、もう七時か。

気づけばもう辺りは暗く、

呆れ顔の小鳥さんはもう一度だけタバコを吸って、火元を消し潰した。

「話はここまでだ。そら、コドモは家に帰る時間だ。オトナには時間が足りないんだ」

「じゃあタバコ辞めたらどうですかね。金と時間の節約になりますよ

？」

「そいつは無理な話だな。コレとは一生付き合っていく事になるだろうしな」

そう言つて、手に握られた四角い箱を振つて見せる。中からは柔らかいものがぶつかかる音がした。

あるいは、それは小鳥さんの大人の証明。

それが意味するイヤミな意味に顔をしかめたりはしません。

勝ちほこつた、余裕綽々な笑みを浮かべて立ち上がる。

「・・・まあ良いです。私としては小鳥さんが割と歳がいもなく学園生活送れるハズカシイ人だと知れたので」

「うっせえ。精々せいせいこうならないように青春満喫してやがれ」

「はいはい、じゃあ時間の無いオトナに変わつて余つてる時間を無駄なく楽しみますよだ」

一瞬で傾いた機嫌きげんのことは、隠して見せてあげません。

貴方の思う通り、私は子供です。大人にどうしても言いくるめられる、未熟で足らない、そんな子供です。

でもそれでも意地の一つや二つ、あるものなのです。

そんな言葉を胸に押しとどめて、私はドアノブだけが銀色の扉を開けて、歩み寄る雨音に消えないように貴方に告げる。

「また明日」

「・・・食堂で会わないようにな」

「台無しですよ」

憂鬱を変えるモノ (Blue day

s / Read with c

h) 1 / 2

「ええとね、二人がみんなに勝てないのは、射撃武器の特性を把握はあくしきれてないからだよ」

「そ、そうなのか？一応分かっているつもりなんだけどな・・・」

シャルルさんが転校してきてから早五日。ISを展開した私と一夏いちかにい兄はシャルルさんのIS操縦そうじゆうこうぎ講座を受けていた。

IS学園は土曜日もISづけで、午前中は理論に関する授業があった一方、午後は自由時間・・・なのだけれど。

生徒の皆さんモチベーションが結構高いらしく、アリーナ全部が開放されているのにも関わらず多くの人が訓練をしていた。

ちなみに、小鳥さんは例によって自分のISの調整らしい。

——それはそれとして。

「えーと、一夏兄はともかく、私が射撃武器の特性を理解していないと言うのは、どう言う事でしょうか？」

「あ、えっとそれは今から説明するからちよっと待ってね」

そう言っつてシャルルさんの話は続く。

「まずは一夏の方からんだけど、一夏っつて何か、遠距離用の兵装使った事ある？」

「いや、無いぞ。白式びやくしきには遠距離装備無いし、打鉄うちがねにはあったけど使うより先に勝負は終わってたから」

まあそりやそうだ。一夏兄がISに乗れると分かっつてまだ一年もたっつてない。

触ってきた時間で言うのなら私の方が長いし、その私ですらこの子ゼフィルスに触るまでは武装を触さわった事は無いから、一夏兄が剣以外を触る機会はずっと少ない。

「うくん・・・じゃあ今度は田花まどかちゃんは何かスポーツやってた？フェンシングとか、そう言う近距離で相手と対面するの」

「えーと・・・無いです」

一夏兄は箒さんのところで剣道をやってたけど、束さんの起こした事が原因で、私が入門して3カ月少して閉鎖へいさしてしまった。

結果として、2カ月もあれば調子を戻せるほど身に染み付いた一夏兄と違い。今の私は剣の構えはおろか、握る感覚さえ忘れている。

「うん・・・思った通りだ」

「?」

一人頷くシャルルさんに私達は首をかしげた。

一夏兄の経験はともかく、私の経験がどうして遠距離武器の特性理解に繋がるんだろう。

そんな様子を見て小さく笑うシャルルさんは続ける。

「一夏は遠距離における射撃武器の速さを、円花ちゃんは近距離での射撃武器の遅さを理解してないんだ。だから距離を詰められないし、どこが射撃武器の限界なのか分かってなくて戦い辛いんだ」

「射撃武器の遅さ・・・」

「うん、円花ちゃんの実体弾じつたいだんじゃなくて、ビーム砲でしょ? ならもっと分かんないと思うんだ」

ビーム砲、まあ確かにゼフィルスの武装は一本のナイフ兼ベヨネットを除けば全部射撃武器だしビーム兵装な訳だし、射撃武器の速さはわかるつもりではありますよ。

「たとえば・・・一夏、ちよつと僕に切り掛かってくれない?」

「え・・・?」

「寸止すんどめでも良いから、ね?」

「お、おう」

困惑こんわく気味に答える一夏兄、まあ流石にいきなり斬りかかってと言われたら困惑しますよね。

そんなこんなで刀を呼び出した一夏兄と、アサルトライフルを手に持ったシャルルさんが向かい合う。

「えーっと、最初は3歩から・・・オツケー、一夏、良いよ」

「お、おう・・・いくぞ・・・!」

一瞬、一夏兄の目つきが鋭くなり、剣が振り上げられる。

シャルルさんもアサルトライフルを構えるが、流石に3歩の距離は近すぎる。一瞬の内では近づかれて、首筋に刃が突きつけられた。

一夏兄のお腹には銃口が向けられているが、恐らくは間に合わないでしょう。

「・・・まあ、こんな風に距離が近いと銃器の『攻撃』は間に合わないんだよね」

「うん？引き金を引くだけでいいんじゃないか？」

「うーん、それだと多分剣を振り抜く方が早いと思うんだよね。一夏はわかりにくいと思うんだけど。射手型シユースタイルで慣れてる人間だと反射的に後ろに退がる距離なんだよ」

一歩後ろに退さがって説明するシャルルさん。心なしかちよつと顔が赤い。風邪気味なんですかね。

そしたら今度はもう二歩退がさがってシャルルさんは五歩分の距離を取る。

「じゃあ今度は五歩分ね。一夏、良いよ」

「いくぞっ！」

今度は勢いよく駆け出す一夏兄。

残り3歩の間合いでシャルルさんは両手でアサルトライフルを構えることに成功して、一夏兄の足元に3点バーストを叩き込んだ。

「・・・と、まあこんなふうには、十分な距離さえあればちゃんと撃つたりして牽制けんせいすることもできるけど・・・。今の距離はホントは対処できない距離なんだ」

「ううん？できてるじゃないですか？」

実演がうまくいった以上、実戦でも普通にできるとも思いますけど・・・。

「実践では相手はスラスターを使うし、直線的に向かってくるなら絶対に80キロぐらい初速が付くんだよ。それに、横方向の移動も含まれるから狙いがズレることも結構あるんだよね」

「なるほど・・・だからか・・・」

「うん？」

「いえ、いつもは小鳥さんと特訓してるんですけど、いつも後退しながら

らの攻撃を身につけるように言われてるんですよね。やっぱりそれって、足を止めたらすぐに距離を詰められるから、でしょうか」「そうだね……でも意外だな……。どうしてそんな戦術に詳しいんだろ」

「……さあ」

「わかりませんね」

そういえばそうだ。初対面の時から作戦指揮さくせんしきをやったから疑問に思わなかったけれど、あの人も一夏兄と同じようにISでの戦闘は素人同然のはずだし……。

「まあ後で聞いてみるか」

「そうですね、今は特訓です!」

「うん、そうだね」

今の私は今までに無いほどやる気がある。コーチがいつもやれ「千冬は目指さない方が良い」だの「ISを尊重してやれ」だの私のやる気を的確けつに削る小鳥さんでない、と言うのはもちろんそうなんです。

『こう、ばしゅつときたらばびゅーんという感じでだな』やたら擬音の多い箒さん、

『縦5m横3mなら相対速度+10km/hで後退しつつ偏差20°。

で狙うと良いですわ』指示の細かさすぎるセシリアさん、

『そうねえ、相手がスライドする場所を狙えば良いのよ。え?分らない?カンでやりや良いのよ』感覚派が過ぎる鈴さん、

と、まあみんな違ってみんな向いてない所があつて控えめに言っただけなんなりしていた所だったので、シャルルさんみたいにやる気を引き出してくれる教官を前に、私のやる気はこれまでに無くアップしているのです。

「じゃあ今度は一夏の方だね、円花ちゃん。手伝ってくれる?」
「わかりました!」

.....

「んぐ、ぐ・・・っ、ああ〜！」

デスクの前で大きく背伸びをした俺は、確かな満足感と共に大きな息を吐き出し、その上で首を鳴らす。

ばきんっ！

自分以外に誰もいない格納庫ハンガーに自分以外の音がする訳も無く、二度の破裂音は硬い壁に跳ね返って2秒程尾を引いた。

「・・・まあ、誰もいない、と言う訳でもないが」

『呼んだ？』

「一応」

ひとりごち、契約を結んだ相手と言葉を交わす。

一応、銀影の存在は周囲に知られてはならないのだが、盗聴盗撮機具の無い事を確認した以上誰かが急に入ってこない限り特に注意する必要は無く、人目を憚らずに彼女と話せる状況は好ましい事だった。

『それにしても、良かったの？ゼフィルスの相手しなくて』

「ん？ああ田花か：：偶には良いだろ。俺も作業があつて、シャルルって言う優等生もいるんだ、息抜きにはなるだろ」

『どうかねえ、案外リヴァイヴのコと仲良くなっちゃうかもよ』

「それならそれで構わんよ。俺は樂できる」

『・・・はいはい』

「それよりもだ」

チエアを立った俺は、話し相手の身体に向けて声をかける。

「何か気になる所は？」

『それ、メカマンの名が泣くわよ・・・』

「便利な機材は利用しまくるのがメカニックだ、こっちの方が楽なんだよ。それに、今はお前の方が信頼できる」

『ま、自分の身体だしね』

銀影はそう言つて言葉を切つた後、数秒沈黙して問いに答えた。

『特に問題は無いわ、接続出力は要求通り。強度も申し分ない』

「それは何より。流石に整備科の連中も侮あなどれない物だな」

IS学園に籍を置く人間は、一部の例外を除いて基本的に天才の集

いである。

それはある意味一夏や円花ですら例外ではない。銀影とのシユミレートで経験時間を稼げる俺と違い、一夏の時間は額面通り2ヶ月弱で俺と同じかそれ以上に戦績を伸ばしている上、円花に至ってはそれ以上の成長速度を見せている。

——ゼフィルスに合わせた戦闘方を身につければもう少し勝率は上がると思うんだけどな。

閑話休題

整備科はつまり整備の分野に対する天才がエリート教育を受けている訳なのだから、それと同じ事が起きるのは当然の帰結だろう。

『天才ね……アンタが言えた義理かしら?』

「凡人だよ俺は。紙よりも薄い経験を積み重ね、小さな羽でバタバタ羽ばたくしかない凡人だ。束や楯無と比べるのも烏漕がましい」

「あら、嬉しい事言ってくれるわね」

不意に投げかけられた声、聞かれてはならない物を聞かれた焦りで振り向くと、そこには更識楯無がいた。

「お前何時から!」

「さつき来たばかりよ。ドアを開けたら小鳥クンが私を誉め殺しにしていたから、つい声をかけちゃった♪」

「……」

「そう身構えなくても良いわよ、それとも、追求されたい?」

「——今日は何の様だ」

「冷たいわねー。そんなに信用ならないかしら」

「初対面に殴りかかる奴に信用もへつたくれも無いだろ……」

「それもそうね、まあいいじゃないそんな事」

良い訳は無いのだが、それは喉に押し込む。

楯無に関しては、反論するとむしろ厄介な事態になる。黙って無視した方が余程マシだ。

「……で、今日は何の用だ。こっちは調整がやっと終わってさっさと帰りたいんだ。手短に頼むぞ」

「ふーん……へえ、一週間で終わらせたんだ」

「何度か、建造計画を変更したがな」

「どうやら、銀影を弄っているのは本音から聞いていたらしく、特にこれと言った驚きは無いようだ。」

しかし、楯無は何かを考えた様子で銀影の事を見つめる。

『・・・私に勘づかれた、とかは無いわよね』

(そうになったらそれまでだろ)

『もうちよつと自分の役割に責任持ってくれないかしらね!?!』

銀影の小言を聞き流し、楯無の発言を待つ。

ギャングかマフィアかは知らないが、侍女がつくような家柄のお嬢様がどうして構ってくるのか、皆目見当も・・・つかないと言う訳では無いが、それにしても不審極まりない。

「私ね、小鳥君の事を調べて見たのよ」

「おう」

「それこそ、全国津々浦々、あなたに関連がありそうな各庁にまで探りをいれたわ」

「・・・おん?」

「それでも情報が出なかったのよねえ」

「待って待って。結果はまあ当然だとして、お前どう言うネットワーク持ってるんだよ?」

政府にまでパイプを持っている17歳女子学生など荒唐無稽に過ぎる。

そんな俺の質問に対し、楯無は首を傾げた。

「あら、本音ちゃんから聞いてないの? 私の家って結構歴史ある隠密活動を生業とする家なんだけど」

「なっ・・・ああ・・・なるほど。そりゃ情報戦得意にもなるわけだ。」

ロシア代表になったのもそこら辺が理由か」

「お、せーかい。KGB式諜報術を学びたくてね」

何と言う化け物だ。実が伴うかは未知数だが、少なくとも『ロシア最強』の肩書きを持っているのが、半分副業じみた理由だとは。

天才だと持ち上げはしたが、完全に想定外だ。

「KGBで・・・。もう何世紀前に解散された組織だよ」

「ざつと3世紀前ね。でも、そこで培われた物はそう易々と消えるものではないわ。古今ここんを、東西とうぎを問わず、情報は何よりも価値のある物だもの」

それは疑いようの無い事実だ。情報一つでテロリストが旅団基地を壊滅手前までに追いやった、と言う事例もある。

かんわきゆうだい
閑話休題

「・・・で？そんな家の人がどうして俺を？独り言ひとごとでも言ったが。俺は凡人だぞ？」

「でも、一般人でもないんじゃない？」

「それは一夏でも変わらんだろうに」

「そうかしら」

正直に言ってしまうのなら、楯無との会話は相応に疲れる物がある。

俺よりずっと情報戦ひいに秀でた彼女と話していると、一言一言に気を使わねばなくなる。

「俺は語る所など一つだつて有りはしない。探るな、とまでは言わないが、このまま調べても大山鳴動たいざんめいどうして鼠一匹ねずみいっぴきが関の山だぞ」

「ふーん？表で公開されている情報くらいしか情報の無い小鳥君が？」

「そうだ。少なくとも日本の国益こくえきに寄与きよしうる事は何一つない」
「そう」

一段低い声音に警戒が高まる。

と、次の瞬間

デーデン！デーデン！デーデーデー！デデデデデデ！！
ポケットの携帯が呼び出し音を鳴動させた。

「げ・・・！」

この鯨が出てきそうな着信音は・・・！
対面するのは十中八九あの人だろう。

（っ、どの件だ・・・!?!）

校内でISを起動したあれだろうか、それとも学園情報を切り売りしてるのがバレたか、思い当たる節が色々ありすぎて仕方がない。

ともあれ冷や汗を滴しながら、迅速に応答する。

「・・・はい、何でしょうか千冬先生」

『お前今何をしている』

「・・・二年の格納庫で銀影の調整を」

『今すぐ第三アリーナに行け、刹那が戦ってる』

「な・・・っ、ああもうこんな時に限って・・・ッ！」

苦虫を噛み潰し、左のポケットから薄長い筐を取り出す。

「戻れ銀影！」

『えちよ、取り込み完了してない！』

「速く！」

『ああもう！』

粒子に変換された銀影が筐に収められたのを確認して走り出す。

楯無の事も、どっごん、という落下音など気にならない。頭の中は、既に刹那の事でいっぱいだった。

刹那のIS——厳密にはISではないが——『エクシア』は無人機を真つ二つにするなど、絶対防御を貫通して余りある攻撃力を有している。

正直刹那の事が心配と言うよりも、戦っている相手が死なないかどうかだけが気がかりだった。

憂鬱を変えるモノ (Blue day

s / Red switc

h) 2 / 2

パタタタッ！パタタタッ！

「そう、射線を明確にイメージして。あ、脇開いてる」

「お、おう」

『一夏兄ー！このままじゃ一発も当たりませんよー！』

シャルルの提案でリヴァイヴのアサルトライフルを借りた俺は、円花を的に射撃訓練をしていた。

確かにシャルルが言うように、銃の速度は速い。

ISの方が速い時があるけど、考えてみればそんなのはごく一瞬だし、銃弾に比べて圧倒的に大きなISに当たるのなんて当然な気がしてくる。

が、まあ当たらない。

円花が言うように訓練開始から10数分経っても、俺の弾が当たる気配は一切無かった。

「うーん・・・まさか射撃用のOSが無いなんてね」

「いや・・・これはどっちゃかって言う俺が下手なんじゃないか？」

シャルルが言うように、白式には射撃標準用のOSが搭載されていないので、目視で狙いを付ける必要があるけど、ここまで当たらないと自信が無くなってくる。

「どうだろう。僕もオートロック機能無しで動くに当たるのはすごく難しいし」

「当てられはするんだな・・・すごいなあ」

「い、いやいや！それでも10〜20発に一回つくくらいだし！それもやっぱり訓練あつてのことだからね!？」

「うーん・・・でもやっぱり凄えよシャルル」

「もう、そんな誉めても何も出ないよっ！」

ばしばしと俺の背中を叩くシャルル。

そんな中、アリーナがにわかにならわつきはじめた。

「え、あれって……」

「嘘、ドイツの第三世代機よね……」

「もうロールアウトしてたの?」

「うん?」

そんなざわめきの中心には、銀影のそれとはまた違う、漆黒のISに身を包むラウラ・ヴォーデヴィツヒが居た。

PICを展開してふわりと飛ぶラウラは、周りの注目なんてどこ吹く風で俺に話しかける。

「おい」

初対面の時と変わらない、冷たい声音。

明確な敵意に裏打ちされたそれに、自然と身構えていた。

「……なんだよ」

「私と戦え」

「——断る」

分かりきっていた文言に、NOを叩き付ける。

「ふん、逃げる気か?」

「戦う理由が無いだけだ。お前に理由があつたって戦ってなんてやるもんか」

見え透いた挑発をかわして、もう一度拒否を示す。

しかし、ラウラは止まらない。

「なら、戦わざるを……!」

ガキヤツ!と音を立ててラウラの肩にリボルバーの形をしたキヤノン砲がかけられた。

「得なくしてやる!」

アラート
照準をつける必要すらない距離。反応の追いつかない距離。
警告よりも早く直感が告げた『この一撃は外れない』と。

まずい、

「ええあッ!!」

「っ!?!」

瞬間、声と共に白と灰色の影が俺達間に割り込み、そしてその右腕の剣を振るっていた。

跳び退さるラウラ。

逆袈裟の軌跡を描いた斬撃は、狙いを外しても砲塔を真つ二つにしていた。

「貴様は!？」

「刹那!？」

着地したラウラと驚いた俺が声を上げ、制服の刹那は剣を折り畳み、まっすぐにラウラと向き合った。

（——なんて速さだよ、ピットからここまでの距離を、ラウラが構えてから間に合ったってのか）

心のなかで呟く。

刹那がこれまで来たことのない第三アリーナの事を説明するためピットまでつれてきていたのだが、そこからここまでの距離はざっと100m前後。

イグニッションブースト 瞬時 加速を反射的にでも使わない限り追い付かない距離だ。

「なに!?!何が起きてるの!?!」

「ドイツの子と男子が戦うみたいよ!」

周りの女子達は、突然な爆発に騒然としつつ、蜘蛛の子を散らすように外側によっていく。

数秒間ためらったような顔をして刹那はたずねた。

「何をしていた」

「……貴様には関係ない」

簡潔な問いかけに、ラウラは冷たい言葉を投げかける。

「……だがそうだな……貴様が織斑一夏を庇い立てすると言うのなら、貴様諸共打ち砕くだけだ」

そこまで言つて、ラウラは不敵に笑った。

「なに、男など影討ちしか出来ないゴミと、教官の足を引きずるクズ、口先だけのカスしかいないんだ、丁度良いだろう」

「っ、てめえッ!」

俺が千冬姉の足を引っ張ったのはどうしようもない事実だけど、刹

那が影討ちしか出来ないと言うのは聞き逃せなかった。．．．あく小鳥は否定できないな！

一歩前に出た俺は、刹那の隣に立つ。

「ふん．．．短慮たんりよ、浅慮せんりよ極まりない行動．．．やはり貴様は教官の弟として相応しくない！」

切られたキャノン砲を収納クロースし予備の物を召喚コールしたラウラは、その砲身を俺に向けた。

「行くぞ、刹那！」

「了解、エクシア、刹那・F・セイエイ、目標を鎮圧する！」

「ちよ、ちよつと待って二人とも！」

シャルルの声を無視して俺たちは駆け出す。

「ほう．．．こい！」

さらに予備のキャノン砲を構えたラウラ、そつちがそうくるなら！
「瞬間 加速！」
イクニツシヨンプースト

銃器の感覚を思い出しながら、加速をつけたまま大きく左に旋回しつつ距離を詰める。

刹那は一直線にラウラへ飛んでいく。

「先ずは貴様だ」

瞬間。両肩、両脚からワイヤーが上方方向に打ち出された。

「刹那！」

「――！」

雨のように降り注ぐそれに、一度足を止めた刹那は両肩のサーベルを抜き放った。

迎え打つつもりなのか!? だとしたら俺は．．．！

「うおおおッ！」

全速力でラウラに攻撃を仕掛ける！

「そんな連携など．．．！」

射出したワイヤーをそのままに、ラウラがキャノン砲を向けた。

この距離、撃たれてからじゃ避けられない。

(砲口を見る、相手を見て、アイツラウラと息を合わせるんだ！)

砲口の先に射線はある、引き金のその先に砲撃がある、ラウラの呼

吸の先に俺への攻撃があるんだ！

どがアンツ！

「っ！」

放たれた一射を身をよじってなんとか躲す。二撃目は引き金に合わせて回避行動を取る。

避けた先で起きる着弾の爆発を背中に刹那を見やる。

「ふっ！えあッ！」

刹那はワイヤーを叩き落とし、弾きながら少しずつ前に進んできた。

4本のワイヤーは、弾かれてもまた蛇のように刹那へ鋭く迫る。

(すげえ……)

ビームサーベルを振り回しながらステップを踏み、四方八方へと斬撃を放ち続けるその姿は、どこか刀剣の演舞と重なって見えた。

感心するのも束の間、刹那の足が止まった。

「チッ、囷かー！」

見れば、日本のワイヤーが刹那の脚に絡みついていた。あのワイヤー6本あったのか!?

俺はさらに二発ラウラの砲撃を躲し、さらに接近する。

刹那はすぐさま脚に絡みついたワイヤーを横薙ぎに切り払うと、真上に飛び上がり正面から刹那を追うワイヤーを

「はあッ!!」

ビームサーベルを投げて撃ち落とした。

「すげえ……ッ！あつぶねえ!!」

意識がそれていた俺にも砲弾が撃ち込まれたのだが、姿勢を崩しながらもなんとか避ける。

刹那のことも気なるけど、今はラウラだ！

ラウラまであと80m、この距離なら……!

力をためて、一気に瞬間^{イグニッションブースト}加速で近づこうとした瞬間。

ビシューッ！

「ッ——!?なんだ!?!」

真上から放たれたビームが目の前に着弾して、足を止めさせた。

「新手かと思つて真上を見上げると、そこには黒いISをまとう小鳥の姿があつた。」

「小鳥・・・!？」

『そこまでだ3人共。気が合わんのは俺もそうだが、周囲に人がいる以上勝手な喧嘩は迷惑千万だ』

ゆつくりと降り立った小鳥は、合体状態だった『アイアス』を分離して俺とラウラの両方に向けた。

かなり急いでいたのか、刹那と同じように制服のままISを展開していた。

「っ、でもー！」

「でも、じゃねえ。刹那の機体を大っぴらに見せる訳には行かない、刹那を巻き込まない形でやってくれ」

「・・・いや、オレがこの戦いに割り込んだんだ」

「オーケー二人とも止めろ、これ以上やると死人が出る」

刹那が退かないと察するやいなや、小鳥は喧嘩を止めるように言う。

「フツ、死ぬのは貴様だ。セツナとやらの技量の底は知れた。3対1でかかってきても良いのだぞ」

「5対1、だ。今度は俺だけじゃない、円花やシャルルも参戦する。加えて、俺達3人には絶対防御を破る手段がある。手加減が出来ない状況なら、命の保証も出来ない」

ラウラは上空の円花と、逃げていなかったシャルルを見た。

「・・・」

「それを終えたとして、他にも代表候補生は居る。アイツらを相手できるか？」

小鳥の後ろ側、観客席にはセシリア、鈴、箒の3人が居た。

「それを成そう、と言うのなら仕方が無い。お前の蛮勇を啜って、全力で磨り潰すだけだ」

真剣な顔でラウラを睨みつつ、それでも俺に剣を向け続ける。

「——ここは退くでしょう。貴様が言う通り、ここでは勝算がつかない」

「感謝する、一夏は言っても聞かないからな」

「いや、聞くけど・・・」

いやまあ、血が昇りやすいってのは認めるけどさ。

小鳥は俺に向けた剣を背中中のラックに戻しながらため息を吐く。

ラウラに向けた剣はそのままだ。

「小鳥」

「黙つといてくれ、この場で下手に喋られると俺に引責が発生しかねん」

煮え切らない感覚を覚えながら、ピットへと戻っていくラウラの背を俺達は見送った。

「――」

見送つて・・・えつと・・・。小鳥がこつちを・・・向いた。

「あ・・・えーつと・・・」

「――いや、お前の事だ。今回の喧嘩に関してはお前は冷静だったろ」

「小鳥・・・怒つてないのか?」

「ああいう手合は目標を達成するためならどんな手段でも使う。お前がどんな状況であってもこうなった」

そう言えば、小鳥にはラウラとの因縁を話してたっけ。

多分、そういうのもあつて小鳥はあんまり怒つてないみたいだ。

「と・は・い・え、だ。喧嘩をするならもう少し勝算を計れ。周囲にはお前らだけじゃない、シャルルや円花も居たんだ」

「う・・・だつて、これは俺と刹那だけのケンカだ。シャルルを巻き込むのは気が引けるし、円花を危険にさらすのは兄貴としてもつてのほかだろ」

「――、ま、そこまで考えてるなら文句は言わん」

あつさりと引き下がる割にはどこかしつくりしない顔をしている小鳥。俺なんかしたかな。

「俺は調整に戻る。またアイツが因縁付けてきたなら俺を呼べ。刹那はあまり頼るな」

「うん?刹那を頼るなつて・・・あんなに強そうなの?」

「強すぎるんだよ。少々端折るが、刹那の右腕の剣は、絶対防御を易々と突破してなお剩り有る攻撃力でな、下手を打てばラウラが胴体から真つ二つになつてた」

ゾツとした。

もし最初の一発をラウラが躲けていなかったら、想像するだけで悪寒がする。

それなら刹那の機体を外に見せたくない、と言うのも頷ける。だつてISを見るってことは、そのISが戦うって事だもんな。

「ん？あれ？小鳥お前、さつき絶対防御を破る手段を持っている人が3人いるって言ってたけど、あと一人って？」

「俺。当たり前だろ。絶対防御のエネルギーが都合よく拡散フィールドの例外だとしても？」

「ああ、なる程」

確かに、それなら絶対防御も突破できるな。

っていうか、束さんハンドメイドのIS、一々殺意高くないか。そう考えていると、シャルルがこつちに飛んできた。

「えつと、一夏、大丈夫？」

「ああうん、大丈夫。ゴメンな、心配かけて」

「ううん、こつちこそゴメン。一夏があんなに怒ってたのに、何も出来なくて」

「いやいや、あれは俺の勝手なケンカなんだから」

「それでもだよ。一夏は刹那くんや、小鳥くんの為に闘ったんだ。助太刀しない理由は無かったよ」

うーん、そこまで言われると何も言えなくなる。

りーんごーんがーんごーん

「ん？あ、もう4時か」

アリーナの全館は4時までしか解放されてない。

アリーナの縁に掃けていた他の面々も、そろそろとピットへ帰っていつている。

今度は円花が降りてきた。

「んー。上からみてましたけど、急にバトつて何があつたんですか」

「ああいや、色々とな」

多分円花がラウラの事を聞いたらフツーにケンカ売りそうだし、ここは黙つとこう。

「ああそれと的役ありがとな」

「いやいや、お安い御用！」

えっへんと胸を張る円花。どうしよう、なおの事当てたくないな。

そう思っていると、遠くから小鳥が「もう帰る時間だろ」と呼んでいた。

・・・帰るの早いな？